

オレを踏み台にしたあ！？

(???)

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

リリカルな世界で憑依した主人公の一人称視点の物語です。

憑依先はチート能力（喪失済み）を授かった銀髪オッドアイ美形の典型的な踏み台転生者。

憑依先の彼として生きていくことを決めた主人公の勘違いはやがて周囲にも伝播していき…

という物語になる予定です。

原作知識はあまりなく、若干の勘違い要素を含みます。

また、一期の少し前からのスタートとなります。

（※本作品は「機動戦士ガンダム」のガイア大尉とは一切関係ありません。あしからず。）

# 目次

少年の目覚め	1
少年の決意	3
少年の徘徊	8
少年と車椅子の少女	13
少年の出会い	19
彼の困惑	23
少年と家族愛	30
少年の登校	34
ツンツン少女の理由	41
少年とゴリと眼鏡	49
ゴリと眼鏡と悪のカリスマ	54
少年の席替え	61
少年と車椅子と少女	70
車椅子の少女と缶コーヒーと	77
少年の平凡な一日	88
少年と終業式	100
少年と火事と電波	107
リリカル少女と魔法と顔文字の人	112
少年のお参りと金髪少女	122
ゴリと眼鏡の一流半	132
金髪少女はがんばる	141
少年と夢電波たち	158
少年と誕生日	166
少年とキャッチボール	177

リリカル少女のお茶会と新たな出会い	193
少年の入れ知恵	203
金髪少女と母親と…	220
少年と道場の人たち	237
リリカル少女の悩み	256
少年と友達・上	271
少年と友達・下	283
執務官のファースト・コンタクト	296
少年と管理局・上	305
少年と管理局・下	319
車椅子の少女は可哀想？	331
少年と管理局と豆狸のすき焼き	334
少年の協力	343
提督と日誌	353
少年と魔導師と魔法使い	366
彼の決意	380
少年とめんどくさい親子	408
金髪少女の『約束』・上	429
金髪少女の『約束』・下	439
少年と『月島さん』	464
少年と厨二病	472
夜の一族当主の追想	484
少年とチーム結成	493
大魔導師と『娘（にんぎょう）』	503

## 少年の日覚え

気付けば知らない天井を見つめていた。

どうやらつい先程まで眠っていたらしい。

清潔そうなベッドから身を起こし、周囲の様子を確かめる。

大きめの窓から差し込む柔らかな日差し。

子供用と思われる学習机の上にはノートタイプのパソコンと本が一冊。

部屋の奥手には洋服ダンスとガラガラの本棚。

その隣には姿見と思しき鏡が立てかけられている。

いかにも小洒落たワンルームといった風情だ。

適度に整理されていて、快適さと清潔さを訴えてくる。素晴らしい室内環境だ。

……オレに全く見覚えのない部屋だという一点を除けば。

少しでも情報を、と窓から景色を眺めてみてもその認識は変わることはなかった。

元々記憶力に自信がある方でもないが、全く覚えのない景色が広がっている。

周囲の様子からしてここは住宅街の一戸建ての家らしい、ということとは判明したが。

寝ている間に一晩でご近所ごとマンション内外の間取りを改築しました… とか？

……いやいや、どこのファンタジーだよ。

幾ら近所付き合い皆無だとしても、管理組合から連絡の一つや二つくらいあるだろう。

まずは落ち着いて情報を整理しよう。

オレはもともと此処とは似ても似つかぬマンションに住んでいて、それから…

「……………」

どうにも記憶が曖昧だな。部分部分で断片的というか、名前すら思い出せない有り様だ。

困ったな。起き抜けで寝ぼけているのかもしれない。  
というか、落ち着いている場合じゃなかったな。

この部屋の本当の主やその家族と鉢合わせてしまったら厄介なことになるだろう。

目が覚めたら此処にいたんです。自分も何が何だか分かりません。  
なんてことを言っても通じるかどうか。

……オレだったら間違いない警察に電話するな。逆上されないように宥めつつだけど。

音を立てぬようにベッドから降り、そつと移動する。

どうか家の中に誰もいませんように。いても気付きませんように。  
抜き足差し足で移動する。……しかし、でかい間取りの部屋だな。

部屋も広い感じではあるのだが天井が高いというか、全てがビッグサイズというか。

そして扉に手を掛けようとして、姿見にチラツと写った自分の姿を見て啞然とした。

そこには信じられない光景が広がっていた。

陽の光に煌めく銀髪に、赤と青のオツドアイ。そして不自然なまでに整った美貌。

そんな10歳前後くらいの少年が其処に写っていたのだ。

「なん…だと…」

掠れながらも絞り出したその声は、変声期前の少年特有の高さを多分に含んでいた。

## 少年の決意

あれから家の中を探し回ったが、他に住人はいないようだった。

“ようだった”というのは仮にオレが誘拐されたとして、秘密の地下室なんかがあつて、其処から観察でもされていたら気付きようがないからだ。

だが、十中八九それはないだろう。

何処も内側から鍵が開けられるようになっていて出入り自由だったのもそうだが、どうにもこの家全体が生活感に乏しいというのがその根拠だ。

先ほど目覚めた部屋以外は部屋としての体裁を最低限保つ程度に留まり、ガランとしている。

この身体の持ち主たる少年がマメで清潔好きだったのか他の理由では知らないが、どの部屋も掃除が行き渡っており綺麗ではあるのだがそれだけだ。

まあ、これらもオレの推測にすぎない。

住人については今はたまたま外出しているだけでいずれ戻ってくるかもしれないし、生活感云々についてもオレの思い込みという可能性は否定出来ない。

結局のところ調査の成果はここが『桜庭<sup>さくらば</sup>さん』の家だということ。そして住人はこの少年（＝オレ）以外は出払ってるっぽいこと。

オレがこの少年になつている理由は不明であること。ハンガーに掛かっている上着を調べたら分厚い財布が出来て諭吉さんが大行列だったこと。

ああ、なんか両親がどこぞにいない辺りはローゼンな人形たちに囲まれた桜田さんちのJUMくんを思い出す設定ですな。苗字の響き似てるし。

人形たちのバトルに巻き込まれるのはゴメンだけど、自分のことを気に掛けてくれる可愛い姉や同級生がいたらさぞかし人生が楽しそうだ。

いや、JUMくんもJUMくんで大変なんだろうけれどね。……脱

線したな。財布の中にも手掛かりになるものなし、と。では学習机に視線を移そうか。

「やっし…」

悪いとは思ったがノートパソコンに接続されていたスマートフォン（指紋認証式だった）のロックを解除し、中のデータを閲覧する。……うん、やっぱりこの身体の持ち主のモノなんだな。すまない、桜庭少年（仮）よ。

住所録には2つしか名前が記されていないなかった。即ち、父親と母親だ。名前も何も書いてない。『父親』と『母親』、それだけだ。

「……………」

ブワツと涙が出そうになるのを堪える。

そうだよな… こんな異形と言っても差し支えない容貌で生まれただもんな。

きっと両親からは不気味がられて、学校では遠巻きに見られ陰口をたたかれる… いや、もつと直接的な虐待やイジメにもあつてきたかもしれない。

しかし桜庭少年（仮）の悲しい過去の一端が明らかになったとしても、手掛かりがつかめたとは言えない状況である。

ふくむ… やむをえまい。机の上に置かれていた本… 『日記帳』を調べるとしよう。マナー違反だろうが状況把握のために、どうか許して欲しい。

心中で桜庭少年（仮）に詫びつつ、日記帳を手取る。

「どれ…」

バラリと日記帳をめくって早くも数分後にオレは後悔することになった。いや、倫理的な問題もあるがそれだけでなく。

曰く「自分は神様転生を果たした最強の存在だ」とか「能力は『王の財宝』『一方通行のベクトル操作』『ニコポナデポ』の3つだ」とか。どうやらこれは日記帳じゃなくて、桜庭少年（仮）の妄想ノートだったようだ。

余りに余りな内容でオレの精神を著しく消耗させる内容だったので、詳細は割愛させていただきざっとだけ流れを記させてもらう。

魔法少女リリカルなのはの世界に転生したユージンⅡRⅡ桜庭は史上並ぶ者のない美形にしてありとあらゆる魔法の天才。

「ちなみにRはルシファーの略らしい。ルシファーだったらLuciferだからLだと思うが推定小学生の可愛い間違いだ。そつとしておこう…」

オリジナルデバイス（魔法使いの杖のようなものらしい）のなんちゃらを使って原作キャラをハーレムの一員にしようと日夜努力していたらしい。

「（努力の内容とは素直になれない彼女たちをデバイスで探し出して接触し、声をかけてやったり頭を撫でたりしてやることらしい。これはツツコミ待ちだろうか）」

そんな彼の努力と成功の日々にも陰りが見えてくる。新たな転生者である御剣刀真みつるぎとうまの登場。コイツにハーレムの女たちは次々洗脳されていったらしい。

「（どうやら桜庭少年（仮）にはNTR趣味もあるらしい。推定小学生にしてその業の深さは如何なものだろうか。……いや、将来有望と解釈しておこう）」

御剣少年との直接対決の結果、彼の卑怯な策に惜しくも不覚を取りデバイスを破壊され、それに依存していた能力も喪われたらしい。

「（なるほどなー。まあ、負けて這い上がるのは王道的な醍醐味ではある。がんばれ、桜庭少年（仮）よ…）」

御剣に邪魔をされて全てが台無しになった。こんなクソゲーな世界は要らない。という形で締めくくられていた。スマホで日付を見比べると昨日書かれたものらしい。

「つて、がんばらんのかい！」

思わず声を出して突っ込んでしまったオレは悪くなかっただろう。そう思いたい。

……しかし、これは気不味いなんてもんじゃない。

考えてみても欲しい。置かれた状況を確認するための情報収集の一環とはいえ、勝手に日記帳を覗いた結果がこの妄想ノートである。

きつと桜庭少年（仮）にとって現実には余りにも辛く、こうした妄想

世界に逃避するしか救いはなかったのだろう。

この容貌に加えて、魔法少女趣味である。学校で他の同級生たちと話が合うはずもない。

特にこの年代は男子は男子同士、女子は女子同士でグループを作る傾向にある。ぼっちであればコミュニケーション技術が磨かれる筈もない。

彼はやり場のない怒りや悲しみを外では抑圧し、この妄想ノートに書き殴ることで心の平穏をギリギリの部分で保っていたのだろう。

しかし、オレも詳しくは忘れたが魔法少女リリカルなのはと言えば一大ブームになった(なっている?)魔法少女アニメの金字塔だ。

多分昨今流行りの女の子同士がキャツキャウフフする、百合っぽいゆるゆるな日常系の物語だったんだろうな。小学生が見てるくらいだし。

曖昧になっている記憶をもとにそう結論づけて、そつと妄想ノートを閉じる。さて、どうしようか… コレ。

もし桜庭少年(仮)： あ、本名は桜庭悠人さくらば ゆうとつて言うらしいです。日記に書いてました。意外と普通ですね。

話を戻そう。悠人少年がこの身体に戻った時… オレが消えなかったと仮定して、その存在に感付かれたらどうなるか。

きっとこの日記帳(という名の妄想ノート)を見てしまったのではないかと早晚気付くことだろう。オレ自身も隠し通せる自信がない。

逆に悠人少年が戻った時にオレが入れ替わりに消えたとしても、やはり「誰かに見られた」という事実は感じ取るだろう。家の中荒らしたし。

その時、彼はどうするか? ……オレだったら自殺する。自殺は言い過ぎにしても黒歴史を暴かれるに等しい行為だろう。

となると… うん、この妄想ノートは存在そのものを消し去るのが安全だな。大人になった時にあのノートを見れば地獄の苦しみを味わうだろうからな。

聞かれても「あ、ゴメン。整理した時に知らずに捨てちゃったかも。何? 大事なもんだった?」とでも言えば彼も無理には追及してこな

いはずだ。多分。

こうして負の遺産とも言える彼の心の闇を処分したオレは今後のことを考える。

当面は戻る方法もわからないし、そもそも闇雲に元いた場所を探してみてもムリだろう。なんせ元の名前、住所、電話番号、一切が思い出せないのだ。

こんな事例、聞いたこともないし人に相談したところで頭の心配をされるだけだろう。というより、悠人少年には相談できる友達もいないっぽいし。

であれば、いつ悠人少年が戻ってきても良いように彼らしく振る舞うことにしよう。

もし彼が戻ってくることでオレの人格が消滅するというのであれば、そこは譲るべきだろう。

もともと彼の身体であるし、子供から物を取り上げて喜んでいるようじゃ流石に元・大人としてどうかと思うしな。

色々と問題は山積みだが、今あれこれ悩んでも解決するとは思えない事柄ばかり。

だったら流れに身を任せてなるようになるでしょう。

## 少年の徘徊

調査も一段落つき思考を中断すれば、時計の時刻は昼前を示している。

もうこんな時間か。

身体は正直なもので、自覚した瞬間に腹に入るものを寄越せと急かしてくる。

まずは冷蔵庫を開けて中身をチェックしよう。

適当な材料があればありあわせのもので調理してもよいだろう。

——ガラツ

ギツシリと詰まったブラック珈琲の缶の大軍がオレを出迎えてくれた。

溢れんばかりの黒の衝撃は、他の一切が入り込む余地がないことを如実に伝えてくる。

——ボタン：

冷蔵庫のドアを閉める。

悠人少年エ： 一体彼の心の闇とはどれほどのものだったのだろうか。

コレはちよつと偏食とかそういう次元を通り越してるよな。

両親いないにしてもコレは不摂生が過ぎんよ…。

なんだコレ、なんなの？ 某コンビニ店がまたぞろアニメとタイアップでもしたの？

そこまで考えて、オレはさつき処分した黒歴史ノートのことを思い出す。

これは… 悠人少年のキャラ付けのヒントとなるのではないだろうか？

誰かを真似るのならばその生活習慣からプロファイリングするのは基本中の基本だ。

きつと彼は、無口でクールでブラック珈琲のよく似合う厭世的な少年だったのだろう。

中二病とか言わないであげて！ 男の子だったら誰しもが通る道

なんだよ、多分!!

オレもかめ〇め波の練習とかしたことがあるし、これくらいは許容範囲だよ。……うん。

……冷静に考えれば推定小学生が中二病患ってても別におかしくないよな。

むしろ微笑ましいと言われる類だろう。この容貌でやられると不気味なだけだが。

「……悲しいことだな」

彼を演じることにそこはかたない憂鬱さを覚えながら、今後の予定を考える。

取り敢えず家で調理するのはNGになった。

申し訳ないがここは彼の財布を借りて昼は外食、夜は調理という形でいこう。

あとブラック珈琲は早めに処分しよう。そうしよう。

すまない、悠人少年。使ったお金はメモっておくからキミが戻った時にちゃんと返すよ。

……あんまり使い過ぎると返済がしんどくなるから、基本、節約モードでいこう。

やれやれ、早く戻れるといいなあ。

ノートと筆記用具にブラック珈琲2本を鞆に入れ、外套を羽織って外に出る。

玄関を開けて感じる、この暖かさが同居した奇妙な肌寒さ…… 春先といったところかな？

そうとも、前向きに考えよう。この地の情報収集が自然に行える良い機会だ。

その時に記憶が刺激されれば、名前や住所を思い出して戻る一助になるかもしれない。

オレってば外出に抵抗はないけど、出る必要がなかったら何日でもこもってられるしな。

適当にぶらついて喫茶店かファーストフード店にでも入って噂話に耳を傾けるもよし。

スーパーで惣菜を買って公園のベンチで春の木漏れ日に身を委ねながら食べるもよし、だ。

なんだか楽しくなってきたな。

右も左も分からぬ状況だが悪いことばかりじゃないだろう。

オレは足取りも軽く、見知らぬ場所から更に見知らぬ場所へと歩き出すのであった。

……

……

……

初めて見る景色の数々に目を奪われながらあちこちをぶらついていると、いつしか図書館のような建物前まで辿り着いていた。

ふむふむ： 館名は『風芽丘図書館』と。やっぱり図書館だったか。

一階部分には喫茶店もあるようだ。ふむ、お昼を食べてから図書館で調べ物もいいかもな。

現在の状況についてやこの街のこと、あとなんか面白い本： 調べたいことは幾らでもある。

店に入ると店員さんにギョツとされた。まあ、この容貌じゃ仕方ないだろうが傷付くな。

とはいえ、憎しみの連鎖が生むのだ。ここは大人になって流そうじゃないか。

そんな下らないことを考えているなんておくびにも見せず、クールに用件だけを伝えてみる。

「二名、禁煙で。……空いてますか？」

フッフ、店員さん驚いてるぞ。「いらつしやいませ、一名様ですか？」なんて定型台詞を言わせる隙も与えなかったからな。

自分の失態に気付いたのか露骨に舌打ちされる。おや、客商売でそれはいただけませんか。

案内の途中ですれ違った店長らしき人が「あの問題児が： 何のつもりだ」とか呟いていた。

ふむふむ： 察するに應對した店員の彼はまだまだ研修中で問題もある性格なのだろう。

だとすればこつちが敢えて指摘することもないな。店長さんの今後の指導に期待しよう。

そうこうしてゐるうちに仕切りのついた最奥の席へと案内された。

角でかつ4人用の席。オマケに仕切りのせいで入口からは見えな  
い。おいおい、良いのか？

確かに対応はちよつと拙かったかもしれないが、こんな露骨な鼻屑  
はいいのだろうか？

「……いいんですか？」

「な、何か問題でもありましたでしょうか」

こちらが目を見ながら確認すると、研修中の店員さんはどもりなが  
らもそう返してきた。

……あ、うん。ごめんね。折角の気遣いに野暮なこと言つちやつた  
ね。

コレでさっきの件はチャラ。そういうことだな？ オーケーオー  
ケー、忘れようじゃないか。

よく見たら汗もかいているし、彼なりに失敗を挽回しようと必死に  
知恵を絞つたんだな。

「いや、何も問題はない。……そうでしょうか？」

「し、失礼します！」

あ、行つちやつた。含みを持たせるように言つてみたが、露骨過ぎ  
て気不味くなつたかな？

まあ、いつか。メニューを見よう。お、ナポリタンセットが美味し  
そうだな。コレにしよう。

出てきた料理に舌鼓を打ちながら周囲のオバサマたちの噂話に耳  
を傾ける。

主人の稼ぎが少ないとか、翠屋という喫茶店が美味しくてお勧めら  
しいとか色んな話が耳に入ってくる。喫茶店内で別の喫茶店の話す  
るなよ。可哀想だろ。思つても言えないオレチキン。

ここ(ウミナリ市という場所らしい)には総合病院もあるらしいな。  
散歩してる時も思ったが、やっぱり都会だよな。

つつがなく腹を満たし、会計を済ませると店員と店長は揃つて安堵

の表情を見せた。

……ああ、クレームでも入れられるのかと思ったのか。それはドキドキするよね。

なんせ周囲には有閑マダムの群れ。些細な悪評だろうと大袈裟に広範囲に拡散されかねない。

「ご馳走様でした。……また来ますよ」

笑顔を見せつつ社交辞令。

仕事でもない限り必要以上に笑ったり喋ったりするのは面倒な性分だが、これくらいは構うまい。無言となつた彼らに会釈を一つし、オレは書架に向かうことにした。

何か収穫があるといいな。

## 少年と車椅子の少女

というわけでやって来ましたよ、図書館。いやまあさつきからいたけど、アレは喫茶店だしね。

うーん：　しかし広いなあ。これだけ広いと迷子になってしまいうさだ。

子供だからというのを差し引いても、この規模って国立図書館に匹敵するんじゃない？

まあ、国立図書館とか行ったことないから想像でしかないけどね。さて、司書さんに話を聞いて本のジャンルごとの書架の凡その位置は確認した。

最初に事情を説明して適当に見繕って貰おうとしたが、出された2冊を見て考えを改めた。

『はてしない物語』と『精神疾患は脳の病気か?』の2冊だった。

すまし顔で渡してくる司書さんにどういうつもりかと小一時間ほど問い詰めたかった。

やめておいたけど。……まあ、面白そうだし後で借りるとしよう。教えて貰った場所は『海鳴市関係』『歴史関係』『医療関係』の3箇所。

今挙げた順に回ればグルッと一周して戻ってくる形になるかな。優先順位についてもそんなもんだらう。

海鳴市について調べることで大体の位置関係やらスポット、常識を学ぶことができる。

上手く行けば記憶を刺激してオレの元いた場所について何か思い出すかもしれない。

オレとしても一番期待しているのはこれだ。……まあ、あまり期待しすぎるのもアレだが。

続いて歴史関係。これは新聞などのいわゆるニュース関係の書架とくつついている。

ニュースにぎつと目を通せば「この街で生きる常識」をモノにすることができらるだろう。

あとはまあ、限りなく可能性は低いが此処がよく似た別の世界って  
こともありうる。

何言ってるんだオマエと言われそうだが、既にオレという超現象の実  
例も存在しているのだ。

今のオレが覚えていることなんて僅かだが、信長とかいなかったら違  
う世界と見ていいだろう。

……単純に歴史小説とか好きってのもあるが。ま、趣味と実益を兼  
ねるのは良いことさ。うん。

最後の医療関係がクセモノだ。そもそもオレは理系じゃなくて文  
系…… だった気がする。

ガワである悠人少年が仮に妄想ノートの通り天才だったとしても  
中の人であるオレは凡人だ。

とはいえ、こういう事例があるかもしれないし藁にもすがる思いと  
いうヤツだ。

やるだけやってみようじゃないか。失敗は成功の母さ。当たって  
砕けろとも言っさ。

……お分かりいただけただろうか？ このオレの現代医学への  
並々ならぬ期待（棒）の程を。

……

……

……

色々と回って時計を見れば今は午後3時過ぎ。

なんだかんだと2時間ほども時間を潰したのか。

充実した2時間を振り返りながら、今オレは医療関係の書架をぶら  
ついている。

この海鳴市は海に面しており、臨海公園は市の名物スポットとなっ  
ているそうだ。

桜街道があったり、由緒正しい神社（石段がとてつもなく長いらし  
い）があったりとか。

毎年夏には海水浴に訪れる観光客もいながら、郊外にハイキングで  
きる山もあるとか。

で、小学校から大学まで一貫教育の私立聖祥大学とか総合大学病院を持つ海鳴大学もあるとか。

そんなご都合主義満載の夢の様なCity…それがオレが今いる海鳴市らしい。

こんな漫画かアニメのような場所、ホントにあつたんだなあ。

で、信長さんも卑弥呼さんも存在すると確認してからは地元ローカルなニュースを摘み食い。

ある程度の常識を得るに至った…というわけだ。

まあ、2時間程度じゃ流し読みにも程があるが。

え？ 読むの遅い？ メモしながらだと時間かかるんだよ。コピーより書いた方が覚えるしね。

しかし、この医療関係の書架に至っては最初からメモをする気にもなれない。

そもそも部分部分で読めない字も混じってる気がする。

あと日本の書籍なら日本語で書こうぜ。もしくはカタカナで。心からそう思う。

…：適当にグルッと回ったら借りるものだけ借りて帰るとするか。夕食の買い物とかあるし。

そんなことを考えながらブラブラしていると、車椅子が目映る。

正確に言えば、車椅子に座ったまま「よっ！」とか「はっ！」とか言いながら虚空に手を伸ばす少女の姿が。そこで問題だ。あの車椅子の少女は一体何をしているのだろうか？

1. ちよつぴり斬新な体操
2. 誰にも見られない場所で新必殺技の秘密特訓
3. 届かない場所にある本を取ろうとしている

個人的に1や2に○を付けるような方とはお近づきになりたくない。常識的に考えて3だよな。

此処は死角になっており他の人の目も届かず、誰かの助けも期待できない。

書架から上半身だけ出し受付に目をやるが、司書さんは席を外しているようだ。チツ、使えん。

まあ、しょうがない。恩着せがましいのはあまり好きじゃないがサツと手伝うことにしよう。

それにきつと悠人少年も困っている少女を見捨てるような性格じゃないはずだ。何となくそう思う。えーと… 口数少なくクールな感じでイメーヅ。声も心持ち低めに。…よし、行こうか。

「…どれが欲しいんだ？」

「うひゃあ!？」

おつきな声だなあ… ああ、ビツクリした。

確かにいきなり声を掛けたら驚くよね。しょうがない。

「驚かせてすまない。…必要な書籍名を言ってくれ」

「あ、ども。…えっと、その『自宅療養による難病克服の体験記』を」

お、おう… これは反応に困るな。

どんなに気遣っても健常者が障碍者にする事なんて施しに過ぎないかもしれない。

ここは反応を示さず、そつと本をとつてそつと立ち去るのがベターだな。

弱いオレを叱ってくれナタク！ なんてことを考えながらも手は淀みなく動き目的を果たす。

「…コレでいいか？」

「あ、うん。…じゃなくて、はい。えらい親切にしてもろておおきいです」

おお、関西弁だ。

キツイイメーヅがあつたけれど、結構柔らかくておつとりしたイメーヅも与えてくれるな。

それに真つ先にお礼を言うなんて出来た子だ。

別に礼を期待したわけじゃないけれど、そういうのつて嬉しくなるよね。

「気にするな、オレは気にしない」

「そういうわけにも… あ、私としたことが目も合わせずに、つて」

某アニメキャラクターをイメーヅしてクールに受け答える。

いいよいいよ、お礼なんて。このまま静かに立ち去るのがいいんじゃないか。

しかし、この出来た少女は車椅子に座りながらこちらの方を向こうとして… 固まった。

…あ、うん。そうだよね。そういう反応になるよね。

忘れてたよ、自分の容貌。淡い茶色の髪（亜麻色って表現するのがベターかも）の少女の背後に立っていたのは銀髪オッドアイの少年。うん、出来の悪い三文ホラー小説って言っても信じるね。

「ぎよえー！ ……もがもがッ!?!」

そして絶叫… は、させないように咄嗟に口を塞いだ。勿論手で。

うるさいからって唇で相手の口を塞ぐのって漫画やアニメの世界じゃないと許されないよね。

…：…噛まれるの怖いし。ていうか手も噛まれるの怖いからすぐに離した。

「落ち着け。図書館では静かにした方がいい」

「…：…っ！ どの面下げてゆうてんねん」

当り障りのない注意をして、冷静になるように促す。こんな感じでもいいだろうか？

とか思ってたらいきなり顔のことで否定入りましたー。

さつき柔らかく感じた関西弁は、刺々しくキツいという当初のイメージ通りになってますぜ。

ハツハツハツ、こんな顔してるからって何言われても傷付かないと思つたら大間違いだぞう？

だが先程の対応を見る限り、根は優しい少女のはずだ。多分、きつと、メイビー。

それに考えても見て欲しい。

元はといえはいきなり話しかけて驚かせたオレにも非があるのではないだろうか？

その一回は笑顔で水に流してくれたのに、不可抗力とはいえこんな容貌で驚かせてしまった。

2回も不意打ちで驚かされれば年頃の少女のこと、多少は言動が

刺々しくなるのも当然だ。

ふむ… ここは一つ、言い訳などせずに誠実に謝罪をするとう。

ていうか、女を怒らせるとだいたい結論は「男が悪い」ってところに落ち着くだろうしね。

「…：すまない、迷惑をかけた」

腰を曲げて深々とお辞儀をする。なんせ車椅子の少女だからな。

彼女よりも頭が高かったりしようものなら、謝罪と認めてなんぞもらえないだろう。

「な、なんやの？ そんな、いきなり謝るなんて…」

「いいんだ、オレが悪かったから。…：コレ、詫びの印にもならないが受け取ってくれ」

困ったような表情を浮かべる少女に、鞆から取り出したブラック珈琲を一本握らせる。

不良在庫も処分できて一石二鳥だ。思わず苦い笑みが浮かんでしまう。

おっと、いけないいけない。謝罪の最中に笑顔なんて見せたら怒られてしまうかもしれん。

少女が再度口を開く前にさっさと退散するでしょう。

桜庭悠人はクールに去るぜ！

「図書館は飲食禁止ですよ」

…：やっぱリクールには去れなかったよ。脳内でそんな台詞が浮かんでくる。

あ、すみません。司書さんもお一つどうぞ。無言で二本目のブラック珈琲を差し出す。

「今回は許しましょう。…：さて、私も少し休憩しましょうか」

露骨に袖の下を要求し、あまつさえそれが通れば笑顔でサボる。公務員の腐敗はここまでできたか！

まあ、どうでもいいか。さて、貸し出し手続きをしてから夕食の買い物をしてないとな。

…：ウフフ。司書さん、戻ってこないなあ。

## 少年の出会い

「かけなさい、少年」

「……………」

桜庭家の応接室： テーブルを挟んで向かい合うオレと少年。座っているオレを、少年は立ったまま見下ろしている。

少年は黒髪黒目に年相応の幼さを宿す、THE☆平凡とも言うべき外見。正直羨ましい。

真意を探るような不躰な視線を受け止めながら、オレは敢えて笑みを見せる。

彼が緊張するのも無理はない。

夕暮れ時に余所様の家： それもそこそこ金持ちっぽい家に招かれたのだ。

両親不在というのも緊張に拍車をかけるだろう。決して腐った意味がなかったとしても。

さて、まずは彼の緊張を解してあげたいがそのためにはなんと声をかけるか…

掛けるべき言葉を胸中で選定しながら、オレはこの少年との出合いを振り返ってみた。

……………」

……………」

……………」

…：卵や牛乳、カット野菜、お米に水出しのお茶パック。それから簡単な調味料の類。

買い過ぎたか？ と後悔しても後の祭り。英語で言うトアフター・ザ・フェスティバル。

貧弱の一言に尽きる悠人少年の小学生ボディに多大な負荷をかけることになった。

特にタイムセールとバッティングしてしまったのが痛かった。主婦の怖さは何処も共通。

「フツ、フツ」も地獄か…」

戦利品を抱えて愚にもつかぬことを呟きつつ帰宅したオレの家の前に、その少年はいた。

やべっ、恥ずかしい呟きを聞かれちゃったかな？ いや、まだそうとは決まってるない。

軽く会釈し、帰ろうと踵を返しかけていた少年の横を通り過ぎる。きっと回覧板か何かを届けに来てくれたご近所さんだろう。うん、そう思うことにした。

「待てオマエ… いや、桜庭。何故外に出ている？」

「……………」

……まさかの知り合いだったでゴザル。

やべえ、やべえよ… 向こうはこっちのこと知ってそうなのに、こっちは全然知らないよ。

向こうが一方的にこちらを知っているだけの熱心なストーカーである可能性… ないな。

「オイ、聞いているのかッ!？」

「…………怒鳴るな。聞こえている」

ああ、はいはい。聞こえていますとも。だから怒鳴らないでくださいな。

ちよつとキミという予想外の緊急事態に遭遇してフリーズしちやつてただけですとも。

ふむふむ、なんで外に出ているのかって？ そりゃ勿論決まってるがな。

「だったら…ッ!」

「見ての通りだ。…………他に説明が必要か？」

最後の力を振り絞り、スーパーのレジ袋を持ち上げてみせる。説明するのも億劫だ。

無口でクールな悠人少年が買い物なんてする筈がない！ なんて流石に思われないだろう。

誰だって生きるためには買い物をするのだ。完全自給自足する推定小学生とか怖いぞ。

腕がちよっぴりプルプルしてる。がんばれ、悠人少年の貧弱ボ

デイ。気合いだ！ 根性だ！

ひっひっふー… ひっひっふー… ってラマーズ呼吸法になつて  
るじゃねえか!?

「……ッ！ 何が可笑しいんだ!?!」

「いや… それよりオマエの用件は?」

ハイになって吹き出しそうになるのを無理やり堪えたモノの口角  
が上がるのは隠せない。

だから怒鳴らないで欲しいが… まあ、諦めるしかないようだ。

決して悪気があつたわけじゃないが、真面目な話の時にいきなり  
笑つたら怒るよね。

コレはオレが悪かつただろう。すまない少年。反省します。だが、  
今は謝る余裕はない。

だからさつきと用件を告げてお帰りくださると嬉しい。回覧板の  
ハンコか? サインか?

「……オマエが今日、無断で欠席したからな。学校のプリントを届け  
に来た」

「ほう? ……わざわざご苦労なことだ」

なるほどねー。学校のプリントねー。まったく、レジ袋抱えながらだ  
と鍵開けにくいな。

ん? 『学校の』プリント… だと…? び、ビンゴオオオオオオオ  
オオオツ!!!

いやあ、悠人少年が何処の学校に通つてるか分からなくて非常に不  
安だった、手掛かりが向こうから来てくれるとは。ありがとう、見  
知らぬ少年よ! お前はオレにとっての新たな光だ!!

「なんだと…?」

ハッ!

いかんいかん… “ご苦労” って目下の人間に使う言葉だよな。  
少年も気分を害している。

だが、オレとしてはこの手掛かりを逃すつもりなどサラサラない。

へっへっへっ、覚悟するんだな少年。オマエには明日、オレを学校  
まで送ってもらおうか!

しかし（推定）無口でクールで厭世系男子の悠人少年が「学校がどこにあるのか分からないの：送ってつてくれる？」なんて上目遣いでお願いしてギャップ萌えをかますわけにはいかない。

そういうのは映画『ロード・オブ・ザ・リング』の萌えドワーフ・ギムリさんだけで充分だ。

よし、ようやく玄関の鍵が開いたぞ。何故か身構えている少年に笑みを浮かべて手招きする。

「気分を害したならば詫びよう。……上がっていくといい。珈琲でも出そうじゃないか」

「……………」

不良在庫の処分は忘れないオレ。『淹れる』じゃなくて『出す』と言うのがポイントだ。

さて、ここからが正念場だ。

『悠人少年のイメージは壊さない』、『話を合わせつつ明日学校に連れてってもらう』…

両方やらなくっちゃいけないのが中の人の辛いところだな。覚悟はいいか？ オレはできてる。

## 彼の困惑

……俺の目の前にはアイツがいる。そう、アイツ…… 桜庭悠人が。数日前に俺はコイツと戦った。……殺し合ったのだ。

この世界で…… いや、「前世」も含めて生まれて初めての本気の「殺し合い」だった。

かつて俺は一度死に、そして『神』とやらを名乗る人物によって二度目の生を受けた。

送り先はなんでもアニメをモチーフにした世界だとか。大して興味もないので聞き流したが。

一度目の人生は先に死んで両親を泣かせてしまう羽目になった。……アレはかなり堪えた。

今度こそ同じ過ちは繰り返すまいと、普通の子供として生きていくことを心に誓った。

普通に生きてさえいれば『神』とやらが与えたという「特典」なんかに頼らないで済む。

平凡に、慎ましやかに暮らしたいという願いと裏腹に、人生は中々上手くいかないものだ。

俺の通うことになった私立聖祥大付属小学校には、『暴君』として君臨する男がいたのだ。

そう…… 今、目の前にいる桜庭悠人だ。

アイツは『神』から授けられたと思しき力を惜しげも無く使い、思うままに振る舞っていた。

幼稚園の時は学区が違った。一年生の時はクラスが違った。そして二年となって現実を見た。

あまり人の噂話に興味が無い俺の耳にも届いていたソイツの悪行ではあったが、心の何処かで「そんな大袈裟な……」と思う気持ちがあったとは言えない。しかし、現実は遥かに酷かった。

本当なら関わり合いになんかならずに、目を伏せてしまえば良かったのかも知れない。

だけど、そんなコトは出来なかった。——ああ、そうか……。

此処で逃げられるような性格だったら今頃こんなところで第二の人生なんか歩んでないか。

心中でこの世界の父さんと母さんに詫び、アイツを止めるために向かつていった。

時に言葉で、時に力で… 初めはてんで相手にならなかったが、それでも喰らいついた。

教室で明らかに嫌がっている高町や月村、バニングスらに迫っているのを止めたり、

街で通行人にちよつかいを掛けようとしていたのを止めたり、

図書館で車椅子の少女に絡んでいたり、喫茶店で暴れていたたり… なんてこともあった。

コイツは心底下衆な野郎だったが、その「力」は本物だった。

ちつぽけな俺の力なんかじゃ、コイツを退散させるだけでも命を賭けねばならないほどに。

そしてコイツと俺の出会いから一年近くが経とうとしている数日前、俺達は決闘をした。

激しい戦いだった。我ながら良く勝ちを拾えたものだと思う。

いや… 仮に今戦ったとして、あの時と同様に勝てるだろうとはとてもじゃないが思えない。

勝率なんてそれこそ1%にも満たなかったんじゃないだろうか。

情報を吟味し、相手の力を予測し、性格も考慮して戦術を練り、万全の対策を立てた。

それでも尚、薄氷の勝利だったのだ。次も勝てると思えるほどに自惚れちやいない。

だから、(原因を作ったのは俺だが)ここ数日のアイツの欠席には誰もが安堵していた。

だが、終業式を間近に控えた状態でこのまま欠席が続くと流石に先生も困りだした。

当然ながら、誰もヤツの家にプリントを届けようなんて思わない。誰もが目を逸らす。

…俺は黙って手を挙げる。原因の一端は俺にある。それに、ヤツ

の様子も確認したい。

俺は家に帰り荷物を置くと、その足で学校を挟んでほぼ反対側にあるヤツの家に向かった。

邪魔な荷物を持っていては咄嗟の対処が間に合わない可能性があるからな。

さて、ヤツは俺を見たらどうという反応を示すだろうか？ 罵倒するか、いきなり襲い掛かるか。

ヤツの性格から取るだろう行動を予測し、対応をシミュレートしつつ歩けばすぐに到着だ。

呼び鈴を鳴らす。……反応がない。

なるほど、俺との戦いの怪我がまだ癒えてないのかもしれない。戦術を再構築しよう。

再度呼び鈴を鳴らすも、やはり反応がない。……どうしたものか。取り敢えずノックをするか。何度か試してみても反応がなければ出直せばいい。

——ドンドンドン……

「すみませくん！」

黒檀製ってヤツだろうか？ 高そうな木製の扉が良い音を返してくる。

反応がないな。だがもう少しだけ。

——ドンドンドン！

「も〜しくも〜しく〜！」

ちよつと楽しくなってきたな。だが、次で反応がなければ諦めるか。

——ドンドンドンゴンツッ！

「失礼しまあいてっ！」

うっかり鍵穴の部分を叩いてしまった。……ちよつと歪んでる気がするな。

ま、まあ反応もないことだし。ここは出直すとしよう。

「フツ、ここも地獄か……」

振り返り、立ち去ろうとした俺の目の前に……まるで見計らったか

のようにヤツが現れた。

コイツ： 怪我もなくピンピンしているじゃないか。

……俺が油断している間もコイツはこの数日間、自由に動き回っていたということなのか？

遠い目をしながら呟いたヤツの言葉が遅れて俺の耳に届いた。「地獄」だと？

一体ヤツは何を見てきたと言うんだ。そして、これから何をしようとしているんだ。

ヤツは思考に囚われる俺の横を、まるで意にも介さず通り抜け、玄関へと向かった。

その瞳には俺に対する関心など微塵も感じられなかった。

……待て、そういうことなのか？

俺にとつて命懸けの戦いすらも、ヤツにとつてはほんのお遊びに過ぎなかったのか？

「待てオマエ…… いや、桜庭。何故外に出ている？」

「……………」

自分でも驚くほど冷たい声を出してヤツを引き止める。挑発のため敢えてヤツを呼び捨てる。

激昂するかと一挙手一投足を注視するも無反応。

「オイ、聞いているのかッ!?!」

「…………怒鳴るな。聞こえている」

逆に激する羽目になった俺に対し、漸く視線を向けてくる。

……なんだ、この表情は？

貴様ごときに関わってる暇などない、とでも言うような。……こんな表情のヤツは知らない。

今迄と全く別人じゃないか。一体どういうことだ？ この数日で何があつたというんだ！

震えているのか、俺は。いや、ここで弱気なんか見せてはいられない。

しかし、そう奮い立たせようとする己の心こそがヤツの思う壺だったのだ。

「だったら…ッ！」

「見ての通りだ。…他に説明が必要か？」

こちらの口火を封じてスーパールの袋を掲げてくる。まるで弄ぶようにブラブラ揺らしながら。

焦る俺の様子を見て取ったのか呆れたようにため息を吐き、小馬鹿にした笑みを浮かべる。

「…ッ！ 何が可笑しいんだ!？」

「いや… それよりオマエの用件は？」

だがヤツはそれ以上語ることはなかった。こちらの考えることなんてお見通しつてワケか。

クツ… 成長するのは何も俺だけの特権なんかじゃない。分かってたつもりだったが。

「…オマエが今日、無断で欠席したからな。学校のプリントを届けに来た」

「ほう？ ……わざわざご苦労なことだ」

敢えて「今日」ということを強調する。

俺が原因で数日間休ませているなら激するまでは行かずとも、皮肉の一つくらいは返す筈だ。

だが、それに対してすら全くの無関心。まるで他人事のように。

貴様など眼中にないと言わんばかりに玄関の鍵を開けようとしている。

「なんだと…？」

このままヤツを立ち去らせていいのか？ ……いや、そんな論理的な話じゃない。

俺は今、間違いなく冷静じゃない。

何度も命を賭けて止めようとしてきたコイツに、その程度の存在“と思われるのがとてつもなく悔しい。俺は最低だ。今から無防備なコイツの背中に不意打ちを仕掛けるのだから。

だけど… それでいいのか？ 俺は、今迄なんの為にここまでやってきたんだ？

動くべきだと訴える俺と、やってはいけないことだと訴える俺…

板挟みにされながら、石のように動けないでいた俺に状況は無情にもタイムアップを告げた。

「気分を害したならば詫びよう。……上がっていくといい。珈琲でも出そうじゃないか」

「……………」

玄関を開けて、予定通りといった具合の笑みを浮かべながらこちらに手招きをする桜庭悠人。

俺は今、自覚した。

千載一遇の好機をむぎむぎ失ってしまったのだと。ヤツはそれを見せ付け楽しんでいるのだと。

……………」

……

：

家に入るなりそのまま応接室に通される。

ヤツはというと荷物をカウンターキッチンの上に置き、冷蔵庫から缶コーヒーを二つ取り出す。

そして応接室に戻ってくると同時に、うち一つをこちらに向かって放ってきた。

——パシッ

難なく片手で受け止め、ヤツの真意を視線で探ろうとする。

「かけなさい、少年」

「……………」

今のやりとりの隙にヤツは油断なく椅子に腰掛け、俺にも着席を促してきた。

この状況で立ちん坊つてのも間抜けなだけだ。ヤツに従うのも癪だが大人しく着席した。

ヤツは満足気に頷くと、口を開いた。

「さて、まずはオマエの用件から片付けるとしよう。……プリントを見せて欲しい」

「言われるまでもないさ。ここに……」

俺は鞆に入れていたプリントを取り出そうとした。が、ない。とい

うか鞆がない。

……あ、あれ？

そ、そういえば『邪魔な荷物を持っていては咄嗟の対処が間に合わない可能性がある』って。

「……どうした？」

言葉にするだけで行動に移さない俺に業を煮やしたのか、不審げな様子でヤツが尋ねてくる。

クツ： 自らの間抜けが招いたとはいえ、コレを口に出すのは屈辱的過ぎる。

「……ない。家に忘れたみたいだ」

「……オマエは一体何をしに来たんだ？」

その後、ヤツの白い視線に晒された俺は、なし崩しに明日の朝一番にプリントをここまで届けに来ることを約束させられた。今から自宅まで取りに戻っては確実に夕食に間に合わない。

父さんや母さんを無闇に心配させるのは本意じゃないとはいえ…クツ、どうしてこうなった！

## 少年と家族愛

「ふう…」

首尾よく迎えの約束を取り付け、ドジっ子の少年を送り返したオレは小さくため息をつく。

そう言えばあの少年の名前を聞き忘れたな。失敗したか… いや、これで良いのだ。

応接室に通されてから… いや、玄関前で会った時からあの少年は落ち着かない様子だった。

その原因は幾つか考えられるが、学校での悠人少年の立場と決して無関係ではないだろう。

そんな中で「で、誰だっけ？」なんて言ったらどうなる？ 少年の顔が丸潰れである。

せめて少年の献身に報いるためにも明日の用意を万全にて行い、明日という日を乗り切る。

それが嫌々やって来ただろう彼に対し、オレが出来る唯一にして最善のコトなのだろうから。

というわけで、鞆の中に入っていた時間割表に従い必要な教科書を次々と入れていく。

しかし悠人少年は凄いものだな。折り目どころか使った形跡がなほ程に綺麗な教科書類だ。

きつと今はなき妄想ノートに記してあったとおり、悠人少年は本物の天才だったのだろう。

最近の小学校は色んな意味で進んでいると聞く。彼の成績を穢さぬようオレも努力しないと！

え？ 時間割表があるなら何処の学校に通ってるか分かるんじゃないかって？

そう思うだろう？ うん、オレもそう思っていた。だが時間割表には時間割しか書いてなかった。学校名も連絡先すらもまるでない。

不親切にも程があるよね。学校の管理主義ってこういう目立たぬ

ところで弊害ある気がする。

……さて、明日の準備も一段落して風呂にも入って本来ならばあとは寝るだけだ。

だが、それをする訳にはいかない。オレはある種の決意を秘めて学習機の前に立っていた。

そう： 目当てのモノはノート型のパソコンである。

ここにはかなりの手掛かりが眠っているのではないだろうか？

分かっている。分かっているんだ…

スマホだけでも失礼なのに、コレに加えてパソコンまで閲覧しようなんて。

悠人少年に『ふ… ふざけるなよ…！ 戦争だろうが… スマホはまだしも、パソコンにまで触れたら… 戦争だろうが…！ 戦争じゃねえのかよ…！』と言われても返す言葉がない。

故に出掛けるまでは触れることはしなかったのだ。…妄想ノートで消耗したのもあるけど。

しかし、近所を徘徊してもダメ。望みの図書館でも記憶を刺激するモノに巡り会えなかった。

こうなると八方塞がりなのだ。…すまない、悠人少年。戻ってきたらお叱りは存分に受ける。

心中で深く彼に謝罪ながらオレはパソコンに電源を入れる。

…スマホと同じく指紋認証型だ。

「む？ これは…」

ロックを解除したオレが見たものは… 668通のメールが未開封になっているという通知だ。

ふむ、出会い系やフィッシング詐欺などのスパムメールが溜まっているだろうか？

マメに処分しないとパソコンの動作にも負担が出てくる。仕方ない、整理をしようか。

「……………」

整理しようと思い、ザツと眺めるとすぐに違和感に気付いた。差出人は主に2人だったのだ。

ほぼ毎日のペースでメールを送ってくれている。そして今669通： いや、670通になった。

コレはと思い、適当なメールを幾つか開封してみる。……中身は案の定であった。

そう、メールの差出人は悠人少年のご両親だったのだ。

中身は日々の些細なコトや仕事で家を空けることの謝罪、こちらの体調の確認がほとんどだ。

些細なすれ違いから疎遠となってしまうたが、悠人少年も両親は心底憎めないでいたのだ。

しかし、それでも複雑な感情はしこりとなって残る。故にメールは未開封のままだった。

ご両親もご両親でそれぞれ働いている忙しい時間を縫って、悠人少年を気にかけていたのだ。

くっ： お互いに不器用過ぎるだろう！ この家族は！

溢れてくる涙が止まらない。だが、そんな『部外者』のオレだからこそ今できることがある。

音声チャットなどしようものなら血を分けたご両親のこと、すぐに息子の異常に気付くはずだ。

だから、オレはオレなりに万感の想いを込めてメールを執筆する。オレにもいたかもしれない両親への想いも密かに乗せて出来上がった文を、お二人に送信した。

オレのしていることは最低だ。コレはご両親を騙す行為に等しい。そんなことは自覚している。

だけど、それでも： コレが少しは悠人少年とご両親が歩み寄りきつかけとなれば……

そう願わずにはいられなかった。

暖かい家族愛に触れ、心地よい充実感に満たされていたオレに睡魔が襲ってくる。

そろそろ就寝の時間か。……今日一日で色々あった気もするし、特に何もなかった気がする。

朝起きたら知らない場所で目覚めて、散歩に出た喫茶店では舌打ち

されてしまい、

図書館では車椅子の少女に謝罪し、ウチまで来た名も知らぬ少年には明日の迎えを頼んだ。

そして、パソコンを起動したら美しい家族愛に触れ、謎の感動に襲われた。

ふむ、なんか字面で書くとアレだが些細な問題だろう。きっと、多分、メイビー。

清潔なベッドに包まれ、オレは微睡みの中へと沈んでいった。

明日には悠人少年がこの身体に戻っているかもしれない。

そうだな… オレにできることなんて、一日一日を死ぬ気で生き抜くことくらいだろうさ。

確か… 『葉隠』だった… っけ…

………

………

…

「え？ 何これ、怖い…」

翌朝起きたオレは、パソコンに溜まっている1000通もの未開封メール（息子からの初めての返信に狂喜乱舞するご両親のお言葉）を見て、軽く引いてしまうのであった。おい、仕事しろよ。

## 少年の登校

気付けば知らない天井を… いや、待て。落ち着けオレ。知ってるだろ。つい昨日から。

どうやらまだ悠人少年は自分の身体に戻ってきてないらしい。ならば、仕方あるまい。

また今日も、桜庭悠人<sup>さくらばゆうと</sup>としての一日が始まる… ということだ。

枕元のアラームに目をやれば時刻は午前6時半。うむ、悪くない目覚めだ。むしろ良い。

昨晚消し忘れていたパソコンを落とそうとして、有り得ない数の未開封メールに軽く引いて。

そして朝のシャワーを浴びてから昨日の残りのご飯に味噌汁を作り、目玉焼きを作る。

中の人って料理が得意なんだ？ そう思った貴方、騙されているぞ。別に得意な訳ではない。

ご飯は電気炊飯器で昨日食べた残り。味噌汁はお湯注いで溶かすだけの即席みそ汁。

目玉焼きは卵落として焼くだけ。あ、オレは塩と胡椒と醤油のローテーション派です。

今日は塩の気分。ズボラなオレでもモノの5分で準備完了。後は食べるだけ。ウメーウメー。

うん、次はハムやレタスがあるといいな。今日の学校の帰りにまた買い物にでも行こう。

それに毎日卵じゃ飽きが来る。粗塩鮭とか海苔とかも買っておこうかな。

トーストの気分のために食パンもあるといいんだが、食パンって日持ちしないからなあ…。

そんなことを考えてるウチに完食しましたよ、と。どうやら昨日の彼はまだのようだ。

さもありません。食器をシンクに付けて時計を確認すれば、まだ7時を過ぎたばかりだ。

少し早く動き過ぎたか… まあ、いい。昨日借りてきた本でも読みながら待つとしよう。

え？ 普通は昨日散々貧弱ボディに泣かされたから、鍛えたりするんじゃないかって？

フフフ、そこが素人の浅はかさってヤツですな。

オレは考えた。悠人少年はきつとこの貧弱ボディをそれはそれは大事にしてきたのだろうと。

そんな貧弱ボディをオレの身勝手な想いで、ムキムキマッチョにしちやつていいのだろうか？

いや、いいはずがない（反語）。…まあ、ぶつちやけ面倒なだけなんですけれどね。

陽の光を浴びるのが嫌いとは言わないし適度な散歩も悪くない。休日出歩くのとか好きだしね。

でもそれだけだ。漫画やアニメの世界ってわけじゃないんだから、悠人少年であるオレに出来ることは無口でクールな厭世系少年たる平凡な学生として日々を過ごすことのみ。

…うん、何故か知らないけれど今とつても憂鬱になったぞ。なんだろうな（すつとぼけ）。

そんなこんなで図書館で借りてきた『はてしない物語』を読み耽るオレ。

映画『ネバーエンディングストーリー』とは違う点が幾つもあって、中々新鮮な気分だな。

——ピンポーン！

さて、どうやら例の少年がやってきたようだ。今日は朝の会前に読書の時間もあることだ。

続きは学校で読むことにしよう。いそいそと鞆に仕舞い、立ち上がる。

おっと、玄関に出る前に軽く身だしなみのチェックはしておこう。

…うん、似合っていない！

銀髪オッドアイに、白のセーラー上服と同じく白のハーフパンツが絶望的に似合わないなあ！

——ピンポン！

急かされた。さっさと出ることにしよう。出かける準備を整え、玄関扉を開け放つ。

——ガチャ……

「挨拶は不要。……例のものは持ってきたか？」

「お、おう……」

本当は「芝村に挨拶はない（キリツ）」って決めたかったんだがな。十中八九通じないだろう。

「結構。ならば向かうぞ」

「あ、ああ…… ってどうするんだよ！ プリントは！」

「どの道今から読んでいる暇はない。教室で渡せ」

「クツ、まさかオマエと一緒に通うことになるなんて……」

鞆に手を入れようとしている少年の脇を通りぬけ、さっさと進む：ポーズを見せる。

慌てて追ってくる。よしよし、計算通りだ。そして教室についても否定しない。

昨日プリントを持ってきたことから、彼とは同じクラスというところでほぼ間違いない。

「……学校に到着するという結果が一致しているならば、過程など枝葉末節。拘るな」

「過程もバス通学で一致してるっつーの!!」

ほうほう、バス通学だったのか。なるほどな。小学校低学年っぽいし安全面を考慮してかな？

あるいはよっぽどの広範囲をカバーするマンモス校なのかもしれない。

まあ、いずれにせよバス停に到着するまでとバスを待つ時間の間、情報収集させていただこう。

ふむふむ、オレたちの通う学校はあの私立聖祥大学付属小学校だったのか。

大学まで一貫のエスカレーター校。しかも偏差値は高く、ステータスとして十分通用し得る。

なんてこった、悠人少年はホントに勝ち組だったんだな。あと目の前の名も知らぬ少年も。

はてさて、こんなエリート学校での授業に記憶が曖昧なオレがついていけるだろうか？

しかも見る。バスを待っている間、他の生徒たちも私語を全くしないで静かなものときた。

驥の行き届きが必ずしも学習レベルを示すわけではないが、一種の指標にはなるだろう。

到着したバスの中も静まり返っている。……あ、いや、これは違うか。分かっちゃったよ。

みんなオレに顔を合わせようとしてくれない。今も露骨に顔を逸らされて、確信したよ。

この悠人少年の異様な容貌が、彼らにとって禁忌タブーそのものになっている、ということをな。

一発芸でもかましてみんなの心を解きほぐすことができれば、あるいは… いや、無理だな。

もし万が一滑ってしまったら、オレは悠人少年にとつてもない負の遺産を残すことになる。

というか、考えたくもないが悠人少年の滑った結果がああ妄想ノートの可能性だってあるのだ。

……うん、大人しく隅っこのほうで静かにしよう。  
わーい、みんな場所を空けてくれて優しいなあ（棒）。

「……プリントをくれないか？」

「え？ 今か？ 教室で渡すって話は…」

「構わん。時間は有効に使うべきだ」

「わ、わかったよ… ホラよ」

なんだかんだと話し相手にはなってくれるし、こちらの提案も聞いてくれる。

ひよっとして彼は素晴らしいソウルフレンドなのではないだろうか？ 名前も知らないけど。

ありがとう、仮称・名無しの少年よ！

いつかさり気なく名前を聞き取れたらその時は呼ばせてもらう！  
……まずは苗字からで。

……くしゃくしゃになった紙束が渡される。何これ、イジメ？ イジメか？ 泣くぞ。

しかもすげー量だよ。なんだよ、休んだの昨日だけじゃなかったの？

一日の遅れがどれだけ響いてくるって言うんだよ。コレじゃオチオチ風邪も引けないだろ。

「……………」

「あ、スマンスマン。くしゃくしゃになっちまった」

すげー殴りたい。けどこの貧弱ボディじゃ目の前の野蛮人に傷一つ付けられはしないだろう。

悪気はないのは分かるんだけどさ… もつとこう、クリアファイル使うとかしようよ！

ああもう、オマエなんか名無しで充分だ！ この名無し野郎！ 苛立ちながらプリントを捲る。

……………」

……………」

……………」

酔いました。すげー気持ち悪いです。

どうしてオレはバスの中で活字なんて読んでしまったんだ。なんもかんも政治が悪い。

安西先生、諦めるからもうゲームセット（という名のリバース）をしましょう。

だがオレは、それでも我慢をする。

考えてもみて欲しい。

無口クルルの厭世系男子。更には銀髪オツドアイ。この時点で近寄り難さダブル役満だ。

今ココでリバースなどしようものなら、めでたくトリプル役満に昇格決定だ。

コレでは悠人少年の帰ってくる場所がなくなってしまう。

アムロレイが「こんなに嬉しいことはない」って言えなくなってしまう。

人類の革新が夢物語で終わってしまう。……うん、途中から関係ないね。

とにかく彼のためにも、オレがリバーズする訳にはいかないんだ。……そう、絶対にだ！

あ、ちよつとゴメン。揺らさないで運転手さん。今とつてもやばいの。

プリントを仕舞い、腕を組み、目を閉じたまま大きく深呼吸。吐き気を抑えるんだ、オレ。

心頭滅却すれば火自ずから涼し……。そう言っただけに火に飛び込んだ快川和尚の心意気を思い出せ。

焼け死んだけど。

よし、治まってきたぞ。集中、集中だ……。オレはやれば出来る子だ。多分、きつと、メイビー。

——プシュー……

だが、そんなオレの必死の抵抗を嘲笑うかのように……

「あく！ 刀真、こんなところに！ つたく、なんで今日は待ち合わせに来なかったのよ！」

「あ、ああ……。バニングスか。その、すまなかったな。高町に月村も」

「おはよー、刀真くん！ あれ？ なんか今日はバスの中が静かだね。すずかちゃん」

「あはは……。うん、そうだね。なのはちゃん。その、おはよ……。刀真くん」

少女特有の甲高い声の数々が、オレの脳を刺激してくる。しかも段々と近付いてきやがる。

名無し！ オメエか！ オメエのせいなのか!? クソツ、とんだ疫病神だぜコイツは!!

なにが「とうまく」だ。上条さんばりに「そげぶ」でもするってのか！

だったらオレの吐き気を今すぐぶち壊してください。

……ホントマジ、お願いします。今だったら土下座しちやってもいいかもしれないんで、はい。

「あ、アンタ……なんでこんなトコにいるのよ……」  
しまった。いつの間にか間合いに入り込まれていた。

まあ、オレ動けないんで当然なんですが。

少女の震える声にターゲットロックオンされていた。なんでオレなんか構うんですか。

スルー推奨。さっさと（無視）しろー！（オレが）間に合わなくなっても知らんぞー！！

「……………」

「へえ…… 今日に限って無視、ってワケ？ 何様のつもりかしら」

敵意に満ちた声だ。こええ、こええよ…… 吐き気の件がなくても目を開けられねえよ。

てか…… ホント、無理なんで。今はちよつと勘弁して下さい。

『諦めたら？』

安西先生の暖かい声が聞こえた気がした。

## ツンツン少女の理由

「へえ… 今日に限って無視、ってワケ？ 何様のつもりかしら」  
「……………」

「ヤツ」は、こちらのそんな嫌味など何処吹く風といった様子に受け流している。

腕を組み、目を閉じ、口を一文字に結んで… 相手をする価値などないというふうには。

全身で私を… いや、自分自身を除いた全ての存在すらも否定しているかのように。

…怪しい。

証拠はないが私の勘が告げている。絶対にまた何かを企んでいるに決まっているのだ。

大体以前から目が合った瞬間に嫁だなんだとベタベタされてきたのだ。

隠れていても探し出されたことだつてある。本気で嫌がつても照れ隠しだと言われて。

コイツはとんでもない「力」を持っているから、誰も面と向かつては逆らえなかった。

そのコト自体で誰かを恨むつもりなんてサラサラない。しようがないことはあるのだから。

けど、もし私と…

なのはやすすずかを含めた私たちと同じ境遇の子が生まれそうなら、黙って見過ごせない！

「耳すら聞こえなくなったの？ もし、そうなら…」

「…少し、静かにしてくれないか」

一刀両断。そして大きいため息をつき、ゆっくりと瞼を開き… 私を見据える。

座っているのはアイツの方なのにまるで見下されるような威圧感… それに…

アイツのあの眼を見て、ゾツとした。コレまで直接暴力を振るわれ

ることはなかった。

だから心の何処かで油断をしていたのかもしれない。  
バカな話だ。アイツのせいで酷い目に遭った人間なんて幾らだっ  
ているのに。

自分だけは特別だって、そう思い込もうとしていたんだ。  
そうでないとちっぽけな正義感が無力感に押し潰されてしまうか  
ら。

だが、アイツのあの眼はなんだ。私を完全に「邪魔者」と見るよう  
な冷たい、あの眼は。

「挨拶は不要。用があるなら聞いてやる。……語れ」  
「……っ！」

一つ一つ言葉を区切り、私の反応など見るまでもないといった様子  
で窓の外に顔を向ける。

「おい！ 幾らなんでも……」

「誰がオマエの発言を許可した？ 順番は守れ」

「……クッ！」

私を庇おうとした刀真の言葉すらもまるで意に介さない。……そ  
れはそうだろう。

関わりうとしなかったアイツに、しつこく声をかけてしまったのは  
私なのだ。

文字通り「眠れる獅子」を起こしてしまったのだ。

薄々感じていたヤツの企みとは、ひよつとしたらコレのことだった  
のかもしれない。

嗚呼…… だとしたら、私はなんて無様な……

「アリサちゃん……」

「うう、アリサちゃん……」

！ …… 屈してしまおうと思っていた数秒前の自分をぶん殴って  
やりたい。

私の後ろにはなのはやすずかがいるのだ。ここで退く？ ここで  
屈する？ 冗談でしょう？

——パァン！

両頬を叩いて気合いを入れる。もう大丈夫だ。もう迷わない。もう…… 屈しない。

笑みを浮かべて真っ直ぐにアイツを見据えて言っつてやる。私の思いの丈を。

「言わなきゃ分からない？ アンタが目障りなの。それに其処は私の席。どいてくださる？」

言い切った。言っつてやった。そう…… 刀真の隣は私の指定席。

本来ならなのはやすずかにも同等の権利はあるけれど、今日くらいは役得と譲っつてもらおう。

しかし……

「断る」

「なあっ!?!」

またも一刀両断。窓の外を眺めたまま…… こつちに視線すら向けないで。

「今日この席にはオレが先に座った。今この場でオマエに譲る理由がない」

「なっ！ り、理由が無いですつて……」

今、私が語っつて聞かせたじゃない。……一体、どういっつつもりなのか？ コイツ。

「だが代案を出すことは出来る。聞け」

「代案ですつて？ ……いいわ、言っつてみなさい」

なるほど…… そういっつことね。ここからが交渉の本番といっつことか。

数日見ない間に余計な知恵をっつてくれちゃつたじゃない。

けど、慣れない武器を扱っつのは怪我のもとつてアリサ様が教えてやるわ！

「まずここは最奥の席だ。故に、このままでもあと2人は座れる。ここまでは良いか？」

「ええ」

まずは簡単な確認。前提条件のお互いの認識ね。

固唾を呑んで見守るなのはやすずか。そして他の生徒たちに向け、

私は親指を立てる。

大丈夫！　こんなヤツなんかには負けたりしない！

「まずオマエたち3人のうち2人が横の座席に座る」

「……それで？」

フン、陳腐なトラップね。

誰かを犠牲にさせて私たち3人の友情を引き裂く狙いの初步的な罠だ。

この程度だったとしたら拍子抜けね。さっさと片付けて…

「しかる後に、残った一人がコイツの膝の上に座る」

「え？　な…　ちよ、俺え!？」

何故かアイツは刀真を指さしていた。いきなり話題を振られて狼狽える刀真。

周囲のざわめきとともに好奇の視線に晒され、完全に冷静さを失っている。

まったく、もっとシャキツとしなさいよ！　だから私がついてないと

…

って待って待て。落ち着いて。落ち着くのを、アリサ・バニングス。

コレはアイツの罠よ。

私の後ろには守るべき友達が…

「アリサちゃん、仕方ないよ。ここは桜庭くんの代案に乗ろう？」

「そうだよ、アリサちゃん。アリサちゃんは頑張ったよ？　誰にも恥じることはないんだよ」

いきなり後ろから撃たれた!?　あ、あれ!?　友情…　友情パワーはあ!?

と、とにかく気を取り直して。

「ぎ、残念だけどその代案は呑めないわね…」

「ふむ、そうか…　やはり女子の膝の上でないと嫌なのか」

ちよ、なんでそうなるの!?!　なのは、すずか!　なんで微妙に距離をとってるのよ!?!

「あ、うん。アリサちゃんは大事な友達だよ？　大事な、友達、なんだけどね…」

「う、うん。その、ここにキマシタワーを建てるわけには。……ホラ！  
バスの中だからね？」

「ちよ、ちーがーうー！ 違うから！ 誤解、誤解よ！ 変なコト言っ  
てるとはっ倒すわよ！」

真っ赤になりながら事態を收拾する。

あれ？ コレって必死になって否定したみたいでますます怪しま  
れるんじゃないかしら？

う、うう… 周囲の視線が痛い。だけど、ここで退くわけにはっ！  
「ほう… 違うか。ならば何故だ？」

「私や私の友達にためにも！ その友情にかけて！ 退くことはでき  
ないからよっ!!」

アイツの言葉に乗っかる形なのが癪だが、胸に闘志を（ムリヤリ）燃  
やして言ってのける。

さあ、どうだ!?

「えー！ ぶーぶー」

「ぶーぶーだよー」

なのは、すずか…。

「……ゆう、じょう？」

「そ、そうよ！」

首を傾げるアイツに向かって、半ば以上自棄になって言い放つ！

なのは、すずか。後で覚えておきなさいよ…。

「じゃあアリサちゃん反対みだいだし、どっちが膝かジャンケンしよ  
う」

「うん… 勝った方がその権利を、だね？ 恨みっこ無しだよ、なのは  
ちゃん」

なのはあああああああああ！ すずかあああああああああ  
ああ！

「その、なんだ… 本音を言い合える素晴らしい友達だ。と、思う」

「……ぐすっ」

ついにフォローされた。こんなヤツにい。

「ちよっと待ってくれ！」

「発言を許可する」

刀真！ やっぱりいざという時に頼れるのは刀真なのね！

「俺の権利は!？」

「それは一旦置いてこう。な？」

「一旦ってなんだよ!？」

「……少年、タイムカプセルというものを知っているか？」

「十年単位で寝かされるじゃねえか!？」

……ダメだ、コイツ。あっさり翻弄されてるじゃない。くっ、どうしてこうなったのよ。

「……結局のところ、代案は呑めないということか？」

「そ、そうよ！ アンタがどかない限りね!!」

刀真で遊ぶのに飽きたのか、私に向かって最終確認をしてくる。

後ろの友達<sup>ウラギリモ</sup> 2人のブーイングは聞こえない。聞こえないと思ったら聞こえない。

「オマエの代案はあるのか？ それもなしに否定するだけでは何も掴めないぞ」

「それは…っ!」

痛いところを突かれた。咄嗟に口籠る私に対して、織り込み済みという風に頷く。

「オレは代案を示した。オマエにそれが無いというのなら、せめて

“理由”を示せ」

「……理由？ それならさつきから」

そう、さつきから何度も示しているはずだ。「アンタがいるのが我慢できない」って。

「否… それは“信念”だ。それそのものに一定の価値は認めるが、決して理由足り得ない」

「だったら、なんなのよ… アンタの言う、理由って」

「分からないか？ ならば、そう… “道理”と言い換えてもいい」

そう、それは確かにそうだ。私は“信念”のために戦っていた。けれど、“道理”って？

「道理とは、誰もが納得する公明かつ正大な指針のことだ。そのもの

が理由と言ってもいい」

「道理… 即ち、理由ってことね。なるほど、それを示せばアンタは席を譲るのね?」

「フツ、言うまでもない。そもオマエたちは道理を曲げる輩を許せるのか?」

「それこそ言うまでもないわね。だったら、アンタに示してやるわ:

『道理』ってヤツを!」

ていうか、アンタこそ道理曲げの代名詞なんだけどね。

…でも、なんだか不思議な気分。あんなに嫌ってたコイツとこんな話をするなんて。

周囲を見渡す。

なのはやすずかは私に対して笑顔で頷いてくれる。

刀真もそうだ。何よ、柄にもなくカツコつけちゃって。

そして他のみんなも… 全員が全員、私にこの場を預けてくれるみたい。

フツ、そこまでされちゃ燃えない訳にはいかないわね!

バンニングス家の帝王学を甘く見ないでよね! 今迄学んできた全てを乗せて論破してやるわ!

そつと目を閉じ、思考をクリアにする。

未だかつてここまで集中力を高めたことがあつたかしら?

だからこそ、確信する。私は負けない。

本当に『信念』と『理由』を背負うものは、戦う前に既に勝利しているのだから!

思考を纏め、目を見開き、標的を:

——プシュー…

『えー… 私立聖祥大学付属小学校です。忘れ物のないように気を付けてお降り下さい!』

「あ、おりまーす」

ヤツは片手をあげ、無駄に洗練された無駄のない無駄な動きでバスを降りていった。

「って、待てやこるああああああああああああああああああああ

あッ!!!  
」

やり場のない怒りの発散場所を求めて、始業時間ギリギリまでヤツを追いかけて回してやった。

ついカツとなってやったけど、私はちっとも悪くないと思うわね。

ああ、むしろ始末し損なつたのが心底申し訳ないわね。反省してます。……なにか文句でも？

## 少年とゴリと眼鏡

——ガチャツ

扉を開け、慎重に左右を確認する。ヤツの姿は見えない。

「……いない、か」

どうやら漸く振り切ったようだ。……長く苦しい戦いであった。

気分悪いのにしつこく話しかけられ、声を絞り出してなんとか用件を聞き出せば席を譲れ。

どこのジャイアニズム宣言かと思っただね。これが学級崩壊というヤツなのだろうか。

あと名無し少年、自然に混ざろうとしてくんな。二対一とか泣いちやうだろ。主にオレが。

あかん。窓の外の景色でも眺めて気を落ち着けよう。答えはNOです。今日は無理なんです。

だが少女は納得しない。当然だろう。男のオレが断固として席を譲らない構えを見せたのだ。

勿論オレも席を譲れない。リバースの危機だ、徹底抗戦の構えをとるしかない。腕力以外で。

あの少女はおそらく頭の回転が早く、責任感が強い。高い能力に裏打ちされた自信も覗える。

まあ、真正面から戦えばオレに勝てる要素なんて皆無。で、彼女は正攻法が大好きと見た。

戦えば負けるなら、逃げ回るしかないじゃない！ 貴方も… 私も！ ……貴方って誰だろ。

なんだっていいか。そう… オレが狙うのは、タイムアップ時間切れ唯一つ。

勝利条件なんて決まりきってる。「学校に到着するまで席に座り続けること」なのだから。

結論から言うと、彼女… いや彼女たちとの会話は想像以上に楽しかった。

彼女の連れ合いの少女2人組も、緊急エキストラに任命した名無し少年もノリが抜群。

最終的にはバスの生徒全員を巻き込んで大いに盛り上がったね。彼女はオレの想像以上の頭の良さを発揮した。いや、ホント頭の良い子との会話って楽だね。

こつちが適当に喋ったことを勝手に察してくれて、オレ以上の回答を導き出してくれるし。

そして天性の華があるのか周囲の人間を引き込んでくれる。オレ？ オレはゆっくり休んだ。

そんな彼女の輝きが最高潮に達した時、無残に試合終了のホイッスルが鳴った。

すまない、少女よ。もうちょっと話していたと思ったのは内緒だ。

それに少しだけ安心もした。

もしかしたら何があっても悠人少年は無視されるのかもしれない。オレはそう思っていた。

しかし彼女が動いてくれたからこそ、最終的に皆と一緒にこの時間を過ごすことができた。

いや、あの頭の良い少女のこと…。きつとこの結果すらも計算通りだったのだろう。

このオレとしたことが、どうやらまんまと踊らされちゃったようだ。

試合に勝って勝負に負ける…。というヤツか。だが、こんな清々しい敗北ならば大歓迎だ。

そう思いながらクールに去ると、あらゆる障害物を蹴散らし、猛スピードで追走してきた。

しかも悪鬼のような表情で。今後、彼女のことは脳内でクロハラハムスターと呼ぼうと思う。

くそう…。ちよつとばかり鍛錬の件を考え直そうかな？ って思ってしまったじゃないか。

え？ クロハラハムスターとやらが何か教えて欲しいって？ 仕方ない仔猫ちゃんだけ。

だが今オレはちよつと忙しい。だからオレのベストフレンドのG

o o g l e に聞いてやってくれ!

ヤツならキミに手取り足取り優しく耳元で囁きかけるように全てを教えてくれるはずだ。

あ、その結果なんらかの夢が壊されてもオレは一切関知しませんので。真実は時に残酷なのだ。

改めて周囲の様子を確認しよう。澄み渡る青空。少し肌寒いが仄かな暖かさを感じる風。

お分かりいただけただろうか? 即ちここは学校の中で最も天に近い場所、屋上だ。

迷ったんじゃないぞ。コレは、そう… 見慣れぬ場所の安全性を確かめるための探索行為さ。

「舐めたこと言ってるんじゃないぞ、オラア!」

ひっ! す、すんませんでしたあ! (土下座)

こんなところで野生のさとりにエンカウトするなんて思わなかったんですう!

無口クールな厭世系男子を演じてても心だけは、心だけは自由だと思いがつてましたあ!

——ドガアツ!

「うぐっ…」

あれ? このうめき声オレのじゃないし、そもそも殴られた形跡だつてないぞ?

いや、なんか少し離れた場所から聞こえてきたような… あっ、あそこか!

見ると、何故かオレと同じ小学校の制服を着た180cmくらいの巨漢が、オレと同じくらいの体格の少年を殴りつけていた。……え?

何アレ、怖い。なんで大人が小学生の服を着てるの?

げ、しかも目が合った。眼鏡の少年が絶望的な表情をする。見捨てられると思ったのだろうか。

まあ、その認識は限りなく正しい。オレだって目が合わなければ正直退散したかった。

だがこの身は、世界に裏切られながらも愛を断ち切れなかった不器

用な悠人少年のモノなのだ。

非常に遺憾だが、逃げるといふ選択肢はないだろう。

最悪、こつちが殴られてる隙に眼鏡の少年だけでも逃げられるように持つて行こうか。

貧弱な少年・悠人ⅡRⅡ桜庭： 口先介入するッ!!

……

……

……

なんか話せば分かってくれました。180cm超のゴリくんはなんと同級生だったのだ。

彼は悠人少年のコトを非常に尊敬している様子だった。……それも頷ける話だ。

無口クールな厭世系男子に銀髪オツドアイというハンデを背負いつつ日々を生きている。

そんな悠人少年は、同じく小学生離れたゴリくんにとって憧れの存在だったのだろうか。

うん。「で……俺小学生だけどどうする？」って出来るイケメンじゃないもんな、ゴリくん。

脛毛溢れてるし、少女漫画とは違う現実の非情さを教えてくれる。アニメじゃない(確信)。

手は壊すだけじゃなくて色んなコトに使えるよ、とか、作るために使うのは壊すよりも優れているけれど、最も大事なのは自分だけができることを探すことだぜベイブ、とか色々語っちゃった。

少し調子に乗っちゃったかな。恥ずかしいぜ。

そんなオレに対し元いじめられっ子にしてゴリくんとか和解を果たした眼鏡くんが尋ねてくる。

「あなたは……一体何者なんです？ 今まで僕が知っていた桜庭さんとは全く違って見える」

あばばばばばばばばばば……！ ナンテコツタイ！ 調子に乗った結果がコレだよ！

おおおおおおおおおおおお落ち着け。まだ慌てるような時間じゃ

ないですよね？ 仙道さん。

あつ、ちよつと顔を背けないで！ お願い、プリーズ！ 時間は待ってられないのよ!?

「答えてください… 桜庭さん」

くつ、逃げ道は… あかん。ゴリくんが期待に満ちた眼差しでこっちを見詰めている。

答え方間違えたらミンチになってしまう。諦めて本当のことを告げよう。

但し、内緒にしてもらうのを忘れずに。そつと人差し指を唇に当て、掠れた声で真実を告げる。

「確かに別人とも言えるかもしれん。……オレは、あくまで仮住まいだが」

本当の家主は悠人少年だからね！ そこんところ忘れないようにね！

オレはそう… 一時ここに止まっただけの渡り鳥のような存在。

だからオレを殴れば悠人少年も無事じゃすまないからな！ ほ、本気だからな！

反応を確かめる勇氣などあるわけがない。そのまま踵を返し、屋上を後にする。

さつさと悠人少年の教室を探さないと（使命感）。

## ゴリと眼鏡と悪のカリスマ

「舐めたこと言ってるじゃねえぞ、オラア！」

——ドガアツ！

「うぐつ…」

唇の中に鉄の味が広がる。

ずれた眼鏡を直し、震える足を叱咤して、もう一度“アレ”を返してくれと言うため口を開く。

「……………」

しかし、恐怖のあまり舌が動かない。クソツ！ そうじゃない…

そうじゃないだろう！

この先どんなに臆病になつたとしても、今、この瞬間こそが人生で一番勇気が必要なんだ！

例え、悪魔によつてこの学校が作り替えられても… 譲れない矜持プライドがあるんだ！

だが、そんな僕の掻き集めたなけなしの勇気すらも“存在する”だけでかき消す人物が現れた。

ユージンⅡ RⅡ桜庭。この学校を… 暴力の支配する地獄に変えた男。

そして… その恩恵を最大限に受けたのが、今、僕の目の前で拳を握って見下ろしている男だ。

どうしようもない… 所詮僕なんかが、何かを取り戻そうとしたのが間違いだったのか。

諦観の念が一度でも湧き上がると、指一本動かすことすら億劫になる。

どうとでもなれ… そんな捨鉢な思いで蹲うずくまる。あのゴリラも既に主の到着に気付いた筈だ。

——ポン…

肩に手が置かれる。

「立てるか？」

何の冗談だろうか？ 目の前には、僕に向かって手を差し伸べる…

邪悪の化身”の姿があった。

僕はその圧力に逆らう気力すらなく、差し出されるその手に応じ、再度この場に立たされる。

「さて、事情を説明してもらおうか」

真つ直ぐに眼を見つめられる。赤と青の瞳が、一切の虚言を許さぬとばかりに射抜いてくる。

「……っ」

なんだ、この静かな迫力は。この数日間で何があった？ 本当に、

“コレ”は“彼”なのか？

それまでのただ荒れ狂うに任せる暴風のような在り方とは違う……

まるで、そう…… 高みから全てを見通して、躊躇わず一切の容赦なく焼き尽くす漆黒の太陽ッ！

答えられない。……答えられるはずがない。真実を語っても死。虚言を弄しても死なのだ。

ああ、なるほど…… さっきまでの勇氣など全くの無意味だ。既に絶對者は決まっていた。

所詮僕たちの諍いなど、蟻とミジンコの戯れに過ぎない。故に気紛れを起こしただけなのだ。

「オイオイ、桜庭様よお！ なんだってそんな雑魚に聞くんですかい!？」

だが、無視をされて当然面白く無いのがゴリラだ。状況を理解せぬがゆえの蛮勇。

無粋に割り込まれたというのに、彼は眉一つ動かさず、ゴリラに視線を向ける。

「ふむ…… 順番が変わるが、まあ、いい。オマエにも聞きたいことはあった」

「へへへ…… なんでも聞いてくださいえ」

コレまでの彼ならば、どんなふうにも弱者を甚振いたぶったかを聞き、悦に入っていただろう。

しかし…… 今の彼は読めない。危険だ。一体どんな質問をするのか予測もつかない！

「オマエが何故ここに居るのか、教えてもらえないか」

「……は？」

下手に出るような口調とともに紡ぎ出されたのは、存在そのものの疑問視だった。

そんなバカな……このゴリラは数日前まで一の子分として扱っていたのではないか？

鈍感な彼もすぐに状況の危うさを認識する。……惜しむらくはそれが遅かったことだが。

「質問の仕方が悪かったようだな。……どうやら、もう一度お願いをすべきかな？」

「おおおおお俺、いやワタクシめはアナタ様と同じクラスの者で、大事な右腕……ひいつ!？」

この場に来て、彼が初めて眉を顰める。……当然だろう。ゴリラと同列に語られたのだから。

かつての彼ならば半殺し程度で済んだかもしれない。

だが、今の彼ならば……極刑以外にありえない。ゴリラもそれを感じ取り、青褪め震えている。

「今、信じられない発言が飛び出したが……真実と見做していいのだな？」

「………」

白目を剥き、泡を吹いている。辛うじて気絶こそしていないものの、それとて時間の問題。

どの道答えられなどしないだろう。

そんなゴリラを笑うことなど誰ができようか。こうして今、失禁してないだけ大したものだ。

「……ふむ」

彼は少し困ったように嘆息すると、続いて僕に目を向けた。

……ああ、なるほど。こうなるのか。逃げることなど、最初から出来はしなかったのだ。

「ならばオマエに聞こう」

「……はい」

観念し、頭を垂れる。

「ゴイツが語ったことは真実か、それともただの世迷い事か… どう思う?…」

「それは…」

「いや、違うな。オマエは真実を知っている筈だ。…構わん、それを話せ」

「……っ!」

「オマエは何故ここにいるのだ」… そういうことか。僕にゴリラを殺せと言うのかッ!

ゴリラの世迷い事を肯定すれば不敬により死、逆に否定すればゴリラを処断する。

人を殺せるスイッチを無造作に放り投げてきた… というわけだ。コレこそが余興、と。

僕だって自分の命は惜しいさ。けれどね…

例え今この時を生き延びられても、絶対者を差し置いて真実を騙った身となり早晚裁かれる。

それはゴリラも一緒だ。僕が彼の言葉を肯定して処断され、何故ゴリラだけが生きられよう。

嗚呼… 捕食者と捕食される側だった僕達が、今や不可思議な運命共同体となっている。

だったら、良いき。今この状況に於いて僕はこのゴリラに奇妙な友情すら感じている。

どうせ「今死ぬか」「いずれ死ぬか」の違い… 一緒に死んでやるくらい、なんてことはない。

「どうした?…」

僕の考えが纏まる頃合いを見計らって、回答を再度促される。

あるいはこの返事すらも予想通りなのかもしれない。いや、きっとそうなのだろう。

だが、それでも胸を張り、真っ直ぐ彼を見詰めて答える。

「……ええ、そのとおり。その彼は、間違いなくこの生徒で貴方の同級生ですよ」

「そうか」

目を閉じ、「その時」を待つ。……しかし、それはいつまで経っても訪れなかった。

「ならばいい。答えてくれて感謝する」

「……………」

太陽が… 微笑んだ。呆然とする僕を、巨軀がすかさず抱き締める。

「うおおおおおおおおおおお！ 心の友よおおおおおおおおお おおおお!!」

いたたた… 凄い力だよ。流石はゴリラ。だけど、うん… キミが無事でよかった。

「和解の最中にすまないが、先程の質問に答えてくれるか？」

先程の… ああ、「事情を説明しろ」という。

「はい、桜庭様！ コイツがコレを描いたんです！ 凄いでしょう!!」  
って、ああ！ なんで彼に渡しているのさ!?

「ほう… ふむ」

「余りに綺麗だったんで… 俺、思わず取っちゃまったんです…」

彼はゴリラの独白を余所に、受け取った「スケッチブック」を捲り二つ、三つ頷いている。

今はもういない母さんの絵なんだ。だが、不思議と破かれるなんて予感は無かった。

「見事だ。【創造の御手】… その原型を見せてもらったぞ。更に精進に励め」

「【創造の御手】… ですか？」

「ああ、そうだ」

聞き慣れぬ言葉に思わず聞き返すも、気分を害する様子もなく頷いてくる。

「そのゴリラの少年の手は言わば【破壊の拳】。困難を打ち砕くための力といえる」

「困難を、打ち砕く…」

不思議と心に染み入る言葉に、思わず繰り返すゴリラ。間抜けだ

ぞ。

「対して眼鏡の少年の【創造の御手】は、新たにモノを生み出す可能性に満ちている」

「……モノを、生み出す」

「……どうやら間抜けは僕も同じだったようだ。」

「『破壊』を操り三流、『創造』して二流。両者を自在に使いこなして初めて一流半だ」

絶句する。……彼の視点は何処までの高みにあるのか。

ゴリラが身震いをしながら、問いかける。

「ならば……ならば一流とは何を為す者なんですか！ どうか教えてください！」

「フツ、それは自分で考えろ。其れがオマエたちに課せられた人生の命題なのだから」

なんと……彼は真理にすら到達しているというのか。

ありえない……彼だって只の人間の筈なのに。だがしかし、むしろ其れが自然に感じる。

「だが、そうだな。ヒントくらいはやろう」

「……っ！」

思わず二人揃って身を乗り出してしまう。

「破壊と創造の果てにある自分には出来ない、自分だけの概念……それが答えだ」

「破壊と創造の果てにある……」

「自分には出来ない、自分だけの概念……」

確かに、一流半から進めばそういうことになるだろう。だがしかし、それは……

「既存概念である、倫理や道徳観念すらも乗り越えて……ということですか？」

「そのとおり。ただ逸脱するだけの器などは四流……其れを知り、受け入れ、遥か高みを目指せ。倫理も道徳も所詮先人が作った手垢塗れの概念に過ぎん。庇護される側から自立する良い機会だ」

「……っ」

この人は、違う。コレまでの… もつと言えば数日前までの彼とは決定的に違う。

「あなたは… 一体何者なんですか？ 今まで僕が知っていた桜庭さんとは全く違つて見える」

思考と同時に言葉が口から漏れる。彼は虚空に視線を向けている。

ひよつとしたらこの不敬な質問を許す機会をくれたのかも知れない。僕は… 止まらない！

「答えてください… 桜庭さん」

その時、彼の背から突風が僕たちに吹き付ける。ゴリラと二人、思わず目を閉じてしまう。

だが、風に紛れた彼の言葉だけは辛うじて拾えた。

「確かに別人【ザァッ！】かもしれない。…オレは、アク【ザッ！】カリスマ【ザァッ！】」

目を開けた時… 彼の姿は何処にもなかった。

「な、なあ眼鏡… 今、確かに…」

「…ああ」

ゴリラに頷きを返す。彼は、確かに言った。「悪のカリスマ」と。

それが… 彼の今の『在り方』だというわけか。

空はどこまでも澄み渡り、時折、暖かさと肌寒さの混じり合った奇妙な風が吹き付ける。

それは、僕にとってこれから起こる何かを暗示しているように思えて仕方がなかった。

## 少年の席替え

——ガラッ

休み時間にざわめく教室のドアを開き、中の様子を確認する。……いた。ここが目的地だ。

名無しの少年やクロハラ（仮）さんを始めとする三人娘の姿を確認し、安堵する。

ふう、漸く目的地に到着したぜ。到着と同時にざわめきが消えるのは織り込み済みさ！

此処に辿り着くまでに突入し、ざわめきを消してしまった他のクラスの皆さん、ゴメンね。

オレは悠人少年本人じゃないから、休み時間を狙って確認するしか出来なかったんだ。

さて、オレの……もとい悠人少年の席は何処かなあ？

グルリと教室を見渡すと、気付きたくなかったとんでもないモノが視界に収まる。

むしろ収まりきれなかった。

……なんで聖帝十字陵（つぽいもの）が教室に鎮座してるの？

え？ 何アレ？ 何かのオブジェ？ ……だよ？ 上にある玉座つぽいのは飾りだよ？

救いを求めるために教室を見渡す。アレは悠人少年の席なんかじゃない筈だ。

名無しの少年はこちらの様子をうかがったまま、黙って見返してくるだけ。

クロハラ（仮）さんはなんかガルル……って唸っている。流石世界一凶暴なハムスター。

目が合うだけで流血の危機ってことか。他の2人の少女は名無し少年の後ろに隠れている。

教室入口で腕を組み、途方に暮れる。

通行の邪魔かもしれないが、下手に動くとおの座席が悠人少年のモノと決定しそうで怖い。

さて、どうしたものか…… そんなコトを考えていたオレに声がかける。

「どうかなさいましたか？」

つと、この声は先ほど屋上で聞いたような。おお…… 眼鏡くん！  
眼鏡くんじゃないか！

心の友となったゴリくん程じゃないにしても、オレともそこそこ会話話はしてくれた。

コレはもはや知り合いと言って差し支えないレベルなのではないだろうか？

彼は色々と物知りっぽいし、聞いてみよう。さっきもゴリくんのコトを教えてくださいな。

だが「アレはオレの席ですか？」と聞くのも怖い。悠人少年の心の闇がまた一つ明かされそうで。チキンと言われようが、受け入れたくない現実というものがある。当たり障りなく訊ねよう。

「『アレ』についてだが……」

「桜庭様の席がどうかしましたかい？」

「……………」

指差し尋ねれば、眼鏡くんより早くゴリくんが答えてくれる。

天然、いや野生の為せる技か。……さて、認めたくない現実と戦う時間がやって来たようだ。

やはり悠人少年はイジメられていたのだろう。あのように晒し者になる席を用意されて。

その昔、王がまだ神々の代理人であった頃…… 彼らは死後、天へと捧げられたという。

その祭壇こそがピラミッドであり、王を神の供物として完成させるための儀式だったとか。

そんな学説を何処かで読んだことがある。

つまり悠人少年は生徒として扱われず、無視され、そして晒し者となっていた恐れがある。

なんとということだ。クツ、児童社会の闇を垣間見た気分になっただけ。

いや： 諦めるのはまだ早い。あの通学バスの中でもオレたちの心は一つになったじゃないか。

人は変わっていきけるのだ。ゴリくんと眼鏡くんがそうであったように。

オレもみんなも： そして悠人少年だって。

そのためにも、まずは：

私立聖祥大学付属小学校二年生・悠人ⅡRⅡ桜庭： 世界の歪み

(聖帝十字陵)を狙い撃つぜ！

「最早アレは不要： 片付けるぞ」

「へへっ、任せて下さいよ！」

正直、手伝って欲しいなって下心もあって声をかけました。

ゴリくん、ちよつと乱暴だけど体育会系の爽やかさと面倒見の良さを感じさせる人柄だしね。

……まあ、なんちゃってインドア派のオレには合わない部分もあると思うけど。

だけど驚いた。いや、ゴリくんマジで凄いわ。まさかモノの数分で片付けちゃうなんて。

オレが呆然と見守っている間に、眼鏡くんが用具室から余った机と椅子を運んできてくれた。

え？ 何この阿吽の呼吸。ひよつとしてキミら、生まれた時から親友やってたんじゃね？

………

……

：

だがしかし、オレは新たな危機に直面している。それは悠人少年の席周辺の配置による。

教室のほぼ中央に陣取り、前方をクロハラ(仮)さん、左横をキマシタワーの少女。

そして右横を真っ先にクロハラ(仮)さんを裏切ったちやつかり系少女に固められていた。

なんてことだ： こんなにあんまりだ。……悠人少年が一体何を

したって言うんだ。

敵意剥き出しの流血系ハムスター少女と、彼女に負けず劣らずイ性格してる親友2人。

この完璧な包囲網は、悠人少年の学校生活に安息の場はなかったことを証明している。

言いたいことも言えないこんな世の中じゃ…

家に帰ってあんな妄想ノートを書くのも無理はない！ あ、いや、やっぱりアレはないわ。

とはいえ、コレでは彼が中々帰ってきたがらないのも無理はない。

ここは彼の身体を一時とはいえ間借りしている中の人として、行動を起こすべき時だろう。

グルリと教室を見渡し、目的の人物を探す… いた！

あの名無し少年め… 窓際最後尾なんていう主人公席をちやつかり占領しやがって！

なんとか彼と交渉して席を交換してもらおうのだ。

お世話になったゴリくんと眼鏡くんには流石にコレ以上迷惑はかけられん。

そもそも名無し少年はバスでもクロハラ(仮)さんらとそれなりに親交がある様子だった。

手に持った交渉アイテムは… オレの頼もしい相棒・ブラック珈琲。心の底から手放したい。

コレを渡す代わりに席を交換してもらおうようお願いするのだ！  
最悪土下座してでも！

——カツカツカツ：

上履きを鳴らして近付くオレに気付いた名無し少年が、不審げに見詰めてくる。だが遅い。

——トンツ

彼の机の上に、ブラック珈琲を置く。

必要ならば相手より先にジョーカーを切ってでも話を進める…

それがオレなりの交渉術だ。

うん、ジョーカーでもなんでもないけどね。ただの不良在庫だけど

ね。

「……何だ、コレは？」

「見て分からないか？ 缶珈琲というモノだ。種類はブラック。銘柄も説明した方がいいかな？」

大袈裟に肩を竦め、分かり切ったことを説明する。

大丈夫だ。彼はまだ動かない。時に腕力を振るうことも辞さぬ構えを見せるクロハラ（仮）さんとは違い、彼は言葉の応酬には可能な限り言葉で応えようとする。元来の性格が素直なのだろう。

「そんなコトは分かってる！ どういうつもりだって聞いているんだッ！」

「ッコレ」で席を交換してもらおう

「はあ!？」

すまないな… 名無しの少年。その素直さを突かせてもらう。悪い（元）大人に捕まったな。

「手早く移動を始めろ。席ごと移動でも、荷物だけの移動でも… その辺は任せよう」

「ちよ、ちよつと待て！ 勝手に話を進めるんじゃない!!」

チツ、話を進めて既成事実化したかっただけなのに。ゴリくと眼鏡くんの手際を見習えよ！

だからオマエはいつまで経ってもオレの中で名無しの少年なんだ。この名無し野郎！

嘘です、ごめんなさい。だから拳を握りしめて睨みつけてこないで。謝りますから、心の中で！

「では、嫌だというのか？」

「……ああ、何を企んでいるのか知らないがオマエの指図には従えない」

強い意志で睨みつけてくる。っ！ そうか… そういうことだったのか。

まさかこの少年も… クロハラ（仮）さんの被害者だったとは。

彼女の恐ろしさを知るがゆえにこの取引に応じられない。そういうことだったんだな？

そうとも知らずにオレは、なんてことを… だが、それでもオレは譲れんのだ。

オレだけじゃない… いつか悠人少年が戻ってきた時のために思い、心を鬼にする。

そう… オレは今、自分以外の者の（胃壁的なサムシングの）命を背負っているのだから！

目的成就のためならば、例え卑怯と誹られようともツ！！

「そうか、残念だ。……だが、一つだけ確認しておきたい」

「……………」

「なに、簡単な質問だ。 〴〵温かい家庭でホットミルクでも飲むように落ち着いて〴〵聞いてくれ」

「……………なんだよ」

オレは今から残酷なことをする。

そう… この教室内、〴〵彼女たち〴〵も間違いなく聞き耳を立てている。

だからこそ、口にする。

「ソコまで嫌なのか？ ——彼女たちの席と隣り合うコトが」

「なっ！ テメエ……」

「座れ… 警告は一度だ。次立てば、席を放棄したと見做す。オマエの言い分に関係なく、な」

すまない… すまない、名無し少年。

彼女たちにも聞かれている現状でキミも本音を言うことなど出来ないだろう。

自分が最低のコトをしているというのは自覚している。

だが、それでも止まることはできんのだッ！！

「ぐっ… それでも、だ。そもそもオマエの提案に乗る 〴〵理由〴〵なんてない」

「ほう… 〴〵理由〴〵と嘯るか」

「そうだ。オマエ自身もバスの中で言っていたよな？ 〴〵道理〴〵がな

ければ従えないって」

「自分の言葉だ。無論、覚えている」

「だったら……ッ！」

ソコまで口に出して、彼は言葉を飲み込む。だが、もう遅い。コレこそがオレが望んだ状況！

「……『ある』と言ったら？」

「なん……だと……」

「『理由ならある』と言ったのだ。……それも、3つもな」

「な……3つッ!？」

思わず口を開ける彼に構わず一気に畳み込む。ここが勝負どころだ！

「まず1つ……オマエはオレに借りがある」

「借り、だと？」

「……この紙束を覚えているな？」

プリント類を鞆から取り出し見せつける。地味に重いぞ。腕がしんどいわ、畜生！

「あ、ああ……だがソレを届けたのは俺で」

「……最初からこの紙束はここまで皺だらけだったのだろうか？」

「ぐっ!？」

「付け加えれば、オレはこれを『誰かの不手際で昨日貰えなかった』と記憶しているが？」

「ぐぬっ!？」

「ああ、そうそう……何故か『昨日より以前に発行された紙も混ぜていた』が……」

「ぐぬぬぬ……」

「まあ、コレは些細な問題だろう。続いて二つ目の理由だ」

紙束を鞆にしまう。ふー……重くてかさばって邪魔くさかった。

さて、二つ目はもつと簡単だ。

悠人少年の容貌をあげつらうことになるため、余り利用はしたくないが……状況が状況だ。

「彼女たちにとっては、オレよりもオマエが隣だった方がマシだろう」  
「……なに？」

「いや、むしろ喜ぶのではないかな？」

チラツと3人の方を見るが、否定する様子はない。

……なんか、顔赤らめてモジモジしてるけど。なんだろ？ 花粉症かな？ この季節だし。

まあ、通つたと考えて先に進めよう。こういうのは勢いが大事だ！

「三つ目… 取引に応じれば、このブラック珈琲が貰えるぞ？」

「いや、要らないけど」

一刀両断に切り伏せられた。

……うん、そりやそうだよ。オレも要らないよ。こんな不良在庫。だが受け取って貰おう！

「なるほど… やはり『お子様』だ」

「なにッ!？」

嘲るように笑みを浮かべれば簡単に乗ってくれる。ここからはイチャモンと屁理屈の世界だ。

それが正しいかどうかなど関係ない。ただ、『正しい』と信じこませてやれば良いのだ。

「珈琲の一つも飲めない子供だからこそ、すぐに冷静さを見失う」

「そんなの… 関係ないだろ」

「どうかな？ 少なくとも根拠はあるぞ。カフェインには覚醒効果がある」

「覚醒効果だつて？」

「集中力を高め、視野を広げる効果だ。……それが足りず苦杯を舐めた経験があるのでは？」

思うところがあるのか、押し黙る。あとは勢いで押し切るのみ。

ブラック珈琲を押し付け、オレは宣言する。

「話は以上だ。……まさか4つ目の理由を寄越せ、などとは言うまいな？」

「……………」

無言で項垂れる名無しの少年。すまない、本当にすまない。

キミに恨みは… まあ、程々にしかなかったが。キミの座っている席が良すぎたのだよ。

さて、引越しの準備をするか。そう思っていたところ、いきなり

声がかけられる。

「桜庭さん、既に準備は整っております」

うわ、ビックリした。さつきといい背中からいきなり声をかけてこないでよ、眼鏡くん。

って、なに？ もう引越し終わっちゃったの？ わお、眼鏡くんマジ優秀。

三人娘もガッツポーズしてるし… ちよつとは隠そうよ。傷付いちまうぜ、主にこのオレが。

でも、彼女たちが参戦したら不味かつただろうなく。ま、結果オーライってヤツだな。

ハツハツハツ、では名無しの少年よ。すまないが、悠人少年とオレのために犠牲になってくれ！

内心でスキップしながら席につき、授業が開始されて思った。

…あれ？ 三人娘と名無し少年、席が近すぎね？ てか、くつついてね？

クロハラ（仮）さん、それって黒板に背中向けてませんかね？

後ろに目がついてる系女子なの？ ゴルゴなの？

あ、ちなみにオレの前の席はゴリくんでした。

…頼りがいのある漢おとこの背中以外に何も見えねえよ。

誰だよ、此処のことを主人公席とか言ったヤツ。

もし見つけたら小一時間くらい説教してやる。

## 少年と車椅子と少女

「おく！ やっぱ誰かに押ししてもらうんは楽チンやなあ。そのまま真つすぐ頼むで、車掌さん」

「……了解した」

車椅子の上ではしゃぐ少女と、大量の荷物を抱えながらそれを押すオレの姿がそこにはあった。

安西先生、もう諦めてるんで早めにゲームセットにしましょう。めっちゃしんどいです。

まだお互いの名前も知らないというのに、少女は随分と好き放題してくれる。鬼だ、悪魔だ。

悠人少年… オレはもうダメかもしれない。万が一の時は、キミが後を継いでくれ。

あ、もともと悠人少年のボディでしたね。コレ。ひっひっふー…ひっひっふー…。

少しでも疲労がマシになるようにとラマーズ呼吸法を試す。余計疲れた気がする。

……さて、どうしてこうなったのかを説明しよう。いや、聞いて欲しい。聞いてください。

オレは放課後になると同時に学校を飛び出した。ヒヤッハー！

悠人少年は部活動などしてないだろう… という一種奇妙な確信がそこにはあったのだ。

てか小学二年生って部活ないっけ？ 記憶が曖昧で覚えてないぜ。え？ こんなに急いで何処に向かっているのかって？ やれやれ

… 朝も言っただろう。

“それで何を目指す!!”と言われたらこう答えねばなるまい。 ”スーパー…!!”と。

今やスーパーを目指すオレのダツシユ… とくと見せてやるわ！あ、横腹痛い。少し休憩。

ふう… オレとしたことが慌ててしまったぜ。だが、それも無理はないだろう。

前方視界がゴリくんの頼れる背中であぐらで埋め尽くされ、全く黒板が見えない教室での授業。

やることもないオレはと言うと、朝から追い回された疲れもあって午睡に身を委ねていた。

そんな時、オレの夢の中に電波が降ってきたのだ。

「中の人さん、食パンは冷凍保存しておいて、食べるときにトースターで焼くといいですよ」

マジでか!? 思わず席を立ってしまい、クラスの注目を浴びてしまったが些細な問題だ。

ありがとう、心優しき電波の人。オレ： 明日の朝、早速試してみるよ：ツ!

そんなわけで、オレはホイホイと欲望に誘われるままにスーパーへとやってきたのであった。

時刻はまだ夕暮れ前。昨日と同じようにタイムセールに巻き込まれるような愚は犯さない。

さあ、出撃だ。スーパーに向かって駆け込んだオレは： 森崎くんばりに吹っ飛んでいった。

——ゴスツ

「へなっぷ」

「きやつ!」

……お分かりいただけただろうか? スーパーで走り回るところという事故に繋がりがねない。

愚かなオレの犠牲を教訓として、どうか諸兄らには今一度前方注意の鉄則を思い出して欲しい。

だが一体相手は誰だったのか? なんか金属っぽいモノにオレは轢かれてしまったような…

悠人少年の貧弱ボディに容赦なく降り注ぐ痛みを堪え、巻き込んでしまっただろう人を探す。

全面的にこちらに非があるのだ。しかも声の様子からして若い女性。これはアカン…。

周囲の(心が)イケメンの誰かが既に助けているかもしれない。説

教なのか？ 正座なのか？

だが、予想に反して周囲の人々は好奇の視線を送りこそすれど近寄ってくる様子はない。

いや… この視線、哀れみか？ そして視線を真正面に送って、オレは漸く理解した。

この間の車椅子の少女ではないか… クツ、確かに障碍者の方には無知識では対応し難い。

お客様の中にお医者様はいませんか!? と叫びたいが、モタモタしている場合ではない。

此処は巧遅こうちより拙速せつそくが尊ばれるべき場面だろう。

オレは転がっている車椅子を立て直すと、急ぎ倒れている少女に駆け寄る。荷物は後回しだ!

「すまない。こちらの前方不注意だった… 腕を借りるぞ」

「あいたたた… いや、こっちこそ… って、ひゃあっ!」

向かい合う形になるように、脇の下に手を回し、掴むようにして若干勢いをつけて持ち上げる。

そのまま車椅子まで移動。彼女が座れるようにゆっくりと下ろしていく。やべえ、しんどい。

ある程度で「手を離すぞ」と一言注意してから手を離す。座る位置の微調整は本人に任せよう。

ふう… 図書館で読んでいた『避難訓練実施マニュアル』。まさか、こうも早く役立つとは。

え？ こういう場面のお約束、お姫様抱っこはしないのかつて？

悠人少年の貧弱ボディを何だと思ってるの？ 現時点で一杯一杯だよ！ かなり無理したよ!

「あ、アンタは…」

少女がオレに気が付く。あの時、会ったきりだというのに覚えていてくれたのか。

…よく考えれば昨日会ったばかりとも言う。そりや記憶曖昧なオレも覚えてるわけだ。

何故だかもう9話くらい昔のコトのように思っていた。アニメで

言えば63日前だ。

二ヶ月以上前になるのかよ…。

でも今は、そんな事はどうでもいいんだ。重要な事じゃない。

なんだっていい！ 荷物を拾い集め（つつブラック珈琲を潜り込ませ）るチャンスだ!!

ヒヨイヒヨイと荷物を集め始めるオレを見詰める少女。くっ…

並みの警戒網ではないな!?

「まあ… 一応、詫びと礼は言っとくわ。ゴメンな、それと… おおきにな」

「気にするな、オレは気にしない。…そもそもこの一件、オレに非がある」

どう見たってオレの方が悪いしな。多分クロハラ（仮）さんがいたら血の制裁を受けていた。

某アニメキャラになりきってクールに応えるが、そもそも今オレはそれどころじゃない。

自分の背中で視線を隠しつつ、首尾よくブラック珈琲を入れる高度な潜入ミッション中なのだ。

こちらスネーク。大佐、『オペレーション：ブラック』について説明してくれ。

了解した、スネーク。クロハラ（仮）には近付くな。アレは人類の手には余る存在だ。

分かっているさ、大佐。明日は絶対に彼女に近付かない。約束しよう（フラグ）。

そんなこんなで脳内で一人スネーク劇場で盛り上がっていたおかげか、ミッションは終了。

無事に彼女のレジ袋の中にブラック珈琲を混ぜることに成功した。本日のノルマ、完了。

「では、そういうことで」

片手を上げて爽やかに立ち去ろう。此処から先（スーパー内）は持たざる者が進むべき世界。

既に溢れんばかりの荷物を抱えた彼女には不似合いな場所だ。

じゃあな、車椅子の少女よ。

「ちよい待ち」

だが、オレの背に彼女は無粋な言葉を投げかける。最低と罵られようが、返事は決まっている。

「断る。コレからオレは(電波さんの生活の知恵を確かめるといふ)大事な用がある」

「あいたたた… さっきの衝突で身体が痛いわあ…」

「何でも言ってくれ。オレに出来得る最善を尽くそう」

よわっ!? オレ、よわっ!? ……でもしようがないじゃないか。

考えてもみて欲しい。

ただでさえこちらに非がある状況に加え、彼女の移動手段である車椅子に着目してみよう。

重厚感溢れるメタリックなボディ。あの衝突でもフレーム一つ歪んでいないその強度。

古来、『戦車一台は騎馬兵十騎、歩兵八十人に相当する』と言われていた。

間違いないその流れを汲んでいるだろう彼女の車椅子は、そのまま兵器として転用可能なのだ。

更にはそれを日頃より生活に密接しながら使いこなすことで技量は磨かれ筋力は鍛えられる。

つまり… 彼女の言うことに逆らおうものならば、「グシヤツ」ってことになりかねないのだ。

こうしてオレは彼女の下僕となり荷物持ち兼車椅子車掌として彼女を家まで送ることになった。

世界は、いつだって… こんなはずじゃないことばかりだよ!!

……

……

……

よ、漸く… 彼女の家とやりに到着した。

安西先生、仕事しろよ… なんて試合終了させてくれねえんだよ。

死ぬじゃん、オレが。

あ、ごめんなさい。調子に乗ってました、ホワイトヘアードデビルは勘弁してください。

彼女の家の玄関奥に、荷物を置く。……オレの買たい物かいはコレからだ。急ぎ戻らねば、戦場スバに。

しかし、彼女はとんでもないことを口に出してきた。

「ええやん。ご飯くらい私が作ったげるから寄ってき」

年頃の女の子として限りなくNGな発言だ。

確かに彼女は美少女だが… たったそれだけで頷くほど悠人少年は安い人間ではない！

……あ、オレはとにかく食パンのことで頭が一杯です。粗塩鮭や海苔も気になる。

それから「両親もおれへんから大丈夫」とかほざきだした彼女をなんとか説得した。

ご両親不在で寂しい気持ちは理解したが、そういう言い方もアウトだからね？

男は狼だからね？ 昨今ロリコン多いし悠人少年じゃないと人生終わってたかもしれないからね？

確かにご両親がおらずに、ウチに負けず劣らず大きなこの家に独りぼっちは寂しかろう。

後ろ髪を引かれる思いはオレとである。だが、彼女に対しオレはご両親の代わりにはなれない。

それに、彼女はただ守られるだけの弱い存在では決してない。

彼女がご両親のことを乗り越え、それでもなお悠人少年を必要とするのならば…

そうだな、「友達」にくらいはなってもいいだろうさ。……アドレス帳の空白も寂しいしね。

「二度目はただの出会い。二度目の今日はただの偶然。三度続けて初めて必然となる」

だから今日のところは帰らせてください。早く、早くしないとタイムセールが始まってしまう！

「……前に会あった時のこと、覚えてへんの？」

あばばばばば…！ この子もひよつとして顔見知りだったんか！？

だだだだだ大丈夫だ！ まだ慌てる時間じゃねえ！ ここは誤魔化そう、そうしよう!!

「そんな昔のことは忘れたさ」

「…：まあ、ええわ。次に会う<sup>お</sup>たら招待は受けるんやな？」

「そんな先のことは分からないさ」

「ちよ！ 言う<sup>ゆ</sup>てる<sup>こと</sup>がさつきとちやうやん!？」

わはは！ 何この子、面白い。クロハラ（仮）さんとは違った独特のテンポでノツてくれる。

「会えるさ」

「へっ？」

「互いに縁があつたらな」

そう言つて外に出てから、玄関を閉める。面白い子だったので思わず言つちやつたぜ。

招待云々に関しては最後まで言質を取らせないことに成功した。

コレはオレの問題じゃない。彼女自身の問題なのだから。そう思い、オレは歩いて行つた。

…：スパーではタイムセールが始まっていた。

今日も悠人少年の貧弱ボデイは主婦という名の地獄の悪鬼たちに蹂躪されるのであつた。

オレの身体はボドボドだあ!!

## 車椅子の少女と缶コーヒーと

一度目はただの出会い。

二度目の今日はただの偶然。

三度続けて初めて必然となる。

……アイツは確かにそう言った。

やったら、次にアイツに会う時……私の中の気持ちは何か、変わって“いるんやろか？”

アイツの出て行った玄関の扉を暫し眺めてから、ため息一つ。私は荷物を運ぶことにした。

アイツとの出会いは最悪だった。今でも、少し思い出したらむかつ腹が立ってくるほどや。

はじまりは図書館やった。

足がこうなってから少しでもマシな生活できるようにと医療関係の書架を巡るんが日課やった。

掛り付けの石田先生はいい先生やけど、自分でも出来る範囲でって思うたんがきつかけやな。

「本当ならさあ。原作順に攻略するのが醍醐味だと思うわけよ？　まづなのはたちからってね」

開口一番にそんなコトを言われて、私は当然戸惑った。なんかのゲームの話やろか？　って。

いきなり前置きもなくゲームの話をされても……とは思ったが、ソコまで嫌でもなかった。

私みたいなちよつと特殊な境遇でもなければ、ありがちな歳相応の身勝手さかもしれんな。

「はあ……そうですよろか」

「でもまあ、御剣のヤツが嫉妬して必死に邪魔してくるわけだし気分転換も必要かな？　って」

「……はあ」

生返事な私の相槌に更に機嫌を良くしてベラベラと喋ってきよる。私が嫌やな最初に思ったのは、その目。ゲーム(?)の話をするの

と、私を見るん目が同じ。

事情があつてこんな身体しとるさかい、好奇の目や哀れみの目で見られるんは慣れとる。

勿論、その二つだつて決していい気分になる視線やない。けど、この目ほどやない。

顔立ちは芸能人みたいに整つてるし、宝石細工のような髪や瞳も持つてはる。

けどなんちゆうんかな？ それでも臭つてくるモンが気持ち悪いねん。私もスレたもんやな。

そう… 私は、今、確信している。『コイツは信用したらアカン』つてな。

「だからキミを攻略してやろうつて思ったわけさ。僕の嫁にしてやるよ。……嬉しいだろう？」

「光栄ですわ。でも折角ですけど、今は私、ちよお急いでるんで今回は遠慮しと…っ!？」

はあ、話にならへん。

愛想程度に会釈して、横を通り過ぎようと思つたら車椅子の持ち手を掴んで静止させられる。

どういうつもりやねん。無言で睨み付けるとニヤニヤ笑つてるアイツの顔があつた。

「そう照れるなつて。原作キャラつてのはどいつもこいつも謙虚だなあ… まあ、いいけどね」

「照れてへんわ… はよ離さんと大声出すで？」

自分の訛りを最大限利用して、どすの利いた声で脅してみる。無論、意に介されないが。

だつたらと息を大きく吸うた時…

「どうせキミも僕に夢中になるんだからさ…」

「……えっ？」

そこでアイツは私の目を真つ直ぐ見て微笑んできた。

!?! ……あ、あかん。何や、コレ。

頭がクラツとして、気が遠くなつて… まるで私が私でなくなるみ

たいに…。こ、れ…は…

「ソコで何やってるんだッ!？」

「……っ!」

「ちっ… 御剣か。相変わらず目障りなヤツだなあ」

誰かの声のお陰で靄もやがかかっていた視界が晴れていく。

……なんや知らんけど、『とても危なかった』。それだけはハッキリと分かる。コイツはッ!

精一杯の抵抗として、まだクラクラする頭を起こしてキツとアイツを睨み付ける。

「オマエ、まだこんなコトを続けているのか?」

「うるさいなあ… 僕の勝手だろう? 僕の “力” をどう使おうがさあ!」

けど、もう私のコトなんか眼中にない様子で二人は言い争いをする。

後からやってきた方の黒髪の男の子が、そっと立ち去るように私に向かつて手で合図してきた。

……大丈夫やろか? そう思ったけど頭痛がひどく、好意に甘えることにした。

「そんな身勝手したら誰かが泣いてしまうんだ… その痛みや悲しみが分からないのか!？」

「分かるワケないだろう? 僕は選ばれた存在。僕に比べりや能力はカスでもキミだってそうだ。むしろ理解に苦しむのはこっちの方だね。何が楽しくてモブたちなんかを守ろうとしてるのか」

「俺は… 俺は、オマエなんかとは違う!」

「当然だ。僕は、オマエなんかとは違う。一緒にするなよ雑魚が。次、邪魔したら覚悟しろよ」

あの二人の言い争いに背を向けて見付からんように静かに立ち去る。

言ってるコトの意味はサッパリ分からなかったけど、私なんかがどうこうできるモンやない。

……それだけは漠然とだが伝わってきた。

結局アイツが私に絡んできたのはあの日くらいで、それから後は暫く平和が続いていた。

後から知ったことやけど、一階の喫茶店は特に酷い目に遭<sup>お</sup>うてたみたいやな。

このまま何事も無く、それぞれの平和な生活に戻れる… そう思っていた矢先のことやった。

私はその時も図書館におつて、ちよつと高いトコロにある本に必死に手を伸ばしていた。

手を伸ばし続ければ、こんくらいは自分でも取れる。そうすれば今だつて変えられる。

そんな想いで半ば意地になって挑んでいたけど、どうしても取れず無理なモンは無理やった。

やつぱ、戻つて司書さんに頼むしかないか。

「……どれが欲しいんだ？」

そう思つて落ち込んでたちようどその時、背後から声がかけられた。

誰かが来るなんて思つてもいなかったの、思わずおつきな声を上げてもうた。

けどソレに対して不快を示すこともなく、逆に驚かせたことを詫びつつ再度尋ねてくれる。

少し低く、落ち着いた声。まるで、そうするのが当たり前のように本を取つてくれた。

こんなに真つ当に親切にしてもらつたんは、いつ以来やろか。

こないだのことは例外にしても、大抵の人は腫れ物を触るかのよう

に私を「伺つて」くる。  
いろんな人に親切にしてもらうんはありがたいけれど、ちよつぴり寂しいんは事実やった。

そう思っていると、とんでもないことに気付いてもうた。私、お礼一つ言うてへんやん！

慌てて声の人にお礼を述べても、まるでなんてことないコトのようにアツサリと流される。

「気にするな、オレは気にしない」

この声の人は、例えば友達のせいで自分もどこぞにぶちこまれることになったとして…

それでもそんな台詞一つでアツサリと許してやれるんとちやうやろか？ そんな気がした。

ああもう！ 何かしたいワケでもないんやけど、せめて目え見てお礼せな気がすまんわ。

そして声の人の方を振り向いた時、私は愕然とした。……あの時の“アイツ”だったから。

思わず上げてしまいそうになる悲鳴をそつと手のひらで塞がれ、噛もうと思えば逃げられる。

図書館で騒ぐな、なんて至極真つ当な言葉にも皮肉で返すしかない。其れが精一杯の抵抗。

一体、何をするつもりや？ 一体、何を企んどるんや？ ……私は警戒し、心持ち距離を置く。

けど次の瞬間、アイツは信じられんことをしてきた。深々と腰を曲げ、頭を下げてきたんや。

そして、一言。

「……すまない、迷惑をかけた」

居心地の悪さになおもゴネようとする私に、赤子に言つて聞かせるように諭した後…

アイツは缶コーヒーを私に手渡してきた。全てを噛み締めたような苦み走った笑顔とともに。

二の句が継げないでいる私を尻目に、其れ以上何をするでもなく、アイツは立ち去った。

……なんやの、もう。

そして三回目の出会い。いや、アイツの言葉を受けるなら『二度目の偶然』かな。

其れは、スーパーでの買い物を終えて帰宅しようと思うた時に起こった。

衝撃とともに宙に浮く。荷物がバラバラに零れ落ちる気配。そし

て、私は地面に投げ出された。

「すまない。こちらの前方不注意だった：腕を借りるぞ」  
痛みに顔をしかめていると、両腕を取られ身体ごと軽々と持ち上げられた。

あ、コレ：『たかいたかい』つちゅーやつかな。

今となつちや全然覚えてへんけど、私もおとんやおかんにされてたコトあつたんかなあ？

そしてゆつくりと車椅子に降ろされた。普通の人たちでは知らんやろう完璧な対応やった。

わざわざその知識を取り入れるか：相手の立場に立って考えれる人しか出来んような。

確認のため相手の顔を見れば、やっぱりアイツやった。声から既に予感めいたモノがあつた。

「あ、アンタは…」

やっぱり第一印象のこともある。悪態の一つでもついたろう思うたけど、出来んかった。

アイツが：まるでなんかの痛みを堪えるような辛い表情をしとつたから。

だが、アイツはそんな自分のことを差し置いて荷物を拾い始める。私は見ることしかできん。

こちらに無防備に晒した背中を見ると、なんやアホらしくなってきたよる。

私の対応にも問題はあつたかもしれん。今までの詫びと、今回と前回の礼を改めてしよう。

そう思つて声をかけてもやっぱり「気にするな」と流された。悪いのは全て自分だ、と。

…：お気に入りなんか？ その言葉。

無事に荷物を拾い終わったアイツは何かをやり遂げた達成感に満ちていた。ドヤ顔ウザイで？

そしてアイツは拾い集めた荷物を私に押し付けると、前回同様そそくさと立ち去ろうとした。

呼び止めるも応じない。……なんや腹が立つな。しゃあない、美少女の怪我の責任を取らすわ。

そこからの変わり身は早かった。明らかに嫌そうな顔をしてるのだが、一切逆らおうとせん。

私も調子に乗って、悪いと思うたけど遠回りさせたり色々したけれど不満一つ口にせんかった。

流星にそのまま家まで通すのはまだ怖い。けど、見極めるため接するくらいはしてもええやろ。

……多少変わったゆうても変わりすぎやしな。油断はできひん。スマホの録音をONにする。

ボロを出すかもしれんし、内心隠して表向きは友好を装っておこか。……私もスレたもんやな。

到着してから渋るアイツを荷物を運ぶためと称して、半ば以上無理矢理に玄関内に押し込む。

てか、車椅子で物理的に押し込んだ。大袈裟に吹っ飛んでたけどアイツなりの冗談やろな。

さつきも倒れている私を軽々と救助してたし、荷物いっぱい持たせても不満一つなかったしな。

さて人目のない場面ではどう出る？ と身構えるモノの、何かと理由をつけて帰ろうとする。

「ええやん。ご飯くらい私が作ったげるから寄ってき」  
「断る」

まさか即答されるとは。……流星にイラツとするわ。この私の手料理が不満なんか？

「なんでや。私、こう見えても料理に自信あるんやで？ 料理は全部私がつとるし」

「ホンマか、工藤」

「誰がクドーやねん。私は八神や」

「せやかて、工藤」

「だからクドーちやう言うてんやろがっ！ 次同じネタ言うたらしばくで、ホンマ!？」

下手糞な関西弁に思わず怒鳴ってしまう。……アカン、先にボロを出したのは私の方やったか？

恐る恐るアイツに視線を移せば、気にしてない様子で……しかし虚空に視線を彷徨わせていた。

「……この世界で、ただ一人のオレに。オレだけのために知識をくれた人がいる」

「え？」

なんや語りだした。どういうことなん？

「分からなくていい。オレも本当のコトなんて分からない。事実、人であるかすら分からない」

「……え？」

「オレは未だ自分という存在が分からない。だからこそ……」

「……」

思わず聞き入ってしまった私に向かって、真っ直ぐに言っただけのけ。

「こんなオレのためだけに向けられた言葉を、オレは、全力で信じた。試したいんだ」

「なんやの、それ…… なんのためなん？」

「愚問だ。オマエも既に、その答えは知っているはずだ」

「……なんやねん、その答えって」

私のために向けられた、私が信じるに値する答えなんて…… そんなん、何処にも。

ううん…… 一つだけ思いつくものがある。おとんの友達の、グレアムおじさん。

私のコトを気遣ってくれて…… 忙しい中でもキチンとメールには答えてくれる人や。

「自分が生きるため…… 自分が存在するため、だ」

「……せや、な」

言うことは分かる…… 分かるけど、だからって簡単にそうですかって受け入れられんやん！

私だって「変わりたい」よ…… でも、だからって。この生き方、簡

単に曲げられん。

「あ、ホラ… 私な、事情があつて両親がおらへんのよ。だから寂しいねん？ な？」

「断る」

媚びるような笑顔を見せても、アイツは聞こうとしない。媚びが足りなかったかな？

「なんでえな？ 私、寂しいねん。兎は寂しいと死んでまうんよ〜？」  
「それは都市伝説だ。そして、オマエのような子供が言うべきことではない。人は、裏切る」

「……っ！ 何様のつもりやねん」

「言葉にするだけで其れが分かるオマエは、決して弱くない。……ならば弱さを装うな」

一瞬で自分の中にある欺瞞を切り伏せられた気がした。そして淡々とご高説をのたまうてきた。

……私は、コイツが気に入らん。まったくもって気に入らんわ。一体何様のつもりやねん!?

「今も両親と触れ合つてて、幸せそうに暮らしているアンタに何が分かんねんっ!!」

「……ふむ」

「もう薄っすらとしか思い出せないのに、毎日少しずつ消えていくのに！ それなのにツ!!」

激情は止まらんかった。しかし、其れに対してアイツはとんでもない返答を返してきた。

「羨ましいことだ」

「……は？」

「両親の記憶があるのが、だ。例え少しずつ喪われていくとしても、確実にオマエの中に残る」

「え？ アンタの両親って、どういう…」

「さあな。オレは顔も知らないんだ… 何処か遠くで元気にやっっているみたいだが」

なんでもないことのように肩を竦める。そんな… せやったら、ウ

チ、最低やん…。

「そんな… それって、寂しくはないんか？」

「それこそまさか。充分過ぎるほどの愛は感じている。互いに少しすれ違った結果に過ぎんさ」

「それでも…」

「ただ、そうだな… 一人で暮らしていると掃除が大変だ。処分に困るモノが残されていて」

「……っ！」

あの時、図書館で私に頭を下げてきた人と同じような… 苦み走つた笑みを浮かべてきた。

自分以外の何かによって運命を歪められて… それでも、自分なりに対処をしようとしている。

止め処なく溢れる諦念と、低空飛行気味の前向きさが同居した… そんな空虚な表情だった。

それから少しの会話を交わして別れることになった。もう、アイツを無理に誘えんかった。

そんな私の様子を見て取ったのか… アイツはこんなことを去りに際に言ってきた。

「会えるさ」

「へっ？」

「互いに縁があつたらな」

そのままドアを閉められる。……まったく、なんやの？ もう。

……

……

…

「ふう…」

荷物をテーブルの上に運び終える。そして手にしたのは胸ポケットから取り出したスマホ。

……録音はキチンと出来てるみたいやな。

「……『縁』、か」

手の上で弄びつつ呟く。コレも、その『縁』になるんかな？

そんな考えに自嘲気味の笑みしか浮かんでこない。

アホやろ。こんなんに頼るようじゃ、その程度の「縁」ってコトやん。私には相応ふさわしゆうない。

簡単な操作を終えて、全てのデータを消去する。所詮この程度のモノやったんや。

そう思いながら、荷物を整理しとると…

「なんや、コレ… そういうことかいな？ ったく… ぷっ、くくくくく。一本取られたわ」

こぼれ落ちたブラツクの缶コーヒーに、思わずさつきとは違う種類の笑みがこぼれていた。

「はあ… 笑った笑った。ったくあんガキ、舐めた真似しくさりよつて。次は容赦せんぞ」

そう呟いて無理矢理に笑いを締め切ると、私は今夜の食事の支度を始めるのであった。

## 少年の平凡な一日

朝、オレはまた「オレ」として目が覚める。ここにやって来てから3日目の朝だ。

三度目の正直は実らなかった。おのれ、悠人少年の心に巢食った闇はまだ晴れないのか。

それは即ちオレの努力が足りないということ。出来ることを少しずつこなすしかない。

昨日は軽く引いてしまいパソコンを落とすのを忘れていた。さて、そろそろ落とすか。

そう思いノートパソコンに向かうと、未開封メールが2000通に増えていた。

……愛が重すぎる。そっとしておこう。オレはクルリと背を向け、1階に降りていった。

世の中には触れないほうがいいこともある。……弱いオレを叱ってくれ、ナタク。

さて、1階に降りて朝のシャワーを浴びてスッキリしたら、調理の準備に入ろうかな。

今日の食材は食パンにレタス、トマト、それから卵にバターといったところだ。

リクエストにお応えして、オレが今現在こなせる唯一の食パン料理をお見せしようと思う。

え？ 誰もリクエストしてないって？ ハッハッハッ、こういうのはノリが大事なんだぜ。

食パンを袋から2枚取り出しつつ、レタス、トマト、卵にバターを冷蔵庫から取り出す。

余った食パンは賞味期限が今日までなので冷凍庫にシユートだ。レタスは程々の大きさに千切りトマトは輪切りに切っていく。そして卵の目玉焼きを作ろう。

卵が出来あがったら、食パン2枚をオーブントースターで焼いていこうじゃないか。

あんまり焼き過ぎると焦げてしまうから、ここはあまり目を離さないようにな。

出来上がったモノはトースト2枚に、千切れたレタス、輪切りのトマト何個かに、目玉焼き。

これらをミックスレイドさせればオレの得意料理クラブハウスサンドの出来上がりなのだ。

正確なレシピなんて知ったこっちゃないぜ。

そもそも面倒になったらカップ麺の残り汁にご飯ぶっかけて卵落として満足するオレだぜ。

謎の高揚感に襲われつつ、トースト2枚に片面ずつバターを塗っていく。

それをトースト、トマト、目玉焼き、レタス、トーストで挟み込む。バターは内面だぜ？

これで完成だが… 作ってみればお分かりになるかもしれないが結構ポリウムが凄いのだ。

故に今回すべきは…

「へアッ！ トウツ！」

気合を入れて、トーストの中央と縁の間にして四辺の真ん中くらいの場所に爪楊枝を刺す。

その数4つ。満足したオレは一つ頷くとパン切り包丁を取り出しつつ刻んでいく。

「フッフ… 怖いか？」

なんてつたつて世界基準軽く超えているもんな。何の世界基準かまでは知らないけど。

切り方は対角線上にX字になるように。終わった頃には綺麗に4つに分かれているはずだ。

ドロツとしたものがまな板を穢す。この黄色いモノ… やつちやつたぜ。

目玉焼き、半熟だつたぜ。諸君らはまな板を汚したくなければ固めに焼き上げた方がいい。

出来上がったもののうち一つを口に運ぶ。うむ、中々にグラツチエ

だぜ！ アミーゴ！

目一杯味わった後にモーニング珈琲（ブラックの缶珈琲）で胃の中に流し込んだ。

……何故か色んな諸々が台無しにされた気がするが気のせいだろう。

昨日、和食と一緒に食べた時よりはまだマシな気がする。だからセーフ： セーフなのだ。

あと1つ食べてから、残った2つはラップに包んで本日のお弁当にすることにした。

なんせ昨日はクロハラ（仮）さんに追い回されたり、校舎内を彷徨ったり、

ゴリくんたちとエンカウントしたりでロクに昼を食う時間がなかった。弁当もなかったし。

その点、コレは時間が経っても美味しいためにお弁当に最適だが、注意すべき点が一つ。

ラップの包み込みが甘いと、トマトやらの汁がこぼれて大惨事を引き起こしかねない。

しつこいくらいに巻き重ね固めに結んだほうが良い。よし、弁当の問題が片付いたら次は…

「今日は… 3、くらいか」

持っていく相棒（という名のブラック珈琲）の選定だ。いや、どれも一緒なんですけどね。

悠人少年の貧弱ボディでは余り多くを運べない上に、余ったら容赦なく体力を奪ってくる。

暫し考えた末に、オレは3つほど持って行くことにした。今日のノルマは3。頑張れ、オレ。

身嗜みを整え準備を終えたオレは、昨日より早目の時間にさっさと出発することにした。

え？ 名無しの少年たちを待たないのかって？ 別に待つ必要ないじゃん。学校で会えるし。

自分一人で行けるかどうかも確かめたいし、早く着いても本読んで

時間潰しすればいいや。

……

……

……

今、オレはと言うと無事に下駄箱で靴を履き替えている。酔わなかった、そして酔わなかった。

大事なことなので2度言いました。流石悠人少年、活字さえ読まなければなんともないぜ！

万一に備えて自宅から酔い止め薬（エンド・オウ・リパリス）を持ち込んでいたが無駄になった。だが、それがいい！

身体が軽い……。こんな気持ちで登校するのはじめて！ もう何も怖くない！

ヒヤッハー！ オレは自由だ！ あい・きやん・ふらーい！！

——ゴスツ

「まそつぷ」

テンションに任せてクルクル回っていたら下駄箱にぶつかり、甚大な被害を受けていた。

教訓『下駄箱で暴れてはいけない』：刻んだぜ、劉鳳オ。

衝撃のファーストブリット（ただの膝蹴り）を下駄箱にかまし、痛みにあえでいるオレの前に。

——パサツ

紙切れが落ちてきた。

ほうほう、『昨日家で作ってみたの。良かったら食べてみてね♪

アリサ・バニングス』か。

このアリサちゃんとやらは、はにかみ屋な妹系天使に違いない。実にいい子だ。

紙切れが入ったと思しき下駄箱を開ければ、誰かの上履きの他に可愛いラッピングを施されたマドレーヌが入っていた。衛生的にどうかと思わなくもないが、実に心憎い演出じゃないか。

ならばこのオレも一肌脱いであげねば。甘いモノを食べたあとは大人の苦味。そう、珈琲だ。

朝から早速1つ処分できるとは幸先が良い。しかもそれが良いことにつながるならば尚更だ。

顔も知らぬアリサちゃんよ、礼は結構だ。キミが上手くいくことを心より期待しているぞ。

ただ、〃アリサちゃん〃： 何処かで聞いたことがある響きだが。はて： 何処だったかな？

まあ、思い出せないってことは大したことがないんだろう。……あ、そうだ！ 思い出した！

ゴッドイーターのヒロインだったじゃないか。あの下乳丸出し&ミニスカで戦うエロい子だ。

教室に辿り着いたオレは、席でニヤニヤしてるクロハラ（仮）さんを目撃した。何アレ怖い。

次の休み時間。オレはまたもやクロハラ（仮）さんに追い回されることになった。解せぬ。

こちらスネーク！ 大佐、指示をくれ！ クロハラ（仮）さんの加速が怖い！ ヤバイ！

——君はあの下品な泥水を飲むつもりなのか？ 凱旋飛行の最中に。

ちげえよ！ 珈琲なんか飲んでる暇ねえよ！ オレが求めてるのはそんな言葉じゃねえよ！

使えない大佐に舌打ちしつつ、オレは駆け抜けていった。希望の未来にレディ・ゴー！ だ。

明日を救え、バルディオス。いや、ダメだ。オマエは駄目だ。明日を救えなかつただろ。

やはりクロハラ（仮）さんは人類の手に余る存在だ。明日以降は決して近付くまい（フラグ）。

……

……

……

そして昼休み。

オレは校舎内を徘徊していた。オレがいればみんな、落ち着いてお

弁当を食べられまい。

いずれは教室で食事を取りたいが、オレたちの間にはきつと時間が必要なのだ。

だが、何処で食べようか？ パツと思いつくのは屋上と便所飯の2つだ。

屋上？ 却下だ。間違いなくリア充の巣窟となっているだろう。多大な精神ダメージ確定だ。

便所飯？ 却下だ。飯くらい美味しく食べたい。あの環境で美味しく食べられるか？ 否だ。

ていうか便所飯に慣れてしまったボディを悠人少年に渡してしまってもアカンだろ。うん。

そういうわけでオレは第三の選択肢： 校舎裏を求めて歩いていった。

流石に小学生の頃から校舎裏で食べることを強いられるような訓練されたボツチ族はおるまい。

そうして校舎裏に向かったオレを出迎えたのは： 聖帝十字陵（元悠人少年の席）の残骸。

オマエ： ゴりくん片付けられてから、ここにいたんだな。ここですつとオレを待つて：

謎の感動に襲われたオレは、帰りを待っていた玉座に腰掛け、お昼を摂り始めるのであった。

……それは同時に、今後卒業するまでのオレのお昼の定位置が決まった瞬間でもあった。

おかしいですよカテジナさん！ そういう重要な選択肢はもつと早めに教えてもらわないと！

好きな子の名前をつけ数多の犠牲者を出した伝説の作品かよ!? あれ、デマらしいですが。

……

……

……

ようやく放課後だ。

週末なのであとは土日が待っているが祝日を挟んでいるため、振替休日により三連休となる。

その解放感からだろうか、オレがいるにも関わらずクラスは賑わっている。良いことだ。

オレはそんなクラスの様子を見て一つ頷くと、そつとその場を後にした。

今のオレには目的地があるのだ。喫茶店『翠屋』： 大層評判が良いお店だそうだ。

となればオレの好物も置いてあるんじゃないかと期待してしまうのも無理はない。

そんなに頻繁に食べるつもりはないが、甘いモノが嫌いというわけではない。

それに流石のブラック珈琲もケーキには良く合うことだろう。

何回かに分けることになるとはいえ、美味しく処分できるならばそれに越したことはない。

——カランカラン：

ドアベルを鳴らして店内に入る。なかなか良い感じのお店だ。小洒落ており、綺麗。

開放感があるというか： ふむ、オープンな雰囲気があるな。悪くない。むしろ良い。

だが、どういうことだ？ このピリピリした空気は。しかもオレに注がれているような：

店員と思しき人物は2人。ウェイターをやっている青年とレジを担当している女性。

どちらも若いな。二十代前後といったトコロか？ 彼らが経営者の筈がない。

店長さんがちよつと所用で外しているために、臨時で店内を任せられた： というあたりか。

同時に理解する。この「おやつ時間」に程近い時間帯、客に溢れる喫茶店は戦場だ。

しかも慣れないスタッフがたった2人で切り盛りするのだ。並み

の緊張感ではあるまい。

そこに現れたオレ。「また現れやがったか！」と思わず睨んでしま  
うのも無理はない。

「フツ… 分かり易いな」

解けてしまえばなんてことはない謎だ。思わず笑いが込み上げて  
くる。おっと、失敬。

いきなり現れたと思えば客かどうかかも示さずにいきなり笑い出す  
人間。こりや不味い。

営業妨害と思われるでも仕方ないで、工藤。「全くやで、工藤」と車椅  
子の少女も言ってる。

いつまでも店の入口に突っ立ってたら邪魔だ。まずはゆっくりと  
中に進もう。

女性が少し青褪めている。ふむ… コレ以上のキャパシティは厳  
しいってことかな？

立ち止まり、席の様子を眺めると同時に「ブオン！」と風が吹き抜  
けた。オレに。

「失敬… 埃がついていたもので」

トレイを振り抜いた構えと、その言葉からウェイターの青年の気遣  
いを瞬時に理解する。

忙しくとも来店した客の埃を払う気遣いを忘れないとは。店内の  
客への気遣いにもつながる。

なるほど、こうしたコトが自然に出来るからこのお店は繁盛してい  
るのだ。立派なモノだ。

「ありがとうございます。…一名ですが、席は空いていますか？」  
「申し訳ありません。現在は混み合っております。予約も含めて満  
席となっております」

なんと！ まだちよつと空いてるように見えたのは全て予約席  
だったのか。残念だなあ。

とはいえ、ここまで出来た店員さんがいるのだ。予約を求めるほど  
流行っても仕方あるまい。

喫茶店で本を読みながら時間を潰すとかやってみたかっただけ

どな。また今度にするか。

「ふむ… 待ち時間はまだかなりかかりますかね？」

「そうですね。つい先程満席になったので1時間か… ひよっとすれば2時間程は」

「分かりました。それでは持ち帰りをお願いします」

流石に二時間も待つていられない。ウィンドウ内のケーキを物色していく。

定番のイチゴのショートケーキ。甘くて美味しいチョコレートケーキ。季節のフルーツケーキ。

みんなちがってみんないい… だけどオレの好みのモノは置いてないようだ。

「すみません」

「は、はい！ ……なんででしょうか？」

そんなに緊張しなくても。ああ、店長さんいないもんね。トラブル発生したら困るか。

うーん… 個人的には店長さんでもないのになんでも解決しようとしたら疲れると思うが。

まあ、その心意気は立派といえる。こちらもそれに甘える形で質問をさせてもらおう。

「売っているケーキはコレで全部ですか？」

「い、いえ… 幾つかは売り切れてますし、それに日によって売るものも違います」

「ふむ… 他には？」

「ほ、他には… お客様の要望があれば、それを作ることも…」（言質を）取ったぞ！ オレの瞳が煌めく！ その言葉、もはや取り消せんぞ！！

「桃子ッ！」

「ッ！ ぐ、ごめんなさい… 土郎さん…」

何やらウェイターの人と揉めているようだが、へっへっへっ… 知ったこっちゃないぜ。

店長さんの不在時に勝手に仕事を引き受けるのは問題だろうが、オ

レも手ぶらじゃ帰れない。

まあ、無理なら無理でしようがない。その時は諦めて別のところに向かうまでよ。

「フランクフルタークラッツ… というケーキをご存知ですか？」

「え、ええ…」

マジで？ 知ってる人、意外と少なかったりするんだよね。コレ。オレは大好物なんだけど。

シンプルで真っ白なケーキで、飾り気もなにもない。だが、それがいいのだ。コレは。

ドイツ製のケーキで見た目はバームクーヘンにクリーム塗られたくった感じかね？ 知らんが。

「それを小さめで一つ、お願いできますか？」

「は、はい」

「それから… オレンジシフォンケーキを一つ。コレも小さめでお願います」

「か、かしこまりました。フランクフルタークラッツとオレンジシフォンケーキですね？」

イヤッホおおうッ！ まさか通るとは思ってたぜ！ 翠屋さいこおおうッ！！

まあ、オレンジシフォンケーキはオレが好きってよりオレが好きな子が好きなケーキなんだが。

…いいじゃん、初恋が二次元だって。誰にも迷惑かけてないしさ。遠い目しちやうよ？

「…：はい、お願いします。支払いは今ですか？ 商品と引き換えでですか？」

「えと… 商品と引き換えをお願いします」

やったやった。あ、無駄遣いしちやったかな？ 悠人少年、お金は返すから許して欲しい。

オレもちよつとは癒やされたいんだ。家で好きなモノを食べて読書したりしたいんだ。

だから許して欲しい。コレはそう… 自分への小さなご褒美とい

うやつだ。何もしてないけど。

「出来上がりでしたら、お電話でご連絡差し上げますので…」

「了解しました。書きます。いつでも電話してください。出なかったら留守電をお願いします」

マジで可能な限りいつでも対応しますよ。夜中の2時とか3時にかかってきても許す。

ウキウキ気分で帰ろうとしたオレの前に、名無しの少年と三人娘が現れた。

何故ここに？ 小学生の頃から喫茶店に入り浸るのはどうかと思うぞ。人のこと言えんけど。

「桜庭… オマエ、何故ココに？」

「愚問だな… オレがココに来る用事など、決まりきっているだろう」  
喫茶店に何しに来るかだつて？ オマエ、そんなんお茶しに来るに決まってるじゃん。

満席だったからお茶出来なかったけどさ。でも、十分な成果はGETできた。

大丈夫だよ、遠坂。答えは得た。オレは、これからも頑張っていけるから… 死んでまうがな。

フツ、コレが勝者の余裕というやつか。悪いと思っただがつい哀れみの視線を送ってしまう。

キミたちはイチゴのショートケーキやマロンモンブランやチーズケーキを召し上がるといい。

オレは、オレだけのために作られたオレ専用のケーキを召し上がるのだあ！ ……後日な。

なんか、クロハラ（仮）さんが「なのはは渡さない！」とか叫んでたけれど…。

なんで菜の花が関係してくるんだ？ あ、ひよっとして八百屋と間違えて入っちゃったのかな。

小学生らしい凡ミスだ。喫茶店で菜の花を買うのか… かなり難しいミッションだと思うが。

「果たしてできるかな？」

「……できるかどうかじゃない。やるんだ！」

おお、名無し少年はすごい気迫だ。そ、そうだな… 最初から諦めてたら何も出来ないよな。

でも、お店の人に迷惑だから今度からは出来るだけお店を選ぶようにしようぜ？（震え声）

声に出して注意できずにスタコラサツサなオレ、マジチキン。店員さん、後の対応は任せました！

「そうか… 成果を期待している。精々オレを楽しませてくれ」

でもまあ、夢があつていいと思うよ。うん。八百屋兼喫茶店さん、斬新でいいじゃないか。

もし成功したらどんな感じだったか聞かせてくれよな？ オレも楽しみにしてるからさ！

気合に燃える彼らの横を通り抜けながら、オレは悠人少年ハウスへと凱旋するのであった。

あ、やべ。買い物忘れてた。……今から出るとまたタイムセールの間になるじゃねえか。

だが、待つて欲しい。

コレはつまり高次の意思より「YOU！ 行っちゃいなYO！」という振りではなからうか？

落ち着け、冷静になれ。

オレはタイムセールの為に戦うんじゃない… 悠人少年のために、オレ自身のために戦うんだ！

くっ…！ 落ち着け！ こんな安っぽい振りに乗るな！

「うおおおおおっ！」

桜庭悠人… 三日連続でタイムセールの主婦に手痛い敗北を喫する。

嘘だと言つてよ、バーニイ…。

## 少年と終業式

オレは今、私立聖祥大学付属小学校の終業式に参加している。コレで小学二年生も終わりだ。

歌詞が全然頭に入っていないので主に口パクになることを許して欲しい。大人の事情なのだ。

あ、前のゴリくんは… その… もうちよいボリューム下げて？  
オイ、熱唱すんじゃないやねえ。

教室の席だけでなく行事においてもゴリくんはオレの前だった。コレじゃ何も見えねえよ！

アレか！ 桜庭の「さ」の前はゴリくんの「ゴ」だからなんか!?  
……本名知らんけど。

本名知らんといえれば結局名無し少年や三人娘の本名も分からずじまいだったな。ま、いいか。

必要なのは前を向くこと、未来を見据えることなんですよ！ だからオレの照準は新学期だ！

新学期の自己紹介の時間でクラス全員分をキチンとメモすれば、今度こそコミユれる筈だ！

自分を信じて努力すれば夢はいつか必ずかなう！ と某悪役も言っていた。叶わなかったけど。

しかし、オレが「オレ」になってから一週間とちよつと… あつと  
いう間の終業式だったな。

その間に色んなコトが起こったようで、その実、大したことは起きなかつた気もする。

オレはそつと目を閉じ、終業式までの数日間を振り返る。  
大きく3つくらいの事件が起きた。

まず『翠屋のドレスを登録した』こと。イヤッホおおおおお  
おおう！ 勿論トップだ。

味も良かったし対応も丁寧。レジ打ち担当の女性は軽く笑顔を見せてくれるようになった。

ウェイターの男性はまだ堅いが些細な問題だ。客商売はそれくら

いがちようどいいかもしれん。

一つ難点を上げるとすれば、何故か翠屋での名無し少年と三人娘との遭遇率が高いことか。

オレは別にどうでもいいのだが、クロハラ（仮）さんがしばしば興奮するのだ。怖いお。

ま、相性の問題つてあるしね。全員と仲良くならなアカンわけでもなし。こういうのもアリだ。

しかし、アレから2回ほど足を運んだけれど未だに店長さんを見たことがないな。

……大丈夫なんだろうか？ あの店。

まあ、味は良いし店員さんの気遣いが素晴らしいし潰れまい。ていうか、オレが潰させない。

2回目の訪問時は連休ということもあつてか、16歳位の少年少女も店の手伝いをしてたな。

なんかオレを見たら固まっていたが、まあ、こんな容貌じゃ仕方あるまいね。許そうじゃないか。

ドヤ顔をしてるオレと決して目を合わそうとしなかったのが印象的だった。シャイなんだな。

次に『八神のアドレスを登録させられた』こと。かなり強引に。日向くんのドリブルばりに。

アレから幾度と知れぬ駆け引き・戦いがあった。オレも、ヤツも決して譲らなかつた。

遭遇の度にヤツは練度を増しオレは逃げ足を磨いていった。互いを高め合うミックスアップだ。

「あ、アンタ……」

「……………」

まずは気付かぬふりをして逃げた。早歩きで逃げ、ある程度から駆け出した。

許せ。キミがご両親のコトを真に乗り越えたらまた会おう。……いつになるか分からんけど。

そして翌日、またバツタリと出会う羽目になった。なんとというエン

カウント率だ。

「おい、こないだは」

「……………」

「おっと、逃さへんで？」

ゆうと は にげだした！ ▽

しかし まわりこまれた！ ▽

なん… だど…。まさか前回の1回で早くも対応してくるとは…

だが、甘い！

「あ、空飛ぶクロハラハムスター」

「え!? どこや… って!!」

「……………」

あばよ、とつつあくん！

それからもオレと彼女の熾烈なバトルは続いた。どちらも半ば以上意地になっていた。

互いが互いを強敵と認め、乗り越えんと死力を尽くした。

「一緒に帰って、友達に噂とかされると恥ずかしいし…」

「おるんか？ 友達… って、逃げんなやあ!!」

「…………ツ！」

泣きながら逃げる振りをして離脱。コレは戦術だ。だから目から溢れる液体は汗なのだよ。

「ようやく捕まえたで！」

「いつからソレがオレだと錯覚していた？」

「なん… やて…?」

まあ、捕まってるんですけどね。上着脱いで逃げました。何がオレをここまでさせるのか。

それはオレにも分からない。

「げえつ、関羽!?!」

「誰が三国時代の猛将やねん。私は八神や… って、やから逃げんなやあ!!」

——ゴスツ… ゴンツ!

車椅子に吹っ飛ばされた後の鈍い衝撃とともにオレの意識がブ

ラックアウトしていく。

「あ、あかん… ついやり過ぎてもうたかな。おーい、大丈夫か？ 平気か？ 平気やな？」

……

……

…

気付けば知らない天井を見詰めていた。額には濡れタオルが乗っている。……何これ怖い。

「お、気付いたようやな。状況は分かるか？」

「大変だ。オマエの名前も思い出せん」

「そら重症や… って、互いに自己紹介一つしてへんから当然やろ！」

小気味良いツツコミを入れてくれる。わはは！ いいねいいね、やっぱこの子おもしろいわ。

「そうか、オレは桜庭悠人だ」

「おう、私は八神はやてや。よろしゅうな、悠人」

「ああ… よろしく、八神」

「……………」

「……………」

沈黙が場を支配する。車椅子の少女は不満そうだ。

だってオマエ、女の子をいきなり名前呼びとかありえなくね？ 悠人少年もそう言ってるさ。

まあ、オレが下の名前と呼ばれる分には一向に構わん！ ってトコだけどね。

「世話になったな。……後日礼は改めて」

ソファから身を起こす。いつまでも女の子一人の家にお邪魔するわけにはいかん。

倒れる直前のコトが思い出せないが、思い出せないということは大したこと無いんだろうな。

「あ… その、ゴメンな。怒って、へんの？」

「怒るも何もない。オマエには感謝こそすれど、其れ以外にはないさ」  
倒れてるのを放置されてたらどんな二次災害を引き起こしてたか

： 財布紛失は覚悟せんと。

安全な場所まで運んでくれて適切な処置をしてくれた彼女には感謝しかない。コレは本当。

それでも申し訳無さそうな顔をしている。医者でもないんだからその場で対応なんて出来んよ。

だが、彼女の顔は晴れない。ふむ、女の子を悲しませるのは趣味じゃない… ならば。

「…そうだな。もし気に病むというのならば料理の一つでも御馳走してくれ」

「へ？」

「但し、オレは好みにうるさい。散々注文をつけるし面倒な人間だ。それでも我慢しろ」

「う… うん」

「それでチャラだ。いいな？」

このあたりが落としどころだな。オレも一食分の食費が浮くし。オレも一食分の食費が浮くし。

大事なことなんで… そもそもなんでオレ、彼女の家に参加されるのを執拗に避けてたんだっけ？

う… くん… 思い出せん。まあ、思い出せないってことは大したことが無いんだろうな（確信）。

それから車椅子の少女改め八神と食卓を囲み、彼女の手料理を召し上がることになった。

彼女の出してきた料理の数々は小学生離れしたチート染みた出来栄えだった。

クロハラ（仮）さんやゴリくん、眼鏡くんと言い最近の小学生は小学生離れしてるなあ（棒）。

こ、これくらいなんてことないし… 電波さんの知識使えばオレにもできるし…（震え声）。

え？ 注文？ 「うめ、うめ、うめ」って食っちゃったよ？ お代わりも頂いちゃったよ？

その流れでアドレスを差し出す羽目になったけれど、悪用されても

許しちやうぜ。この味なら。

今、八神の家は町中でクロハラ（仮）さんに追い回された時の緊急避難先として活用されてる。

最後に『名無しの少年が珈琲貴族に覚醒した』のだ。え？ コレ、オレのせいじゃないよね？

な：　なんか三人娘に睨まれたけれど、別にオレは何もやってなくてね？

カモにし易いから1日1本（時に2本）は上手く丸め込んで飲ませてただけで：　あ、それか。

「珈琲も最近では、糖尿病予防や抗ガン作用に一定の効果があることが認められているんだ」

「そうか…」

へえ、そうなんだ。知らなかったよ。で、なんでソレをオレに語るんだよ。オマエは。

三人娘は？　え？　聞いてくれないって？　そうか、オマエも辛いんだな：　聞いてやるよ。

「特に生活習慣病に結びつく糖尿病に大きな効果があるのは立証済みだ」

「ふむ…」

「アルツハイマーやパーキンソン病などの認知症全般にも大きな抑制効果があるんだぜ？」

「ほう…」

だ、誰か助けて：（震え声）。オイ、目え逸らすな！　三人娘ども!? 「珈琲にはカロリーが無い割にビタミンやミネラル等の栄養も豊富なのでダイエットにも最適だ」

「ダイエット」というキーワードを聞いて三人娘が瞬時の変わり身をやつてのけた。

名無し少年から詳しく聞き出そうとしてる。オマエらホントにイイ性格してるなあ？（迫真）

彼も日頃、苦勞しているのだろう。ひよっとしたらオレたちは分かり合えるのかもしれない。

「オマエの意気込みの程は伝わった。ならば駆けつけ一杯… 今日も1本くれてやろう」

「いや、結構だ。……『本物』を知ってしまったと、缶コーヒーはそう頻繁に口にしたくない」

やはりコイツとは分かり合えないようだ。間違いないな。コイツは敵だ。たった今、確信した。

………

……

…

校歌をBGMにコレまでを振り返り、改めて思う。

中にはほんのり良いこともあったかもしれないけれど、コレ、大抵ろくでも無い思い出よね!?

目頭が熱くなるのを止められない。三年生に進級したら、もっと良いことがありますように。

## 少年と火事と電波

「——この前みんなに調べてもらったとおり、この街には沢山のお店がありますね」

オレは今、席に腰掛けながら新たに担任となった美人の女性教師の言葉に耳を傾けている。

そう： オレはついに小学3年生へと進級したのだ。待望のクラス替えはなかった。

進学校のシステムというモノを甘く見ていた。なんだよ、それ： なんなんだよ： 畜生！

つまりここは超進学クラスであり、名無しの少年や三人娘は勿論のこと、ゴリくんや眼鏡くんも勉強できる系小学生だったのだ。オイやめろよ。英語ペラペラと喋るなよ。赤木キャプテンかよ。

ココは違う、オレの知る小学校の学習カリキュラムとは違う。必死で勉強せねば（使命感）。

「みんなは将来どんなお仕事に就きたいですか？ 今から考えてみるのもいいかもしれませんね」

ていうか “この前” っていうんだよ。明らかにオレが認識してない世界線のコトと思われるぜ。

このままじゃ悠人少年の（主に成績とかそういう方面の） “将来” がヤバイ。ヤバすぎる。

今後は愛想も振りまいて内申点の向上も狙っていかねば。先生とのコミュニケーションが鍵だ！

「じゃあ、ここでみなさんの将来の夢を聞かせてもらいましょう」

当てられた生徒たちは元気良く答える。弁護士、官僚、会社経営者

： オイ、小学生ども？

ソコはホラ、仮面ラ○ダーとかウルトラ○ンって答える流れじゃないかな？ そうだろ？

神様転生してチート能力貰って異世界で大活躍とか： あ、それは悠人少年の妄想ノートか。

「では… はい、桜庭くん」

え？　ちよ、ま…　オレえ!?　ま、まさか当てられてるとは思って  
なかったぜ。あばばば。

だが待て、コレは降って湧いたチャンス。コレを乗り越えればボツ  
チ解消&内申点上昇!

よし…　正直に答えなくては。そう、近い将来この身体は悠人少年  
に返す訳で、そうなれば…

「……成仏？」

——ざわ…　ざわ…

「ず、随分と…　その、将来過ぎる先のことを見据えているのね…」

アカン（白目）。

ちよつと待った。今のナシ。おいしい、珍獣見るみたいな目で見るの  
やめてくれませんかねエ？

ひっひっふー…　ひっひっふー…　ラマーズは生命の呼吸法。オ  
レに勇気を与えてくれる。

「無論、今のは軽い冗談です」

「そ、そうよね？　…先生、ビツクリしちゃったわ」

「ええ、申し訳ない。改めて述べても？」

「ええ！　それじゃ、改めてお願いね？　桜庭くん」

よし、オレの『□仕切り直し（偽）：E』が辛くも発動した。だがチャ  
ンスはこの一度きり。

もはや間違いは許されない…　悠人少年になりきって答えるんだ。  
彼ならばどう答えるか!?

「オレは…　全てを望みます」

——シーン…

クラスが沈黙に包まれる。よしよし、今度は間違えてないみたいだ  
な。オツケーオツケー。

「安息に満ちた日々。恐れるモノのない生活。それらは戦うコトに  
よってしか得られない」

赤い第五人形も言ってた。生きることとは戦いだって。そう、  
学生生活は試験との戦いなのだ!  
イキルコト

穏やかな性格の悠人少年ならばそれらを乗り越え、安息の日々を目

指すことだろう。うん。

それらは人にとって「全て」と言えるほどに満ち足りた生活になるんじゃないかな? と思う。

「よって、オレはココに宣言する。オレはオレの持てる全ての力を以って其れに挑む、と」

まあ、オレじや力不足かもしれんけれどオレなりに全力を尽くして頑張るつもりだぜ?

フフツ… 一時的に身体を譲ってくれてる悠人少年に恥をかかせるわけにやいかないからな。

落第とか、落ちこぼれとか、そういうものの恐怖とは無縁の生活に一刻も早く到達したいぜ。

「あらゆる困難や障害は、足を止める理由にはならない。力を以ってコレを排除する所存」

もちろん、困難や障害に当たっても頑張つて乗り越えていきますよ! 学習力や勉強力でね!

え? 運動力? ……まあ、それはおいおい(目線そらし)。

うくん… 将来の夢を語るつて言うよりも、なんか抱負とか所信表明っぽくなっちゃったかな?

「……以上です。先生並びに級友諸君らには清聴に対し深い感謝の程を」

お辞儀を一つして着席。弁護士やら官僚やらを目指す彼らには退屈過ぎる平凡な夢だろうな。

お、ゴリくんと眼鏡くんが領いてくれてる。おー、分かってくれたか2人共。嬉しいなあ。

そうだよな、勉強できると言っても庶民派も混ざってるよな。心の距離が狭まった気がするぜ。

その後、何故か妙に静かなままその日の授業は続けられた。

オレの余りに地に足の着いた将来設計に当てられて、みんなも自分を見直すコトになったか?

気にするなつて。小学生らしくはないと思うが、大きな夢を語るの  
は子供の特権だぜ?

……  
……  
……

そして今、オレはスーパーで買ってきた鶏もも肉を手に台所と向かい合っている。

何故かような姿を晒しているのか、そこから説明せねばなるまい。

コトの切欠はやはり八神である。ヤツがオレの自炊スキルを聞き出し、鼻で笑ったのだ。

電気炊飯器のご飯と即席みそ汁で召し上がって何が悪い！ 一人用だとこんなモンだろうが！

オレだって味噌汁くらいは（辛うじて）作れるわい！ ただ少人数作るのが面倒くさいだけだ！

……と、無口クールに反論するオレにヤツは言った。「ほな、おかずのレパートリーは？」と。

野菜炒め、焼き肉、パスタ…… 魚は捌くの苦手だけどなんとか焼けます…… と小声で回答。

そしたら鼻で笑われた。それで「あんな、パスタはおかずやないで？」と突っ込まれた。

どう思うよ、諸君！ このオレが出来ない子みたいな扱い！ コイツはめっちゃ許せんよなあ〜？

というわけでオレは本日、生まれて初めて鶏の唐揚げに挑戦するのだ。大丈夫、出来るさ。

オレは巷でも「中の人はやればできる子なんだけど……」と絶賛評判中じゃないか！

今後感想でも「コイツは出来る厨二」「やるじゃん厨二」と言われる筈。いや、中二ちゃうし。

とりあえず、使われた形跡のないでかい中華鍋を取り出して…… 目一杯サラダ油を注ごう。

で、火をかけておこう。よく分からんけれど、油が煮立つまでかければいいよね？

なんか男塾とかでよく煮立った油が出てくるし、中国じゃありふれ

た光景なんだと解釈する。

鶏もも肉は： えーと、確かビニール袋に入れて粉と一緒に揉むんだっけ？

…ふむ、小麦粉と片栗粉が出てきたな。

さて、どちらを選ぶべきか？ よし、小麦粉！ キミに決めた！  
ってあちっ！ あちっ!?

恐る恐る背後を振り返ると… 紅蓮の世界が広がっていた。

——ポオオオオオオオオオオ…

あばばばばばばばばばば！ なんか中華鍋から火柱立ってますよ!?

どうしてこうなった！ どうしてこうなった！ 火事じゃん、コレめっちゃ火事じゃん!?

どうしようどうしよう。待て慌てるな冷静になれ… って出来るわけーねだろがボケエ！

えーと、えーと… とりあえずマヨネーズを投げてみる。

——パアンツ!!

ぎゃああああああああああ！ 破裂して飛び散って余計大惨事になった気がするう!?

ど、どうしようどうしよう… どうすれば！ あ、そうだ。パソコン！ 知○袋で！

ダメだ。つい先日未開封メールがついに8000通を超え、まともに動作しなくなってたんだ。

スマホは!?! ぎゃああああああああ！ キッチンの上に置いてるうううううう!?

と、取りに行くことなんざ出来ねえ… もうこうなったら消防車を呼ぶしかないのか!?

遠くにいる悠人少年のご両親に迷惑をかけてしまうしかないのか？ 己の無力が恨めしいツ!!

『聞こえますか… 僕の声が…』

そんな時だった… 救いの電波が聞こえてきたのは。

## リリカル少女と魔法と顔文字の人

「将来かあ……」

眩きながらタコさんウインナーをプラスチックの爪楊枝で刺し、クルリと回して口に運ぶ。

お昼の時間： 屋上はそこそこの生徒数で賑わい、それぞれの話題に花を咲かせている。

私たち： アリサちゃん、すずかちゃん、刀真くん、そして私の4人グループもその一つだ。

「アリサちゃんたちは、もう大体決まってるんだよね？」

「うちはお父さんもお母さんも会社経営だし、一杯勉強してちゃんと跡を継がなきゃね」

「私は機械系が好きだから…… 工学系で専門職になればいいなって……」

うくん： やっぱりみんなしつかり考えてるんだなあ。

私はどうなんだろう？ 喫茶『翠屋』の跡取り娘？ それも勿論候補の一つなんだけど……

あれ？ 刀真くん、さつきから難しい顔して黙ってどうしたのかな？

「刀真くん、どうしたの？ 何か、考え事？」

「ん？ ああ、いや……」

いち早く気付いたすずかちゃんが彼の様子を伺う。

いつもだったらそれで笑顔に戻ってくれる筈。けれど、今日の彼はそれでも浮かかないままだ。

ひよっとしたら…… 彼も、漠然と同じコトを考えていたのかも。…… “さつき” のことを。

「さつきの桜庭のコトで、ちよつと…… な」

…… やっぱり。口には出せないがそう思った。

ううん…… 私だけじゃない。アリサちゃんやすずかちゃんにとつてもそうだったのだろう。

先ほどもでのわざと話題を避けていたような、わざとらしい空気は

既に吹き飛んでいた。

——全てを望む。そのためにはあらゆる困難や障害を力によって排除していく。

彼は迷いなくそう言い切った。『自分が望むのはほんのちつぽけなことだ』とでも言う風に。

其れが否定されることなどありえない、とでも言うように。其れは事実、果たされる。

彼の迫力に飲まれたクラスは、先生ですらろくな注意を挟めないままなし崩しの授業に入った。

「あんなのは世迷いごとよ！ 最近ちよつとは変わったかと思っただれど……」

「でも…… 恐怖のない安息に満ちた生活とか、やっぱり簡単には手に入らないと思う……」

「すずか！ アンタ、だからってあんなヤツの言うことを……」

「ううん、違うよアリサちゃん。そういうつもりじゃないの。けど、けどね……」

ど、どうしよう。二人が言い争いを始めちゃったよ…… こんなこと、滅多にないのに。

でも、確かに内容はともかく迷いなく言い切った桜庭くんの姿勢は羨ましくて……

だから、どうやって二人を止めたら良いか分からないよ。……刀真くん、お願い。助けて。

私の願いが通じたのか、刀真くんは一つ頷き口を開いた。

「……確かにアイツは変わったと思う。以前までのように無軌道な暴力方はしなくなった」

「あ、うん。そうだよね…… お母さんもそう言った。割りとケーキ好きみたいよって」

「確かに変に知恵が回るようになったわね。それに、殴ろうとしてもすぐに逃げていくし……」

「あはは…… 前だったらアリサちゃんに追われても逃げずに抱き締めようとしてたよね……」

みんな、心の何処かで思っていたことなのだろう。堰を切ったように思い思いに語りだす。

一番の違和感はまだ私たちが3人に近付かなくなったことだろうか？ むしろ避けてる？

翠屋ではたまに会うこともあるけれど、ケーキ目当てみたいだしアリサちゃん見たら逃げるし。

「けど、それだけに今のアイツには底の知れなさがある。……深みがあるって言うのかな」

「……………」

一同、押し黙る。そうなんだ… たまに口を開けば余裕のある言い回しや難しい表現ばかり。

私たちに余り本気になってないっていうか、遊ばれているような印象すら受けちゃう。

それを感じるからこそ、プライドの高いアリサちゃんは怒って追いかけて回してるんだと思う。

「フーン… どうせアイツのコトだからロクでもないコトを企んでるに決まってるわ！」

「それは… うん、そう考えるのが自然なんだけど…」

今の彼は問題行動らしい問題を起こしていない。けれど、時折滲ませる気配や表情…

それに、さっきの授業でのような言い回しなどで私たちの警戒をコレでもかと誘ってくる。

まるで慌てふためく様を楽しむか、あるいはその先にある何かを狙っているかのように。

「コレ以上ココで話していても結論は出ない。だったら、俺らしくやってみるさ」

「どうするつもり？ 刀真」

「……考えてダメなら、当たってみるしかないだろう。アイツ… 桜庭本人に、直接的な」

そう呟いた刀真くんの瞳は、決意に彩られていた。

……………

…  
…

今は夜だ。学校帰りに傷付いたフェレットを拾って榎原動物病院に預けたのが夕方のこと。

でも、昨晩夢で見たような景色で一瞬驚いたのは内緒だ。ううん、内緒はそれだけじゃなく…

「私と刀真くんだけ何かの声に導かれるようにフェレットを探し当てられた」という点だ。

私一人だけだったら空耳や幻聴ですまされたかもしれないけれど、どうして刀真くんまで？

塾での授業中もそれが気になって、当てられてしまった時もミスしそうになってしまった。

うう… 失敗失敗。真面目に受けないと。そういえば、桜庭くん最近全然塾に来ないよね？

帰宅し、晩御飯の時にフェレットのことを家族に切り出してみた。一時預かれないかなって。

アリサちゃんやすずかちゃんのお家は、他のペットを飼っている関係で難しいみたい。

刀真くんのお家は、お父さんとお母さんが揃って動物アレルギーで無理みたい。大変だよ。

ちゃんと話してお願いしたら、みんな賛成に回ってくれた。頑張ってお世話しないと！

アリサちゃん、すずかちゃん、それに刀真くんは首尾の程をメールにて送信… と。

はあ、ホッとしたなあ… コレで明日を迎えるばかりだよ。フェレットさんも安心だよ。

『聞こえますか… 僕の声が…』

そんな時だった… 不思議な声が頭に響いてきたのは。コレは、誰の声？ なんなの？

『コレ… 昨夜の夢と、帰り道に聞こえたのと同じ声…』

『オマエは誰だ？ 俺を呼んでいるのは、オマエなのか!?!』

え？ 声が増えた。そ、それにこの声… どこか聞き覚えがあるよ  
うな…。

でも、呼びかけ主はこちらの反応に安堵の吐息を漏らしたみたい。  
『良かった… 僕の声が聴こえるんですね。お願いです。僕に少しだ  
け力を…』

『ちよつと待つて欲しい。オレの声も聞いて欲しい(´；ω；)』  
何らかの言葉を更に紡ごうとしていた呼びかけ主の声に、割って入  
る新たな声。

あ、あれ？ えーと… 呼びかけ主さんと、それに応えた声さんと  
新たな声さんと私。

ううう… ややこしいよお。

『え？ あの、貴方は誰ですか？ 勝手に割りこまないでください。  
それに今は…』

『割りこんでゴメン。でもこつちもそれどころじゃないんだ。火事な  
う(´・ω・´)』

え、えええ！? か、火事つて… 確かに其れは一大事だよ！ ど、ど  
うしよう!?

『オマエ… 火事つて大変じゃないか！ 大丈夫なのか!?』

『心配してくれてありがとな、元気な少年。今はなんとか無事だぜ！  
(´・ω・´)ゞ』

ほっ… 良かった。煙に巻かれて倒れてるとかだったら大変だっ  
たもん。無事でよかったよ。

『けど、長くは持たない。知恵が欲しい。パソコンは8000通の未  
開封メールのせいで動かない。スマホはキッチンの上に置きっぱ  
だつたんで取りにいけねえ。てかお釈迦の可能性大(；・▽・)』

『…家族はどうなんだ？ 親や兄弟は頼れないのか?』

『事情があつて遠くで暮らしてる両親がいるぜ。…顔も知らないけ  
どな(´・ω・´)』

うわ… 複雑な家庭の事情を知っちゃったよ。どうしよう。コ  
レって結構ピンチだよな？

『余り心配かけたくないから、電話は最終手段にしたいけど… 電話

すべき？（；ω；）』

『そつか… そうだよな、親御さんに迷惑はかけられないよな。できるだけ頑張ろうぜ！』

『うん、その気持ち… 私もよく分かるよ。力になってあげたい！』  
『オマエらのヌクモリテイに全オレが泣いた。ありがとう… ありがとう…（；ω；）ブワツ』

家族に迷惑はかけられない気持ち… 分かるもん！ 力になってあげないと！

『あ、その、ごめんなさい。僕の方も結構ピンチでして、その…』  
『おっと、すまなかった。じゃあ、元気な少年の方はそっちに向かってくれ！（；ω；）』

『そう言うなら行くが… 大丈夫か？』

『なあに、こっちは少女に家庭の知恵を借りるさ。…大丈夫だ、問題ない（ー、ドー）キリツ』

「こ、ここで私一人にこの重圧が降りかかるのお!? が、頑張らないと…。」

『わ、分かりました。とりあえず状況を話してください』

『任せる。あれは今から三六万… いや一万四〇〇〇年前のことだったか…（〇・ω・〇）』

『て・ば・や・く！ ……お願いしますね？』

『サ、サーセン…（（；；）ガクガクブルブル』

要約すると、犬猿の仲の知り合いに挑発されてついカツとなって唐揚げを作ろうと思った。

サラダ油に火をかけっぱなしにして余所見してたら大炎上になって今に至る… と。

うわあ… この人ホントに心の底からどうしようもないダメ人間だなあ。ウフフ…（遠い目）。

『とりあえず、まずコンロの火を切ることです。次にお風呂場で濡れた毛布を何枚か用意！』

『お、オーケーBOSS！φ（\*，D，\*）メモメモ』

『あとは火元に重ねて消化してください！ 次やったら素直に消防署

に連絡しましょうね!?!』

『は、はい… マジサーセンつした… (´；ω；)』

もう！ でも、ふざけた調子の人だけどこか憎めない感じだったなあ。

そんなことを思いながら、呼びかけ主のところへ急ぐ。私だって何かできるかもしれない！

…あの人、なんで脳内の声であんなにフリーダムに顔文字っぽい表現できたんだろ。

………

………

…

現場にたどり着くと…

其処には夕方のフェレットを背に庇いながら、怪物を足止めしている刀真くんの姿があった。

ええっ!?! こ、コレってどういう状況なの!?

「来たか！ すまないが、オレの魔力じゃコイツを封印できないらしい… って高町い!?!」

流石の刀真くんもビックリしてるみたい。

あはは… そうだよな、私なんてビックリし過ぎてさつきからついていけないくらいだし。

「と、とにかく… そのフェレット！ 事情説明は任せた！ 時間稼ぎは引き受けるツ!!」

そう言つて、ボールのような怪物を蹴飛ばし刀真くんがラッシュを仕掛けている。

フェレットつて… この子？ 事情説明なんて、どうやれば…。

「あの…」

「わわっ、喋ったあ!?! つて、コレ、さつき聞こえてた声…」

「彼と同じで来てくれてありがとうございます。どうか、僕に力を貸してくださいませんか?..」

「ち、力って？ そ、それに… 刀真くん勝ってるんじゃない?..」  
そうなのだ。

怪物の攻撃は全てかわし、時に剣で薙ぎ払い、時に拳で撃ち貫き……  
終始刀真くんのペースだ。

「ええ、彼はよくやってくれてます。けれど、ジュエルシードを封印するには魔力が足りない」

「まりよ、く……？」

「どうか…… 僕の力を、魔法の力を使ってくれませんか？ お礼はします。必ずしますからッ！」

「なんだか分からないけれど、私にしか出来ないことがあって……それが貴方や刀真くんの助けになるってことだよ？ だったら、いいよ。お願い、教えて！ 一体、どうすればいいのッ!？」

このまま黙って見ているなんて出来ない。私しか出来ないことがあるなら迷うことなんてない！

「この宝石を手…… 目を閉じ、心を澄ませて。そして、僕の言うことを繰り返して」

「(この宝石、暖かい) ……うん」

目を閉じるだけで、不思議と心が澄み渡っていく。この宝石に、まるで助けられてるように。

「我、使命を受けし者なり」

「——我、使命を受けし者なり」

「契約のもと、その力を解き放て」

「——契約のもと、その力を解き放て」

なんだろう？ 私の手の中で、宝石が一つ脈打った気配がする。

「風は空に、星は天に」

「——風は空に、星は天に」

間違いない。この宝石は脈打ち、そして今や輝きを放っているのではないか。

けれど、不思議と驚きや不安感はない。

『おっすおっす、今大丈夫？ 無事鎮火したから連絡に。マジ、あんが』

とね！ (´・ω・´)ゞ』

「おっすおっす、今大丈夫？ 無事鎮火したから連絡に。マジ、あんがとね！」

『ちよ、邪魔すんなあああああああああああああああああああああ  
ああッ!』

フェレットくんの絶叫が夜空に響き渡った。

あ、えつと、その… それから色々あつて私は無事に『魔法の力  
』を受け取りました。

魔法少女っていうのかな？ に変身してから、刀真くんが弱らせて  
た怪物を封印して。

今夜の事件は解決ということになりました。

怪物を生み出していたのはジュエルシードっていう宝石。

異世界における古代遺産で、願いを叶える凄い力を秘めてるんだけ  
ど制御が難しいんだって。

全部で21個あつて、さつき封印したのと合わせてそのうちの2個  
が手元にあるんだとか。

「さつきみたいな怪物が現れるんだったら放つてはおけないな。け  
ど、高町。オマエは…」

「みなまで言わないで、刀真くん。私だって同じ気持ち。それに、封印  
役は必要でしょう?」

「ごめんなさい… 僕の事情で巻き込んでしまつて」

項垂れるフェレットくみを慰めながら、詳しい話はまた明日… と  
いうことで解散しました。

家に帰ったらお兄ちゃんとお姉ちゃんにバレバレで、怒られちゃつ  
たよ。トホホ。

でも、フェレット改めユーノくんはお母さんが気に入ったことも  
あつてウチで預かることに!

その晩は軽く自己紹介だけしてすぐに休むことにしました。

明日からジュエルシード探して忙しくなるんだもん。つまり、身体  
が資本だもんね。

私にしか出来ないことがある。それがこんなにもワクワクするこ  
とだなんて!

え? 顔文字の人? 消火作業で疲れたつて、アレからすぐに寝  
ちやつてたけど…。

一体誰だったんだろう？

どっかで聞いたことある声だったような… うくん、気のせいかな

？

## 少年のお参りと金髪少女

「桜庭… 俺と戦え」

「断る。今日は予定がある」

放課後になると名無し少年が声をかけてきた。何言つてんだコイツ、嫌に決まってるじゃん。

てか「おい、デュエルしろよ」が通用するのは遊○王の世界だけだつての。スルーだスルー。

筆記具をまとめて席を立つ。ふう、今日も充実した一日だった。さて、さっさと帰ろうかな。

「ちよ、ちよつと待て！ そ、そうだ。応じてくれたら、俺特製の珈琲をプレゼントしよう」

「たつた今、待つ気が完全にゼロになった」

オレに珈琲をプレゼントしようとか喧嘩売ってんの？ マジで売ってんの？ 挑発なの？

だとしたら大成功だよ。こうかはばつぐんだ。今後オマエの頼み一切聞きたくなくなったよ。

それに今日は予定があるのは本当なのだ。それはズバリ、悠人少年の件に関する神頼みだ。

オレが悠人少年の貧弱ボディに取り憑いてから暫く経つが、事態は改善の兆しを見せない。

人事を尽くして天命を待つ… と言うが、天命が動かぬならばこちらが動かさねばなるまい。

そのためにオレに必要なのは賢明な諸兄なら既にお分かりのことだろう。そう、お参りだ！

すまない、名無しの少年。デュエルだかモン○ンだかにはまた今度付き合っただけだからさ。

きつといつも三人娘と一緒にだから、中々に男の子っぽい趣味とかを発露できないんだろう。

ひとまず、オレのブラック珈琲を2缶引き取ってくれたら応じるってルールでどうだろうか？

「最後にコレだけ聞かせてくれ。……予定って、なんだ？」  
「……………」

真剣な声音に、はたと足を止めてしまう。無視してもいいんだが、それは流石にアレだよな。

だが「悠人少年が戻ってこれるよう神社にお参りしに行きます」なんて言えないし… ん？

待てよ？ 彼も、オレが悠人少年ボディを乗っ取ったコトによる綻びに気付きつつあるのか？

「オマエも気付きつつあるのではないか？ 綻びが生まれ、何かが狂いつつあることに」

「ひよつとして、其れは昨晚の…」

うん、そう！ まさにそれ！ 悠人少年だったら昨晚あんな事故を起こしたりしなかったよ！

しかし、名無しの少年も気付いていたとは… やはりこの少年、思ったより勘がいいな。

あ、それともボヤ騒ぎがちよつとしたご近所の話題になって、たまま耳に入ったとかかな？

「ほう… 気付いていたか。中々に勘は鋭い… それとも偶然かな」  
「オマエは何か知っているのか!?!」

「さあな… 知っていたとして、ソレを今、ココでオマエに語って聞かせる『理由』があるのか？」

「クツ…」

悔しそうに顔を歪める。そんなに二次災害を不安に思ってたのか… 悪いことしちゃったな。

でもゴメンな、少年。悠人少年の名誉のためにも昨晚の事件の秘密は墓まで持つて行くぜ。

うくん… そんなに悔しそうに顔されると悪いコトした気になっちゃうなあ。しょうがない。

「なに、オレがするのはほんの儀式のようなモノだ。……上手く行けば全てが元通りだ」

「儀式？ 元通り？ なんでオマエがそんなコトを…」

「それこそ愚問だな。……オレが語る夢の実現のために、其れらは欠かせぬ要素だからだ」

「……っ！」

ちよつとサービスし過ぎたかな？ まあ、いいか。大人ってのは子供に優しいもんなんだよ。

名無しの少年の反応を確かめることなく、オレは三人娘の横を通り抜けて教室を後にする。

まあ、昨晩はオレの方が電波さんたちに世話になったしな。情けは人の為ならずってヤツさ。

さあ、未来ある子供のため、元・大人としてキツチリ成仏という夢を実現しようじゃないか！

……

……

……

オレは諦めない。

誤解とすれ違いばかりを繰り返すこの救いようのない世界の中で、悠人少年とご両親が再び暖かい笑顔で巡り合えることを夢みて。

そんなコトを考えながらブラついていたオレの視界に、とんでもない光景が飛び込んできた。

なんと人気の少ない公園の中とはいえ、金髪の少女が大型犬を放し飼いにしていたのだ。

見たところリードも持つてない……クッ！ あの少女は海鳴市ペット条例を知らないのか!?

恐らく彼女は海外では条例の緩い地域に住んでいたのだろうか……此処は独立国・日本だ。

このままでは少女は補導され、あの大型犬は保健所行き……ご家族も大層悲しむことだろう。

ちい……（保健所に見つかるまでに）間に合うかッ!? 悠人ⅡRⅡ  
桜庭、介入するッ!!

クロハラ（仮）さん……この一瞬だけでいい、キミの異常にアレな健脚をオレに貸してくれ!

ノリの良い脳内のクロハラ（仮）さんが「悠人、トランザムは使いなよ」と振ってくれる。

「了解！ トランザムッ!!」

掛け声とともに、奇跡の加速度を体現したオレは、一気に金髪少女の間合いへと飛び込む。

完全に不意を突かれた形になった少女は、慌ててベンチから腰を浮かせ身構えようとするが…

「させん！ 逃すわけにはいかない！ コレはもう、この少女だけの問題じゃないんだッ!!」

このワンコやこの少女のご家族のためにも… 誰かが心を鬼にしてやらねばならんだッ！

その点、世界から異端視されながらも不器用な愛を持ち続けるこの悠人少年はうってつけだ。

嫌われ役は任せろー（バリバリ）。さて、少女とワンコが対応を示す前にまずは一喝する！

「オマエはッ！ 自分がどれだけ危ない橋を渡っているのか、分かっているのかッ!？」

両者は愕然とした表情を浮かべる。……すっげえ、犬ってあんなに表情変わるんだ。

「ていうか、言ってること分かるのかな？」

んなわけ無いか。ご主人様が怒鳴られたんでちよつと驚いてしまったんだろう。すまん、犬。

「そんなんっ！ まさかもう管理局が来るなんて…」

少女は深刻な表情を浮かべて三角形のアクセサリを取り出すと、そんなことを呟いてきた。

「はて、カンリキヨク？ 漢字に直すと『管理局』だろうか？ ……ははあん、読めたぞ。」

この少女も実は悠人少年と顔馴染みだったのか。互いにデイープな設定を語り合うほどの。

『管理局』… ブギー○ツプの『統和機構』と並ぶ良い厨二ワードではないだろうか。

この年齢にしてココまでの資質を開花させているとは… コレは将来が楽しみな逸材だろう。

でも今は、そんなコトはどうでもいいんだ。重要なコトじゃない。「警戒する必要はない、少女よ。今のオレは機関の人間ではない…ただの一人の桜庭悠人だ」

なんだっていい！ この金髪の少女を説得するチャンスだ！！

……

……

…

ふむ… 残念ながら少女を説得することは叶わなかった。強い意志を秘めた少女であった。

ご家族を悲しませることになっても、この道を止まるわけにはいかないと言っていた。

其処までの覚悟を持って愛犬にリードを付けることを拒絶するのは… 生きるんて辛いなあ。

オレに出来たことなんて、せめて彼女が保健所に見付からず移動できるように祈ること。

そして「常に周囲の目を気にすることだ」との心得を説き、ブラツク珈琲をあげたくらいだ。

彼女たちがせめてこの治安の良い海鳴市で、少しでも長い間、幸せでいられますように…

そんなコトを考えながら長い石段を登り切ったオレの目の前には… 半壊した神社があった。

周囲は瓦礫や穴ぼこだらけ… その中央に無駄に巨大な黒い犬(？)がぶっ倒れている。

ゴリくと眼鏡くんが傷だらけになりながら、その犬を見下ろしている。え？ 何コレ怖い。

…：…な、なんかアクシオンを起こさんと。とりあえずゴリくと眼鏡くんは怪我の治療やな。

「…苦労だったな。…：後はオレに任せ、オマエたちはすぐにこの場を去れ」

とりあえずココは預かり、怪我をしてるゴリくと眼鏡くんはココを立ち去るように勧める。

勿論、頑張ったであろう2人にそれぞれ1本ずつブラック珈琲を渡すことは忘れないオレ。

こんな時にも不良在庫の処分を忘れないばかりか、怪我人に荷物増やさせてマジすんません。

でもなんか嬉しそうに受け取ってくれた。なんて出来た人たちだ。いつか友達になりたいぜ。

「さて…」

問題はこのデカイ犬なんだよな。つか… その、なんだ… 端的に言つてデカ過ぎるぜ。

それは、犬というにはあまりにも大き過ぎた。大きく、分厚く、重く、そして大雑把過ぎた。

……つい、そんなイメージを抱いてしまうような犬である。コレ、何犬だろ？ 雑種かね？

ふむ… ゴリくと眼鏡くん襲っちゃったし、この犬、保健所で処分されちゃうのかな？

流石にそれは可哀想だ。何とかならないものか… しかし、こんな犬に対応できる人物など。

……いた、一人だけ。先程お会いした金髪の少女だ。大型犬に優しい彼女ならば大丈夫だ。

しかし、どうやって彼女を探そうか。なんせ彼女の連絡先どころか、名前すら知らないのだ。

うーん… とりあえずダメ元でさっきの公園に行ってみようかな？

この犬を放置していくのも可哀想だが、背負つての移動などこの貧弱ボディでは自殺行為だ。

「……………」

「……………」

途方に暮れて空を見上げれば… いつの間にやってきたのか先程の金髪の少女と目が合った。

空を飛んでいる。……そうか、コレがCGってヤツか。中々に本格的じゃないか。

最近の小学生は進んでいると思ったが、まさかCGまで使いこなすとは。時代の流れは早い。

「ちよとど良かった。コレを任せられるか？」

顎であるの巨大な犬を示す。オレじゃこんな犬をどうこうできん。噛まれると死んでしまう。

自分と同じくらいの年齢の少女に丸投げは気が引けるが… しようがないことつてある。

そ、それにいざとなったら手を引いて逃げるくらいはオレにだって出来るさ。多分（震え声）。

「でも、私で… いいんですか？ だって、それは貴方が」「いいんだ」

長き戦いの果てにイノバイターに進化した某ガンダムマイスターの如き笑顔を彼女に向ける。

だって、こんな巨大なワンコとのコミュニケーションってどう取ればいいのか分かんないし。

なんか目が4つあるし、色んな突起物が身体に生えてるし… 凄く高い品種かもしれんしな。

「でも…」

「大丈夫だ、問題ない」

「……どう、して」

少女は気乗りしないようだ。たしかに、大型犬を二匹目はしんどかろうな。だが、逃さんツ！

「オレが、オマエならば任せられると… そう判断した」

「私、なら…？」

「オマエがオマエを信じられないならそれで良い。ならば、オレが信じるオマエを信じろ」

兄貴ばりの笑顔を見せる。そう、オレは彼女の大型犬への愛と確かな腕前を信じているのだ！

「私が信じる私じゃなくて… 貴方が信じる私、を…？」

「ああ、まずはそこからでいいさ」

「……は、はいッ！」

納得してくれたようだ。こうして彼女の手により犬は小型犬に戻った。……CGだったのか。

副産物として出てきた小さな宝石が彼女に回収されることに。CGを発生させる装置かな？

そして彼女は何度も頭を下げて帰っていった。……あ、あれ？ 犬は放置なの？ ちよつと？

「くうん……」

「……………」

仕方ないな…… 小型犬になったことだしウチで引き取ることにするか。……帰るぞ、ダニー。

おかしな気分だな。このオレにも漸く共にあの大きな家で過ごす家族が出来たというのか。

フフツ…… こんなオレにも帰る場所が出来たということだな。未永く仲良くやっていこうな。

その後、本堂で目覚めた飼い主の女性によってダニーは回収されていった。さらば、ダニー。

べ、別に寂しくなんてないし。もともとココにはお参りでやってきただけだし……（涙声）。

……………」

……………」

……

当初の目的通り半壊した神社の賽銭箱に奮発して壹百円玉を放り投げ、しっかりと祈念する。

すまないな、神社の人。ゴリくんたちとダニーが荒らした神社の修繕費用に使って欲しい。

悠人少年の心の闇が晴れてキッチンと社会復帰できますように。あれ？ 微妙にニートっぽい？

さあて、お参りも無事（？）に終わったことだし帰るとするか。タイムセールが始まるしな。

……唐揚げの作り方、八神に教わるかな？ でもアイツ、土下座くらい普通に要求しそう。

却下だ、却下だ。とりあえず電波さんの助言に従い、本屋さんで料理本を入手。そこからだ。

「え？　なんで、ココに……」

「桜庭……」

石段に向かって歩いてきたオレの前に、名無しの少年とちやっかり系少女の2人が現れる。

ちやっかり系少女は肩にイタチっぽい何かを乗せている…… えーと、アレ、なんてったつけ？

確か…… ペレットだっけ？　うん、なんか違う気がするな。ドツグフードっぽい響きだし。

「そのイタチらしきモノは…… いや、なんでもない」

まあ、イタチの名前がどうだろうと関係ないよな！　オレにはダニーが（脳内に）いるしな！

とりあえずノロイ（仮）ってコトにしとこうか。キミの名前は（勝手に）ノロイ（仮）だ！

あんなにイタチ無双なアニメは知らない。そうだ、今度図書館で『冒険者たち』を借りよう。

「待て！　オマエ、ココで何を……」

「……今日は予定があると云った筈だ。徹頭徹尾、その為にしか動いていない」

お参りに行くって言ったじゃん。ココが何処だと思ってるんだよ。神社でしょ？　神社だよ。

あ…… この瓦礫とクレーターのせいか。うん、それはオレのせいじゃないよ（震え声）。

ゴリくんや眼鏡くん、ダニーのコトについて知られるワケにはいかなぬ。逃げないと（使命感）。

「現住生物と融合したジュエルシードの暴走体は無傷で、それも魔力の痕跡すら感じさせずに……」

オレの背中に声かけられる。コレ、誰が喋ってるんだ？　なんか

聞き覚えのある声だけど。

まあ、多分ちやつかり系少女が喋ってるんだらう。あんまり彼女の声聞いたことないしな。

あとジュエルペット？　なんだっけ、女兒向けアニメだっけ？　そんなんオレに振られても…

「何の話だかサツパリだな…　じゃあな」

すまないな、少女。そういう話はオレじゃなくて元々の悠人少年として欲しいと切に願う。

彼ならば大丈夫だ。妄想ノートに魔法少女アニメに関する設定を書き連ねてたくらいだしな。

そんなわけで、桜庭悠人はクールに去るぜ。

…：オレは悠人少年になってから何度目かとなるタイムセールの圧殺を経験した。

最近、コレがないと少し物足りなくなりつつあるのが悩みの種だ。

今日の成果は冷凍春巻きと冷凍オムレツ…　来週もオレと地獄に付き合ってもらおう！

## ゴリと眼鏡の一流半

「ギャアアアアアアッー！」

今日も“あの方”のおっしやる“一流”を目指すため、ゴリラと二人で神社の裏手で特訓をしよう。

そう思っていたのだが… やれやれ、そんなコトを言っている場合ではなくなったようだ。

合図の目線すらかけることなく同時に駆け出す… 悲鳴は境内の方から聞こえてきたようだ。

辿り着けば、黒く巨大な獣が気を失った女性にゆっくり近付こうとしている様子が目に入る。

所々に禍々しい鋭利な突起物を生やした凶悪なフォルム。不気味に赤く灯る瞳は四つもある。

そして注目すべきは牛ほどもある巨軀。何の生物に一番似ているかと問われれば犬だろう。

だが、こんな異形を犬と思ひ込むような者は、余程の花畑脳か異端的思考の持ち主くらいだ。

「グルルルル…」

その“犬”（便宜上敢えてそう呼ぼう）は僕たちの存在に気付き、威嚇の唸り声をあげてきた。

漲る殺気と剣呑な雰囲気を漂わせる巨大な“犬”。その姿はまるで地獄の番犬を連想させる。

きつと、ほんの少し前の僕だったらみつともなく逃げ惑い、必死に命乞いをしていただろう。

「へへっ… 奴さん、逃がしてくれるつもりはないようだぜ」  
「みたいだね。さて、どうしようか？」

だが、全くもって問題にならない。そんなモノは今や選択肢にあげるコトにすら値しない。

何故か？ それは今、僕の隣には若干血の気が多いものの非常に頼りになる相棒がおり。

何より、既に『絶対者』というモノの存在を知ってしまったからだ。

頭ではなく、その魂で。

「どうするってほどのモンなのか？ ええ、眼鏡」

「フツ、違くない。僕たちにとつては、なんら問題ない『日常』に過ぎないか」

笑みすら浮かべ、二人で軽口を叩く。そのとおり、いつもどおり“の延長に過ぎなかった。

全く怯える様子のない僕たちに対し、“犬”の方は不快そうにより大きな唸り声を上げる。

余裕のないことだ。それでは、あの女性を救出しつつこなせる勝ち筋を“創る”としようか。

「頼むぞ、ゴリラ。僕は……」

「皆まで言うんじゃねえ。“オレの敵はオレのモノ。オマエの敵もオレのモノ”……だ」

「フツ…… そうだったな。破壊の拳、いつもどおりあらゆる困難を打ち砕いてくれ」

「そつちこそ！ オレの活路を創造するのを忘れんじゃねえぞ、創造の御手よオ!!」

僕たちは小さく、弱い。一人一人では、そこらにいる小学三年生と何ら変わらない存在だ。

かたや壊すしか能のない三流、かたやよちよち歩き程度の二流見習いといった有り様だ。

そう、二人で力を合わせてやっとな一流半の背中が見える程度の矮小な存在だ。けれどね……

「覚悟しろ、駄犬！ 僕（俺）たちの一流半は、ちよつとばかり痛い（イテエ）ぞッ!!」

目指す頂いただきに挑むためにこんなところで立ち止まってなどいられない。踏み台になって貰う！

まずは二手に別れるコトで狙いを分散させる。牽制用の指弾を撃っておくことは忘れない。

ハハッ、まさか全弾顔に命中するとはね…… コチラを舐めてるのか戦い慣れてないのか。

いい感じにカッカしてくれたようだ。どうやら僕に狙いを定めてくれたようだね。ならば…

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!」

唸り声とともにコチラへと飛び掛かってくる「犬」に向かって、自分自身も飛び込んでいく。

——ドゴオツ!

鈍い音と共に「犬」の巨躯が更なる宙に舞う。狙い通り、ゴリラの横殴りが炸裂したようだ。

一方僕は地面につき、勢いを利用して前転することで両者の激突をやり過ごしていた。

しかしなんだ、今の際どいタイミングは。なんだか僕の服にも掠っていたみたいなんだけど。

「ノロノロしてんなよ。たるんでんじゃねえか?」

「そっちこそ。僕抜きだからってアツサリ負けるなよ?」

互いに背中合わせのまま、短い言葉を交わす。このまま一時期僕たちは別行動を取るのだ。

僕は女性を回収して安全な場所に運ぶ。ゴリラはそのサポートとして「犬」の足止めと牽制。

言葉にすることなく瞬時に組み立てた作戦であり、互いが逆の役割を担うコトもありえた。

近付き、女性の様子を確認。目立った外傷もなく、脈拍も正常。コレなら移動も可能だろう。

腕を肩に回し抱きかかえる…む、若干重い。つと、女性に対して失礼な感想だったかな。

急ぎ神社の本殿へと駆け出す。あそこに寝かせておけば女性の身もひとまずは安全なはずだ。

戻ってみれば惨憺たる有り様、という具合だった。神社のあちこちが崩れ、穴ぼこだらけだ。

ゴリラは幾分怪我を増やしているものの、動けぬほどではないし、よく対処してくれている。

「犬」は全くの無傷と言って差し支えなかったが、コチラのサポ―

トを重視してくれたか。

内心「頭が上がらないな」と苦笑しつつ、そのままゴリラを援護する最大の好機を模索する。

真つ当な生物かは怪しいものの、一応アレも生物は生物。攻撃には独特の呼吸があるはずだ。

読みは当たり、息を吸い込むと同時に筋肉を硬直させる様子が伺えた。何らかの動きの予兆か。

当然そのまま好きにさせるつもりはない。指弾を注ぎ動きを止め、ゴリラの攻撃を援護する。

——ゴッ！ ……ブシャッ！

「……ッ！」

殴りつける鈍い音とともに鮮血が飛び散る。 ……ゴリラの左手から。チツ、抜かったか!?

心中で舌打ちをしつつ、状況の把握と分析に務める。思考を止めるな、悔やむのは後にしろ。

“犬”は数々の突起物がついた硬質の鎧に身を包んでいた。 ……先ほどの“溜め”はこのためか。

ゴリラの攻撃を易々と弾いたことから、その防御力は推して知るべし… といったところか。

戦闘中に独自の理論に基づき形態を変化… いや進化させる。だが決して自動的ではない。

恐らく何らかのプロセスが必要なはず。トリガーは“思考”… もしくは“願い”というヤツか。

ならば…

「ゴリラ、ここは僕が引き受ける。今のキミの攻撃では通用しない… 分かるね？」

「ッ！ ……クククッ、分かったよ。精々しくじるんじやねえぞ？ このモヤシ眼鏡が」

そんな僕の言い様に反論せんと、怒りに顔を紅潮させるも一瞬のこ  
と…

すぐにコチラの作戦を理解したゴリラは不敵な笑みを浮かべる。

阿吽の呼吸とは良いものだ。

「任せろ、相棒」

「死ぬなよ、相棒」

交差の瞬間に交わす言葉はそれこそ一言。それに万感を乗せ、前衛と後衛を入れ替わった。

指弾に大したダメージは期待できないが、眼や口を狙ってばら撒けばそれなりの牽制になる。

“犬”よ… オマエは所詮ただの獣だ。“人間”の恐ろしき、この僕たちが教育してやるツ!!

「グアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!!」

……とは息巻いたものの、中々に骨が折れるものだね。コレは。

相手の攻撃の気配を見てかわせば決定的なダメージは避けられるのだが、細かい傷は増える。

それに獣なりに知恵を回したのか、僕の機動力や足場を奪う戦い方にシフトしつつある。

さて、ゴリラは上手く動いてくれるだろうか？

確認したいが、視線を動かし声をかけることで万が一にも“犬”に悟られる訳にはいかない。

作戦を第二段階に移そう。僕は敢えて抑えていたギアを一つ上げ、“犬”の懐に飛び込む。

「……ツ!?!」

想定外の動きだったのか、“犬”は口を開けたまま硬直している。……やれやれ、甘すぎる。

「ゼロ距離、とったぞ。全弾くれてやる… 遠慮せずに貫っていけ」  
——ドガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ…ツ!!!

「グギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!?!」

無様に開け放った口の中にありつただけの指弾礫を叩き込んでいく。……出し惜しみはしない!

その口の端から溢れる血を零し、“犬”は怒り狂う。いいぞ。怒れ、怒れ… もっと怒れ。

思ったより効いているようだが、礫が尽き果て、指弾も撃てなく

なつた僕には決定打がない。

だから…

「ゴイツはサービスだ… とつておけ、駄犬ツ!!」

拳を握り締め、そのままヤツの口の中に叩きこむ！ ダメージなんか最初から期待してない。

そもそも今の未熟な僕に “破壊の拳” の真似事など分不相応だ。そう… 狙いはただ一つ。

ヤツを逃さぬ杭とするため… たつたそれだけのために、敢えてヤツの口中に手を差し出す！

当然というべきか、虚を突けたのは一瞬のこと。

“犬” はすぐに僕の腕を食い千切らんと、その牙に力を込めてくる。服が破れ、肉が裂ける。

血が溢れ出ている気もするし、ひよつとしたら既に骨まで齧<sup>かじ</sup>られているのかもしれないな。

無論、このまま腕をくれてやるつもりはない。コチラに近付く影に気付き、笑みを浮かべる。

——ドゴオオオオオオオオオオツ!!!

神社の本殿の屋根から飛んできたゴリラが、全ての質量を右手に込めて “犬” を殴り付ける。

そう、あの装甲を見た時に固まっていた。ゴリラと僕が狙っていたのは最初からこの一瞬。

“認識外の死角から大質量攻撃を叩き込む” … という一点のみ。それだけに全てを賭けた。

「グギヤ…ツ!?!」

その衝撃に耐え切れず “犬” はグルンツと白目を剥き、僕の腕にかかっていた圧力が消える。

ああ、やはり素人だ。救えない。 “犬” よ、オマエは決して顎を緩めるべきではなかった。

例え、『首がもがれ、生命尽き果てようとも獲物を逃がすべきでなかった』のだ。だから…

「ガハハハハハハハハハハッ!」

——ドンツ！ ドンツ！ ゴンツ！！

決してキミを逃さない破壊の化身によって、蹂躪される。終わるまで解放されることはない。

堅牢を誇った城壁は罅だらけになり、地面と板挟みの衝撃を殺しきれずに負荷を与える。

一撃毎に地面が凹んでいく。やがて“犬”は抵抗できなくなり、僕たちは勝つべくして勝った。

だがどちらにも満身創痍。全てを出し切った上で辛い勝利を掴み取ることが出来たに過ぎない。

ハハッ： だけど、まだまだ紛い物の僕たちにとってはこんな勝利であつても上出来かな？

そう思い顔を上げると、いつの間に来たのか： 当たり前のように“あの方”が佇んでいた。

思わず呆然としている僕たちに向かって、それぞれ一本ずつブラツク珈琲が放られてくる。

「ご苦労だった。……後はオレに任せ、オマエたちはすぐにこの場を去れ」

……やれやれ、なにもかもお見通しだったというわけか。ここまで来るともう笑うしか無い。

一流と： その先にある“悪のカリスマ”の背中、まだまだ遠い那由多の彼方か。

だけど諦めない。いつか辿り着いて、“この方”と同じ景色を見てみせる。それが今の僕の夢だ。

でも： 今日の授業で“全てを望む”と語ったこの人に、少しは認められたのかもしれないな。

手の中にある重みに少し嬉しくなった僕は、ゴリラと一つ頷き合  
い、長い石段を降りていった。

……  
……  
……

「あ、あの……すみませんっ！」

「……………ん？」

石段を降りて少し歩いてみると、見知らぬ少女に声をかけられた。金髪の可愛らしい子だ。

「変なことを聞いてごめんなさい。その怪我…何か恐ろしいモノに襲われたんですか？」

「……………」

さて、どう答えたものか。その瞳は真剣だ。

半ば以上確信を持った問いかけ…間違はなく“先程の件”の関係者ということになるだろう。

「あの…？」

「大丈夫だ、桜庭様に任せて来たからな。それにこれくらいの怪我、なんてコトねえよ」

ゴリラ、キミってヤツはなんでそう…全く、たまにキミが羨ましくなるよ。

間違つてもキミになりたいとは思わないけれどね。

「え？ サクラバって…あの、銀の髪に赤と青の瞳を持った男の子のこと…ですか？」

む？ この少女、あの方の知り合いだったのか…その表情には誰かを心配する色が浮かぶ。

その“誰か”が、この世で最も心配という行為が似つかわしくない存在なのはご愛嬌だが。

とはいえ、害意を持っていないというのならば話しても構うまい。結果的にゴリラに感謝か。

「彼ならこの先の神社にいるよ。……………気になるというのなら、行ってみたらどうだい？」

「……………っ！」

元来喋るのが余り得意ではなさそうな彼女は、言葉を発する時間をもどかしかったのだろう。

ペコリと一礼すると、神社に向かって駆け出して行ってしまった。……………すごいスピードだ。

まあ、仮に何かが起こったとしても、“あの方”なら歯牙にもかけ

ずに全てを解決される筈だ。

途中立ち寄った公園で、ベンチに座って小休止をする。

どちらからともなく、ブラック珈琲に目を移す。安っぽい印字から味は期待できないだろう。

だけど、僕たちは迷うことなくプルタブを起こして缶コーヒーの蓋を開ける。

「ぶはっ！……っはは。なんだよ、コレ。苦くて、ひどい味だ」

まず口をつけたのはゴリラだ。苦味に顔をしかめ、そしてどこか嬉しそうに悪態をついた。

続いて僕も口をつける。……うっ！ 突き刺すような苦味が、僕の脳を一瞬で突き抜けていく。

「うん…… たしかに…… コイツは苦いな」

でも…… 今は、この味が最高だな。ゴリラと二人、僕たちはただの小学生らしく笑い合った。

## 金髪少女はがんばる

第97管理外世界… 地球。私が襲撃した輸送船からジュエルシードがばら撒かれた惑星だ。

本当ならばあの時点で手に入る筈だったジュエルシードは散らばり、未だ回収されてない。

当然というべきか、この結果にはお母さん… プレシア・テストタロツサも酷く怒りを示した。

自分の情けなさに嫌になってくるが、コレも文字通りに自分の撒いてしまった種とも言える。

キチンとジュエルシードの回収を行って、お母さんを怒らせてしまった分を挽回しないと。

そう思っていたのだがマンションへの引越し作業が思ったより難航し、気付いたら寝ていた。

微睡みが深い眠りに移行する頃、アルフから「ジュエルシードの反応がある」と報告される。

私の眠りなんかよりもずっと大事。そう思い現場に急行したが、全てが終わった後だった。

此方の気配を察して姿を消したのか、或いは別の原因か… とにかく空振りに終わったのだ。

明日は朝からがんばらないと… 少し空が白み始めている街中を歩きながら、私はそう思った。

…  
…  
…

太陽が黄色い。軽い調査の後、マンションに戻れたのは夜明け前。あまり眠れた気がしない。

程々に暖かい気候が今はジワジワと体力を奪う敵となっている気がする。がんばらないと。

昨日反応があったというアルフの言葉を信じるなら、この街にはまだジュエルシードがある。

「…………ふう」

今日は昨晚の失敗を反省し朝から出歩いている。仲間もいない。土地勘もない。当てもない。

アルフと街中を歩き回っているのだが、ジュエルシード搜索の成果は芳しいとはいえない。

現地住民の目があるのだから、おおっぴらに魔法も使えない。コレは当然の帰結とも言える。

判断を誤ったのだろうか？ 明日からは夜の探索を中心に切り替えていくべきかもしれない。

けれど、ソレもコレも今日の探索を全力でやり抜いてから。今判断すべき時ではないはず。

昼だからこそその発見もあるかもしれない。そう考えながら歩いていると公園に行き当たった。

『ちようどいいよ、フェイト。ココで少し休憩しよう』

「アルフ… 今は休憩なんてしている暇は…」

今は赤い大きな犬（本人曰く「狼」らしいが）になったアルフが念話で気遣ってきてくれる。

だけど、その提案に頷くわけにはいかない。今は一刻も早くジュエルシードを集めないと。

休むなんて後で幾らでも出来る。時間をかければかけるだけ危険になるロストロギアなのだ。

そう… “ロストロギア”。既に喪われた過去の超技術によって生み出されたとされる遺産。

持ち主の願いを叶える力を持ち、使い方を誤れば次元すら崩壊させる強い力を秘めた道具…

それがジュエルシード。そんなモノが全部で21個もこの街の何処かに散らばってしまった。

お母さんの望みもあるけれど、無関係なこの世界を巻き込みたくもない。コレもまた本音だ。

あの輸送船の乗組員も始末せず見逃してしまった。もう管理局に通報しているかもしれない。

管理局： 正式名称 “時空管理局” は、全ての管理世界の秩序と平和を守るための組織だ。

ココが管理外世界ということもあるから介入はまだ先だろうが、それとて時間の問題に思う。

お母さんの使い魔だったりニスに徹底的に鍛えられここまで来た私は、それなりの腕がある。

並大抵の魔導師にだって遅れを取らない自負がある。けど、それは一対一に限定した話だ。

“組織” を相手にした場合、幾らアルフが協力してくれても厳しい勝率になるのは否めない。

いや、管理外世界に来るほどの猛者ならば単騎で私を圧倒する存在だっているかもしれない。

だから、時間は私たちに味方しない。いや、そもそも私たちに味方なんていない筈なのだが…

『大丈夫だって！ 今あの公園に人影はない。だったら座りながらサーチでもすればいい』

「でも…」

『確かに条件は過酷、時間は心配さ。だからこそ替えの効かない身体は大切に扱うべきだよ』

「う…」

半ば以上強引に押し切られ、公園内のベンチに腰を下ろすことになる。…う、どうしよう。

…： 足に根が張ったように動かない。自分で思っていた以上に疲れていたのかもしれない。

それに、目を閉じて背もたれに身を預ければ、涼しい風が通り抜けてなんとなく気持ちいい。

薄目を開ければアルフはそんな私を見てニヤニヤしている。…： むう、ちよつとだけ悔しい。

「了解！ トランザムツ！！」

そんな私たちの気の緩み… 明らかな “油断” が、一瞬といえど見逃されるはずもなかった。

慌てて体勢を整えようとするとも、声の主は信じられないスピードで間合いを詰めてきた。

ひよつとしたら私たちの警戒が薄れる瞬間を待っていた？ いや、今考えるべきは其処では…

「オマエはッ！ 自分がどれだけ危ない橋を渡っているのか、分かっているのかッ!？」

声の主は、突然の事態に考えが纏まらず混乱気味の私に更に追い討ちの一喝を浴びせてくる。

…：間違いない。この人は「事情」を知っている。恐らくは管理局の息がかかった存在だ。

私は待機状態となっているデバイス「バルディッシュ」を取り出して身構えるので精一杯だ。

「そんなッ！ まさかも管理局が来るなんて…」

逃げ出さないと… ううん、ダメ。逃げる隙なんて与えてくれない。そんな眼をしている。

アルフへの注意も忘れていない。ただの使い魔だと甘く見るような迂闊な人じゃないみたい。

周囲には仲間も伏せているだろう。こうなったら精一杯の抵抗をして何とか突破するしか…

『フェイト！ ココは私が引き受けた！ アンタだけでも』

『そんな！ やめて、アルフを見捨ててなんて…』

ダメ… ダメだよ、アルフ。もうリニスだっていないのに、コレ以上貴方まで喪ったら私は…

けど、私の思うような事態… 管理局員との戦闘も、其れによる拘束も発生はしなかった。

何故なら、私を捕らえに来たはずのその管理局員が…

「警戒する必要はない、少女よ。今のオレは機関の人間ではない…ただの一人の桜庭悠人だ」

まるで旧知の友と出会ったような穏やかな笑みを浮かべ、私に対してそう言ってきたからだ。

思わず呆気にとられる私たちを見て、その笑みは少し困ったような

色に変化をしたようだ。

鞆から取り出した飲み物の缶を一つ取り出し、私に差し出してくと隣に座る許可を求めた。

拒否して、さっさと逃げ出すべきだったのかもしれない。けど、何故そうできなかったのか。

それはきつと、私とアルフのコトを本気で心配している… そんな眼をしていたからかも。

自分でもよくは分からない。すぐに拘束される心配はないみたいだし、話しくらいは聞こう。

コレは情報収集の一環だ。そう自分に言い聞かせて、ベンチへの着席を許可することにした。

「まずは… いきなり怒鳴ってしまつてすまなかつた」

彼はベンチに腰掛けて一息つくつと、横目で私の方に軽く眼を向けながらそう前置きしてきた。

銀髪が陽の光を反射させ、赤と青の瞳がチラツと申し訳無さそうに私の様子を窺ってくる。

この街では余り見かけない特徴的な外見。だけど、私は不思議と彼に違和感を感じなかった。

それにまさか謝られるなんて思わなかつた。どちらかと言えば悪いことをしているのは私たち。

私だつてそれくらいのは自覚は持っているつもりで、断じてこの人が謝ることではないはずだ。

「いえ… 言いたいこと、分かりますし」

「そうか… 分かつた」 上での行動だつたか」

「……はい」

視線を前に移し、少し遠くを見詰めながら残念そうに呟いた。…ココで謝ることは簡単だ。

けれど、それは出来ない。悪いことであっても、褒められない行為であつても止まれない。

直すつもりもないのに謝るなんてただの偽善。其れくらいは私にも分かる。だから謝れない。

この人も理解はしているのだろう。やりきれないような、そんなしかめっ面を浮かべている。

「その道は… 恐らく、誰も幸せになれない。それでもか？」

「……はい」

「いや、きつと全てに対して不幸な結果になる。オマエ自身と、周囲を巻き込んで」

「……………」

……辛い。

けれど、この人の断罪を私は聞かなければいけない。それがこの世界を巻き込んだ私の責任。

そう、周囲の無関係な人だってきつと不幸にしてしまう。もう、しているのかもしれない。

「オマエの不幸を悲しむ存在がいる。其れもまた、自覚すべきことだ」  
「……………」

……私の不幸を、悲しむ？ そんなヒト、いるはずがない。だからがんばらないといけない。

私の居場所を作るため、守るために。……そもそもこの人に、私の何が分かるというのか。

苛々は募って、私のためを想ってくれてだろうこの人に対して、酷い言葉をぶつけてしまう。

「……貴方に私の何が分かるって言うんですか？」

「ふむ… 確かにオレは大したことなど分からないだろうな」

「だったら私に構わないで…ッ！」

「だが… 誰がオマエを心配し、そして悲しむかは分かるつもりだ」

——ッ!? この人はまだ… ううん、私が酷いことを言ったというのに意にも介してない。

……まるで、誰かに罵詈雑言を浴びせられることなど慣れている“と言わんばかりに。

それに、私を心配し悲しむ人？ 本気でいるとでも言うのだろうか

? やけに自信満々だが。

そんな私の胸中を見透かしたかのように、余り多くを語らぬその人

が… 再び口を開いた。

「オマエの不幸を、オマエのご家族が悲しまぬ筈がない」

!?! ……すさまじい衝撃だった。私は、お母さんのために動いてい  
るつもりだったのに。

それが、結果としてお母さんを悲しませることに繋がりがねない：  
この人は、そう言うの？

確かに遠い記憶の中に存在するお母さんはとても優しくかった。け  
れど、今のお母さんは…

「悲しんで… くれるのかな、お母さん」

つい、不安が形となって口からこぼれ出てしまう。違う… こんな  
コトは考えたくなかった。

胸が痛い。苦しいよ。こんなコトに気付きたくはなかった。コレ  
がこの人の与える罰なの？

でも、なんでだろう。胸が痛い、でも暖かい。信じたい。その気持  
ちが身体の中で暴れ回る。

「間違いなく。其処の犬もまた、オマエの家族。同様に悲しむはずだ」  
『犬じゃないけどね。ま、コイツの言うとおりアタシはフェイトにな  
んかあったら悲しいよ』

「アルフ…」

そつとアルフの頭を撫でる。断言したこの人のご家族は、きつと素  
晴らしい人なのだろう。

少しだけ、興味がわいた。

「そう… かも知れませんが。貴方のご両親はどんな人なんですか？」

「さあな。……なんせ顔も、声も、名前も分からない。オマケに職業す  
らも不明と来たモンだ」

「……え？」

それはもはや、他人と呼ぶべき存在なのは… なのに、なんでこ  
の人はこんなに普通なの？

自棄になっているわけでもない。諦めている素振りでもなさそう  
だ。怒りの声色でもない。

まるでソレを “あるがままに受け入れている” かのよう… こ

の人にとっては当たり前なの？

「最近はメールも滞りがちだったけど、ふむ、そろそろ時期かも知れんな」

「あ、あの…」

「むっ？」

「……辛くは、ないんですか？ 寂しくは、ないんですか？」

思わず聞いてしまった。生まれた時から両親の顔も識ることがないままに放置をされている…

いや、ひよつとして組織にまつわる理由で家族の絆を引き裂かれてしまったのかもしれない。

そんな境遇にありながら、自身の家族に対し前向きな感情を抱き続けられる心中が知りたくて。

だが、この人は「何を言われてるのか分からない」といった表情で二度三度瞬きをしてから…

「ああ… そう言えばこの手の質問をされるのは二度目か。……正直理解に苦しむが」

合点がいったとばかりに一つ頷いた。やはり、なんでもないことのように。だから知りたい。

「教えて、くれますか？ 貴方が、平気な理由」

「既に充分過ぎるほどの愛は感じているからだ。受け取る側が感じていれば其れは真実だ」

「……………」

受け取る側が感じていれば… そう、そうだった。なんで私は少しでも疑ってしまったのか。

お母さんは、私を愛してくれていたのに。私の胸の中にある、確かな暖かい思い出なのに。

ごめんなさい、お母さん。ごめんなさい、アルフ。私、一人ぼっちなんかじゃなかったんだ。

「それに、オレは信じている」

「信じている？ 何を…」

「決まっている。悠人少年とご両親が再び暖かい笑顔で巡り会えるそ

の時を： だ」

不敵な笑みを浮かべ言い切る。其処には世界の全てを敵に回しても尚色褪せぬ輝きがあった。

うん： 今なら分かる。この人の言っていることが。絶望的な戦いなんかじゃ決してない。

胸の中に確かに愛が注がれた記憶があるなら、後は信じるだけ。疑う理由は、何処にもない。

「凄いです： 本当に」

「大したことじゃない。誰もが当たり前のようにやっているコトだ」

ああ、そうか。この人は「当たり前のコト」に取り組んでいるだけ。ただ、それだけなんだ。

だから気負うこともないし、負の感情に囚われることもない。いつも前向きにがんばれる。

ここ暫く心の中に巣食っていたモヤモヤが、この少しの会話の中で晴れ渡った気がしてくる。

でも、だからこそ： さっきのこの人の言葉は私にとって重みを増してくる。

「話を戻して悪いが。ご家族を悲しませることになっても： それでも、曲げられないのか？」

「はい、もうこの道を止まることはできませんから」

この人の心配を足蹴にするのは申し訳ないけれど、それでも笑顔で返す。止まれないから。

それに、始まりは「お母さんの望み」だったのかもしれないけれど： 今は違う。

この人が気付かせてくれた。コレはもう、私の望みなんだって。私の望んでいるコトなんだ。

頷いたふりをして立ち去るのがきつと賢いのだろう。けれど、この人には嘘をつきたくない。

だから、ハッキリと言おう。

「最初は、ソレを望んでいる人がいたからやっていることでした」  
「……………」

「けれど、今は違います。私は、私自身の意思でコレを続けます。……  
例え、悪いことでも」

暫しの沈黙。この人は何も返さない。……呆れられただろうか？  
失望させただろうか？

この人にそう思われてしまうのは、ちよつとだけ……ううん、かな  
り辛いかもしれない。

でも、大切なことに気付かせてくれたこの人だからこそ、私は嘘を  
つきたくないと思った。

「……えらいな」

困ったような笑顔で予想外の言葉を発してきた。え？ なにコレ  
？ 褒められた？ なんて？

分からない……分からないけれど、今自分の顔が真っ赤になってい  
るのが分かってしまう。

口元が緩むのが止められない。自分の身体がこんなに思い通りに  
ならないことがあるなんて。

「そ、その……なんで……」  
口をパクパクさせてそれだけ、なんとか絞り出す。

「今迄、誰かの為に頑張ってたんだらう？」  
「……………」コク、コク

言葉も忘れて首を上下に振る。それは、その、間違いない……です。  
「今後はその人のために、自分の意思で頑張ることを決めた。……え  
らいじゃないか」

「……………」

その、そういうのは、やめて欲しい。私のやっていることは悪いこ  
とだし。

「確かに褒められた行為ではない。オレも或いは力づくでも止める  
べきなんだらう」

「……………」

「しかし、『悪いコト』というだけでオマエの今迄の頑張りが否定さ  
れるのは見るに耐えん」

「……………」

「だから、世界が認めずともオレが認めよう。……よく頑張ったな、えらいぞ」

笑顔で堂々とそう言い切ってくれた。私が間違っていて止めるべきというコトは分かっている。

それでもこの人は、私の決意を見て聞いて感じ取ってくれて自分を主義を曲げてくれたのだ。

そんな人に褒められるのが、認められるのが、こんなに嬉しいことだったなんて思わなかった。

「オレにできることは、オマエを見なかったコトにしてその無事を祈るくらいだ」

「……………はい、ありがとうございます」

「それと忠告を。……常に周囲の目を気にすることだ。オレのようなヤツばかりじゃない」

「……………」

一気に冷水を浴びせられた気分になる。そう… そうだった。現地住民の目ばかりじゃない。

管理局や、あるいはソレに類する組織だって何処に紛れ込んでいるかも分からない状況だ。

この人の言っていることは、同時に私の脇の甘さの指摘とも言える。有難く受け取らないと。

真剣な表情で頷く私の様子に満足したのか彼も席を立つ。と思うと、そのままの姿勢で一言。

「ああ、そうそう。……オマエの不幸を悲しむ人間はもう一人いるぞ」

「……………えっ?」

「今ここにいる一人の少年… 桜庭悠人。彼もまた、悲しむ。くれぐれも無茶はするな」

「……………さくらば、ゆうと」

そう言い残してあの人は去っていった。貰った缶の飲み物の蓋を開ける。……珈琲だった。

私のバリアジャケットのように黒く、悲しみを煮詰めたように苦々

しい： そんな味だった。

他人事のように自分を指し、当然のように私の不幸を悲しむと言つてくれた人の： 名前。

それが： 桜庭悠人。さくらばゆうと

……

……

……

今、アルフは姿を隠しながら周囲の索敵を行ってくれてる。あの人の忠告に従つてのことだ。

私はというと、公園のベンチで休憩しながら目を閉じて、その感覚を鋭敏に尖らせている。

アルフの報告や： あるいはジュエルシードの反応を見落とさないための“待ち”の態勢だ。

「ツー」

来た！ ジュエルシードの反応： しかも結構大きい。まず間違はなく暴走体となっている。

しかもこの反応： ひよつとして、何らかの現地生物と接触してしまったのかもしれない。

急がないと。私が私の望みで戦うと決めたからこそ、誰かを巻き込んでしまうのは避けたい。

『フェイト！ 今、ジュエルシードの反応が！』

『うん、気付いてる！ アルフは引き続き詳細な場所の特定急いで！』  
念話でアルフの報告に返事を返しつつ、駆け出す！ 変身をした方が到着は早いのだろう。

けれど、私が目立った行動を取れば、今後の活動に支障を来す可能性が強くなってしまう。

焦る時こそ慎重に行動しないといけない。こんな当たり前のことすら先程まで忘れていた。

あの人との会話やベンチでの休憩で、気力・体力ともに満たされている。うん、大丈夫だ。

今の私のコンディションなら、例えばどんな暴走体が相手であろうと

も充分に対処できるはず。

さつき感じた反応に向かって急いでいると、ちょうどその方向から歩いてくる人影が見えた。

……いや、見た目に酷い怪我をしている。間違いなく、この人たちは「巻き込まれている」。

どうやって暴走体から逃げ切れたのかまでは分からないけれど、まずは話を聞いてみないと。

「あ、あの… すみませんっ!」

「……ん?」

「変なことを聞いてごめんなさい。その怪我… 何か恐ろしいモノに襲われたんですか?」

私の突然の言葉に、眼鏡の人から不審げな目つきを向けられる。……やっぱり変だったかな。

でも、今はこの人たちが貴重な情報源。ジュエルシードの被害を増やさないための大切な。

だから、人と話すのが苦手でもちゃんと話さないと。と、取り敢えず会話をがんばらないと。

「あの…?」

「大丈夫だ、桜庭様に任せて来たからな。それにこれくらいの怪我、なんてコトねえよ」

良かった。誰かが後を引き受けて… え? サクラバ、ってさつきあの人の? そんな!?

まさかさつきベンチを立った時には、既にジュエルシードの反応に気付いていたということ?

でも、あの人の力量は分からないけれどジュエルシードの暴走体は熟練の魔導師でも危険。

確認をしてみればやっぱり先程のあの人の。早く行かないと生命が危ないというコトにも…!

「彼ならこの先の神社にいるよ。……気になるというのなら、行ってみたらどうだい?」

「……っ!」

御礼の言葉を発するのもしどかしく、一つお辞儀を残すだけで、私は駆け出していった。

急がないと間に合わないかもしれないから。私はまだ、あの人に何も返せてないのだから。

先程からジュエルシードの反応が沈静化しているのも気がかりだ。一体何があつたのか：

長い長い石段を駆け上がる。走り通しで息が上がってきているが、諦める訳にはいかない。

「はあ、はあ…」

『あの… フェイト？』

『なに、アルフ？ 話しなら後に』

『いや、神社の境内以外に人の気配ないからさ… 此処なら変身していいと思うんだけど』

『…：アルフ、そういうことは早めにお問い合わせ』

自分でも驚くほどに冷たい声が出してしまった。アルフを怖がらせてしまったかもしれない。

…：後で謝ろう。ともあれ、ポケットから待機状態のバルディッシュを取り出し構える。

「お願い、バルディッシュ」

「yes sir」

自律思考可能なインテリジェントデバイス「バルディッシュ」を起動し、ジャケットを纏う。

そのまま飛行し、瞬時に神社に到着。状況の確認をすればあの人の姿はすぐに見つかった。

それと同時に信じられないような光景を目にして、硬直してしまふ。なんだろう、アレは…

周囲はまるで嵐にでも遭ったかのようにボロボロになっており、それは暴走体すらも同様。

にも関わらず、あの人は埃一つ身に浴びた様子はなく、静かに暴走体を見下ろしている。

暴走体は現住生物と融合を果たした危険な状態。もちろん、私で対

処できない敵ではない。

だが、「全く魔力を使わずにコレを押さえ込むことが出来るか？」と問われれば無理だろう。

けれど、状況からそう判断するしかない。この人は、無傷で物理攻撃のみで押さえ込んだ。

あるいは、何らかの魔法を使ったのかもしれない。物理攻撃のみというは無理がある。

だが、その痕跡を感じさせないほどに高度な隠蔽技術を用いて？そのほうが不自然だろう。

そんな一瞬の思考を見逃すあの人ではない。視線を巡らせ、あっさりとは見つかった。

ジュエルシードを集めないといけない。それは私の望みでもある。そのためにこの人と戦う？

……戦いたくはない。きつとこの人は凄い実力者なんだろう。

私とアルフの二人がかりであっても軽くないなせるくらいに。けど、ソレ以上に戦いたくない。

この人の望みを知ってしまったから。この人が、その当たり前の望みのために求めるならば。

「ちようど良かった。コレを任せられるか？」

そんな私の葛藤を嘲笑うかのように、この人はそんなコトを言って暴走体を顎で示してきた。

なんで？ 理由がわからない。だったら、何故この人はこんな危険な真似をたった一人で？

其れは、貴方の願いを叶える力だっけ持っている… そんなコトはきつと承知の上だろうに。

「でも、私で… いいんですか？ だって、それは貴方が」「いいんだ」

私の疑問の声は、半ばで止められる。全てを乗り越えたような、穏やかな決定権を持つ声。

私に疑問を差し挟むことすら許さない、厳しくも優しい… まるで天上人のようなそんな声。

私はそれに甘えてもいいんだらうか？ ううん、良い訳がない。そんな理由なんて、ない。

「でも…」

「大丈夫だ、問題ない」

「……どう、して」

尚も言い募る私の声を断ち切ってくる。それは、溢れる自信を感じさせる力強い声だった。

どうして？ ……なんで出会ったばかりの私なんかここまで良くしてくれるんだらう？

私は、そんなに立派な人間じゃない。ただ、自分のために頑張ろうというだけの浅ましい…

「オレが、オマエならば任せられると… そう判断した」

「私、なら…？」

「オマエがオマエを信じられないならそれで良い。ならば、オレが信じるオマエを信じろ」

其処には全てを吹き飛ばすような笑顔があつた。不安も、悩みも、恐怖すら吹き飛ばすような。

「私が信じる私じゃなくて… 貴方が信じる私、を…？」

「ああ、まずはそこからいいさ」

思わずオウム返しに言葉を繰り返してしまう。あの人は、其れに対して軽く頷いてくれた。

私を… 私なんかを褒めて、認めて、信じてくれたんだ。この人は。なら返事は決まってる。

「……は、はいッー」

ああ、きつとこの人は「そういう人」なんだ。暴走体と融合したジユエルシードを封印する。

私は一人ぼっちなんかじゃなかった。大切な家族… お母さんがいて、アルフがいるんだ。

それにこの人、桜庭悠人という「味方」もいてくれる。うん、私は一人じゃないよ。リニス。

ありがとう、お母さん。ありがとう、アルフ。ありがとう、バル

ドイツシュ。

そして、ありがとう… リニス。

私、とっても尊敬する人ができたんだよ。……だから、もっともつとがんばってみるね。

## 少年と夢電波たち

「……………」

ハロー、エブリワン。ごきげんよう、みんな。オレです。お久しぶり。え？　そうでもない？

なんか前回のオレの出番から軽く10日以上は経過した気がしてたが…　気のせいだったか。

ま、〃B〇STAR D!!〃や〃H〇NTER×H〇NTER〃の愛読者にとっては些細な問題か。きつとそうだ。

そんなオレはというと…　今、ゴリくんの後ろの席で絶賛睡眠中。勿論、授業中ですが何か？

しよ、しよがなないんや！　どんな環境でもやる気あれば勉強できるなんて所詮幻想だよ。

オマエ、一度視界の90%塞がれてみるよ…　仮に席を立ってみても黒板が見えないんだぞ？

やる気なんか湧いてくるはずもない。いや、マジで。オレを本気にさせたら大したもんだよ？

ク□高の神山君だって後半は全然勉強してなかったしね。彼はホントに無茶をしたと思うよ。

だからジョースター卿の奨めに従いオレも逆に考えた。学校で勉強できないなら学校外でだ！

休みの日に図書館で自習するしかあるまい。教科書を流し読みした限り極端に難しくはない。

分からないトコがあったら先生に聞こう。た…　多分イケるはずだ。いや、きつとイケる！

司書さんはブラック珈琲の差し入れを喜んでくれる貴重な人。今後も良い関係を築かないと。

そんなこんなで上記の理由を一つとしてオレは今、ゴリくんの後ろの席で絶賛睡眠中なのだ。

コレは充電期間というヤツだ。オレはまだ本気を出してないだけ。やればできる子なんだ。

……アカン、なんかますますダメな人の思考になってる気がする。まだ大丈夫。だ、だよね？

それに『冒険者たち』が待っている。『果てしない物語』は面白かった。コレにも期待大だ。

最近の図書館はラノベも置くつて言うし。そつち方面で期待してもいいかもな。楽しみだ。

いや、勉強もしますよ？　しますけれど、コレはそう、より効率的にするための気分転換で…

『ところで、神社でのアレは何だったんだろうね？』

『ああ…アレか。儀式がどうか言ってたが、まさか俺たちの先回りをしてるなんて』

『分かりません。危険なロストログアを使う、彼の目的とは一体…』

お、来た来た…　二つ目の理由が。いや、授業中寝てると電波が届くようになったっちゃってね。

オレはコレを『夢電波』って呼んでるけれど、正直どういう原理で話してるのか分からん。

ま、所詮は夢。どうせ整合性は明後日の方向に決まってる。ツツコんだらキリがないだろう。

最初は気のせいかと思つて黙ってたんだけど、どうも気のせいじゃないみたいなんだ。コレ。

あの火事の晩に助けを求める声に応えてくれた子たちみたいだし、改めて礼も言いたいし。

あと魔法の力を手に入れたつて設定らしいのだが、放つておくと戦闘の話しかしやがらねえ。

やれポジシヨニングがどうか、連携がどうかさ…　違うだろ？　もつとこう、あるだろ？

綺麗なこころの花を咲かせるため、園芸部とかファクション部とかでがんばっていくとか…

なんだつたら、本からたこ焼き好きの魔法使いが出てきて学校巻き込んで大騒ぎでもいいよ！

てか、奇跡も魔法もあった魔法少女ばりに夢も希望もない話などオ

レが認めん！一言物申す！

『そもそも、ジュエルシードというのは』

『おつす、オマエら。元気してる？ 朝飯何食った？（。3。）ノ  
オイッス！』

『……………』

『あ、顔文字の人だ。うん、元気ですよ。朝はカリカリベーコンの目玉  
焼きとサラダ！』

『俺は普通の白飯に味噌汁。それから玉子焼きにおろし醤油… だ  
な』

へえ、結構いいもの食べてるんだな。特に元気な少年の典型的和風  
な朝飯も心惹かれるよね！

うん、結構結構。朝は活力の源だよな。オレも朝は卵とマヨ垂らし  
て焼いた食パン食った。

割りと美味しかったし今後のレパトリーに加えようと思う。あ、  
そうだ、礼を言わないと。

『とにかくですね。ジュエルシードは危険な』

『あ、いつぞやの晩はありがとな？ お陰で火事の被害は最小限に抑  
えられたよ（∩・ω・∩）』

『……………』

『そんな… 気にしないでください。少しでも役に立てたなら良かつ  
たです』

『ああ… それに俺は大したコトはしてないさ。でも、そっちは無事  
だったのか？』

『スマホはお釈迦になったけれど、しゃあない。むしろソレで済んで  
ラッキー？（∩▽∩）／』

真っ先にこっちのコトを気にかけてくれるなんて、いい子たちだ  
なあ。教育がいいのだろう。

どうせ連絡先なんて全然登録されてないスマホがお亡くなりにな  
ったって、些細な問題だ。

ん？ 最近誰かをアドレス帳に追加したような… まあ、いいや。  
用があれば連絡するだろ。

弓弦先生ばりの一行矛盾を成し遂げたオレはこの時、盛大な死亡フラグを同時に立てていた。

何故か、そのフラグは今度の休日に回収される…。そんな気がしてならない。不思議だな。

けど心当りが無い。だからきつとこの悪寒は気のせいだろう。それより今は会話を楽しもう！

『で、ソイツが『暴徒鎮圧は防衛隊時代の任務で慣れてます！』って言うわけよ（「・ω・」）』

『え？ ええ!? 2000年間も戦争がなかった平和な惑星…。なんですよ？』

『うむ。ちなみにソイツは防衛隊員になったばかりの新人だった（／・ω・）／』

『そんな…。新人さんが暴徒鎮圧に慣れちゃうなんて。その人、嘘をついてたのかな？』

『果たしてどうかな？ スレてしまったオレにはまた違った側面が見えてくるが（「・ω・」）』

『違った側面だつて？ ということだ？ ただ単に嘘のボロが出ただけじゃないのか？』

やべえ…。この子たち、半端無くノリがいいぞ。今更冗談でしたなんて言えない雰囲気だぜ。

戯れに出したミ〇トさんの話題に食い付く食い付く。コレが演技だったら大したもんだよ。

ならばオレはもつとノツてみせるだけ！ 意地があんだよ、男の子には！ そうだろ、君島ア！

『それらの『事実』は彼にとつての『真実』を脅かす程ではなかった、としたら？（／・ω・）／』

『一体どういふことなんですか？ 真実も何もそもそも矛盾しかない気がします。』

『真実はいつも一つ…。なんて幻想だ。人の数だけ存在するモノとも言えるのに（「・ω・」）』

『人の数だけ…。でも！ そんなのおかしいよ！ 本当に大切な

ことって…』

『…ふむ、別の話をしようか。オマエたちは『正義』の反対ってなんだと思う?』(。ー。ゞ)』

『それは当然… 『悪』だろ?』

『ブブー! ハズレだZE (▽)( )』

『『ええっ!』』

…おお、結構反響が大きいな。ソレもそうか。正義と悪ってのは分かり易い構図だもんな。

それに、ここまで驚くってコトはこの子たちがそれだけ純真でいい子たちだってことだな。

ならば伝えよう。言葉は言葉に過ぎないが、受け止める側の可能性によつて結果は変化する。

こんな空虚なオレの借り物の言葉だが、この子たちならきつと上手に受け止めてくれるはず。

『『正義』ってのは、要するに人の従うべき道理のコトを言うゞ( | △  
— ) ゝ』

『人の従うべき…』

『道理… か。最近、意識しだした言葉だな』

『正義を行ううってコトは道理を守らせるってコトだ。それ自体は良いことだが… (○ | □ | ) ○』  
『……………』

生唾飲んで待ち構えられても大したこと言えないよ? 基本、黒○

博士の受け売りだしね。

彼女候補が死んだり死んだり脳味噌だけになったりする全年齢対象の野球バラエティだしね。

とはいえ、誰が吐いても言葉の価値は変わらないよな。精々踊つてやるか、道化らしくな。

『この道理ってのがクセモノでな。人の数だけ正解があると言って良いモノなんだ (○ | △ | ) ○』

『ど、どういうことですか?』

『例えば、そうだなあ… 女は守るべきか? それとも対等に扱うべ

きか？／（「」）／

『勿論、守るべき…』

『うん、対等に…』

『むっ!』

まったく、いい子たちだぜ。どっちも自分なりの正しさを貫き通そうとしているんだもんな。

この子たちだったら、オレなんかがどうこう言わなくてもいずれ自分で気付いてただろう。

既に答えは得ているようなもんだし、この子たちの「正しくある」とする心は本物だもんな。

『アヒヤヒヤ！ま、そういうワケで。正しいコトは一つじゃないかもかも？』（○◇）○』

『ややこしいよ、そんなの…』

『そうだな、ややこしいな。正義の反対が「もう一つの正義」だなんてよくある話さ（？ω？）ゞ』

『それじゃ困りますよ。何が正しいのか分からなくなつて…』

『だから、考えろつてこつた。考えて考えて考え抜いて…結論が出たら迷うな！く（？△？）ノ』

子供の時は目一杯物事にぶつかつて、思いっきり失敗するコトだ。今はオレも子供だけだな。

ソレを支えるために大人がいるんだしな。だけど、失敗するなら考えながら失敗すべきだ。

考えて、失敗して、反省して、学習して…そうやって、大人になればええやん。ええやん？

『でも、進んだ道が間違つてたら…』

む？。まだそんなコトを言うか… 喝ツ！ オマエらは悠人少年と違つて恵まれてるんだぞ？

『何のために親がいると思つてるんだ。どうしようもない時は助けてくれると思うぞ（？へ？○）』

『親、か…でも迷惑をかけるのは…』

『ソレに、何か忘れてないか？（\*？ー？\*）』

『えっ?』

『もし間違いをやろうとしている友達がいたら、オマエたちは放っておくのか?ゞ (≡▽≡)ノ』

『『あつ…』』

やれやれ： 全く、世話の焼ける夢電波たちだぜ。まあ、オレには友達いないんですけどね。

ゴリくんや眼鏡くんと友達になりたいのだが、彼らは彼らでなんか忙しそうだしな。残念。

べ、別に友達いなくなつて寂しくなんかないし： は？ 八神？  
ヤツはただの宿敵ライバルですが。

『つまり正義は人の数だけある。何が正義かは恐れず自分たちで探すんだ—— (?▽?) ノ彡☆』

『『うんッ！ (ハイッ!) (ああッ!)』』

だからミ〇トさんのあの言動の数々にも、深い事情や譲れない正義の心の発露があつたんだ。

そう思つておくことにしよう。アレを一々突つ込んでたら誰も幸せになれないし： (震え声)。

何の話してたっけ? ジュエルペットがどうか… ま、いいか。気にしてないみたいだし。

ふむ： オレの内容があるようで実はあんまない、ふわつとした話で邪魔して悪かつたかな。

明日からはあんまり邪魔をしないように自重を心掛けないとな。ついついノツちやつたぜ。

普段悠人少年のRロールプレイ Pしてるせいで、素の状態で話せると舞い上がっちゃうんだよね。反省。

まあ、フオーメーションがどうかそういう話をするよりは建設的だったかもしれないのだが。

とはいえ飽くまでオレは無関係な外様。楽しくても彼ら夢電波とは住んでいる世界が違う。

程々を心掛けながら今後も付き合っていけないとな… ん? そろそろ目が覚めそうな予感。

「……………」

目を覚ますと、夕焼けに染まった教室の姿が目飛び込んでくる。時刻は午後5時に程近い。

あのさ… 寝てたオレが悪いのは百も承知なんだけどさ、誰か声くらいかけてくれても…

茜色の教室の中で一人そっと涙を流すと… オレは自分の鞆を取って家路につくことにした。

……………

……

…

またオレはタイムセールに突入する羽目になってしまった。

アパーム！ 弾！ 弾持ってこーいッ！

ホント、タイムセールは地獄だぜ！ フウハハハハアア！！

クソ、悠人少年の貧弱ボディを無礼<sup>なめ</sup>るなよ！ そう簡単にやられはせんよ！

主婦の力くらい、オレ一つで押し返してみせるッ！ 悠人少年は伊達じゃないッ！！

おお、ゆうとよ。しんでしまうとはいなかものめ。

王様の声が聞こえた気がした。よりによってエジンベアバージョンですか。

## 少年と誕生日

——カリカリ：

うーん、やはり図書館での勉強は捗るな。休日故、人が若干多いのが難点だが些細な問題だ。

悠人少年がご両親と暮らしていればゼミをお願いすることも考えていたが、大丈夫そうだ。

個人的に「あ！ これゼミでやったトコロだ！」というのは是非やりたかった。少し残念だ。

え？ ゼミって何のゼミかって？ そりやおめえ、アブラゼミじゃね？ ミンミンゼミかも。

まあ、何にせよ良かった。コレでゴリくんの背後の席でも授業になんとかついてけそうだけ。

流石にクロハラ(仮)さんら三人娘に囲まれた席はアウトだったが、無法は本意じゃない。

オレ一人の我儘で「席を交換させる」など本来あつてはならんコトなのだ。注意しなければな。

そもそもゴリくんと眼鏡くんらには先日の神社のコトと言い、何かと世話になっているのだ。

コレ以上オレの我儘に付き合わせるのも申し訳ない。対等な関係こそ友情構築の第一歩だ。

だが、さっさと席替えはして欲しい。割と切実に。ホント頼みます、結構美人な担任の先生。

「……………」

ふーむ… 朝食も取らずに開館前に詰めかけてたのだが、もう10時か。なんか食べるかな？

司書さんはブラック珈琲渡せば8時に一緒に入れてくれる。これぞ賄賂の成果ってヤツだ。

どうせお昼時に喫茶店に入っても混んでるだろう。ココは少し時間をずらすのが賢い行動か。

筆記用具と教科書類を纏め、オレは席を立つ。既に『冒険者たち』は

貸出手続き完了済みだ。

先に誰かに借りられたりしたらガツカリ感が半端ないもんな。手早く済ませておくに限る。

ああ、そうそう。喫茶店も最近新人さんの緊張が取れてきた。店長さんが頑張ったのだろう。

周りの人たちも徐々に変わっていつてる気がする。オレもきつと何か変わっているのだろう。

だけど、このままでいいのだろうか？ 悠人少年のボディを間借りしてるに過ぎないのに。

……いかにいかに、どうしようもないコトを考えても仕方ないな。前向きに頑張っていこう。

「きやつ!？」

「おっと、失礼」

考え事をしながら歩いていると、ちょうど図書館に向かっていた誰かとぶつかりそうになる。

この特徴的なメタリックのボディ… 即座に兵器に転用可能な危険な車椅子を操る少女は…

我々はこの少女を知っている！ いや！ この眼差しとこの車椅子の操縦テクを知っている！

「キミは、八神はやてだね？」

「おう、アンタか。ちよおツラ貸せや」

あ、あれ？ ココは「そういうキミは、桜庭悠人」って返す場面ではないの？ ……八神さん？

あの、貴女はもつとマイルドな京都弁が似合う柔らかい雰囲気の子の子だったはずですよ。

そんなドギツイ河内弁で人を殺せそうな視線で威嚇してくる子じゃなかった！ 何があった！

「落ち着け。何があった」

「ああん？ 分からんか？」

「うむ、とんと」

「……アドレス交換してから連絡一つ寄越さん上に、連絡しても繋が

らん。大概にしいや?」

「…………。ああ、なるほど(ぼむ)。って、悪いのオレじゃん。やっべ、すっかり忘れてたわ。」

スマホがお釈迦になった時に、想定より被害が少なくて良かったなあと安心しきつてたぜ。」

まあまあ… たかだか一週間くらい音信不通だっただけじゃないか。あんまカツカするなよ?」

「あ?」

「いや、なにも」

「…………こええ。めっちゃこええ。小粋なジョークなんか言える雰囲気じゃねえ。死んでしまう。」

常日頃からクロハラ(仮)さんに追い回されてるオレをして思わずビビってしまう威圧感。」

今、コイツを刺激することはオレに生命に関わる問題だ。何とか穏便な解決を試みないとな。」

「ソレについては悪かった。止むに止まれぬ事情があつたのだ」

「…………なんやねん、その事情って」

「無論その説明もしよう… だが、ココで立ち話もなんだ。場所を移そう」

そのまま目線で、オレの進行方向の喫茶店を示す。…………八神も視線を追って理解したようだ。」

「喫茶店? せやけど… ちよ、勝手に動かすなあ!」

「安心しろ、オレの奢りだ」

「…………はあ、奢るしかないよな。あんまり無駄遣いしたくないがスイーツくらいは献上せんと。」

まだゴネようとする八神の車椅子の持ち手を取って、さっさと喫茶店に向かうことにした。」

甘いモノでご機嫌取って誤魔化すしかないか。ったく… コイツはハードなミッションだぜ!」

「いらっしやいませ。お席のご案内をさせていただきます」

「はい、よろしくお願いします」

「……むう」

なんか半分オレ専用になっているいつものテーブル席に案内される。今はコレが都合が良い。

奥のほうで隔離されてるので、万が一にも八神が暴れだしても多少は隠蔽が効くのかな。

翠屋もいいんだが、あそこは客の入りが多過ぎて座っても中々落ち着けない欠点もあるしな。

「本日はブレンド珈琲がサービスとなっております…」

「いや結構。アップルシナモンティー2つと、彼女にオススメのパフェ1つで」

何が悲しくてプライベートでまで珈琲を飲まんとあかんのや！

答えは「絶対にノウウ！」だ。

「かしこまりました。アップルシナモンティー2つ、季節のフルーツパフェ1つ承りました」

「はい、お願いします」

「ちよ、ええ!?!」

わたわたメニューを取ろうとしている八神を尻目にさっさと注文をすませた。悪いな、八神。

オマエが万が一にも珈琲を注文しようモノなら、オレも吐き気を我慢する自信がなかった。

どうせオレが（悠人少年の残してくれた金で）奢るコトになったのだし、多少のことは許せ。

「でも、流石にパフェなんて悪いわ」

「嫌いだったか?」

「ううん、嫌いやないけど…」

「ならば気にするな。オレも気にしない。ドンドン食べ」

「もう、流石にドンドン食べへんよ」

クツクツクツ、八神め。甘いモノをたらふく食べて怒りの原因など全て忘れてしまおうが良い。

互いに笑顔を見せて和やかな空気が流れる。よしよし、ミッションはいい感じに遂行中だ。



「ご注文のアップルシナモンティーと季節のフルーツパフェでございます」

ス○ツガーさんかよ！ 早い！ 早過ぎるよ、畜生！ もうちよつとだけ考える時間くれよ!?

「お、きたできたで。ん、美味しそうやなあ♪」

「ドンドン食って大きくなれよ」

「おう、ちやつちやつと話せや」

「アツハイ」

仕方あるまい： プランBに移行する！ 婉曲的に伝えることで煙に巻いて誤魔化すのだッ！

「盗まれた過去を探してたんだ」

「うん： うん？」

まあ、ホントはただの記憶喪失だが。盗まれた可能性もほんの少しあると思う。1%くらい。

「オレは彷徨ったんだ。見知らぬ街を」

「おい」

まあ、今は海鳴市って知ってるんだけどね。望めば大抵のモノが手に入る都会っていいよね。

「炎のにおいが染み付いて、むせて： こうなった」 コトツ：

「なんやコレ」

オマエさあ、〃なんやコレ〃とはなんだ。〃なんやコレ〃とは。オレの『スマホくん・壊』だよ。

ちよつとフレームがひしゃげてアレな風体を晒してるけれど、どつからどう見てもスマホ：

に見えなくもないだろうが、オイ。こういうのも味があつていいんだよ。存在忘れてたけど。

「スマホ： だつたモノだ」

「要するに火事に巻き込まれてぶつ壊れたんか」

「……うむ」

正直オレ自身にとつても意味不明なさつき戯言で理解するとは、コイツ： やはり天才か。

って、あかんやん。煙に巻けてないやん。なんで正確に真実を掴みとるんだよ、コイツは。

だが最後の砦… 火事の原因についてだけは、断固としてコイツに悟らせるわけにはいかん！

「まあ、火事やったらしゃあないか。でも、せやったら原因はなんやったん？」

「さあな。そんな昔のことは忘れたさ」

「あ、ひよっとして私に言われたこと気にして料理で失敗した… とか」

「ゴフツ!？」

……もうやだ、コイツ。エスパーなの？ 人類の革新なの？ ソンナノ、ミトメタクナイ！

NT（ニュータイプ）って言うかNDK（ねえどんな気持ち？）だよ。酷い死体蹴りだよ。

思わず机に突っ伏すオレを誰が責められるだろうか？ パトラツシユ、ボクはもう疲れたよ。

「あ、いや、その… あんな！ だ、誰だって失敗はあると思うんよ!」  
「……………」

なんで小学校低学年のおにやのこにオレは今、必死にフォローされてんだよ。痛い、痛いよ。

心が痛すぎるよ。可能なら今すぐ悠人少年にバトンタッチしたいよ。さっさと降臨しろよ。

……うん、流星にこの状況でバトンタッチは酷すぎるよな。辛くても戦わなくちゃな、現実と。

「私かて料理覚えたての頃は色々失敗もしたし… ちっとも気にするこことやないで。な？」

「火事も？」

「いや、流星に火事はないわあ… あっ」

「……………」

やっぱり現実ってクソゲーだよな？ オレも心からそう思う。神にいさまの言葉は至言だね。

あとさつきから八神が的確に急所を狙ってる気がして仕方ない。  
ヒットマンかよ、コイツ。

オレに死ぬ気弾を使うつもりか？ いいのか、そんなことして。死ぬよ？ 死ぬ気で死ぬよ？

「はあ… 気遣いは無用だ。言い訳のしようもなくオレの失態だ。……笑いたければ笑え」

「いや、さすがに笑えんて…」

あんまり深刻そうな顔されるより、ここまで来ればいつそ笑われる方が気が楽なんだがな。

まあ、コイツもご両親がいないし学校行ってないしでコミュニケーションは不足がちだろう。

気遣いが不器用になってしまうのもしょうがない。不器用さではオレも人のこと言えんし。

「ま、そういう事情で連絡ができなかった。……すまなかったな」

「あ、うん」

「ソレよりさつきとパフエを食え。溶けてるぞ？ 勿体無い」

「わ！ つとと。はよ食べんと…」

「急ぎ過ぎても頭痛になる。パフエも逃げやしないから、ゆっくり食え」

「……ん」

モキュモキュ食い始めたコイツを眺め、ふと考える。奢った側のオレが何を得ただろうかと。

スマホくんの遺体は晒され、火事の原因も特定された。……何一つオレの得たものがねえ！

熱くなる目頭をそっと抑えながら、オレは冷め始めたアップルシナモンティーに口を付けた。

……

……

…

アレから八神に案内されて（車椅子押したのオレだけど）、街の携帯ショップへと向かった。

なんか新しいスマホを手に入れるために街に出る流れになってしまったのだ。何故だろう。

開店までの時間潰しとして朝の図書館で適当な本を見繕っていた…… という話になっていた。

面倒なので八神の話に合わせてたのだが、それが原因か。まあ、あつて困るもんでもないし。

「お〜！ 暫く見ないうちに色々出来てるやん♪」  
「……………」

女の子つてガラケー好きだなあ。オレは家のパソコン使えないから必然的にスマホ一択だが。

「へえ…… バースデー割引つてのもあるんかあ」  
「ほう」

まあ、悠人少年の誕生日すら知らんオレにとっては心底どうでもいい情報だ。無関係無関係。

「私の誕生日はなあ、6月の4日やねん」  
「そうか」

「にひひ… プレゼント、期待してるで？」  
「え？ なんで？」

「あん？」  
「任せろ。楽しみにしているといい」

脅しに屈した弱いオレを叱ってくれ… ナタク。でもなんか八神さん怖いし、仕方ないよね？

小学校低学年の女の子の誕生日プレゼントねえ… 何を上げれば喜ぶんだろう。花束とか？

う〜ん… コイツの場合そのまま調理して上手に食べちやいそうなのがするが。別にいいけど。

「そういえばアンタの誕生日って？」  
「オレ？ オレの誕生日か…」

先程も言ったとおりオレは悠人少年の誕生日を知らない。故にコレについて答えようがない。

屋敷の検索ではその情報は見付からなかったしな。ココはオレの

誕生日で誤魔化そうかね。

オレの誕生日：… まあ、普通に考えてオレが悠人少年になった日でもいいだろう。適当だけど。

「……3月16日？」

「なんで疑問形なん？」

「いや、なんとなく」

「ま、ええか。しかし残念やなあ… もう過ぎてるやん。祝えるんは、ほとんど一年先かあ」

「ん？ オレの誕生日祝いは別に要らないぞ」

「ちよ、しらけること言わんといてえな。それとも… その、迷惑やった？」

「別に迷惑ではないが…」

「ほんならええやん。決まり！ な？」

強引に押し切られてしまう。多分その頃には悠人少年もこのボデイに戻ってると思うんだが。

まあ、いいか。コイツ地味にスペック高いし、その頃には沢山の友達に囲まれてるだろう。

こんな携帯ショップで世間話混じりに聞いたオレの誕生日なんぞ、一年先まで覚えていまい。

つーか万が一、億が一、悠人少年が戻れなかったとしてもむしろオレの方が忘れてそうだし。

「ありがとうございましたー」

結局スマホは、修理交換の範囲で新品の別物を金額一部負担での提供という形で落ち着いた。

未成年だから契約とか難しいかと思っていたが保証期間内ということ融通が効いたのだ。

あと八神が関西弁で逞しく交渉していた。頼もしいヤツだ。パフェを奢った甲斐があったぜ。

アドレスを交換してお互いに別れる。八神はというと今日は午後から病院で診察の日らしい。

一応、仮にも女の子だし送って行くこうかと尋ねたのだが一人で行け

るから大丈夫とのこと。

送るぐらいだったら構わんが、まあ、病人としての自分を見せたくない気持ちもあるかもな。

「…………お」

帰り途中のショーウィンドウにて、オレは赤く輝くヤツ… シオン  
ジユとの邂逅を果たした。

誕生日プレゼント… ガン〇ラでいいんじゃない？ この造形美、八  
神も大興奮間違いなしだぜ！

## 少年とキャッチボール

みなさん、おはようございます。ゴールデンウィーク真っ只中ですね。此方はまだ先ですが。

オレはと言うと、今、荒縄が縛られた丸太を抱えて飛んでおります。この広く青い大空を。

別に桃○白ごっこに目覚めた訳ではありません。むしろテイ○レインタオツーの方が好きです。

コレには友情を指したオレの悲しい事情があったのです。……ああ、地面が近付いてきた。

って、少年がこっちに背を向けて立ってらっしゃる？ ちよ、待て、落下直撃コースやん！

あばばばばばば……こんなコトで怪我なんてさせるわけにはいかん！ 死ぬ気で逸らすツ！

「其処の少年、避ける！ うおおおおおおおおおおおおツ!!」  
「え？ うわあ!？」

さて、コトの結末について語るのは後回しにして、何故こうなったかを説明させて頂きたい。

……  
……

「さて、八神の誕生日プレゼントか……どうしたものかな」

アレから日を跨いで、候補は幾つかに絞られた。まだ先のコトとはいえ準備は大切だろう。

シ○ンジュはカッコいいのだが、ここは原典に忠実にサ○ビーやナイ○ンゲールもどうか？

特にナイ○ンゲールの優美さは女性受けをし易いのではないか？ キュ○レイも鉄板だろう。

いやいや、ビ○ドファイターとしてはフェ○ーチェも捨て難い。あの気品は素晴らしいよね。

まあ、そもそも原型であるウィ○グガン○ムのカッコ良さが異常な

のだ。異論は認めるが。

みんなはノーマルのゼ□派？ それともゼ□カス派？ オレは断然ノーマルだなあ。好みで。

いつそガン○ラに縛られずにス○ープドッグなんてどうだろうか。炎のにおいが染み付くぜ！

……いやいや、やめておこう。別にトラウマになったワケじゃないが火事はもう勘弁だぜ。

火事を連想させるものは遠ざけるべきか。あ、でもブルー○イツ シュドッグならアリじゃね？

或いは戦艦でリーン○ースJr？ ……発売されてねえよ。アー クエン○エルで我慢しろよ。

「……む？」

そんなコトを考えながら歩いていると、河川敷にいるゴリくと眼鏡くんの二人を発見した。

荒縄を巻きつけた丸太に複数のボールを投げる眼鏡くん。それぞれ緩急をつけ同時に命中。

かと思えば、角度や回転を調整していたのか、一步も動かない眼鏡くんの手元に帰ってくる。

なんか分からないけれど凄いことやってる気がする！ キミはこのNARUTOなのか！

奥のほうではサッカーもやってるみたいだし、海鳴市はスポーツが盛んなんだなあ。きつと。

ややあつて眼鏡くんの投球練習(?)が終わり、ゴリくんとのかやつチボールを開始した。

満更知らない仲でもない。スルーするものもどうかと思い、オレは河川敷に降りて挨拶をする。

「おはよう、二人とも。……朝から精が出るな」

「あ、桜庭様じゃねえですか！」

「おはようございます、桜庭さん」

二人はオレの姿を認めると元気に挨拶を交わしてくれる。なんかイイよね、こういうのって。

やっぱり友達つてのは量じゃなくて質だよ！ ……まあ、まだ友達じゃないんですけどね。

いっけね、オレのせいで二人の友情のキャッチボールを潰してしまったか。すまぬ、すまぬ。

「ああ、そのままオレを気にせず続けてくれ」

「はい。それじゃ失礼して…」

キャッチボールを再開する二人。ソレを眺めるオレ。さて、さつき  
の思考を続きをするかね。

……ふむ。いつその二人に、八神の誕生日プレゼントの件を相談するのだろうか？

意外と悪くないかもしれない。プラモはとかく好みが分かれる。  
第三者の意見も重要だろう。

「そのまま聞いて欲しいのだが… 良かったら相談に乗って貰えない  
だろうか」

「へえ… 相談、ですかい？」

「ああ。一ヶ月半ほど先に、ある知り合いに誕生日の祝いを送ること  
になったのだが」

「なるほど… プレゼント選びについて、ですかね？」

「うむ、そういうことだ」

相談から発生した悩みの共有は、お互いの仲をより親密な関係に導  
いてくれるとも言うしね！

まあ、そういうのがなかったとしてもこの相談に乗って貰うことに  
マイナスはないだろう。

プラモってコトは決まってるんだけどねえ… どうにもそつから  
先が迷いに迷ってしまつて。

「ちなみにその相手は？ ああ、性別とかプロフィール的な意味で  
すが」

「知り合いの女性だ。学校外での関係なので詳しくは知らないが、年  
は同年代くらいかな」

「へえ… 彼女ですかい？」

「そういう関係ではないと断言しよう」

ないわー。まったくもってないわー。まあ、そうやってすぐくつ  
けたがるのは年相応かね。

コレが修学旅行とかだったら、槍玉に挙げられてネタを提供するの  
も吝かではなかったが。

色恋沙汰とかそういうのを意識しだすのはもうちよい後からでも  
充分つしよ。プークスクス。

「ああ、そういえばゴリラ。キミの趣味なんかはどうだい？」

「おお、そういえばアレだったらいいかもな。嬉しいぜ、桜庭様のお役  
に立てるんならな！」

「ほう…」

ゴリくん、キミもビ○ドファイターだったのか。良かろう、ならば  
語り明かそうではないか！

さあ、好きなプラモを選べ！ オレはソレを参考にして、プレゼン  
トにしようではないか。

ゲル○ゲーか？ ザム○ザーか？ どっちも出てねえよ！ 種つ  
てプラモの出来はいいのに！

「桜庭様、だったら『編みぐるみ』なんてどうですかね？」

「……………」

編みぐるみい？ ……ゴリくんが？ ちよ、ちよつと待ってくれ。  
表情筋が全力稼働中だよ。

……まあ、その、気持ちはありがたいんだけどちよつとね？ オレ  
も男の子だしさ（笑）。

折角の提案に対して悪いが、お断りを入れてプラモの中から選んで  
貰うとしようじゃないか。

「ゴリくん、悪いが」

「しかしゴリラ、随分とイメージと違う趣味だが相変わらず堂々とし  
ているね？」

「おうよ！ この趣味は俺の誇りよ。笑ったりバカにしたりするヤ  
ツあボコボコだぜツ！」

「……………」

オレの表情が消える。あかん（白目）。笑ったら生命はねえ… そ

れだけは分かってしまった。

「ははっ、なくんてな！ ……おっと、桜庭様。何か言いましたかい？」

「いや何。素晴らしい提案をありがとう、悪いね… と言ったのさ」

「気にせんでくださいよ！ 一ヶ月半もあるなら時間は充分でさあ。みっちり教えますよ！」

「おいおい、ゴリラ。桜庭さんが寛大だからって、あまり調子に乗るなよ？ ははは」

しかもオレがやるコトは決定かよ！ 和気藹々わきあいあいと笑い出す二人の空気に、取り残されるオレ。

決して納得したわけではないが今断ったら死んでしまう。コレは受けるしかない（震え声）。

しかし、八神に編みぐるみを渡して大丈夫か？ 上手に調理して食べてしまわないだろうか？

まあ、「食べられないからな。絶対に食べるなよ。絶対だからな」って注意すれば大丈夫か。

「ん、ありがとう。…よろしく指導を頼むよ、先生」

「へへっ、任せてくださいませえ！」

「おや、責任重大だな？ 先生」

「おいコラ眼鏡、からかうんじゃねえ！」

友達になる前に弟子になってしまった。何言ってるか分からねーと思うがオレも分からねえ。

まあ、なんだかんだ相手してくれるのは嬉しいな。先日の神社でもだいぶ無理を言ったし。

オレの想定とは違う結果になってしまったが、善意に対してはお礼を言っておくべきだろう。

「先日の神社での一件でも無理をさせたな… そのコトについても、今、改めて礼を言おう」

「当然のコトをしたままでさあ！ したいようにやっただけなのに礼なんてむず痒いっすよ」

「ええ、ゴリラの言うとおり。けど、あの『犬』の相手は大変でした。

「暴れませんでしたか？」

「ああ、ダニー（仮）のコトか。良き相棒になる予定だったが後から持って行かれた…。あの。」

「ふむ…。特段何も。こちらが何かをするまでもなく…。後から持って行かれたからな」

「あ…。それは余計なコトをしてしまったかもしれない」

「いえ、あの女性に神社のコトを教えたのは僕だったので。まさかそんなコトになるなんて」

「なんと…。あの飼い主の女性にダニー（仮）のコトを教えてあげたのは眼鏡くんだったのか。」

「ということは、ゴリくと眼鏡くんは飼い主が来るまでの間、その足止めをしていたのか！」

「彼女はその連絡を受けて急ぎ駆けつけて、自分のペットと再会し連れ帰るコトができた、と。」

「そう、オレが早とちりしてテイクアウトしちゃう前にね。だから彼らは良いことをしたんだ。」

「むしろ事情も知らずに、「ココはオレが預かる（キリツ）」なんて言ったオレが恥ずかしい。」

「飼い主の人が何故本殿から出てきたかは謎だが、盛大な方向音痴の可能性が微レ存だろう。」

「公園で出会った金髪の少女がCGを使いこなす昨今。些細なコトを気にしてはいかんのだよ。」

「フツ、考え過ぎだ。キミの判断は間違っていないさ」

「そう言って頂けると…。っと」

「こちらへの対応に注力してくれるあまり、キャッチボールへの注意が散漫になったのだろう。」

「眼鏡くんは放られたボールを弾いてしまった。オレの言葉が妨げになったなら申し訳ない。」

「足元にボールが転がってくる…。オレはソレを拾い上げつつ、考えていた言葉を彼らに放つ。」

「キミたち… 一つ、オレともやってみないか？」

「!?」

そう、キャッチボールを！ 友情構築の第一歩だ。叶うことならばオレも是非混ぜて欲しい。

だが場が静まり返ってしもうた。や、やべえ… 何かやつちやつたかオレ。間違えたか!?

縫るように二人を見ても… 分からん。オレは心で対話できるイノベイターじゃなかったか。

「貴方と… ですか？」

おっと、反応があつたぜ。キチンと会話のキャッチボールをしてくれる眼鏡くんは優しいな。

あとはオレたち3人でリアルなキャッチボールをするだけだ！  
ヘイカモン、イエーツス！

「わざわざ聞き返すほどのことかね？ 何… そう難しいことを聞いた訳じゃあない」

「……………」ゴクツ…

あ、原因はオレだったりするのかな？ 貧弱ボディな悠人少年を心配し躊躇ためらったのかもしれない。

だとしたら… え？ いきなりコイツ何言ってるの？” ってなっちやつても仕方ないだろう。

割りと唐突な頼み方だったコトもあるし。別にそんなに難しく考えなくても構わないのだが。

とはいえ、まずは落ち着かなくちゃあ返事も出せないよな。K O O Lになるんだ、二人とも。

待て待て、K O O Lだったら雛〇沢症候群の末期症状だろ。むしろオレがC O O Lになれよ。

オレが落ち着かないと彼らも落ち着けない。ココは例え話を交えてリラックスして貰うに限る。

「ッシャーペンの芯を1本、ポキッと折るような楽な気持ちで” 答えてくれ」

「ハァ… ハァ…!」

うん、緊張するなあ。なんか眼鏡くんは真剣に見詰めてくるし。そんなに不躰だったかな？

あ、ゴリくん息が上がってるじゃないか！ ひよつとして疲れて休憩が欲しかったのかも。

彼らは優しいから断り難い質問をしちゃったのかもしれない。気が急いでたなあ、反省しよう。

「受けても構わないなら『YES』、気が進まないならば『NO』と…ほんの一言返すだけだ」

「……………」

「……………どうか、答えては貰えないだろうか？」

そう言っただけ。時間にして数分？ 数十秒？ 或いはほんの一瞬の間だったかもしれない。

「……………僕の答えは、『YES』です。お受けしましょう」「め、眼鏡!？」

「いいんだ、ゴリラ。ちょうど良い機会だ… せめて『その背中』だけでも見ておきたい」

うん… うん？ なんかおかしな雰囲気になっっているような？ 受けてはくれるみたいだが。

『背中を見る』ってコトは、ひとまず、眼鏡くんは最初のうちは見学に回るってコトかな？

つまり、トップバッターはゴリくんか。ゴリくんはボールを放り投げ、丸太の前に移動する。

「……………さあ、来い」

おっしゃー！ ばっちこーい！ ……あ、でもグローブは持ってきてないから手加減してね？

「分かりやした。桜庭様、俺も覚悟を決めましたぜ」

お、おう… 覚悟ってキャッチボールに必要な物だっただろうか？ あ、休憩欲しかったの？

『もしそうならば…』と声をかけようとしたオレは、眼前のありえない光景に硬直してしまう。

目を閉じ深呼吸中の彼の周囲の空間が、少し歪んでいるように見え

るのは気のせいですよね？

おい誰だ、キャッチボールは友情構築の第一歩なんて抜かしたヤツ。死ぬだろ、主にオレが。

ボコボコに… は出来ないから、ボコボコに論破するよ？ つい最近、八神に負けたけど。

アレはオレの本当の実力ではない。…そう、オレは後2回くらい変身を残している気がする。

「コオオオ…」

…ちよつと待つて。下らないコト考えてる隙に、ゴリくんが世紀末っぽい呼吸し始めたよ。

こういうのはコマンド『説得』で全力回避。…最近のスパ□ボつてフラグ管理複雑よね？

出撃数とか撃墜数とかさ… 好きなヤツを好きなように動かさせたのがいいんじゃないのか？

あ、でも複雑極まりないフラグ管理を乗り越えたIFルートは感動しました。無印も二次も。

三次Zとかもう出てるかな？ まだキ○コ強い？ ル○ーシユはどうですか？（現実逃避）

さて、気分もだいぶ落ち着いてきた。そろそろ厳しくて辛い現実に立ち向かおうじゃないか。

覚悟しろ。八神に敗れたとはいえオレの得意分野は依然、屁理屈。ふわっと誤魔化してくれる！

「ゴリくん」

「お待たせしやした。大丈夫です。もう、止まりません。もう… 止まれません」

はい、死んだ！ 今死んだよ、オレ！ 既にゴリくんは殺る気満々で覚悟完了でしたとさあ！

下らないコト考えて現実逃避してた隙に、ゴリくん止まれなくなつてるYO！（※二度目）

こうなったら眼鏡くんに頼るしかねえ！ オレの中で穏健派にイメージされてる彼ならばッ！

「眼鏡くん」

「ご安心ください、無粋な横槍は入れさせません。どうぞご存分に……」  
ダメだ！ この眼鏡ダメだ！ 前門の虎、後門の狼。……もう、覚悟を決めるしかないのか？

「……では、行きやす」

「……」

「100%中の100%」と言わんばかりに膨れ上がったゴリくんの筋肉を見て…… 理解した。

オレは、ココで死ぬのだと。かくなる上は、ジタバタ見苦しく足掻くのはやめて心静かに……

いや、待て待て。百兆歩譲ってオレが死ぬのはいいとしよう。だが、悠人少年を巻き込むな。

そうとも、ここで諦めてたまるか！ 負けられないんだ…… オレはやればできる子だった筈！

ただかボール一つ…… 悠人少年で押し返してみせる！ 悠人少年は伊達じゃないはずだ。

タイムセールの主婦にも押し負ける貧弱なボデイだが、所詮はキャッチボール。多分大丈夫！

「うおおおおおおおおおおお!!!」

やつぱ無理い！ 思わず投球モーションの段階で背後の丸太の影に隠れる。がちりガードだ。

考えてみればマトモに付き合う必要などなかったのだ。こうしてガードでまずはやり過ぎす。

しかる後に、ちよつと体調崩したとかなんとか言っただけだ。流石オレ、小賢しいぜ！

——ゴツ…… パアンツ！

よし、荒縄丸太くん一号はボールを見事受け止めてくれた。何処も痛くないぞ、素晴らしい。

身体が軽い…… こんな気持ちで戦うの初めて。もう何も怖くない。天にも昇る気持ちだよ。

あれ？ なんかマジで天に昇ってね？ おかしくない？ なんで

重力から解放されてるのよ？

「ツ！ モーションから軌道を予測し、丸太を盾に使いつつ自ら後方に跳躍し衝撃を殺すとは……」

「なんてこった。流石は桜庭様だぜ……」

いや、違うからね？ 単にボールがホップして、オレごと丸太を吹き飛ばしただけだからね？

重力に反逆しまくるゴリくんの投球がおかしいだけだからね？

オレ逃げただけだからね？

あつはははははははは…… うん、視界がグルグル回ってるね。うふふ、アイキャンフラ〜イ！

………

………

………

って、アホなコト考えている場合じゃないな。流石にこの状況で三度目の失敗は犯さないぜ。

少年はこちらに気付き振り返るも、硬直しているようだ。そりやそうだよ。仕方ないね！

だったらオレが何とかするしかない。この少年を守るために！

悠人ⅡRⅡ桜庭、介入する！

「うおおおおおおおおおおお！ トランザムツ!!」

オレはトランザムを発動し、少年に突撃…… 彼を突き飛ばすコトで丸太の破片から守り抜く。

いや、丸太蹴ってその反動で突き飛ばしただけですけど。トランザム（笑）ですけどね。

目論見は辛くも成功し、蹴り飛ばすことでバラバラになった丸太の破片が後方に飛び散った。

いたた…… 何とか受け身は取れたが。少年は見たところ無事なようだった。不幸中の幸いか。

「だ、大丈夫か！」

「一体何が起こったんだ？」

うむ…… どうやらさつき遠目に見えていたサッカーの試合に乱入

する形になってしまったか。

試合は中断となり、人が集まってくる。オレ、すげえ迷惑な存在だな。消えてしまいたい。

一方のチームの監督らしき人には見覚えがあった。確か翠屋のウェイターさんだ。てコトは…

「……………」

「オマエ、桜庭。今、空を飛んで…」

……………うん、いました。オレをじっと見詰める三人娘にユニフォーム姿の名無しの少年たちが。

なんかすっげえ睨まれてますね。仕方ないね。今日はホントに全面的にオレが悪いのだし。

膝立ちの姿勢だったオレは、そのままDOG☆GE☆ZAをする。伏してお詫び申し上げます。

「この度は自分のせいでご迷惑をお掛けして、誠に申し訳ありませんでした」

「えっ、オイ… やめろ、オマエのそんな姿は…」

名無し少年がなんか言ってるが誰が悪いと言えばオレが悪い。それはもう言い訳無用な程に。

そんなオレが見せられる誠意、それは土下座以外にあるだろうか？

いや、ない（反語）。

だからオレに出来るコトはお詫びをし続けるコトだけなのだ。すまぬ、すまぬう… ってな！

「今後はもつと周囲に気を付けてキャッチボールをしたく存じます」  
「いや、なんでキャッチボールしてて丸太と一緒に空から降ってくるのよ…」

クロハラ（仮）さんが的確なツツコミを入れてくる。それはむしろオレの方が知りたいです。

オレもまさかこんなコトになるとは思わなかったよ。多分海のリハクだっけ見抜けないよ。

ていうかオレの中で貴女とゴリくんは人類の例外です。色んな意味で物理法則超越してるよ。

「すみません！　ですが、この人は僕達の挑戦に付き合ってくれただけで…」

「ボールを投げたのは俺なんでさあ！　だから、悪いのは俺なんでさあ！」

「おや、いつの間にかゴリくと眼鏡くんたちが駆けつけてくれたらしい。待たせちゃったか。」

「だがしかし、彼らが悪いという言葉に頷くことは出来んな。其処はキツチリ訂正しなければ。」

「ふざけるな！　悪いのはオレ一人だ。……オマエたちには関係のないコトだ」

「そも、ゴリくと眼鏡くんはオレの我儘に付き合ってくれただけだ。彼らは何一つ悪くない。」

「し、しかし…」

「け、けどよ…」

「まあまあ…　少しはしやぎ過ぎるなど若い時分にはよくあること。余り気にしないことだよ」

「尚も言い募ろうとするゴリくと眼鏡くんを抑えて、少しご年配の男性が仲裁をしてくれる。」

「もう一方のチームの監督だろうか？　出来た人や。すみませんすみません、オレのせいで。」

「ココの小学生が色々と進み過ぎてるのは、こうした指導者の方が立派だからなのだろうなあ。」

「うん。僕もGゴールキーパーKなのに飛んでくるモノに反応が遅れちゃったし…　むしろ助けられたよ」

「さつきオレが突き飛ばしてしまった少年が、片膝立ちの格好のまま笑顔を見せる。ええ子や。」

「本当にすまなかった。……立てるか？」

「オレは土下座を一時解除し、少年の元に駆け寄って手を差し出した。許してくれるだろうか？」

「いや、赦免を期待しちやイカンよね。罵倒の一つや二つくらいは覚悟しておこうじゃないか！」

「ありがとう。こっちはこそ騒ぎにしちゃったみたいでゴメンよ」

だが、少年は笑顔でオレの手を掴むと立ち上がって礼を言ってきた。なんて出来た子なんだ！

「うん、お互いに怪我はないみたいで良かった。けれど、はしやぎ過ぎるのは程々にね？」

「……はい、申し訳ない」

ウェイターの人が柔らかい表情でこちらに注意してくる。この人、こういう顔もできたのね。

「それでは高町さん、今日のところは柔軟をして解散しましょうか？」  
「そうですね、少し残念ですが決着はまたの機会ということで……」

監督さん同士で話し合っている。オウフ…… オレのせいで解散の流れか。罪悪感が凄まじい。

「じゃあ今日はここまで。身体冷やさないように柔軟をして帰るぞー！」

「「はーいー」」

パンパンと手を叩いてウェイターの人が解散を宣言する。うくむ…… 今日のこととは反省だな。

「キヤッチボールをすれば最悪死に至るケースもある」と、心のメモ帳に赤ペンで記入だ。

さて、オレは彼らが帰った後に河川敷の掃除でもするか。破片で怪我しちやったら悪いしね。

なんかゴリくんと眼鏡くんも手伝ってくれた。彼らには借りばかりが増えてる気がするなあ。

掃除中に「なんで自分のせいにして謝ったの？」的なコトを聞かれた。だってオレが悪いし。

ト○ーズ閣下の言葉を借りて、勝利よりも戦う姿が尊いとか誇りある敗者になりたいとか、

物事の結果には原因があって今回オレが原因だからしょうがないね、的な回答をしておいた。

彼らは感心したように頷いてくれた。名言は、その価値がある人に触れてはじめて輝くのだ。

ゴリくん眼鏡くん、キミたちならばその資格は充分に備わっているはずだ。精々励めよ？

などと調子に乗った上から目線の戯言を心に秘め掃除を続けていると、あるモノを発見した。

「コレは… CG発生装置」

…間違いない。あの時、金髪の少女がダニー（仮）から回収したCG発生装置ではないか。

うーん、失くして困っているだろうがオレはあの金髪の少女の名前も住所すら知らない。

あの時出会った公園にいるかな？ いるといいな。そんなコトを考えながらポケットにしまう。

しまう時にこの青い石にしか見えないCG発生装置がほんのり光っていたが、何故だろうか？

変なボタンでも押してしまったか？ こんな高そうなモノ、弁償でもさせられたら<sup>おおい</sup>大事だ。

片付けを手早く済ませ、ゴリくんと眼鏡くんによく礼を言い、オレは急いで公園に向かった。

……

……

…

よし、いた！ ベンチに腰掛けてる！ 今日は大いなのか… 軽く手を上げ、声をかける。

「こんにちは」

「あつ！ こ、こんにちは。その、先日はお世話になりました！」

少女は立ち上がりペコリとお辞儀してくる。世慣れてない雰囲気はあるが、やはりいい子だ。

“何故か急にこの公園に来なくちゃいけない気がして”今やってきたところだったらしい。

奇妙な偶然だが、今回その偶然に助けられたとも言える。オレはCG発生装置を取り出した。

「あつ！ それは…」

やはりコレはこの少女のモノだったらしい。こんな高そうなモノ、  
そうそうないだろうしな。

目にした瞬間は凄く驚いた様子だったが、差し出すと何度も礼を  
言って受け取ってくれた。

うんうん、今度は失くさぬよう気を付けるのだよ？ 届けてくれる  
人ばかりじゃないからね。

軽く手を振って少女と別れると、オレは家路へとつく。良いコトを  
した後は気持ちが良いな。

「……ブラック珈琲の処分、忘れてた」

今日だけで結構しよぶ、配る機会があつたのに。……この桜庭悠  
人、戦いの中で戦いを忘れた。

## リリカル少女のお茶会と新たな出会い

私、高町なのはは私立聖祥大学附属小学校に通う平凡な小学3年生。

ある日突然手に入れた魔法の力で、この街のジュエルシードを封印するために頑張っています。

ジュエルシードは「ロストロギア」とも呼ばれる危険な魔法のアイテムなんだって。

放っておくと、暴走したり周囲の生物を取り込んで大きな被害を生むこともあるみたい。

だから私は、ユーノ君から借りた魔法の力でそういった事故を未然に防ごうと動いてるんです。

ユーノ君は「ミッドチルダ」っていう別世界から来た魔法の使えるフェレットさん。

事故に遭って積み荷のジュエルシードが散らばって、その回収のためにこの世界に来たの。

本当はユーノ君のせいじゃないのに、関係ない世界のために必死になれる責任感の強い子です。

困ってるユーノ君のために私にできることがあるなら、力になってあげたい。そう思います。

それに力になるのは私一人じゃありません。もう一人、頼りになる人がいるんです。

その人は御剣刀真君みつるぎとうま。私と同じ魔法使い（ユーノ君曰く、魔導師）でとっても強い。

本人は自分に才能がないと思ってるみたいだけど、プールでも学校でも助けられたんだよ。

集めたジュエルシードはコレで4つ！ まだ決定的な事件は起きないけれど頑張らないと！

「どうしたのよ、なのは。いきなり拳を握りしめて」

「あはは…なのはちゃん、なんかとっても燃えてたみたい」

「いや!? しまった…今は刀真君と一緒に友達のすずかちゃんに

お呼ばれしてたんだった。

もう一人の友達のアリサちゃんが驚いてる。うう、恥ずかしいところを見られちゃったよ。

友達とは言っても流石に二人に魔法のことを話すわけにいかない… 何とか誤魔化さないと。

「にやはは… それは、その…」

「大方、来週の温泉旅行を楽しみにしてるんじゃないか？」

「あ、うん！ そうなんだ… えへへ、バレちゃったか」

刀真くんの出してくれた助け舟にすかさず乗って、笑って誤魔化す。…嘘って難しいよ。

「うん、そうだね。私も今からすっごい楽しみなんだ」

「ふうん… ま、いいわ。私も楽しみなのは本当だしね」

笑顔でそれに応じてくれるすずかちゃん、不審げだけど追及はしないでくれたアリサちゃん。

二人に対する罪悪感でいっぱいです。…ジュエルシード集めが終わるまでの辛抱だよね。

ジュエルシード集めといえば… 最近めつきり「変わって」しまったある一人が思い浮かぶ。

神社の件でも、あの休日のサッカーの時でも… 私たちに先回りして動いていたあの人が。

サッカーの時は感じたのは私だけだったし、勘違いかもしれないけれど、神社の時は違う。

なにより、荒れ放題になった境内に一人で佇んでいたコトをただの偶然と片付けられない。

…とすれば間違いない。

あの人はジュエルシードの存在を知り、何らかの目的のために私たちに先んじて動いている。

そういうコトになるんだろう。一体何のために？ アレは危険なものでもあるのに…。

「そういえば、桜庭くんのコトなんだけどね…」

「!？」

ある意味でタイミングが良すぎたすずかちゃんの振った話題に、私は過剰に反応してしまう。

「だからどうしたのよ、なのは」

「う、ううん。なんでもないよ…。それですずかちゃん、どうしたの？」

「うん…。実はこないだ、教室に忘れ物しちやっ取りに戻ったら桜庭くんがいて」

「ひよっとして何か嫌がらせされたんじゃないでしょうね!？」

興奮して席を立とうとするアリサちゃんを刀真君と二人で落ち着かせる。

うん、ユーノ君も一緒だね。3人だね。それで？ と、すずかちゃんに目で先を促してみる。

「えっとね。夕暮れの教室で…。一人で、泣いてたんだ」

「泣いてたあ!？」

余りな内容に理解が追いつかないのか、素っ頓狂な声をあげるアリサちゃん。

けれど、私だって同じ気持ちだ。…ううん、刀真君も声も出せずに呆然としているみたい。

気持ちを共有できないのは、事情を知らず小首を傾げてるユーノ君だけだ。可愛い。

「桜庭くん、前は使っていた不思議な力…。めっきり使わなくなったよね」

「そういえば、そうね…。確か二年生の終わりに何日か休んでから、だったかしら？」

「うん、確かそうだったよね？ 刀真くん」

「そうだな…」

私の問いかけに軽く頷く刀真君。彼も彼で、この報告に思うところがあるのかもしれない。

「三年生になってすぐのHホームルームRでの発言もそうだけど、桜庭くん、変わったのかも…」

「ああ、あの…。安息に満ちた、恐れるモノのない日々のために戦う

“つていう?..”

「……うん」

「考え過ぎよ。すずかもその言葉にこだわり過ぎじゃない? 客観的に聞けば戯言の類よ」

すずかちゃんを宥めようとしているアリサちゃんの言葉は多分、正論なんだと思う。

けれど、この間のサッカーの時も真っ先に謝ったし、ぶつかった子のコトも氣遣っていた。

そういえば、“あの話”はみんな知らなかったかな… この機会だし話しておこうかな。

「みんな… この間のサッカーでの件、あつたでしょ?」

「え? うん」

「ああ、あつたな」

「アイツがいきなり土下座してきた “アレ”ね」

「後からお父さんに聞いた話だと、残って散らばった破片のゴミ拾いもしていたみたい」

「……」

場が沈黙に包まれる。それはそうだと思う。あの土下座だけでもショックな事件なんだもん。

なのに、ゴミ拾いに桜庭君が勤しんでいたなんて、天地がひっくり返るほどの衝撃だよね。

私だってお父さんから聞いた話でなかったら中々信じられなかったんじゃないかな、と思う。

戻ってきたお父さんがソレに気付いて声をかける前に、何処かに駆けてつたみたいだけど。

かなり感心していて評価も上方修正したみたい。……お父さんの人を見る目は確かだ。

刀真君がウチの道場で修行するようになったのも、確かお父さんの推薦がきっかけだったし。

「……ひよっとして修行に寄せてもらった時にアイツもいたのは、それが?」

「うん、多分」

「今も続いているの？」

「用事があつて鍛錬はしてないけれど、毎回、道場の掃除はしっかりとくれるみたい」

「正直、コレまでの桜庭くんからじゃ考えられないね…」

「……うん」

だから、お父さんが認めているとすれば「彼が変わった」のだからと考えるとしつくり来る。

「……あー、それじゃ私の見た“アレ”も見間違いじゃなかったのかもね」

「え？ なにかあつたの、アリサちゃん」

微妙な表情を浮かべて、遠い目をしながら語るアリサちゃんにすずかちゃんが食いついた。

「うん… 実は昼休みにアイツがコソコソ出て行くから怪しいと思つて尾行してみたのよね」

「それで？」

怪しいからつて人を躊躇なく尾行するアリサちゃんも結構怪しいと思うよ。言わないけど。

「で、例の残骸置き場に到着して玉座に腰を掛けてたんだけど…」

「……あれ、まだ撤去してなかったんだ」

すずかちゃんも結構言うね。まあ、私もアレをずっと残しておくのはどうかと思うけれど。

「そしたら、鞆から何を取り出したと思う？」

「何つて… そりゃ、昼飯じゃないのか」

うん… 刀真君のツツコミは尤もだと思うけど、流石にソレじゃ話が広がらないと思うよ。

「……そうよね、そう思うわよね？ でも違ったわ」

「もったいぶらないで教えてよ、アリサちゃん」

痺れを切らせて私が促すと、より一層遠い目をしてアリサちゃんはようやく語ってくれた。

「……編み物を、やり始めたの」

「はい？」

「編み物って… 夢でも見たのか？ バニングス」

「そう思ってくれて構わないわ。ぶっちゃけ、私自身も今もソレを疑ってるくらいなもの」

「編み物って… なんで？」

「私が知りたいくらいよ。聞いてきてよ、なのは」

「ふええ!? わ、私…!?」

冗談っぽく流されて場が笑いに包まれる。ダシに使われた形の私としては少し複雑だけど。

「あ、そういえば刀真」

「……………ん？」

「アイツとの決闘… どうなったの？」

「……………」

途端に空気が重くなる。だ、大丈夫かな？ 刀真君、すつごく苦い表情をしてるんだけど。

「……………ボコボコにされた」

「!?」

ボソツと呟いた言葉の内容に、私たちは思わず絶句してしまう。やっぱり変わってなんか…

「レパルダスの“ねこのて”で“キノコのほうし”を使って問答無用で眠らせてきて…」

「……………」

「“みがわり”置いて“たべのこし”で回復しつつ延々と眠り殺されて… クッ！」

「いやゴメン、何の話？」

「わからないなら… いい」

「大丈夫だよ、刀真くん。私のアルセウスあげるから… カイオーガとミユウツもね」

「……………すまない」

よほど悔しかったのか落ち込んでる刀真君を慰めるすずかちゃん。私には分からない世界だ。

「と、とにかく！ ゴミ拾いしてて、剣道場に顔出して、編み物して、ゲームしてると」

「アイツも『変わった』… ということだろうか？」

「あはは… 『変わった』というか、『変わってる』というか、『へん』って言うか…」

『わけがわからないよ』

『ユーノ君、それ以上いけないの。なんだか分からないけれどそれはダメな気がするの』

『え？ わ、わかったよ… なのは』

——ッ！

ユーノ君と念話でそんな話をしていると、ジュエルシードの反応を感じた。

刀真君も気付いたみたい。互いに頷き合う。

まだ暴走はしてないみたいだけれどお茶会でお話の最中だし…  
うう、どうしようか？

『だったら… なのは、刀真！ 僕を追って！』

『なるほど… 乗らせてもらうぞ、ユーノ。高町もいいな？』

『う、うん！』

『きゅつきゅ〜！』

同意を確認すると、ユーノ君は鳴きながら庭の奥の森に向かって駆け出していく。可愛い。

「あ、ユーノくん？ 困ったなあ… 森に行っちゃったみたいだよ。探してくるね？」

「高町だけでは大変かもしれない。俺も同行しよう」

棒読みになってないか不安だけど、刀真君のサポートもあるし何か大丈夫… だと思ふ。

「二人だけで大丈夫？ 私もついていこうか」

「あ、だったら私も…」

「ううん、大丈夫。刀真君もいるし、すぐに戻るから」

手伝いを申し出てくれたアリサちゃんとすずかちゃんには悪いけれど、この方が都合。

「じゃあ、行くぞ。高町」

「うん！」

もう一度、頷きあつてから駆け出した。ジュエルシードの暴走から友達の二人を守らないと！

……

……

…

そう、思っていたんだけど。

「ニャ〜オ〜♪」

大きくなった、すずかちゃんの飼い猫（名前はアインス）が嬉しそうに歩いていた。可愛い。

「なのは、刀真。まずは動きを止めないと」

「お、おう… そうだな！」

「あ、うん… そうだよね！」

封時結界（時間の流れを切り取るらしい）を張ったユーノ君の言葉で我に返る私たち。

……そうだね、まずはアインスからジュエルシードを取って元の大きさに戻してあげないと。

えっと、でも… どうすればいいんだろう？ 攻撃、するのは可哀

想だし…。

「……危ないッ!!」

私が迷っていると、何かを察知した刀真君は駆け出してアインスの前に立って右手を掲げる。

すると、アインスに向かって降り注ごうとしていた光弾が、その右手で掻き消される。

見上げると、上空には一人の女の子が浮かんでいた。黒い衣装を身に纏った金髪の女の子が。

今は少し驚いた様子。私たちがいたコト、じゃなくて魔法が掻き消されたコトについてかな？

「私のフォトランサーを… なんにせよ、不確定要素は排除します」  
「…はい、そうですか」と引けるかよ！ オマエもジュエルシードを

集めているのか!？」

「答える必要を感じない。どうせ、言っても分からないから：　あの人”以外は”

「だったら口を割らせるまでだ！　悪く思うなよ、喧嘩を売ってきたのはそっちが先だ！」

二人の緊張感が高まる。このままじゃ喧嘩になるみたい：　私も手伝わないと。

「今行くよ、刀真く：　きやつ!？」

——ブオン：

『Protections』

レイジングハートが咄嗟にプロテクションを張ってくれたお陰で、なんとか間に合った。

けど、今の一撃は：？

「ちっ、私の拳を防いだみたいだね：　悪いけれど、アンタの相手はこの私だ」

いつの間に接近を許したんだろう？　赤毛の女の人私に向かって拳を振り下ろしていた。

『相手は逃がしてくれないみたいだ：　なのは、僕もサポートに回るよ』

『うん、さっきの子もとっても強そうだったし：　一緒に刀真君を助けに行かないと！』

こうして、私たちにとって多分初めてとなる本格的な魔法使い同士の戦闘が始まりました。

ユーノ君によれば魔導師というらしいけれど：　そうなるこの人たちもミッドチルダの人？

この人たちは：　そして桜庭君は、一体何の目的でジュエルシードを追っているんだろう？

すごく気になるけれど、今は目の前のことに集中しないと。でない」と刀真君を助けられない。

「がんばろう、レイジングハート」

『yes, sir』

私は今や大事な友達であるレイジングハートを握り締めて、赤毛の女の人に向き合いました。

アリサちゃんやすずかちゃん、それに刀真君やユーノ君といった大切な人を守るために。

## 少年の入れ知恵

「桜庭… 再戦だ！ 今日こそオマエを倒す！」

名無しの少年が勢い良く向かってきた。その手には3DS。まさか前回で懲りてないとはな。

伝説ポケモンでも手に入れたのか？ 外道コンボ対策でも練ってきたのか？ その両方か？

ククク、ならばセカンドステージに上がろうではないか。相手がメタを張ったその上をいく！

「良かろう。ならば思い出させてやろう… あの日の恐怖と絶望をな」

「俺は負けない… 俺には頼もしい仲間たちがいるんだ。この力で必ずオマエを…！」

「余り強い言葉を使うなよ… 弱く見えるぞ？」  
「ッ！」

すごいいい気になってるオレ。まあ、やってることはただのポケモンバトルなんですけどね。

藍染隊長っぽいキメ台詞でまずは軽いジャブ。こうかはばつぐんだ！ が、ほどほどにね。

ゲームとは本気で遊ぶから楽しいのだ。そのためにはある程度の役作りというモノは必要だ。

だが役になりきっても、憎しみで戦ってはいけない。故にやり過ぎてはいかんのだよ。OK？

名無しの少年も、オレのイメージ通り主人公っぽい台詞をポンポン吐いてきてくれるしな。

クツクツク、おかげでオレも冷徹な悪役（笑）のイメージに徹することが出来るというわけだ。

しかし大した自信だ。こちらこそ簡単に負けてやるつもりはないが、はてさてどう出るか？

「出る、アバチュウ！」

「……はい？」

いや、おい待て。なんでポケモンやって金子一馬っぽいデザインのキャラが出てくるんだ。

あれ？ 金子一馬ってこの時もうやめてたっけ？ いや、どうでも良いよ。良くないけど。

なんかどっかで覚えのあるRPG史上最強最悪っぽい相手が出てくるコトの方が問題だよ。

『ちぼのぼんさん』… こうかはばつぐんだ！』

「いや、待て。おい、待ってば… おい」

なんか、オレの手塩にかけて育てたポケモンたちが一瞬で消し飛んだんだけど。何この虐殺？

ア○ラスって親会社の経営がやばい云々って話は聞いていたけど、任○堂に身売りしたの？

身売りしたからってそのまま出すか？ 思い切りすぎだよ、任○堂。ふざけんよ、任○堂。

「俺の… 勝ちだー！」

「ぐわあああああああああああああああああ！」

……

……

…

—— チュンチュン…

「…夢、か」

… 朝から心臓に悪い夢を見たぜ。

ポケモンバトルをしてたら何故か遊戯王が始まったような、そのまま負けてしまったような。

負けて地獄の罰ゲームを受けたような、そんな恐ろしい夢だった。もう忘れつつあるけど。

取り敢えず名無しの少年との再戦はモンハンにしようか。うん、それがいい。きつとそうだ。

争いを助長するのは良くないよね。ゲームだからこそ楽しまないとね。チームプレイ最高！

ポケモンなんておこちやまのお遊戯よ。ペペペのペーよ。怖いわ

けじゃないぞ。ないからな？

さて、トーストと缶珈琲でも召し上がるとするか。なんか久しぶりに缶珈琲飲む気がするな。

んなわけないか： 冷蔵庫を開ければ、だいぶ缶珈琲の在庫が減ってきたコトに気が付く。

オレはこれだけしよぶ、飲んできたんだ。あと少しで冷蔵庫はその本来の姿を取り戻すのだ。

スーパーで買ってきたレタスにプチトマトを用意し、トーストにジャムを塗って朝食は完成。

だいぶスーパーでの買い物も小慣れてきた感じがするな。商店街にも足を伸ばしてみるか？

駅前にも商店街があるみたいだし、其処の勝手を知るとは今後の生活にプラスになる筈だ。

しかし悠人少年は帰ってこねえなあ。マジでこのまま大人になったらどうしようか。不安だ。

今や着実に海鳴市での生活圏を広げており、当初の右も左も分からぬ状態のオレではない。

ソレは裏を返せばオレの足跡が残るということでもある。大した影響がないならそれでいい。

だが、樂觀はできまい。戻ってきた悠人少年になんらかの不具合をもたらさぬとは限らない。

身に覚えがない相手との好悪感情やら繋がりが残っていたりしたら、彼とて戸惑うだろう。

ていうか彼の将来の夢が教師だったのを知らずにサラリーマンになる、なんて可能性もある。

「……難しいものだ」

そういえば缶珈琲からコーヒーゼリーって作れるのかな？ ゼラチンパウダー買って試すか。

最近缶珈琲を余り渡せなくなってきた。オレの屁理屈で誤魔化すにも限界があるのだろう。

だがゼリーにすればスムーズに処理できそうだ。オレ自身も美味

しく食べられるかもしれん。

「……悪くはないな」

——ピピピツ、ピピピツ……

忌々しい珈琲をゼリーにする皮算用に酔いしれていると時間を告げるアラーム音が鳴り響く。

む？ もうこんな時間か。憂鬱だがそろそろ道場に向かわねばならないか。やれやれだぜ。

いや、ホントにオレは何故本来全く縁がないであろう道場なんぞに律儀に通っているんだよ。

あの日は普通に学校帰りに翠屋にケーキを買いに行っただけだぞ？ 本当にそれだけだった。

強いて言えばウエイターの人に「先日は試合中お邪魔して失礼しました」と頭下げただけ。

それだけなのに何故かウエイターの人に誘われ道場に通う羽目になったのだ。マジで何故だ。

もしかして：嫌われてる？

身体はモヤシで出来ている悠人少年に道場とかどんな無茶だよ。死んじゃうだろ！ オレが！

案の定、学生の身でありながら師範代やつてるお兄さんにゲロ吐く寸前まで絞られたしな。

というか、お兄さんと妹さんたちの目を盗んで適度にサボってなかつたら確実に死んでたね。

二度と行きたくなかったがそんなコトをすればオレを紹介したウエイターさんの顔が潰れる。

ウエイターさんの顔を潰してしまえば、翠屋でのショッピングも今後やり難くなるだろう。

ていうかウエイターさんもウエイターさんだよ。なんでサッカー少年たちを誘わないんだよ。

オレは心の中でブツクサ言いながら歯を磨いて家を後にするのであった。……はあ、憂鬱だ。

……

……

…

「ごめんね。今日は恭ちゃん、兄が用事で出かけるの伝え忘れてて… 私しかないんだ」

「あ、そうなんですか」

イヤツホおおおおう！ 今日あの鬼のようなお兄さんがいないぜ。あれ？ てことは…

「……では、妹さんは今日はお休みなのにわざわざオレに伝えるために？」

「あ、ううん。そうじゃないの。私は私で鍛錬しようかなって… キミはどうする？」

ううん… どうしたもんかね。帰ってもいいみたいだけれど、まあ、掃除もしときたいしな。

何故オレが掃除にこだわるのか？ 掃除大好き人間というわけではない。ただの処世術だ。

どんなに練習でダメでも、キチンと残って真面目に掃除をしているヤツは一定の評価を得る。

徐々にフェードアウトしていくとしても、しっかりと掃除していたという印象が残ればいい。

そうすれば後はちよろつと顔を出すだけで、道場と距離を置きつつ翠屋との繋がりは残る。

フッフ、オレの考えた完璧な将来設計。成功間違いなし！ 成功… するといいなあ（白目）。

「それではお邪魔でなければ、隅の場所を借りて素振りでもさせて戴きたいのですが」

「勿論お邪魔じゃないよ。……でも、いいの？ そろそろ組み手とかしたいんじゃないかな」

「滅相もない。型は全ての基本にして奥義。其れをロクに覚えず組み手など恐れ多いですよ」

「そうなんだ。……うん、真面目だね」

組み手？ 何その死亡フラグ？ この眼鏡の似合うおっとりした

妹さんを侮ってはいけない。

稽古初日にお兄さんと目に見えぬ速さで組み手を行って、オレをドン引きさせた人なのだ。

練習試合とか絶対にしたくないでゴザル！ 幸いにも、随分アツサリと引き下がってくれたが。

「じゃあ、今日は私も型稽古に変更しようかな」

「？ 他にやりたいことがあったのでは？」

「いいの。基本は大事だなんて私も思ったわけだしね」

「まあ、そうですね」

良く分からないけど、妹さん本人が納得しているなら好きにすればいいと思います（小並感）。

こうして稽古という名の耐久素振りレースはスタートした。隅で邪魔にならないようにな！

たまに妹さんがアドバイスしてくれる。ちよつと怖いお兄さんと違って優しく、耳に入り易い。

「……そういえば、キミは素振りの最中に数を数えないんだ？」

「フツ！ まあ、数を重視しているわけでは…… ハッ！ ないですからね」

そう、時間が来るまで素振りを続け誤魔化すことが大事なのである。数が重要なのではない。

「うん、数よりもイメージとかの方が大事だよね」  
「フツ！ そうですか…… ハッ！ ねつと」

良く分からない納得のされ方をした。今のうちにちよつと休憩しよう。深呼吸深呼吸、と。

ていうか素振りの最中に話しかけるの止めて欲しい。返事するの疲れるし、無視も失礼だし。

でも彼女なりの気遣いだろうし無碍にするわけにもいかないってうか、お兄さん怖いし。

二人しかいないわけだから自然とサボったら目立つわけで、こちらのチエックも厳しくなる。

うん、地味にしんどいぞコレ。やっぱり帰ればよかった。

「ねえ、キミはなんでこの道場に通おうと思ったの？」

「……なんで、ですか？」

「うん。もし良かったらだけど、教えて欲しいな……なんで強くなりたいてって思ったのか」

真面目な表情でオレを見詰めてくる妹さん。が、なんでだと？ そんなオレが知りたいわ！

ウェイターさんに無理やり連れてこられたからですと正直に答えるか？ ……アウトだな。

迂闊なことを口走ってウェイターさんの耳に入ってしまった場合、今後翠屋で気不味くなる。

それはいかん。……本音を交えつつふわっと答えて誤魔化すしかあるまい。がんばれ、オレ！

「別にオレは強くなりたいと思って此処に来たわけではありません」  
「そ、そうなの？」

ゴリくんとかクロハラ（仮）さんがいるこの街で、強さを求めるのが如何に無意味なコトか。

「そもそも、人の数だけ強さがある」  
「人の数だけ……」

ゴリくんもクロハラ（仮）さんも、貴方たち兄妹も大概ですよ。八神もデッドリーだしさ。

眼鏡くんも眼鏡ゾーン形成してるっぽいし。ホント海鳴市は地獄だぜー。フウーハハハー。

出会う人出会う人がなんらかの人外に位置してるっぽいし。悠人少年もコレに絶望したのか？

「オレのような弱い人間にとって、それらはあまりに眩しすぎる」  
「……………」

取り敢えず喋っている間は休憩できる。ソレに気付いて、ゆっくりと噛みしめるように喋る。

「けどその想いや繋がりに触れることは決して無駄じゃない。そう、思うんです」

「想いや繋がりに、か」

うん、なんか自分でも何言ってるか分からなくなってきた感。ちよつと遠い目をしてしまう。

妹さんも目立った反応はしてないみたいだし、滑ったようだがスルーしてくれたんだらう。

このまま何事も無く素振りを再開しよう。今日のコトはきつと黒歴史にして忘れてくれるさ。

それから特に会話もないまま素振りを続け、休憩を挟んで型稽古の練習にも付き合わされた。

お昼は持ってきた塩おにぎりだった。昨晚の余りのご飯を握ってラップに包んできたのだ。

妹さんは何か作ろうかと言ってくれたが流石に悪いしな。……うん、ブラック珈琲に合わん。

……

……

……

掃除も終え、帰る頃にはすっかり外は夕焼け色に染まっていた。結構身体はだるいしなあ。

今からスーパーに向かえばちようどタイムセールの間。ボコボコにのされてしまうだらう。

ふくむ……ここは朝も少し考えてみたとおり、ザツと商店街のチエツクもしてみようかな？

「……おう」

そんなコトを考えながら例の公園を通りがかると、例の金髪の少女がベンチに腰掛けていた。

だが、傍目にも分かるくらいドンヨリと落ち込んでる。彼女の周囲が暗闇に支配されてる。

リストラされたサラリーマンかっけくらいに落ち込んでる。コレが金色の闇ってヤツなのか？

「……隣、いいだらうか？」

オレはブラック珈琲を差し出しつつ声をかけた。暗闇といえば珈琲！ 渡すしかないよね！

「……あ、はい」

彼女は涙目でオレの差し出した珈琲を受け取ってくれと、そのまま黙りこくってしまった。

ど、どうしよう… なんか茶化せる雰囲気じゃないんですけど。明らかにオレ邪魔っぽい。

オレがベンチに腰掛けると、お互いに気不味い沈黙が流れる。… なんて座ってしまったし。

え、えーと… そう、なにか気の利いたことを言わないと。ウイツトに富んだ会話の出番だ！

「飲むといい。… 多少は気が紛れる」

「……はい」

あかん（白目）。オレがこの一ヶ月で上達したのはブラック珈琲を勧める会話テクだけかよ！

「何も… 聞かないんですね」

「……多くの悲しみは時間が癒してくれるさ」

「……」

「だが、もし解決を望むならば相談には付き合おう」

よく男女間の喧嘩で話題になる『男は女の気持ち分からない』『っていうのがありますよね？』

大雑把に言うのと慰めて欲しい時に淡々と問題点と解決策を語ったってのが多いみたいです。

だから男性はKYだとか女って感情的で分かんねーとか、そういう対立があるとかないとか。

ソレが全てではないでしょうし例外もあるのだと思います。つまり何が言いたいかと言うと…

オレも感情的に愚痴られてもテンパるだけで何が何やら分からないよ！ という話ですね。

卑怯かもしれないが予防線を張らせてくれ。すまん、金髪の少女。頼りにならない知り合いで。

「私が… 私が望むのは、『解決』です」

「……そうか」

顔を上げた少女が、真剣な表情で見詰めてくる。え？ ひよつとして相談に付き合う流れ？

「聞いてくれますか？ ……私の話」

「勿論だ。……といつても、役に立てるかどうかは保証しかねるがね」  
更に予防線を張つてしまうオレ、マジでチキン。すまん、金髪の少女。ガツカリさせたかな？

「いえ、貴方なら大丈夫です」

「……………」

……謎の信頼が重い。悠人少年は一体この少女にどれだけ信頼を積み重ねてきたのだろうか。

「実は……」

端的にまとめると、この街に散らばつてしまった“あるモノ”を巡つて取り合いになつたと。

自分たちは二人、相手は三人と数では不利ではあったが経験が物を言い有利に進めていた。

だが、ある程度まで戦いとどめを刺そうとしたトコロで隙を突かれて陣形を入れ替えられた。

その後は勢いに押され後手後手に回つてしまい、不覚を取つて敗れてしまったというコトか。

なるほど、分からん。そもそも“あるモノ”ってなんだよ。分からないから聞いてみようか。

「その“あるモノ”というのは……」

「はい、貴方もご存知の例のモノです。この地域の一般人にはまだ認知されていませんが」

え？ オレ知ってるの？ ……つまり自分で考えて当ててみるということか。コレは難問だ。

「……………なるほど、な」

ティンときたぞ！ この子は金髪の少女。その格好もあまり日本人らしからぬファッション。

加えて大型犬をリードも付けずに散歩させていたコトから海外暮らしが長かつたのだろう。

となれば、オレの知識を総動員して浮かび上がった答えが一つだけある。恐らく間違いない。

「楕円形の例のモノ、か」

「はい」

念の為に確認したが、やはりか。分かればなんてことない謎だった。え？ 答えは何かかって？

無論『卵』だよ。正確にはイースターエッグ、*“復活祭”*と呼ばれる海外の風習ってわけだ。

毎年春先に行われ、茹で卵の殻に色を塗ったり絵を描いたりして街中に隠して皆で探すのだ。

確かに日本じゃマイナーな行事だよな。勝手を知っている彼女ならば優位に立ち回れた筈だ。

だが、そうそう上手くは行かない。対抗馬とイースターエッグの取り合いに発展した、と。

ならばとバトルで雌雄を決するコトにしたのだが、奮闘むなく敗れてしまった。残念、と。

「大変だったな…」

「はい、途中までは勝っていたんですけど」

なんか魔法とか魔導師とか謎の用語が出てくるけれど、まあ、そういうゲームというコトか。

話を聞く限りでは3Dの格闘アクションっぽいニュアンスかね。  
エクストリームバーサス  
E X V Sみたいな。

そっち方面はあまり得意じゃないが、部外者ならではのアドバイスも多少出来るかもしれん。

「まずはキミたち、そして相手についてを可能な限りで構わないので教えてくれ」

「は、はい。えつと…」

ふむ… なるほど。押せ押せで攻めてくる前衛アタッカーな空を飛ばないタイプが一人、と。

それから、ターゲット・ロックオンして防御を抜くような砲撃してくる後衛タイプが一人。

そして最後に前衛後衛に指示を送りつつ支援魔法をかけて立ち回る器用な司令塔が一人、と。

対して金髪の少女サイドは、高速戦闘を得意とする少女本人と格闘戦を得意とするもう一人。

偏ってるな、オイ。陣形整えられたらそりや不利にもなろう。装甲も抜けられるっばいし。

結構意気消沈してるな。説明しながら彼女も己の状況の難しさを実感してしまったようだし。

ならば、オレのすべきことは「決して勝てない相手ではない」と、彼女に気付けさせるコトか。

具体的な勝ち方は経験者である彼女が見付けるだろう。オレが言うのは極論でも構わない。

彼女も多分こんなオレなんかには然程の期待は寄せていないだろう。きっと、多分、メイビー。

「二対三で戦うからには負けるのは何ら不思議ではない」  
「……うう」

「数が多いというコトは暴力だ。それだけ戦術も対応力も増えるのだから」

「……はい」  
「だが、二対一を三回繰り返したらどうだ？」

「……え？」  
「キミたちが二で、相手が一だ。その状況を三回繰り返す。……どうだ、勝てるか？」

「それは、その… 勝てる、と思います。ううん、必ず勝ちます！」  
力強く言い切る彼女に対し、オレはニヤリと笑みを返す。こういう

のは「らしさ」が大事だ。  
「ならば、その状況に持ち込むためにキミたちはどうすればいいか？」

ソレが問題だ」

「は、はいー！」  
「幸いにして、キミたちには彼らには決して真似できない最大の武器

がある」

「……武器？」

彼女の問いかけにオレは一つ頷き、答えを促す。気分はすっかりアーサー・ヘルシング卿だ。

やはりこの少女は素質がある。管理局の追手に怯えるRPといい、このノリの良さといい。

オレが話していてもここまで楽しいのだ。きっと悠人少年との一時はさぞ心温まっただろう。

「……魔導師としての経験に優れているコト、ですか？」

「確かに… だが司令塔の彼は中々の熟練者だ。キミたちとそこまで差があるとは思えない」

「……チームワークがとれているコト、ですか？」

「ソレはあるだろう。だが決定的とは言えない。時間とともにその差は縮まる一方だろうね」

「……」

「もっと、もっと、もっと、もっと… 単純なことだ」

「……『速い』コト？」

「そうだ。キミたちはとても『速い』んだよ」

狙ったようなこのやり取り… そして表情や台詞選び。素晴らしいな、この金髪の少女は！

「速さは手数を生み、常に戦場のイニシアチブを握れる。思考時間すら相手に渡さぬままに」

「速さ… ソレが私たちの、武器」

「キミたちが阿吽の呼吸とともに生み出す素早い連撃に、相手は常に後手に回ることだろう」

「でも、それでどうやって相手を…」

「分断する。力技で断ち切ってもいいし、誘いこんでもいい… 其処は好きにするのだな」

「……なるほど」

「相手と闘いつつ、戦場を観察するのだ。もっと簡単に、戦場を支配しろ」と言い換えてもいい」

「……戦場を、支配」

こんなオレの話にもノリノリで付き合ってくれる少女。付き合いが良過ぎでちよつと心配だ。

「でも、此方の意図に相手が乗ってこなかったら…」

「そうだな。なるべく意図は悟られないに越したことはない」

「じゃあ、しつかりと陣形を固めて守りに入られたら…」

「ああ、勝つのは難しい。だから…」

「……だから？」

「その時は『例のモノ』を持ってさっさと逃げてしまおう」

「……へ？」

「逃げてしまえば誰も追いつけない。どうだ？ 『速い』ってのは得だろう」

うん。まあ、カツコイイ言葉で誤魔化してるけれど特に何の中身もないいつものオレですね。

『速さを武器にして少しずつ相手の数を減らせ』ってソレができたら苦労しませんよね。』

少女の疑問も尤もだ。挙句ゲームと現実の世界を混同して『逃げちゃえ』だ。コレはアウトだろ。

「プツ… ぐ、ぐめんなさい。なんだか、おかしくって」

「いや、戯言だったな。すまない、キミにとっては真面目な話だっただろうに」

「いいえ、おかげで楽になりました。無理に勝たなくても良いんだ、って」

「……そう言ってくれると此方も助かる」

いい笑顔でそう言ってくれる。彼女は優しい。此方のコトを氣遣って笑ってくれたのだろう。

そんな彼女に冗談を言ったオレ。無責任にも程がある。嫌われる前にさっさと退散しよう。

……もう手遅れかもしれないけれど。『こんな敗北主義者は処刑だ！』とか思われてないかしら。

「つまらない話をしてしまったな。……オレはそろそろ行こう」

「い、いえ！ すごく勉強になりました！」

ええ子や。こんなくだらな話に付き合ってくれたばかりか、キチンとお礼も言えるなんて。

さり気なくブラック珈琲も、二本目を渡せたし。受け取ってくれたし。めっちゃいい子だ。

家に持ち帰るもよし、友達にあげるのもよしだよ。今後も末永いお付き合いをお願いしたい。

……

……

…

それから暫く経った休み明け。久々に夢電波たちと回線がつながった。でも様子がおかしい。

『おつすおつす。どうした、今日は？　なんか元気ないなー　ゞ（ゝω・・・）ocへキラツ♪』

『あ、顔文字の人。うん、実は温泉旅行に行った時にちよつと色々とおつてね…』

電波さんたち温泉旅行とか行くのか。そういえば海鳴市にも温泉あつたっけ？　ま、偶然か。

『実は以前言つてた探し物を見つけたんだけど…　それで衝突があつてね』

『おー、アレか。なんか宝石とか探してるんだっけ？　（・ω・）』

以前ジュエルペットがどうか言つてたもんね。まだ続いてたのか。結構流行ってるんだな。

『…：其処でかち合った相手に負けたんだよ。ソレも以前勝つた相手にな』

『あらら…　まあ、勝つ時もあるさ。ドンマイ！』

○（▽？\*）』

ソレで落ち込んだのか。ポケモンバトルとかだつたらオレもそれなりに指南出来るんだが。

『ソレは確かにその通りなんだけれど、今回はちよつと不自然さが目立ってね』

『どういふことなん？　（。・ー・）ン？』

『以前戦った時は力押しで攻めてくる印象だった。確かにその実力は脅威だったけど…』

『ああ、対応できないほどじゃなかった。だから前回は勝ちを拾えたんだ』

『今回は違ってたってコトか… (；・ω・)』

『うん… 何がなんだか分からないウチに分断されて、各個撃破されちゃったって感じ』

要約すると手も足も出なかったわけか。そりゃキツイな… 落ち込むのも分からんでもない。

『単に相手が本領を発揮しただけって話は？ 壁一。▽。(クヒヒ…』  
『確かにソレもあるかも知れない。けれど事態はもつと深刻かもしれない』

『深刻？ 壁一A。(ジー』

『うん。相手に優秀なブレインがついた可能性もある… それだけ戦術的な動きだった』

なんと。其奴がこの事態を引き起こした元凶ってコトか。コイツはめっちゃ許せんよなあ…？

『マジかよ、オレのイマジナリーフレンズによくも… よくも… (ρ≡□≡)ノ…!!!』

『え？ ちょ、イマジナリーフレンズって… 僕たち、ちゃんといえるんだけど』

ハハッ、ナイスジョーク (笑)。

『もしソイツを見つけたらボッコボコにしてやんよ！ (c|| (c|| (c|| (c|| (c|| (c|| (。口。 ; c||アチャチャチャチャー!!!』

『あはは… こうなったら顔文字の人は止まらないからね』

『フッ、ようやく笑顔を取り戻したようだな… オマエら (、・ω・ ) b』

『…ああ、元気付けられたみたいだな。みつともないところを見せた。礼を言うぜ！』

なあに、いいってことよ。(多分)子供たちは元気が一番。笑顔が一番似合うはずだからな。

だが、分断に各個撃破ねえ… 最近どつかで聞いたような気がするが。ま、気のせいかな？

こうしてオレは、あまり深く気にせず以後はいつものように駄弁つて盛り上がるのであった。

## 金髪少女と母親と…

やはり私たち以外にもジュエルシード集めをしている人がいた。それ自体は驚くに値しない。

むしろ自然なコトであるし、管理局に通報をした気配がないのは稀なる幸運とすら言えた。

私たちは言い訳できない「悪」だ。だから、話し合いにも応じず略奪のための戦闘を仕掛けた。

…結果は無残な敗北に終わったが。途中までは間違いなく優勢に進めていたように思える。

だが想定外の粘り強さを見せ、埒の明かなさに焦れた私が勝負を仕掛ける一瞬を狙われた。

彼らはまず標的をアルフに絞った。先程迄私と戦っていた少年が大量の剣を投射しつつ迫る。

当然アルフの援護をしようとした私の動きを、少女の使い魔であろう動物が牽制し妨害する。

的確に嫌な手を打ってくる… だけど、アルフの耐久性には私も絶対の信頼を置いている。

これまでの攻撃程度なら耐えられるはず。ごめん、アルフ。すぐにフォローに向かうから…!

そして自身の妨害を行う使い魔に意識を移そうとした時、凄まじい閃光がアルフを飲み込んだ。

「……なっ!?!」

信じられない… アルフが一撃で。それに、あの少女は散発的な魔力弾しか放てなかった筈…

その一瞬の自失が命取りとなった。少女の砲撃魔法の着弾直前にアルフから離れていた少年。

彼の向かう先は当然、私。反射的に回避行動を取り直撃は免れたモノの、体勢を崩してしまう。

ソレを見逃す彼女たちではない。使い魔の彼はバインドを放ち少女の砲撃魔法をアシストする。

後退しては避けられない… そう思うほど完璧な仕掛け。一瞬だけ私の胸中に絶望が浮かぶ。

だが、すぐにソレを振り切る。私の中には母さんと「あの人」がいるんだ。後退できないならば…

「……ッ！」

「えっ?」

「そんな… 砲撃に向かって飛び込んだのか!？」

当然、そのまま飛び込めばただ落とされるだけ。けど、迷いはアルフと自分を更に追い込む。

こうなった以上、悔しいけれど今は彼らには勝てないのだろう。だからこの場は撤退する。

放たれたバインドを潜り抜け、砲撃にギリギリ掠る程度の角度で飛び込むコトで目を晦ませる。

虚を突き、倒れているアルフを掴み脱出に成功した。辛うじて生き延びたが、苦い敗北だった。

……

……

……

砲撃を掠ってしまったコトによる魔力の低減やバリアジャケットの一部損壊。アルフの負傷。

いくら非殺傷設定といえ、マトモに受ければ場合によっては暫くの間行動不能になり得る。

状況は芳しくない。……もつと言えば悪い。八方塞がりと言える。私は深い深い溜息を吐く。

今から引き返して再戦を挑んだトコロで、勝てるとは正直思えない。二対三でも負けたのだ。

まして戦闘が行えなくなったアルフを強引にマンションに戻した今、現有戦力は私一人だ。

今後ジュエルシールド探しをする度に、あの子たちとぶつかってしまったのだろうか? 憂鬱だ。

あの後からずっと「あの人」と出会って話をしたこの公園で、一

人、ベンチに腰掛けています。

分かっているのだ。こんなトコロでこれみよがしに落ち込んでみても意味などないことは。

ならば何故？ “あの人”に期待している？ 慰めて、優しくして貰えるかもしれない…と？

何をバカな。

私は悪いコトをしている。むしろ、此方を氣遣つてくれた “あの人”の手を振り払ったも同然。

そんな自分が、少しばかり自分が不利になったからと誰かに縋ろうとしている。浅ましい。

コレ以上、この思い出の場所を穢けがすことは許されない。そう思つて、立ち上がろうとした時…

「……隣、いいだろうか？」

“あの人”は缶珈琲を差し出しつつ、そう声をかけてくれた。……思わず涙が零れそうになる。

安堵と嬉しさ、情けなさが涙となり溢れてくる。けれど…ダメ、泣くわけにはいけない。

そして落ち着く頃合いを見計らい、気が紛れるからと缶珈琲を飲むようにだけ勧めてくれた。

私は喋ることが得意ではない。この人も多弁ではない。だから、自然と場は沈黙に包まれる。

だけどそれは決して居心地の悪いものではなく…優しく包み込んでくれるような静けさ。

でも、この人はこんな私という退屈をしてないだろうか？ 隣の様子を恐る恐る伺ってみる。

じつと前を見詰めたまま沈黙している。彼の表情から、その内心を読み取ることができない。

「何も…聞かないんですね」

「……多くの悲しみは時間が癒してくれるさ」

「……」

「だが、もし解決を望むならば相談には付き合おう」

やっぱりこの人は凄い。私がウジウジと足踏みをしている間も、ただ前だけを見据えている。

そう、後退ができないならば前に進むしかない。たとえ傷ついても、目的を果たすために。

私があの日出会った時、そしてつい先程の戦いの中でも選んだのは“そういう道”だった筈だ。

多くの悲しみを背負いながらも、きつと、この人は一度も進むことを止めなかったのだろう。

時間が癒してくれる。それだけを救いに多くの困難とぶつかり、解決をしてきたのだろう。

迷ったり、悩んだり、苦しんだりすることもきつとあっただろうに… その全てを乗り越えて。

私はこの人と出会えた幸運を何処かにいるだろう神様に感謝しつつ、知る限りの全てを話した。

この人は多くを語らない。けれど、一体誰がその分析力と戦術眼・戦略眼を疑えるだろうか？

確たる考えが既に頭の中にあるが、私自身に考えさせるために敢えて全てを語らないのだ。

私が答えを導き出せるギリギリのヒントを置いて… 流石にソレくらいは私にだって分かる。

そしてあの人は、勝利に焦る私に対して軽く微笑みながら私の間違いを優しく諭してくれた。

「その時は『例のモノ』を持ってきつさと逃げてしまおう」  
「……へ？」

「逃げてしまえば誰も追いつけない。どうだ？ 『速い』ってのは得だろう」

ああ… そうだった。何よりも大事なものは、勝利ではなくジュエルシードを手に入れること。

そのために『勝つ』というプロセスを通ることはあっても、目的が逆転してはいけないのだ。

この人と話せば話すほどソレまでの自分の視界の狭さを思い知り、

笑ってしまいそうになる。

いや、事実笑ってしまった。暫くソレが止まらないほどに。

私はなんて小さな所でグルグルと迷走していたんだろう。コレがこの人の視点というコトか。

私の道は前に進む道。目的のために何をどうすればいいか良く考える。うん、もう大丈夫。

そんな私の様子から役割は果たしたと見たのだろう。彼は二、三言葉を残し立ち去っていった。

……

……

……

それから一週間ほどの時間を経て、私はまた公園のベンチに腰掛けていた。あの人を待って。

当然待ち合わせなどしていない。ジュエルシードの件もあり、長時間待てるわけでもない。

それでも構わない。一日のうちの僅かな時間を私が勝手に待つているだけ。それでいいのだ。

たったそれだけのコトで、ジュエルシード探しにも普段以上の意欲が生まれるように感じる。

手元にあるジュエルシードは4つ。けど長らくの間、あの人に譲って貰った2つだけだった。

やっと自分で見つけたと思ったらあの子たちとぶつかり合って、追い払われてしまう始末。

アルフにも消耗を強いてしまった自分がみつともなくて、情けなかった。それもかつての話。

恐らく……私と同じモノを求めるあの子たちとは、今後も幾度と無くぶつかり合うのだろう。

全員、侮れる存在ではない。特に、砲撃魔法を得意とするあの女の子…… 凄い才能だった。

それでも私は負けない。全てを駆使して戦場を支配すべく立ち回って、目的を果たしてみせる。

彼らを侮っているわけではない。自身を過信しているつもりもない。ただ、それが全てだから。

……彼らとは、温泉宿付近の森の中でジュエルシードを封印し終わった後に再戦を果たした。

あの人が示してくれたとおり、逃げに徹しても充分目的の最低条件は果たせたことだろう。

けれど、いつかは立ち向かわないといけない。いずれ退くことがあってもソレは今じゃない。

そう考えた私は、互いのジュエルシードを1個ずつ賭けての決闘を彼らに挑むことにした。

やはり、前に戦った時よりも更に強くなっていた。少女が、自らの適性を自覚したのだろう。

以前の私たちを退けた役割分担で、苛烈な攻めを仕掛けてきた。ソレこそが私の狙い通り。

そう、受けるだけならさして難しくない。まずは私に目を惹き付け、アルフに隠れてもらう。

そして退くと見せかける。使い魔は思った通り優秀な司令塔ではあるが、果断さには欠ける。

残る（恐らく）魔導師になって間もない少女に、的確な判断を求めるのは酷というものだ。

（経験の浅さを匂わせつつ、驚異的な伸びを見せる少女に才能格差を感じずにはいられないが…）

……そうなれば彼らの連携は乱れ、自然、戦術はフォワードの少年の独断によるモノとなる。

誘いこみが成功すれば“昼から潜伏していた夜の森の中”…という環境は私たちに味方する。

あとは一人ずつ、私たちを認識する間もなく戦闘不能にすることはそう難しくはなかった。

警戒し誘いに乗らなかつたとしても、闇に乗じたヒット&アウェイを仕掛けようと思ったが…

なにせよ無難に勝利を収めることに成功した。一夜でジュエル

シードを2つ手にしたのだ。

そうそう何度も渡れる橋ではないが、初見ということもあり勝利の天秤は私たちに傾いた。

問題はその後起こった。立ち去ろうとする私の背に向けて例の砲撃少女が声をかけてきた。

「待って！ ……名前、あなたの名前は？」

「……フェイ」

『あ、名前っていえば… フェイトって “アイツ” にまだ名乗ってなかったっけ？』

「……………」

別段隠すことでもないと言乗ろうとした私に対して、アルフが念話を飛ばしてくる。 ……え？

「フェイ、ちゃん？」

「あ、いや、違う… ちょっと待って」

小首を傾げる少女に少し待って貰って、暫し考える。幾ら私でもそんなコトは… あ、あれ？

『アルフ… ひよつとして私、凄く失礼？』

『いや、知らないよ。まあ、“アイツ” はそんな小さなコト気にしないんじゃない？』

「小さくないよー！」

「ええっ!？」

思わず怒鳴ってしまった。砲撃少女を驚かせてしまった。少年も使い魔も目を丸くしている。

「ごめんなさい。名前については少し事情があつて… また今度お願いします」

「お、おう…」

「領かないですよ、刀真くん！ フェイちゃんも、どういうこと!？」

「お、落ち着こうよ… なのは」

私が謝罪とともに頭を下げると、少年は頬を掻きながら困ったように応じる。もう回復した？

長期戦は不利かもしれない。やはり早めに決着を着けられて良

かった… 心からそう思う。

一方、収まらないのは少女のほうだ。使い魔に宥められているが、中々落ち着けないみたい。

悪いコトをしたと思う。…私、フェイちゃんではないのだけど。次回、訂正できるといいな。

「ともかくその件は、次回縁があったら… というコトでよろしくお願ひします」

「なんだか丁寧かつ遠回しに断られたよ!？」

何故か勝った筈なのに逃げるようにしてその場を立ち去る私。居た堪れない気持ちになった。

けれど、仕方がない。仕方がないのだ。まずは“あの人”に自己紹介をしてからでないと。

別にあの子たちが嫌いというわけではないけれど、まず一番尊敬する人に自己紹介をしたい。

でも、あの人に“フェイト”と呼ばれたら… お父さんやお兄さんってこんな感じなのかな？

「~~~~ッ!」

ニヤけそうになる顔を引き締めつつ上げた時、目の前には見覚えのある銘柄の缶珈琲があった。

「……久し振りだな。一つ、どうだ？」

「……」

口をパクパクしながら頷く。“あの人”がいた。いつの間に？

気付かなかった？ どうして？

頭の中が真っ白になる中でなんとか缶珈琲を受け取り、小声でベチを勧めるのが精一杯。

お、落ち着こう。落ち着かないと。パニックになったら脱落してください。冷静さこそ武器。

「あ、その…」

「ん？」

キチンと言わないと、フェイト! “私の名前はフェイト・テスト

ロッサです”と、この人に。

「〃例のモノ〃、自力で2つ手に入れました！ 1つ手に入れてから相手と互いに1つ賭けて…」

「そうか、おめでどう」

……ダメでした。緊張に負けるなんて。母さん、ごめんなさい。フエイトは弱い子でした。

「しかし、ふむ… 思ったより長引いているな。コレは当初の予定通りなのか？」

「いえ、本来はもっとスムーズに集まる筈だったのですが調査が想像以上に難航して…」

「なるほど。……集めたモノはどうしている？」

「全て私が持っています。全部集めるまでは…」と」

「ソレはあまり感心しないな」

「ど、どういうコトでしょうか？」

難しい表情と共に、彼は私の行動に対し疑問符を投げかけてくる。一体どういうことだろう？

「ある程度ごまめに親御さんに届けるべきだろう。……理由は幾つかあるが」

「………」

「取り扱いは親御さんの方が詳しいだろう。ソレに調査中に何があるかは分からない」

「あっ……」

言われてみればその通りだ。互いに応じた決闘といえども、負ければ何があるか分からない。

ひよっとしたらジュエルシードを1つと言わず、持っている全てを奪われるかもしれない。

いや、ソレならまだ良い。或いは、拘束されて母さんに類が及んでしまうかもしれないのだ。

「どうやら分かったようだな」

「……はい」

この人は凄い。いつも二手先、三手先を読んで、私が足りない理解をそつと指摘してくれる。

けれど、母さんが私に下したのは、ジュエルシードを全て集めてくるように」という命令。

私はソレを裏切ることになってしまう。……失望されるのはいい。でも、悲しませるのが辛い。

「……悩みがあるようだな？」

「あ、いえ……」

暗く沈んでしまった私の表情を見取ったのだろう。気を使わせてしまった。自分が情けない。

「大した役には立てないが、日頃世話になっている恩もある。……出来る限り力になろう」

大した役には立てない？ 日頃世話になっている？ どういう冗談だろう。全く、この人は……

「それでは、聞いてくれますか？」

「……ああ」

渡された二本目の缶珈琲を手で弄びながら、私はこの人に母さんと自分の関係について話した。

「なるほど…… 家族問題、か」

「……はい」

流石にこの人でも、家族については難しいかもしれない。なにせ、この人が既にご家族から……

「不器用だな、二人とも。それ故に愛がすれ違う…… 何処の家庭も同じ、というコトか」

「……え？」

や、やっぱりこの人にも分かるの？ アルフも信じてなかった、母さんの不器用な優しさが。

「でも……」

「ん？」

「貴方には何かが見えているんですね？ 私たち親子の新たなきつかけとなる、何かが！」

「……」

縫りつくように…… いや、実際縫り付きつつこの人の答えを待つ。

その時間が永劫に感じる。

「……ああ」

肯定を以て返される。信じられない。こんなコトがあつていいのだろうか？ ならば、私は……

「なら、お願いします！ どうか、私と母さんを……」

「オレが示す方法はいわば劇薬。確実に効果があるとは言えず、悪い方向に転ぶかもしれない」

「構いません！ いえ、むしろ望むところです。例え1%でも可能性があるなら……」

「……」

充分過ぎる。それにもし失敗しても、私の頑張りが足りなかっただけ。何度でも挑んでみせる。

「決意の程は分かった。ならばオレも全力を尽くそう。……少し厳しいかもしれないぞ？」

「是非お願いします！」

私はこの人の課した特訓を受けることになった。

「では、まずはオレをその家族の人だと思つて帰宅の挨拶を試してみろ」

「はい！ ……ただいま帰りました、母さん」

「……30点だ」

「そんな……?!」

「言つておくれが200点満点でだ」

「……はう」

特訓は厳しかった。それでも諦めるわけにはいかない。それこそが私の願いだつたのだから。

有意義な時間ながら一日ではとても終わることが出来ず、何日か公園に通うことになった。

ジュエルシード探しをアルフに押し付ける形になったが、嫌な顔一つせず引き受けてくれた。

この人にもアルフにも支えられて、私は本当に恵まれている。……それに、きつと母さんにも。

「家族……特に親子について、みんな忘れがちなコトが一つある」

「忘れがちなコト、ですか？」

「ああ。……子は子として生まれる、けれど親は親として生まれるわけではない」

「……なる、ほど？」

「もつと分かり易く言うのだな。キミの親も20年、30年前はキミと同じ子供だったんだ」

「母さんも…昔は、私と同じだった？」

「だから上手な親もいれば、下手くそな親もいる。親も完璧じゃないんだ」

「親も…完璧じゃない」

そんなコト、考えたこともなかった。私にとって、母さんは母さん。ただソレが絶対だった。

でも私は、知らない間に母さんに対して“母さん”という壁を作っていたのかもしれない。

壁といえば、こんな話もあった。この人の話は私の知らないことばかりでとても多くを学べた。

「もつと甘えて我侷を言つてやれ…ですか？」

「……ああ」

「でも、そんなコトをしたら母さんをガツカリさせてしまいませんか？」

「むしろ逆だ。手のかからない聞き分けのいい子ほど、親御さんは壁を感じて寂しいのさ」

「えっ？」

「子供が甘えたいように、親も子供に甘えて欲しい。だから“ソレ”が、子供の仕事だ」

「でも、甘えるってどうやったら…」

「ふむ…親御さんに褒めて欲しいか？」

「はい！」

「頭を撫でて欲しいか？」

「はい!!」

「だったら“そうしろ”って駄々をこねてみる。キミはいい子だが、

いい子すぎるのが難点だ」

私の頑張りがまだ足りないから母さんは振り向いてくれない：そう思ってきたのだけれど。

今から考えてみれば、私が頑張れば頑張るほど、母さんは辛そうにしていたかもしれない。

ううん、頑張り方が間違っていたというコトなのだろう。幸せって、きつともっと簡単なんだ。

そして今日、私は時の庭園：母さんの下へとやってきた。隣には心配そうに見つめるアルフ。

「すう… はあ…。ゴメンね、アルフ。貴女まで付いてこさせちゃつて…」

「ううん、そんなの良いんだよ。でも、やっぱりかなり緊張してるみたいだねえ？」

…ソレはそうだろう。今迄こんなに緊張したコトはないというくらいに私は緊張している。

それでも私はただ前に進む。バルディツシユに結びつけた「ボン太くん」に勇気を貰って。

コレは特訓の最終日に、あの人から「お守り代わりに」と貰った世界にたった一つの宝物なのだ。

「その… ボン太、だっけ？ リスのぬいぐるみをくれるなんて小粋じゃないか、アイツ」

「編みぐるみって言うらしいよ。あと、『ボン太くん』だよ。『くん』を付けようね？ アルフ」

無言でコクコクと頷くアルフ。私、そんなに怖い顔をしてただろうか？ ……反省しないと。

あと個人的にボン太くんはネズミだと思う。今度、「あの人」に聞いて確認をしてみよう。

扉の前でアルフと別れて、母さんとの対面を果たす。さて、此処から特訓の成果を見せないと！

「ジュエルシード探しは」

「ママ、ただいまー」

「……………」

「……………」

沈黙が痛いのが、逃げるわけにはいかない。私はまだ「あの人の」教えの全てを出し切っていない。

「コホン… 一体どういうつもりかしら、フエイト?」

「……………」

その問いかけに対して、私はプイツと顔を逸らして返答とする。  
……ごめんなさい、母さん。

「……フエイト?」

「『おかえり』って言ってくれないと、返事しないもん」

「ゴフツ!」

「母さんっ!」

何故かいきなり母さんが吐血して倒れそうになった。え? え?

一体、どういうコトなの?

ひよつとして「あの人の」教えをこなすには、まだまだ私の力が未熟だったというコトでは…

いや、母さんは不器用な人だもの… ひよつとして身体が悪いのを隠してた可能性だってある。

「だ、大丈夫。大丈夫だから… その、おかえりなさい。フエイト」  
「…………ツ!」

あの母さんが、微笑みながら「おかえり」って言ってくれた。思わず涙がこぼれそうになる。

けれど、しっかりと笑顔を見せなくちゃ… 母さんを心配させてしまつては元も子もない。

母さんが私に心配をかけさせまいとしているんだ。だったら、私も心配をさせてはいけない。

「うん、ただいま!」

「ええ、おかえり。それでジュエルシードだけ…」

「4つ集めてきたよ。現物をこまめに届けたほうがいいかなって」

「なるほど。それは助か… コホン、たったの4つ。コレは… あまりにも酷いわね」

一度は受け取ろうとしてくれたけれど、自制したのか、厳しい目を  
してそう言い直してくる。

でもコレは仕方のないコトだろう。何故なら、今迄は私が勝手に壁  
を作っていたのだから。

だから私が勝手に歩み寄って私が勝手に甘えるんだ。そう：コ  
レが私の「我侭」なのだから。

「……それだけ？」

「え？ ……フエイト？」

「いっぱい褒めて、いっぱい撫でて」

「あ、え… その？」

「じゃないとジュエルシードあげない。新しいジュエルシードも探し  
に行かない」

「……………」

沈黙が空間を支配する。私も母さんも、互いを見詰めたまま言葉を  
発することが出来ない。

やっぱり、ダメなのだろうか？ 私なんかじゃ、母さんの心を溶か  
すことは出来ないのかな？

自分が情けなくなつて、涙が溢れてくる。ごめんなさい、あんなに  
色々教えて貰ったのに…

「……ダメ、なの？」

涙が止まらない。母さんもきつと、我侭ばかりの私に嫌気が差して  
しまつているコトだろう。

「……え？」

「仕方ないわね。今日だけよ」

優しい言葉とともに温かい何かに身体が包まれる。え… 嘘？  
母さんに、抱き締められて…

「ああ、さん… 母さん、母さん、母さん！ うわあああああああ  
んっ!!」

泣きじやくる私の背中を、母さんは優しくそつと撫で続けてくれ  
た。小声で何か呟きながら。

「大丈夫、浮気じゃない。だから違うのよ？ 目的のために人形に幸

せな夢を見せてるだけで…」

それから、一杯お話をして一杯一緒の時間を過ごした。そう、今までの時間を埋めるように。

持ってきたケーキは抱き締められた時ダメになったけれど、母さんが料理を作ってくれた。

そして一緒にお風呂に入って、一緒のベッドに入って、私が寝るまでずっと話をしてくれた。

……

……

……

翌日、私はソレまでのアルフの調査から絞り込んでいたジュエルシードの捜索を行っていた。

広域探査魔法で位置を特定し、封時結界を展開してからジュエルシードの強制発動を促す。

普段ならばコレだけの大規模魔法を重ねれば、体力を著しく消耗して動けなくなっていた筈。

「けれど、今の私ならこの程度…」

無論、難なくジュエルシードの封印に成功する。コレで一個はジュエルシードを確保できた。

後はすぐに退いてもいいし、此処であの子たちを待つて決闘を仕掛けてみるも良いだろう。

母さんに目一杯甘えさせて貰った今の私なら、たとえ誰が相手であろうと負ける気はしない。

でも、やっぱり「あの人」は凄い。いとも簡単に、私たち親子の壁を取り去ってしまうなんて。

「ところでさ、フェイト」

「どうしたの、アルフ？」

「アイツにはもうちゃんと自己紹介を済ませたんだよね？」

「……あ」

思わぬ自分の失態に私が硬直すると同時に、あの子たちの姿が見えてきた。ど、どうしよう。

「フェイちゃん！ この前の約束、覚えてるよねー!?」

「待て、高町！ 俺が言えたことじゃないけれど、あまり突っ込みすぎるな!」

使い魔の子を肩に乗せたまま、凄いスピードで飛んでくる。うん、やっぱり凄い才能だと思う。

「……だつてさ。どうするの？ フェイト」

「……逃げよう」

合わせる顔のない私は、その場で身を翻して全速力での逃走を決意した。……ごめんなさい。

「フェイちゃん！ なんで逃げるの!」

「ご、ごめんなさい！ 次こそは、次こそはちゃんと名乗りますから……」

——逃げてしまえば誰も追いつけない。どうだ？ 『速い』ってのは得だろう。

やっぱり“あの人”は凄い。……きつと、こういう展開すらも予測していたのだろうか。

## 少年と道場の人たち

——ブンツッ! ……ブンツッ! ……ブンツッ!

皆様ご機嫌よう、俺です。久しぶりのような気もするけれど、きつとそうでもないよね?(汗)

もし長いことお待たせしてしまったとしても、ソレはこの悠久なる星々の営みに比べれば…

きつと、瞬き程の刹那にも満たぬ時間なのではないかと愚考するしだ: はい、ゴメンナサイ。

——ブンツッ! ……ブンツッ! ……ブンツッ!

え? さつきから何をしているのかって? よくぞ聞いてくれました。素振りですよ、素振り。

鍛錬に目覚めたわけでは断じてない。そんなことは賢明な諸兄には既にご理解のことだろう。

翠屋のウェイターさんに(半強制的に)誘われて、何故かオレは道場に通うことになったのだ。

——ブンツッ! ……ブンツッ! ……ブンツッ!

この道場で、オレは多くの知己を得た。人外じみた動きをする翠屋のアルバイトっぽい兄妹。

ちやつかり系少女や名無しの少年といった級友の2人など。…: うん、あまり多くないね。

ていうかこの道場は経営とか大丈夫なんだろうか? その4人ともう一人しか見たことないよ。

「お、やってるね」

やってきた。その「もう一人」である翠屋のウェイターさんが。何故この人がここにいいのか。

「どうも、お邪魔しています」

「いや、こちらこそ素振りの邪魔をしてしまったね。どうぞ、続けてくれて構わないよ」

だがそんなことは口に出せないチキンなオレ。翠屋での買い物気分不味くなったら困るからね。

軽く会釈だけ返して、素振りを続ける。適当なところで切り上げて掃除したらケーキ買おう。

いつもは挨拶を交わしたらずぐ立ち去る筈のウェイターさんが何故か留まりこちらを見ている。

一体どうしたというのだろう。……なんかジーつと見られてる。時折考え込んでいるようだ。

翠屋のレジ係である桃子さんと良い仲っぼいので、まさかシヨタに目覚めたわけでもあるまい。

仮にシヨタに目覚めたとして、悠人少年みたいなアレな風貌の子より名無しの少年に迫る筈。

つまりこの人がいたいけな少年を狙うホモだったとしてもオレは安全ということだ。……多分。

「桜庭くん、キミは本格的に稽古をしてみる気はないかな？」

そんなちよつぱり失礼なことを考えているオレに対して、この人は爆弾発言を投げかけてきた。

落ち着け、稽古と言っても素振りのなサムシングかもしれない。あ、筋トレは嫌ですけどね。

そう、組み打ち稽古という名前のデス・ゲームばかりが稽古じゃない。当然のことじゃないか。

確認をしろ。そうすれば、オレは笑顔でいられる。何も問題は無い。そう、何も……

「それは、こちらのぐい兄妹がされているような組み打ち稽古では……」  
「ああ、勿論そういうった物も含まれるだろうね」

Oh…… 神は死んだ。いや、まだだ！ まだ諦めるには早いぞ！  
そう、ここで全力回避だ！

「折角のぐい提案ですが、自分はまだ素振り一つも満足に出来ない未熟者です。故に辞退を」

「ふむ……」

まあ、そもそもこの責任者はあの兄妹…… 正確には「キョーちゃん」なるお兄さんのみだ。

若い道場主ということで門下生が少なく大変なのかもしれない。

苦労しているのだろう。

きつと職場上の先輩であるウェイターさんに頼まれ、嫌々オレを引き取ってくれたのだろう。

何度が受講料を納めようとしたが「気にしなくていい」の一点張りを受け取ってくれなかった。

出来た人だ。あるいは、ウェイターさんの紹介ということだけでそれだけ気を使っているのか？

だからといって、それにオレまで便乗してしまつて彼抜きで勝手に決定して許される筈もない。

オレのここでの役割は、素振りと掃除のみ。それだけは譲れない。……譲つてはいけないのだ。

主に悠人少年のボディの安全上の理由で。

「その決意を秘めた瞳…… ただの謙遜、というわけでもなさそうだね」「ええ」

謙遜じゃなくて保身です。死にたくないんです。そんな切なる想いを瞳に込めて訴えかける。

「分かった。そうまで言われては引き下がるしかない。……惜しいことだとは思うが、ね」

「……申し訳ありません。ご好意には感謝しています」

これは本当だ。自分が道場に放り込んでおしまいではなく、ちよくちよく様子を見てくれた。

オレが素振りしかやってないと見るや、こうして声をかけ次のステップを示唆してくれた。

やつてることはキョーちゃんへのパワハラだが、こちらに対しての親切心には感謝しかない。

ただ、適当に素振りをして掃除でもして帰りたいオレにとってはありがた迷惑だったただけだ。

……うん、オレって本格的に屑だね。ちよつぱり自己嫌悪に陥つてしまいそうになる。

「そんな顔をしないで欲しいな。そもそも無理に誘つたこちらが悪かつたんだ」

「いえ、あなたのせいでは…」

「代わりと言ってはなんだが、素振りの仕方を教えよう。それくらいなら構わないだろう?」

「え? あ、はい」

自己嫌悪が顔に出てたようで心配されたが、そのまま何故か素振りを指導されることになった。

何を言っているかわからないだろうがオレも何が起こったのかわからぬ。…ってヤツだね。

押しの強い人つてことは分かった。とはいえ減るもんじゃなし、適当に付き合えば満足する筈。

——ビュオンツ!

「……そして最後に残心だ。加えて残心後に、打ち筋の反芻はんすうをしよう」  
「なるほど」

そうこうしているうちに実演付きの解説は終わりを迎えていた。素振り一つとっても大変だな。

「じゃあこれを1セットとして… そうだな、まずは一日五百回から。いいね?」

「アツハイ」

良くないが。ちつとも良くないが。けど冷静に考えたら一日一万回感謝の正拳突きよりマシだ。

もともと此処に来て素振りしかすることがないのだ。だとすれば、五百くらい平気だろう。

むしろ五百回の素振りが終わったら帰っていいってことじゃね? 逆にありがたいくらいだね!

……

……

…

そんなふうを考えていた時期がオレにもありました。

——ビュンツ! ……ビュンツ! ……ビュンツ!

「ぜえ、ぜえ… ふう…」

結構キツイです。あれから数日間、教えて貰ったとおりに素振りを

しているがマジでしんどい。

木刀は結構重いいし、柄の部分は汗で滑るし、残心と反芻まで加わるから地味に時間かかるし。

つまりどういうことかって言うと、まあ、アレです。ママができて痛い。潰れそうで痛いです。

ていうか潰れた。さっき潰れた。痛いよ。オマケに血で木刀が更に滑る。もうやってらんねえ！

「桜庭くん、調子はどう？」

「……見ての通りです」

眼鏡美少女な妹さんが声をかけてくれる。普段ならばその笑顔に癒やされていたかもしれない。

しかし今のオレはそんな余裕がある状況ではない。頼むから他の人のところに行つて欲しい。

具体的にはキョーちゃんなるお兄さんのところとか名無しの少年のところとか。翠屋でもOK！

とにかくオレなんかは構わずそつとしておいて欲しい。指導しないなら他に適役がいますよね？

キョーちゃんほどじゃないにしても、割りと人外一步手前の動きを見せる名無しの少年とか。

今や道場の外の庭に場所を移して、ひっそりと素振りを続けているオレへの嫌がらせだろうか？

このままじゃ皆さんの目を盗んでサボれないじゃないか！ ……屑とか言うなし。自覚してる。

「つて、すごい怪我してるじゃない！ 血塗れになってるよ!?!」  
「ママが潰れました」

とかなんとか考えてると、手の怪我に気付かれてしまった。といってもママが潰れたただけだが。

ちよつと指導通りに素振りしただけでこんなに怪我をするとは、うん… この貧弱ボディ。

はっはっは… いや、如何にコレまでの素振りがなつてなかったかってことですね。ホントに。

「と、とにかく道場に上がって！ 今日のところは見学！ あ、そのままに消毒しないと！」

「お、おう…!?!」

手を引いて連れて行かれそうになる。痛い痛い痛い… ちよ、マジで痛いから引つ張らないで。

あれ？ でも待てよ？ 見学？ ってことは合法的にサボれるってことなのか？ ラツキー？

イヤツツホオオオオオオウ！ そうと決まれば道場に向かいましょう。ハリーハリーハリー！

「ヤダって言ってもダメだからね？ 今日私や恭ちゃんの稽古を見学すること！」

「……………」

ピタリと足が止まる。危ない危ない… これはとんだ孔明の罠だったぜ。どういうことかかって？

つまりこういうことさ！

『ただいまキョーちゃん。それじゃ組み打ち稽古をしようか』

『…………カラテだ。カラテあるのみ』

『あ、はい。見学させていただきます…?』

(中略)

『これで大体分かったよね、桜庭くん。〃見学〃してたなら当然だよね?』

『え？ アツハイ』

『じゃあ今からやってみよつか。大丈夫、(生き残れば)きっと強くなるよ！』

『ドーモ。桜庭〃サン。キョーちゃんです』

『アイエエエ！ ナンデ!? キョーちゃんナンデ!?』

『銀髪オツドアイ死すべし。慈悲はない。イヤーツ！』

『グワーツ！』

アワレ、桜庭〃サンはナゾナゾめいた邪悪なハイクを残し爆発四散！ インガオホー！

…………あかんやん。…………死んでまうやん。…………死にたくないよう(震

え声)。

オレはいつの間にもニンジャでスレイヤーな世界に紛れ込んでしまったのだろう。嘆くしかない。

いや、死んでたまるか！ やらせはせん！ やらせはせん!! やらせはせんぞおー!!!

「桜庭、くん？」

気が付けばオレは妹さんの手を振り払っていた。……この体、なんて己の気持ちに正直なんだ。

妹さんはなんかショックを受けたような顔をしてる。そりやそうだよな！ 親切心だものね！

単にその親切心に応えるには悠人少年のボディが貧弱過ぎただけだからね！ ごめんね妹さん！

「その、オレなんかのために其処まで考えてくれるのは嬉しいです。……けれど」

「けれど？」

考えろ、考えろ、考えろ… 上手くフォローをするんだ。こう、ふわっと口先で誤魔化すんだ。

いつそ手の治療だけ受けさせて貰うか？ 却下、なし崩しにそのまま見学ルートに入りそう。

つまり、この手の怪我を押しでも素振りをしなければいけない理由がある。ソレを口にする！

「痛くなければ覚えませぬ」

「……はい？」

あかん(白目)。ちよつとコレどういうことよ！ 痛みで記憶するドMになつてんじゃねえか！

別に痛いのが好きってわけじゃねえよ！ ソレだったらとつとと組み打ちに特攻してるわい！

えーと、えーと、えーと… よし、ちよつと良い話風に持って行くか。ソレで納得してくれ！

「えと、強さだけを求めるのが武道の真髄… ではないと思います」  
「それは… うん」

「どんなに強い人でも、事故や病気であっさりと命を落とすかもしれないよ」

「……うん」

あれ？　なんか落ち込ませちゃった？　いかん、この話題は地雷だったか！　シフトチェンジ！

なんか適当に心身の成長のためにこれやってるんで気にしないでください的に言っておこう。

うん、その方向で。

「オレが武道を学んでいるのは心を鍛え人の痛みを知るためです。その第一歩なんです、これは」

「そっか…　うん、そうだったんだ」

よし、軌道修正完了！　結局ドM疑惑を払拭できてねえよ！　何故こうなったし！　何故ツ！

このままじゃ「銀髪」「オッドアイ」「無口」「クール」「ドM」で属性過多になるだろうが！

てんこ盛り過ぎてやべえよ。絶対に浮くよ。既にクラスで浮いてるよ。聖帝十字陵関連とかで。

「桜庭くん、変わったよね」

「フアツ!？」

確かにいきなりドM宣言したら「おまえ、変わったよな…」って言うたくなる気持ちも分かる。

分かるけれども！　分かって欲しくなかった！　どうしよう、このままじゃ悠人少年の正体が！

間違はなく「いたいけな少年に化けた妖怪め。成敗してくれる!」  
「グワーツ!」の流れだ…

……いかなでしょ。最悪オレがどうかなくなったとしても悠人少年まで巻き添えにするのはNGだ。

誤魔化せ！　全力で誤魔化すのだ！

「人は生きている限り、死の直前まで幾らでも生まれ変わることが出来る」

「……生まれ、変わる」

よし、乗ってくれた！ あとはこう、ふわっといい感じっぽく中身の無い会話をして誤魔化す！

一瞬、「支えてくれる人がいればオレだって成長しますよ、猿渡さん」と言いそうになったぜ。

落ち着け、ミストさんはいい。そもそもぼっちだろ。オレは友達が少ない通り越して皆無だろ。

「現状を受け入れるのも変えていくのも己次第。それが、人の可能性だとオレは思います」

「そっか… うん、そうかもね」

「勿論きっかけはあります。貴女を含めた周囲の人々との交流がそうであったように」

「あはは、持ち上げ過ぎだよ。でも、そっか… うくん、私も変われるのかな？」

変わったことは否定しないのが大事だ。これにより今後は多少の誤差は受け入れられるからだ。

勿論、変わったとすれば貴女のせいでもあるんですよ」と釘を差すのも忘れない姑息なオレ。

「ええ、きつと」

「あら、断言しちゃっていいの？」

指示代名詞を多用して話の輪郭をぼんやりとさせて、受け取り手の都合の良い解釈を引き出す。

そして彼女が望む答えを返してそつと背中を押す。フハハハハ！

イージーミッシヨンだな！

「無論。オレですら、〃そう〃なんですから… 貴女に出来ない理由がない」

「フフツ… 説得力あるね。…よし、私も恭ちゃんへのアタック、頑張ってみようかな」

小声の呟き。どうやら妹さんはキョーちゃんへのアタックに本腰を入れることを決心した模様。

一つの道場において最強は常にたった一人… 即ち、本気で首を獲りに行く、ということか。

名無しの少年も中々のワザマエだが、キョーちゃんや妹さんに比べると一歩劣る。仕方ないね。

むしろ小学生で普通についていってる時点でおかしいんじゃないかね。のってオレなんかは思うしね。

「あー！ い、今の独り言… 聞いちやった？」

「独り言なんて呟いてたんですか？」

「あ、ううん！ 聞こえてなかったならいいの！ じゃあね、色々ありがとう！」

「はい、それではオレは素振りに戻ります。……話を聞いてくれてありがとうございました」

真つ赤になつて誤魔化す。分かつてるさ、妹さん。物騒な決意表明を聞かれてたら困るよね。

ここで口封じなんかされたらたまつたもんじゃない。オレは何も聞かなかった。いいね？

オレは素振りに戻る。妹さんは目標が出来た。キョーちゃんは強敵と戦える。完璧じゃないか！

——ズキンッ！

「あぎゃー」

……この手の痛みは完璧じゃないな。まあ、いいさ。これくらいは必要経費さ（涙声）。

……

……

……

それから暫く。金髪少女と謎の特訓をしたり、編みぐるみの試作品をあげたりと色々あった。

親御さんと上手く行つてないっぽいので、甘えればいいんじゃないかね？

とか適当に言つてみたが。

果して上手く行つただろうか？ 調子に乗つて萌えまで叩き込んだのは失敗だったかもしれない。

まあ、練習中の編みぐるみで偶然出来た試作品こと『ボン太くん』をあげたので許して欲しい。

「……可愛い。コレ、なんですか？」

「いい質問だ。ボン太くんはボン太くん… それ以上でもそれ以下でもない」

「すまないがオレにもソレ以外のことは分からないのだ。だから聞かないでくれ、金髪の少女よ。」

「というか、あんな素人が作ったような編みぐるみを渡されて彼女も迷惑だったかもしれない。」

「まあ、邪魔だったらさっさと捨てているだろうし気にすることもないか。機会があつたら謝ろう。」

「一方、素振りの方であるが…」

「手の怪我は絆創膏とかだと滑るし、包帯とか巻いてみたらある程度は楽に振れるようになった。」

「その代わり包帯を変える時は地獄の苦しみを味わうけどね。いや、オレはDMじゃないから。」

「マメができて潰れて、マメができて潰れてのエンドレスワルツに慣れる頃、素振りにも慣れた。」

「——ビュウンツ！ ……ビュウンツ！ ……ビュウンツ！」

「最近、美由希が妙に迫ってくるんだがなにか」

「知りませんね」

「おかげで、素振りをしながらキョーちゃんと話ができるほどになった。ていうか邪魔するなし。」

「しかし、おまえと話をしてから」

「知りませんね」

「——ビュウンツ！ ……ビュウンツ！ ……ビュウンツ！」

「では、なにか心当たり」

「心当たりもありませんね」

「すまぬ、キョーちゃん… オレは一小市民だから、あの件のことについては何も喋れないのだ。」

「妹さん直々の口止めをどうしてオレ如きが逆らうことができようか？ チキンと言わば言え。」

「オレはあの一件について何も聞いていないし何も知らない。その」

姿勢を崩すことはないだろう。

「……そうか」

「はい、お役に立てなくて申し訳ありません」

——ビュウンツ！ ……ビュウンツ！ ……ビュウンツ！

「いや。こつちこそ、邪魔をして悪かった」

「いえ、ろくなお構いもできず」

キョーちゃんは道場に戻っていった。えーと… 今ので何回だっけ？ 確か397、だっけな。

さて、残り103回。パパートと終わらせるかと思ったところで入れ替わりに現れる人の姿。

オレの手のひらにエンドレスワルツの痛みを刻んでくれた 元凶

“こと、ウェイターさんである。

「どうも、こんにちは」

「こんにちは。ああ、そのまま続けてくれて構わないよ」

「それではお言葉に甘えまして… 先だっではご指導ありがとうございます  
いました」

——ビュウンツ！ ……ビュウンツ！ ……ビュウンツ！

パワハラ疑惑がオレの中で根強いウェイターさんであるが、親切心からの指導は感謝すべきだ。

「いや、それを雨の日も風の日も休まず続けているキミには頭が下がるよ」

「……せっかく教えて貰った以上、そうすべきだと思いましたが」

むしろ休んで良かったのか！ オレはなんでクソ真面目に毎日毎日通ってたんだ！ アホなの？

いやしかし、休んでいいならこれから適当に手を抜いていけるんじゃないか？ うん、それで。

「人の心を汲み取るのは正しい行為だ。これからもそういった気持ちを忘れずにね」

「……はい」

——ビュウンツ！ ……ビュウンツ！ ……ビュウンツ！

はい、アウトオー！ 逃げ道が塞がれましたよ、ド畜生！ 思わず

剣を握る手に力が籠もるぜ。

とか何とか思っていると、ウェイターさんが素振りをしているオレをまじまじと見詰めてきた。

だ、大丈夫だよな？ 悠人少年みたいな子には、普通、見向きもしないよね？

「……うん、大分『型』が出来てきたね」

「そうですか」

よし、セエーツフ！ 良かった良かった。オレの心配は杞憂だったらしい。そりゃそうだよな。

自分が指導した少年がすっかりやれているのだろうかってのは、まあ気になって当然だよな！

失礼な妄想に怯えててすみませんでした！ 神様仏様ウェイター様、オレのためにありがとう！

「よし、それじゃ体に覚え込ませるために今日から一千回いってみようか」

「フアツ!？」

「あ、ごめんよ。物足りなかったかな？」

「いえ、一千回でいきましよう。何事も基礎は大事です」

神は死んだ！ 死んだのだ!!

一千回の素振りが終わり、フラフラとなったオレは最後の気力・体力を振り絞り道場に向かう。

「フアー… ブルスコ… フアー… ブルスコ… フアー…」

それもこれも掃除をするためだ。というか、掃除できなかつたら素振りをしている意味が無い。

って、おや？ なんか道場が綺麗に掃除されているような… ま、まさか既に他の誰かが!?

オレがこの道場に来る目的の99%は掃除と翠屋なのに、これが人間のやることかよおおお!

「ど、どうしたの？ 桜庭くん」

「モルスア!？」

orzのポーズを取っていると妹さんに見られた… オマ

ケに変な声をあげてしまった。

変な人だと思われてしまったらどうしよう。……「今更」という声は聞こえないことにする。

だがここで妹さんに会えたのは僥倖。彼女ならば、この道場で何があつたのか知っている筈だ！

「実は道場が綺麗なので床を調べていました」

「あ、それ私が掃除したんだよ」

「ごん、おまいだったのか。」

ドヤ顔で胸を張りつつ言つてのける妹さんをぺちぺち叩きたくなる。殺されるからしないけど。

「いつも桜庭くんに掃除させてちゃ悪いからって、お母さんが」

「なるほど」

妹さんのお母さんか……。きつと玄海師範みたいな古強者なのだろうな。会ったことはないけど。

まあ、今日は掃除しなくていいってならさっさと帰るか。流石に素振り一千回は疲れたしな。

ママが潰れなくなつた分、包帯の消費が減つたのはありがたい。まだ風呂に入ると染みるけど。

「お手数をお掛けしました。それではお先に失礼させていただきます……ん？ それは？」

そこでオレは初めて妹さんが手に何かを持っていることに気付く。なんだろう？ 皿か何かかな？

「あ、えつと…… 恭ちゃんのために料理を作つてただけど、お腹減つてないみたいで」

ふくん……。そうなのか。妹の手作り料理を食べられないとは、キョーちゃんも間が悪いことだ。

とはいえオレには関係のない話か。作ってくれる相手がいるわけでもなし。友達すらいない。

成り行きで食べた八神のご飯は美味しかったな……。いかんいかん、思い出したら腹減つてきた。

——ぐう……

「あ、桜庭くん。お腹減ってるの？ もし良かったら、これ、食べる？」  
「そんな、悪いですよ。ただでさえお邪魔してる身なのに」

人様のために作った料理を横取りするのもな。今食べられずとも後から温め直せばいいだけだ。

そうした方が、キョーちゃんも妹さんもみんなハッピーのはずだ。オレが入る余地などない。

妹さんは優しい性格だから腹を鳴らしたオレに対して気遣ってくれるが、そつと流して欲しい。

「美由希、あまり無理を言うもんじゃない」  
「あ、恭ちゃん！」

すると何処で話を聞いていたのか、キョーちゃんが割り込んでくる。さて、帰る準備をするか。

「ご兄妹の語らいの時間が一段落したら一言挨拶だけ残して立ち去るでしょう。よし、正座待機。」

だが、いつまで経っても会話が終わる気配を見せない。むしろヒートアップしてるようである。

「いや、これから母さんの晩御飯があるんだから： 料理は次の機会にでも」

「もう！ またそんなこと言って！ この間もそうだったじゃない：  
ぐすつ」

「参ったな…」

「恭ちゃんが食べないんだったら、コレ、捨てちゃうんだから」

あらら… 兄妹喧嘩で互いに引くに引けなくなってるのかな？  
でも捨てるのは勿体無いよな。

「あの～…」

「あ、桜庭くん。ごめんね。みつともないところ見せちゃって： 今日はお疲れ様でした」

「騒がせてしまつてすまないな。分かつてると思うがおまえが気にすることじゃないからな」

オレが声をかけると兄妹喧嘩を中断して、こちらに向き直り気遣いの言葉を投げかけてくれる。

うん、やっぱりいい人たちだ。これはオレが一肌脱いで仲裁役をし  
てもバチは当たるまいさ。

お世話になってる身でありながら食い意地を見せるのはアレだが、  
どうせ恥など掻き慣れてる。

「いや、どういった料理なのか気になっちゃいまして… 良かったら  
教えてくれませんか？」

「あら、桜庭くん。気になるのかな？ どうしよっかなあ〜」

「おい、美由希」

「もう！ 恭ちゃんも黙っててよ！ さて、桜庭くん… そんなに知  
りたい？」

途端に機嫌を治す妹さん。チョロい。そんなチョロさで世間を  
渡っていけるのか心配になるよ。

とはいえ、今この状況に至ってはそのチョロさありがたい。さあ  
ドンドン煽らせて貰おう！

オレ様の口先に酔いな！ ……自分でも恥ずいこと言ったと自覚  
してるんでスルーして下さい。

「もったいぶらないで教えて下さいよ。余計気になるじゃないです  
か」

「フフツ、ごめんごめん。……はい、じゃ〜ん♪」

そう言っ出て出てきたモノは、異臭を放つ物体Xだった。いや、そ  
うとしか表現できないです。

人様の作ってくれた料理をそのように形容するのは失礼極まりな  
いよね。でも、コレはない。

なんで一介の料理にモザイクがかかってるんだろう？ オレの純  
粋な疑問は「そこから」だった。

「What, s t h i s ? (訳：コレは何ですか?)」

「えへへ〜… ビーフ・ストロガノフに挑戦してみました！」

妹さんはビーフ・ストロガノフさんに謝って欲しい。心の底から。  
こんなの絶対おかしいよ。

今日という日に限って名無しの少年は道場に足を運んでいない。  
おのれ、デイケイドオ!!

キョーちゃんに視線を向けると目を逸らされた。この反応……知ってたんだね、キョーちゃん。

……だが待って欲しい。一周回って考えよう。意外と美味しいということも有り得るのでは？

ちよつとだけ見た目と匂いが悪くて、脳の危険信号がヤバイレベルで鳴り響いてるだけで。

多少不味くても死ぬ程ではない筈だ。料理の不味さで誰某が死んだ話など聞いたこともない。

そう思つてビーフ・ストロガノフ（仮）さんに視線を戻す。そうさ、先入観を捨てて観察だ！

コールタールのような色合いで何故か泡立っている液体。皮のついたタマネギらしきもの。

酸っぱさ苦さとヘドロのような匂いが入り混じり、まあ、その……食欲をそそりません。はい。

「……………」

うん、ないな！ 折角出されたモノだが、貧弱な悠人少年のボディが耐えられるとは思えない。

「腹が減つてないならば無理に食べることもない。美由希が勝手に作っただけだからな」

「そうですね。実はオレもお腹が……」

キョーちゃんもこう言っていることだし、作ってくれた妹さんには悪いが……

「そつか…… うん、ごめんね」

わ、悪いが……

「…………ごめんね。お皿、下げるね」

泣きそうな顔のまま、皿に伸ばした手には幾つもの絆創膏が見えた。すまぬ、すまぬ……

——ガシツ！

「えっ?」

「お腹がペコペコだったんですよ！ いやあ、ツイてるなあ!!」

そのまま皿を奪うと、笑顔でそう言った。ああ、すまない『悠人少

年』。オレには無理だった。

呆然としている妹さんを尻目に、オレは零れ落ちそうな涙を隠しつつスプーンを手取る。

さらばだ、ヤマトの諸君。オレはスプーンを物体Xに突き刺し…  
すくい、それをゆつくりと…

……

……

…

「ハッ!？」

……いかんいかん、また落ちかけていたらしい。悪い意味で想像の斜め上の破壊力であった。

まだ戦いは終わっていない。皿の上にはまだ半分以上も物体Xが鎮座しているではないか。

そこに声がかげられる。言うまでもない、先ほどもオレに助け舟を出してくれたお兄さんだ。

「おまえはよくやった。もう充分だ… 命を大切にしろ」

「ちよつと、恭ちゃん!？」

ぶつきらぼうな口調と鋭い目付きから（主にオレに）誤解されがちだが、凄くいい人なのだ。

手が震える。逃げ道があるなら助かってもいいのでは？ なんて甘い考えが浮かんでくる。

だが、オレは震える手を押さえ込み動かないようにすると、ふてぶてしい笑顔を彼に向けた。

「……おかわりをしてしまっても、構わんのだろう?」

「ツ！ おまえ…」

「うん！ 一杯あるからドンドン食べてね！」

キョーちゃんはオレの決意に押し黙り、頷いた。逆に妹さんは嬉しそうに目を輝かせている。

死亡フラグは積み重ねれば逆に死ななくなる。そういうものだと今オレは信じるしかない。

そうとも、死んでしまうと思うから死んでしまうんだ。オレは絶対

生き延びるんだと信じろ！

結論：無理でした。

オレはあの後、妹さんの料理を完食した。味の感想を求められたので正直に不味いと答えた。

アレを旨いと言ったら今後八神の料理に向き合えなくなる。もう次の機会はないだろうが。

それだけじゃアレだろうと色々フォローを試みてみたが、何処まで通じたかも分からない。

そもそも何を言ったのかも臆気だ。こうして自宅まで歩いて戻れたのが奇跡なくらいなのだ。

オレのこの状態はただの自業自得だが、悠人少年のボディを巻き添えにしたのが悔やまれる。

こういったことがないよう、賢明なる諸兄は脳からの警報には素直に従うことにしようね！

玄関に入った処で崩れ落ちた。……どうやら部屋に辿り着くことなく此処で斃れる運命らしい。

「やはり私（の脳の警報）は間違っていないかった……が……ま……」  
——ドサツ……

意識が遠くなる。指先から感覚が喪われていく。そうか……これが、『死』というものなのか。

そのまま、闇に飲まれていつて……

## リリカル少女の悩み

「うにやああああああああああ!?!」

「クツ… 狙いが定められない」

私、高町なのはは聖祥大附属小学校に通う小学3年生。何のとりえもない女の子だったけど…

ある日突然手に入れた魔法の力で、この街のJ<sup>ジュエルシード</sup>Sを封印するために頑張っています。

そんな中出会ったもう一人の魔法少女フェイちゃん。彼女もまたJ<sup>ジュエルシード</sup>Sを集めているみたい。

「レイジングハート！ お願い！ 狙いは最小限でいいから！」

『All right… Divine Shooter』

「させない… バルディッシュュ！」

『Roger… Photon Lancer Multishot』

桜色と金色の光が目映く明滅して周囲を明るく染め上げます。

そんな通常ならば綺麗と目を奪われるような光景でも、今の私の目にはロクに入ってきません。

って、わきやあ!?! い、今髪の毛に砲弾が掠った。容赦無い、容赦無いよフェイちゃん!?!

今、どういう状況なのかと申しますと…

「そこっ！」

「にやああ!?! あ、当たってない…」

私がフェイちゃんをスピードで攪乱しています。はい、逆ではなくて。『私が』なんですすよね。

唯一この状況に問題があるとすれば… 私も全然制御できていない、というところなのです。

ていうかフェイちゃん慣れるの早ッ！ もう狙いが定まってきたるよ。このままじゃ… よしー！

「レイジングハート！ フライアーフィンを6基から8基へ！」

『Well, but… (訳：しかし…)』

「お願い！」

『… All right』

一気に加速力が増す。少しでも加減を間違えるとバランスが崩れて、上下左右に振り回される。

でも、*“だからこそ”* フェイちゃんの間隙を突ける。ちゃんと互いの目を見てお話をするんだ。

どんなに砲撃魔法を撃ってもかわされるなら、どんなにバインドを放つても避けられるのなら…

ソレが出来ない程の距離まで詰めるしかない！ *“あの人”* が教えてくれた通りに！

「いくよ、フラッシュムーブ！」

『All right… Flash Move』

*“距離を取る”* ために習得していた移動魔法を、*“距離を詰める”* ために使う。そしてその結果…

「え？」

奇しくも重なる二人の声。目の前には呆然としたフェイちゃんの顔… 私も同じ顔なのだろう。

あ、これってもしかしなくてもかなりピンチなのかもしれない。ちよつと無茶し過ぎたかな？

互いに硬直したまま二人の距離は近づいていつて…

——ゴンツ！

痛い！

と思う暇もなく、私はここに至るまでの記憶に思いを馳せていた。これって走馬灯、なのかな？

……

……

…

今回はユーノ君の調査のおかげで、私たちがJ<sup>ジュエルシード</sup>Sを先に発見することができました。

回収時に出てきた相手は火の鳥みたいな融合体。……多分、鳥さんと融合しちやったのかな？

かなり素早かったけどフェイちゃんほどじゃない。だから、私たちも落ち着いて対処できます。

刀真君、ユーノ君との連携で鳥さんから無事J Sジュエルシードを抜き出し、あとは封印するだけ。

なんだけれど…

「どうしたんだ、高町?」

「何か心配事でもあるの? なのは」

動きを止めてしまった私を心配してか、刀真君とユーノ君の二人が揃って様子を尋ねてくる。

でも、この気持ちは私のきつと我俣。私のせいで二人に迷惑をかけてしまっただけじゃない。

彼女が来た時点で無事にジュエルシードを入手できる確率はグンと下がってしまう。だから…

「…そのジュエルシード、こちらに渡してもらいます」

自分の内なる葛藤を止めて封印しようとした私の背に、待ち望んだ人からの声かけられる。

私たちと同じ位の年齢の、そして何らかの目的でJ Sジュエルシードを探し求めている魔法少女。

今まで何度となく戦ったけどロクに相手にされることなく、まともにお話もできなかった少女。

「来たんだね、フェイちゃん」

私は… この子と、キチンとお話したい。ちゃんと互いの目を見て、名前を呼び合いたい。

その過程で戦いが避けられないならば、勝つしかない。そんな決意を秘めて振り返ったが…

フェイちゃんのデバイスに括りつけられた“あるモノ”を見た時、動きを止め固まってしまった。

「どうしたんだ、高町!」

「彼女の前で無防備に動きを止めてると危険だよ! なのは!」

動きを止めてしまった私を心配してか、刀真君とユーノ君の二人が揃って様子を尋ねてくる。

どういうこと？ 二人は気にならないのかな？ あの、可愛らしい生き物の編みぐるみが。

男の子だからね。仕方ないね。でも私は気になって仕方ないよ！  
何あれ何処で売ってるの!?

「……フェイちゃん」

「何度も言うけど、私はフェイじゃなくて」

訳の分からないことをフェイちゃんが喋り始める。ゴメンね、フェイちゃん。今はそれより…

「フェイちゃん」

「あ、はい。……その、なにか？」

……うん、キチンと目を見て話し合えば気持ちは通じるんだよね。嬉しいよ、フェイちゃん。

何故か震えてる気がするけど。何故か刀真君とユーノ君も互いに抱き合って震えてるけど。

それはささいな事… だよね？ 顔文字の人の話にでてきたミストさんなら分かってくれる筈。

「その子… なに？」

「……？」

「その、可愛い編みぐるみの子。……何処で売ってるの？」

「ボン太くんのこと？」

ふむふむ… そっか、ボン太くんって言うんだ。心のメモ帳にしつかり記入しておかないと。

「コレは売り物じゃない。私の尊敬する人が手ずから作って渡してくれた信頼の証」

「信頼の… 証…!？」

ハンドメイドの「信頼の証」… そんなに重いものだったなんて。オマケに非売品だったなんて。

ちよっぴり誇らしげなドヤ顔で説明するフェイちゃん可愛い。いや、それは置いておくとして。

私はフェイちゃんに告げられた余りにショックな現実には、思わずその場に崩れ落ちそうになる。

「こんなのってないよ… あんまりだよ」

「いや、そんな大袈裟なものじゃなかったような… 多分適当に渡しただけだと思うけど」

「そんな筈ない。…アルフはあの人のことをどう思ってるの？」

「どうって… そりやただの気のいいやつとか？」

なにか言葉を交わしているフェイちゃんとアルフって人との会話も、もう耳に入ってこない。

けど、刀真君とユーノ君にとってはそうでもなかったみたいで…

「！ユーノの読み通り、やっぱりブレインってのがいたみたいだな…」

「うん… 当たって欲しくはなかったけどね」

「聞きたいことがソレで終わりなら、今日もジュエルシードをいただいでいきます」

動揺する刀真君とユーノ君の二人を尻目に、そう切って捨てて臨戦態勢を取るフェイちゃん。

けれど、幾ら欲しいからって力づくっていうのはやっぱり間違ってるよ… フェイちゃん。

互いの目を見て話し合う… ソレが友達になる第一歩。私、フェイちゃんのために鬼になるよ！

「じゃあ私が勝ったらボン太くんを貰うね？」

「え？ いや、その… それは、困ります…」

「フェイちゃんが言ってるのはそういうことなんだよ  
「うう…」」

「人にされて嫌なことをやっちゃいけないよね？」  
「ご、ごめんなさい…」

小さくなつてシヨボンとするフェイちゃん可愛い。…でも、私もボン太くん欲しかったなあ。

あ、私が勝ったら作ってくれた人を紹介してもらおうかな？ うん、それなら大丈夫だよ！

よし、気合が入ってきた！ 今日という今日は負けないよ、フェイちゃん！ 覚悟してよね！

「それじゃいくよ！ フェイちゃん！」

「……はい」

「そっちは気合十分ってワケだ。それじゃアタシも手加減は抜きで行くよ」

「俺だつて、今度こそ負けるつもりはないさ」

「なのは！ 刀真！ 援護するよ！」

互いに譲れない想いを背負って激突！ そして…

あっさり負けちゃいました。

まだ刀真さんとユーノくんの二人が粘ってくれているけれど、劣勢なのは火を見るより明らか。

刀真さんとユーノくんのフォローで直撃は免れたとはいえ、動けるままで少し時間がかかりそう。

『あー… また負けちゃったか。どうして勝てないんだろう…』

舞うように戦うフェイちゃんを羨ましげに見つめてそんなことを考える私に… “声” が応えた。

『おつすおつす。どつたのー？ 今日には元気ないみたいじゃーん 壁

ー・▽・ノ オツハロー♪』

『あ、顔文字の人だ。お久しぶり… えへへ、恥ずかしいところを見られちゃったなあ』

『別にちつとも恥ずかしくはないぜ。誰だつて落ち込む時はあるしな』  
く(・ω・)ノドンマイ』

『……いつも元気な顔文字の人にもそういう時つてあるの？』

『勿論。例えば大事なイマジナリーフレンドが元気ないと心配して落ち込むぜ？』  
i—|—?—○—|—』

『あはは！ もう、冗談ばっかり… でも、ありがとね。それじゃ、相談に乗ってくれる？』

顔文字の人はいつも元気で前向きだ。……この人に私たちは何度考えさせられ救われたことか。

『おっけー、どんと来いや！ でも頼りにならんだろうから過度な期待はNGな？ ？d（・ω・\*）』

『ソレは振りだよな？ “目一杯頼りにしろ” ってことなんだよね？  
ありがとう、顔文字の人！』

『勘弁して下さい。そうやってハードルあげるのやめてくれませんか  
ねえ… ヽ（・ω・、；）ノあわわ』

『ごめんごめん。えっとね…』

いつまでも楽しくお話をしたいけれど刀真くとユーノくんが大変な時だもの。自重しないと。

だから私は顔文字の人に、要点をかいつまんで説明してみる。可能な限り現状を客観視して。

魔法量は（ユーノ君曰く）私の方が上なこと。私は砲撃型であること。相手は高機動型なこと。

その他にも、“自身の想い”… 互いにちゃんと顔を見てお話をしたいこととかも “全部” 含めて。

『なるほどなー。…これはむしろ相手の子を褒めるべき流れだな』

（。ー、ωー）ンー』

『ど、どういうこと!?!』

『いや、万能リソース扱いの魔力で勝ってて、オマケに人数でも勝ってるんだ（・ω・、）』

『うん』

『本来ゴリ押ししてても、結果は圧勝となって然るべき流れだ… と思う（？ω？；）』

『で、でも、実際問題私たち負けっぱなしだよ!?!』

顔文字の人が悪いわけではないけど、つい噛み付いてしまう。うう… 悪い子になってるよ私。

『うん。だから相手の子が巧いんだなく… と素直に認めるしかない。天晴！<sup>あっぱれ</sup>（\*^ー）b』

『じゃあ、どうやったら勝てるのかな…』

『これだけクレバーな立ち回りができるなら勝つのは難しいかもしれない。けど…（・w・）』

『けど?』

『お話』するのならばそう難しくはない。相手の土俵に立って引き摺り出せばいい。v(?▽?)ニヤツ』

『相手の土俵? でも私は砲撃型の魔導師で… あの子ども、凄く速いし…』

フェイちゃんのスピードに追い付ける気がしない。狙っても逃げられるしバインドも通じない。

『それは適正の問題だ。最もキミに向いたスタイル、というだけではない、(・ω・oノ)』

『どういう、こと?』

『確かに砲撃よりは幾分か効率落ちるだろう。だが、〃できない〃わけじゃない (ノo・ω・)ノ』

『……?』

『魔力をブチ込めば、それは可能になるんだ。〃できる〃と〃できない〃の違いは大きい (・ω・)』

『……あつー!』

現在、両踵に展開してるフライアーフィン… それを4基にしたら? あるいは6基にしたら?

砲撃の距離を稼ぐという目的のために開発した移動魔法、フラツシユムーブにしてもそうだ。

発想を変えれば、幾らでも私が〃やれること〃はあったはず… そのことに改めて気付かされた。

『気付いたようだな。互いに見ることは叶わぬがきつと良い顔をしてるのだろう ヽ(▽、\*)』

『……はい!』

『これが最後かも知れないが心残りはなくなった。あの二人にもよろしく伝えてくれ (・ω・)ノ』

『え? さ、最後って… どういう、こと…』

『ちよつと物体Xを食して生死の境を… ゲフゲフン、膝に矢を受けてしまつてな (・ω・、)』

『物体X? 膝に矢? そんなに大変な状況なのに、なんで私に…』

それに、この会話が最後かもしれないなんて。そんな… 私、助けられてばかりだったのに…

ううん、違う。それが“この人”なんだ。飾らない言葉で私たちを笑わせて、和ませてくれて。

そつと背中を支えてくれるような、何気ない日常。だったらここで私を取り乱しちやいけない。

『まったく… 危ないことは程々にしないとだよ？ 顔文字の人』

『いや、面目ない。冷静に考えたら死ぬことはないと思うんで待っててくださいえ… (／▽／) ウエヒヒ』

『うん、待ってる… いつもの3人で待ってるからね…』

『おう、帰ってきたらまたみんなでバカ話でもやろうZE！ ヽ(≡▽≡) ヽヒヤツハー！』

『もうっ！ そんな話をしてるのは顔文字の人だけでーすー！』

『こりゃ一本取られた。はっはっはっ、そんじゃそろそろ… (・▽・) ケラケラ』

『…あっ』

いつまでも楽しく話をしていきたいけれど、何にだって終わりはやってくる。そう、今この時も…

『大切なのは… 間合いと、決して挫けない心じゃよ。…なんてな

— (?▽?) ノミ☆』

『…ん。ありがとうね、顔文字の人』

私のお礼に言葉を返すことなく、顔文字の人は“いなくなっってしまった”。本当に、あつさりど。

自身が生死の淵にありながら、きっとギリギリまで私のために時間を使ってくれたんだろう。

ありがとう、そして待っているよ、顔文字の人。あなたが教えてくれたことを心に焼き付けて。

だから私は… ううん、“私たちは”決して諦めない。

「そうでしょ？ 私の… “挫けぬ心”」

『Yes, My master!』

魔力は充分！ フライアーフィンを多重展開。よし、いける… こ

れならきつと捕まえられる。

「私、フェイちゃんと話がしたい。ちゃんと互いを見て名前を呼び合いたい!」

『All right... Flash Move』

——私は跳んだ。＼あの人＼が気付かせてくれた私なりのやり方で… あの子と向き合うために。

……

……

…

「いったたたたた…」

「……くっ!」

互いの頭をぶつけてしまい、硬直してしまう。いたたたた…  
うう、失敗したよ。凄く痛い。

けど、今この時こそがチャンスでもある。……フェイちゃんが動けないうちに距離を詰める!

私の気持ちを汲み取ってくれたレイジングハートが瞬時にフラッシュムーブを発動してくれる。

「零距离ツ! これで…」

『Divine…』

「そう来ると」

! まずっ…

「思っていた」

『Thunder Rage』

「ツ!!」

大魔法を発動中のフェイちゃんのデバイスを、咄嗟にレイジングハートで受け止めてしまう。

乗せられてしまった。私の（意図したわけじゃないけど）頭突きで痛がってたのは演技?

って、今はそんなことを考えている場合じゃないよ! うう…  
どうしよう、このままじゃ…

「高町!」

「なのは！ 今すぐ援護を！」

「おつと… 行かせると思うかい？」

刀真さんとユーノくんも足止めをされている。この場には私しかない。私が何とかしないと。

「ありがとう、アルフ。すぐに終わらせるから…」

「あわわわ…」

ますます圧力がかかってくる。…ううん、覚悟を決めろ！ 高町なのは！

…もし、ユーノくんの言うとおり私の魔力が桁違いなら。

…もし、刀真くんの言うとおり私にしか出来ないことがあるのなら。

…無理を通すのは、今、この時を置いて他にはない！ そうでしよ！？ “顔文字の人” ツ!!

「ツ！ なんで…」

「フェイちゃんがそうであるように、私も、簡単に負けてあげられないの」

——ピシピシピシ…

押されていた私の魔力をなんとか持ち直す。だけど、フェイちゃんもますます魔力を込める。

うん、いいよ。そんなに簡単に行くとは思ってない。だったら…ここから先は我慢比べ。

散々無駄遣いした私の魔力がどこまで持つか分からないけど…

あと少しなら頑張れるから！

——ミシミシミシ…

「あなた達にとつても、そんなにJジュエルシードSが大事!？」

「確かにユーノくんのためにそれは大事だけど… もっと大事なことがあるよ。私の理由」

「…あなたの、理由?」

「うん。それはね…」

——パリン…

私の手の中のレイジングハート… そしてフェイちゃんのデバイ

スが同時に砕け散ってしまう。

ごめん、ごめんね。レイジングハート。私のせいで無理をさせちゃったね…

『All right.: My little master』

光に呑まれていく中で、私とフェイちゃんはしっかりとお互いを見つめ合うことが出来ました。

空は真っ赤に染まっている。今、私はそんな綺麗な夕焼けを地べたに倒れたまま見上げている。

「引き分け… ううん、負けかな。…:J S、ジュエルソード持って行かれちゃったし」

また勝てなかった。でも今日は互いに目を見て話すことが出来た。これからだよ、高町なのは。

あ、そういえば…

「見つめ合った時、涙目だったなあ… 頭突き、実は痛かったんだね。ごめんね、フェイちゃん」

心の中で反省。

「お〜い、高町〜!」

「なのは〜!」

そんな私のところに刀真さんとユーノくんが駆けつけてくれる。本当に私は恵まれているなあ。

フェイちゃんの戦闘センスは素晴らしいと思う。多分私なんかじゃ太刀打ち出来ないほどに。

だけど、私には大事な「仲間」がいる。そもそも、「お話をするためなら勝つ必要だってない。」

そういうことだよね？ 顔文字の人。……元気に戻ってくるまで、私たちが3人で待つてるから。

……

……

……

家に帰るとお姉ちゃんが泣いていた。それをお兄ちゃんが宥めて  
いる。一体どうしたんだろう？

「ただいま。……お姉ちゃん、どうしたの？」

「ああ、おかえり。む… 美由希は桜庭と少し、な」

「っ！ ひよっとしてお姉ちゃんを苛めたの？ 最近変わったと思っ  
てたのに……」

「違う… 違うの、なのは」

また以前のような嫌がらせをしてきてお姉ちゃんを苛めたのかと  
思ったけど、違うの？

「ヤツについてはおまえが一番被害にあったからな… オレの意見は  
押し付けられない」

「でも…」

「何も仲間外れにするつもりはない。会話のやりとりを客観的に聞か  
せるから判断して欲しい」

「……うん、わかったよ」

「まず、ヤツは美由希の差し出した料理を食べた。完食した。……一  
皿残さずだ」

「あー…」

その… なんといったらいいか。家族鼻根で見ても、お姉ちゃんのお料理は… かなりひどい。

知らずにアレを食べさせられたなら多少の暴言は仕方ないかな？

それでも嫌な気分だけだ。

そう思いながらもとりあえず聞くといいった手前、お兄ちゃんの語る  
内容に耳を傾ける。すると…

『不味い。具は生焼け、スープは半固形… そして隠し味が悪い方向  
に化学反応している』

『うう…』

『何から何まで、“食べ物”としては最悪中の最悪だ。全く、食べたもんじゃない』

『ご、ごめんなさい…』

『けど… “優しい味”でした』

『…ええ？』

『その一点だけで“料理”としては及第点だ』

『あ、ありがとう…？』

『妹さん。この料理からは貴女の“誰かに向けた優しさ”がよく伝わってきました』

『う、うん…』

『もし貴女が“誰かのための料理人”でいたいなら… 無理に背伸びをする必要はありません』

『でも、がっかりさせちゃ…』

『最初は70点… いや、60点50点からで構わない。レシピの通りに作ってみましょう』

『…』

『貴女の優しさが加わるならば、それは世界にたった一つの料理になるのだから』

『…』

『この言葉を最後に逃げるように道場を後にした。ヤツが無事に帰り着けたのかは分からない』

え？ どういう、こと？ お姉ちゃんの料理を食べて全力でダメ出しをして… ソレは分かる。

けれど“優しい味”だと褒めて… お姉ちゃんの気持ちをそつと後押しする。それじゃまるで…

それに今日、“あの人”はなんて言っていた？ 膝に矢を… ううん、その前のこと。物体Xを…

「ッ！」

「どういう意図で“優しい味”と評したのか分からない。ただの苦し紛れのフォローかもしれない」

一瞬、思い浮かんだ「あの人」のことを頭から追い出そうとする。……でも、それが出来ない。

一つの思考から追い出しても並列思考マルチタスクのままどうしても考えてしまふ。今、この瞬間すら。

「けれど…」

お兄ちゃんが微笑む。やめて、やめて、やめて… 「あの人」は私たちの恩人で。だから！

「ああ… 間違いなく美由希は救われたよ。……無論、この俺もな」

「あの人」とは違うって、そう思いたいのには… でも、泣きながら頷くお姉ちゃんを見て。

心の何処かで、納得してしまっている自分もいたのです。

——翌日。

お姉ちゃんがお母さんに頼み込み、四苦八苦しながらもレシピ通りに作ってみたお味噌汁は…

ちよつと塩辛かったけれど、とても「優しい味」がして… 高町家の笑顔が増えたのでした。

「……ねえ、ユーノくん」

「なんだい？ なのは」

「『念話』ってある程度以上の魔力がないと、受け取ることも話すこともできないんだよね？」

「うん、そうだね。だから助けを呼ぶために使うことになったんだけど」

私は知っている。私がユーノくんに出会う前からまるで魔法のような力を使っていた人のことを。

「あの人」は沢山の人を傷付けて… でも「あの人」は恩人で… でも「あの人」は…

答えの出ない思考の迷路の中で、私はいつまでもグルグルと一つのことを考え続けるのです。

## 少年と友達・上

『あーあ、こんなクソゲーもうやってらんないよ』  
『……………』

それは、今ではない“いつか”の会話。  
それは、もういない“誰か”との会話。

『だからおまえに譲ってやる。精々感謝するんだね』  
『……………』

いや、会話にすらならない一方的通告。  
そして、“自分”は…

——チュンチュンチュン…

「あゝ…」

小鳥の鳴き声をBGMに覚醒。今日も清々しい目覚めだ。……体調が絶不調なことを除けばな！

なんだか妙な夢を見ていた気もするが、覚えていないということは大したことないだろう。

体調が悪い時は得てして悪夢を見てしまうものだ。むしろ覚えてなくてラッキーということか。

弱った身体に鞭打ちベッドから起き上がったところ、何かがおかしいことに気付く。……はて？

「こういう時は昨日の行動を思い返そう。えくと、いつもどおり道場で素振りして…」

そう、あの物体Xを食べて八つ当たり気味に妹さんに鬱憤を撒き散らした後、確か自宅玄関で。

……うん、冷静に考えれば酷い。いつそ本当に死んでた方が世間のためだったかもしれない。

だが、オレはともかく悠人少年まで巻き添えにするのはNGだ。反省はするが死ぬ気はないぜ。

「む… そういえばいつの間にベッドに？」

ここで漸く違和感の正体に気付く。そうだ、オレは玄関でぶっ倒れてた筈。いつの間に此処に？

考えるんだ。爆ぜろリアル！ 弾けるシナプス！ ヴァニツシュメント・デイス・ワールド！

この状況に至った経緯についてオレは灰色っぽい脳細胞で推理する。邪王真眼は全てを見通す！

1. 夢遊病患者よろしく倒れたオレが自力で歩いてベッドイン

2. 死の淵に立たされたオレが特殊な能力に覚醒！ 転移魔術でベッドイン

3. 親切な第三者が扉を開けて倒れてるオレを確認。そのまま寝室まで運んでベッドイン

うわあい。1と3のどれに○を付けても「おまえ、頭おかしいんじゃない？」になっちゃうYO！

「まあ深く考えたら負けな気がする。さて、今の時間は…ん？」

平日だし学校もある。時間を確認するため、時計を置いてあるサイドテーブルに視線を移すと…

見慣れぬ紙切れが置いてあった。……これはなんだろう？ まあ、危険物ではなさそうだが。

悩んでも仕方ないと手にとって読んでみると、それは意外な衝撃をオレに与えてきたのだった。

『悠人くんへ』

お体の具合は如何ですか？

あなたが玄関で倒れているのを見た時は心臓が止まりそうになりました。

仕事の都合で一人暮らしをさせている私達が言うのもなんですが、あまり無理をせず、何より自分の体調を第一に考えて生活して下さい。

勝手かとは思いますが、学校には既に欠席する旨連絡しておきました。

本日はどうかゆっくり静養するようにして下さい。

もし体調が思わしくないようならばキッチンと病院へ行くこと。体調如何によつては迷うことなく救急車を呼ぶようにして下さい。本当は目が覚めるまでついていたかったのですが、急な仕事が入りました。

この場を二人揃つて離れてしまうことを、心苦しく不甲斐なく思います。

ダメな親だと恨まれ、憎まれ、嫌われるかもしれない。

それでもあなたを愛する気持ちは夫婦ともに変わりません。

何か必要なことがあればいつでも電話をかけて下さい。

勿論必要なことがなくてもいつでもお電話下さい。待っています。

電話が面倒だったらメールでも構いません。どちらもお待ちしています。

それと一度は断られましたけれど、良かったら一緒に暮らしましょうね。

あとお金についてですが……

「……………」

お分かりいただけただろうか？ このオレが衝撃を受けた理由を（白目）。……愛が重いわ!?

この紙切れにどれだけ愛と文字を詰め込めれば気が済むのか。いや、凄く良いご両親なのだ。

良いご両親なのだが、うん、ちよつと悠人少年が距離を置きたがった理由が推測できてしまう。

とりあえず激しく目が滑るだろう諸兄に成り代わり、内容についてオレなりに要約してみよう。

1. 学校に欠席連絡したよ！ 病院いけよ！ しんどかったら救急車使え！

2. もう帰るけどいつでも電話かけてこいや！ メールでも可！

3. 一度我々との同居を断ったな？ だがまだ諦めてないぜ！

4. 遠慮せず金使え！ てか使わないと心配する！ 口座番号はこれだぜ！

ざっとこんな感じだろうか？

病気かもしれない玄関で倒れてた子供を置いていくのは、個人的になにか思わんでもないが…

同居するのを断ったのは悠人少年からのようだし、養育費は充分過ぎるほど与えてるようだ。

とすれば、あとは彼ら家族の問題。オレがあれこれと気を揉むのはお門違いでしかないだろう。

やれやれ… ご両親と対面が叶わなかったのは、オレにとって幸運だったのか不運だったのか。

オレが気を揉むのはお門違いとは言ったものの、悠人少年が戻らねば嫌でも対面の時が来る。

その時のことを、今から考えておくのも必要なことなのかもしれないな。ま、なにはともあれ…

「ゴフツッ！ ……うん。病院、いこっか」

オデノカラダハボドボドダア！ ……一刻も早く、もずく湯に漬からないと（使命感）。

……

……

…

ボロボロの身体を引き摺りながら、なんとかオレは『海鳴総合病院行き』のバスに乗り込んだ。

安堵の溜息を吐く。しかし、それで終わりではなかった。さらなる悲劇と絶望がオレを襲う。

一体オレに何が起こったのか？ それは… はい、酔いました。…弱ってたから仕方ないね。

つまり…

『だから昨日のような戦い方をするとは言わないけど、無茶はしないで欲しいんだ』

『う、うん。ごめんね』

『僕は頼りないかもしれないけど、昨日起こった次元震動はとても危険なんだよ？ だから』

夢電波の世界に飛んでしまうのも、時間の問題だったということだよ！ はっはっは！ (白目)

『おっはよー、おまえら。元気ー？ オレはグロッキーなう (\*´・ω´)ノ』

『おっす、おはよう。ほら、二人共もうその辺にしておけよ。……グロッキーって大丈夫か？』

『あつ、顔文字の人… その、無事だったんだね…』

少女が淋しげな声を出してる。もしや心配させてしまったか？

ハハツワロス、自意識過剰乙。

『なんだ、調子悪いの知ってたのか？ だったら教えてくれればいいのに』

『あ、うん、その… 次元震のこととかあつて…』

『あー… そういえば昨日ちよつと揺れたらしいね。そっちは大丈夫だった？ (´・ω´、)』

スマホに地震のニュースが入ってた時は驚いたぜ。下手すりや玄関で潰れてお陀仏だったとか。

でもお互いに怪我がなくて良かったな。少女がちよつぴり元気なのが気がかりではあるが。

オレが声をかけるまでなんか言い争いをしてたみたいだし、それ関係かな？ 仲良く喧嘩しな！

『震源地でしたけど、まあ、なんとか。そっちもお大事に。友人が元気ないと寂しいですよ』

『……え？ (´・ω´、) why?』

『…え？』 ってなんだよ。こっちはオマエのこと友達だって思ってるのに。そっちは違ったのか？』

震源地だったのか。そっかそっか、でもみんな無事で何よりだよ… え？ 今、なんて言った？

ゆうじん？ ゆうじん… ゆーじん… ユージンⅡRⅡ桜庭。なんだ、悠人少年のことか。

一瞬オレのことを友達と言ってくれたかと思っただけで舞い上がりそうになっただけ。え？ ……はい？

『（・ω・）…』

『ど、どうした！　なんか固まってるぞ?!』

『（；ω；）（ブワツ）』

『ひっ…　なんかいきなり泣きだした。ご、ごめんなさい。なにか失礼なことでも…?』

ごめんよ…　そしてありがとう。おまえらのこと、最初はオレの弱い心が生み出した妄想だと…

まあ、ぶつちやけ今でも割りとそう認識しているのだけど…　でも、本当に嬉しかったZE！

確かにオレの妄想が生んだイマジナリーフレンズかもしれない。けど、この想いは本物だよな！

『いや、嬉しくて…　友達いた記憶もないし…　ありがとう、ありがとうオマイら（TWT）』

『そんな…　お礼なんて必要ないですよ』

『今までオマイらのこと、オレの弱い心が生んだ小粋な妄想どもと思っでごめん（TWT）』

『よし、そこは全力で謝れ』

オレの友達第一号が妄想の生んだ何かというのは、この際気にしないでおく。とにかく友達だ！

辛いことや悲しいことがあったら、こうやって夢電波の世界で愚痴ったり相談をしたりして…

そうしてオレの健全な青春ライフは営まれていくのだな！　やっただぜ、悠人少年！　第三部完！

…いやいや、妄想に逃げ込むアレな人になってるよ。バトンタッチされても悠人少年困るよ。

『で、結局昨日なにかあったんだよ?』

『それは僕も気になります。ひよつとしたら何か力になれるかも知れませんか』

『あ…　その…』

少女が口を開こうか迷っているようだ。昨日はテンパッて大分アレなこと口走っちゃったしな。

よし、案ずるな。ここは口先の魔導師と呼ばれるかもしれないこのオレに任せておくのだ！

こう、なんかアレな感じでみんなまとめてふわっと適当に丸め込んでくれるわ！ フハハハハ！

『そこから先はオレが話そう。……さて、君たちが知らぬのも無理は無い (○≡▽。)○』

『うん… わかった。みんなも聞いて、顔文字の人の話』

『なんか大袈裟だな。そうまで言われなくてもちゃんと聞くつて』

オレは厳かに語り始めた。

『魔王を倒した勇者に地上が沸く頃、人知れず遥かに強大な敵と戦っていたのだ… ○ (?-?-\* )』

『うん… お姉ちゃんの料理を、うん？』

『魔王よりも遥かに強大な敵… それは一体…？』

後に勇者と呼ばれる少年の父となる、ある男の話を。

『……その名は冥竜王ヴェルザー！ (。 —、ω、 —)』

『冥竜王… ヴエルザー…？』

『一体どんなヤツなんだ…』

強大な敵の登場。少年たちの盛り上がり、オレの語り口も熱を帯びる。

『魔王すら大魔王の手駒に過ぎぬ。その大魔王と魔界を二分する、それほどの猛者だ (—ω—)』

『そんな！ そんなヤツ相手にたった一人で戦うなんて無茶だ!』

『あの… もしもし?』

……あれ? もともと何の話してたっけ?

まあ、いいか。思い出せないということはきつと大したことないんだろう、うん。

『辛くもヤツを退けたもののその生命は風前の灯。もはや死を待つばかりだった… ( — — — )』

『くっ… どうにもならないのか…?』

『……』

固唾を呑んで聞き入る3人の気配を感じる。ここからが盛り上が

りどころだ。

『だが、一人の美しい王女によって救われることとなった。その女性の名はソアラ c (ω、\*)』

『助かったんですね！』

『やったぜ！』

途端に歓声に沸く3人。フツ、現金なものだ。そしてここからは恋愛描写だ！

『王女ソアラと知られざる英雄… 二人は惹かれ、互いに愛し合うに至った (◇ ω ◇)』

『英雄とお姫様のラブロマンスですか。王道ですけど、こう、胸に来るものがありますね』

『きやーきやー！… って、あれ？』

まあ、ほとんどのこの一瞬で終わるんですけどね。恋愛描写。

『しかし幸せは長くは続かなかった。己の権力に固執する家臣が王に讒言さんげんし… (・ω・、)』

『やつと掴んだ幸せなのに… こんなの、ひどすぎる…』

『ちよつとちよつと、顔文字の人…』

ここで少女が声をかけてきた。なんだろう？ 少年たちも続きを楽しみにしているというのに。

『ん？ なになに？ (・ω・、)』

『うん。その話の続きは私もすごく、すごく気になるんだけどね？ 昨日の話については…』

『昨日の話… あっ Σ (。ロ。；)!!』

やつべえ、すっかり忘れてたZE！ ……よし、ここはクールに徹して誤魔化そう！

『……忘れてたんだね？』

『そ、そんなことないですよ…？ ヽ (。ロ。\*) ツ三ヰ (\*。ロ。 ) ノあわわ』

『なんでだろ。顔文字の人の事、信じたいのに… 嘘つきだなんて思いたくないのに…』

おかしい。このオレの軽妙なトークが通じない… いや、そもそも

通じたことあったつけ？

なんか八神にボコボコにされた記憶しかないような… う、うん。まあ、気にしないでおこう。

大丈夫！ きつと大丈夫だよ！

『だ、大丈夫。大丈夫、とにかく大丈夫。大丈夫だから！ (；ω；) オロオロ (；ω；) オロオロ』

『全然大丈夫だって気持ちになれない… 顔文字の人が言ってること、本当だって思えない！』

『……ごめんなさい m ( | ; m )』

……オレは無条件降伏した。

『もう！ 顔文字の人ったらもう！ 私は真面目にお話してるのに！』

『ごめんごめん。つい調子に乗っちゃって… 反省してるって (？▽?) ムゴメリンコ♪』

『おい、ちつとも反省してるように見えないぞ。まあ、ノツた俺たちも俺たちだけ』

いやあ、友達扱いされちゃってついテンション上がっちゃったぜ。とはいえ、真面目に戻ろう。

からかうつもりはなかったけれど、結果的にそういう感じになっちゃったのは反省しないと。

おれは しょうきに もどった！ トラスト・ミー。で、昨日の話だったつけ？ 料理だとか。

『ホントにすまんかったって。で、何の話だつけ？ 昨日の献立の話？ (∩・ω・∩)』

『いや、献立は関係… あるようなないような。じゃあ、こっちから幾つか質問いいかな？』

『おっけー！ かかってきなさい！ (∩・ω・∩) ノシ クイク イ…』

質問？ なんだろ？ スリーサイズとか聞かれても答えようがないけれど。聞かれないよな。

『顔文字の人の名前… 教えてもらっても、いい？』

『あー… それかー… うーん、なんて言ったらいいかな… (？ω？…;)』

『……やっぱり、言えない？』

『言えない』 っていうのはそのとおりだが。なんと答えたものか… まあ正直に言うしかないかな。

『まあ、言えないっていうか… オレ自身、自分の本当の名前覚えてないんだよな (？ω？…;)』

『……え？』

『仮の名前なら言えるんだけど、求めているのはそういうのじゃないんだよな？ (・ω・、)』

『仮』 っつーか『借り』になるんだろうか。この身体も借り物だし… 色々すまん、悠人少年。

『ご、ごめんなさ… わ、私！ そんなつもりじゃ…!』

『どうどう、落ち着け。別に悪いこっちゃないって。な？ で、他に質問あるー？ ぐ。(。ω。)(。ω。)]』

『う、うん… ごめんね。えつと、じゃあ…』

信じるんかい。いや、嘘は言っていないだけだし。……この子らの将来が心配になってくるぜ。

まさか大人ってことはないよな？ 大人でこの信じ易さだったらちよつとヤバイ。和むけど。

まあ、信じてくれたのならば大人としてソレに応えるべく、誠意ある回答をしなきゃいかん。

そうだろ！ 松ツ!! ……今どき、無法松を知ってる人っているのかな。

『えーと… 学校で、『悪のカリスマ』って呼ばれてたりする？』

『え？ なにそれ？ いじめ？ (。ω。)( what?』

『じゃなくて… その、自分で名乗ってて友達とかに呼ばせてる… とか…』

悪のカリスマ… D I O 様なの？ 邪悪の化身とか？ もはや痛々しい中二病患者じゃねーか。

あまつさえソレを人に呼ばせてる？ ねえよ… 黒歴史確定の大

惨事だろ。そりやないわー。

というか、そもそもオレが人にそう呼ばせるのって不可能なんですかね！ 改めて言えと!?

『This is 無理。Because オレ ぼっち。……OK? ( ; ω ; ) ブワツ』

『ご、ごめんなさい… その、私、なんて言ったらいいか…』

『な、なあ… 落ち込むなよ。……今はその、俺たちが友達だろ? な?』

せやな! まあ、少女の手前落ち込み過ぎても嫌がらせみたいになる。今はぼっちじゃないし。

オレの妄想が生んだ夢電波とはいえ、この暖かい友情は本物なのだから。だから気にしない。

べ、別にチヨロクなんてないんだからね! 勘違いしないでよねっ!  
! ……うん、オレきめえ。

『大丈夫大丈夫… オレのL ライフポイントPはまだ残ってるから… で、他の質問はー? (つ口;\* )』

『ご、ごめんなさい。これで最後だから。……珈琲は、好きですか?』  
『大嫌いです ( ; ω ; )』

あ、うっかり0.3秒で即答しちゃったよ。少女が珈琲好きゆえの質問だったならどうしよう。

でもしようがないね。珈琲だけはない。この一ヶ月ちよつと、オレがどれだけ悩まされたか。

仮に少女が珈琲好きだったとしても、オレを巻き込まない何処か遠くで好きに嗜好してくれ。

流石にオレも妄想にまでブラックの缶珈琲を渡せるなんて思っちゃいない。触れぬのが一番だ。

『え? ほ、ホントに? じゃあ、ブラックの缶珈琲とかは…』  
『この世で最も忌むべき存在だな ( ; ω ; )』

『……そう、そうなんだ。うん、大嫌い… か。良かったあ… やっぱり 違ったんだね』

なんか喜んでる。コワイ。どうした、少女。そんなに珈琲嫌いだった

たのか？ 仲間だったのか？

オレ、今までに珈琲派と思わせるような言動してたのかな？ え？  
マジで？ どうしよう。

言動全てが珈琲くせえんだよ、バーロー。とか言われてしまったら  
もはや立ち直れそうにない。

『ちよつと待て！ 珈琲嫌いとは放っておけないな！ この俺が珈琲  
の良さを一から…』

『黙れ、その珈琲臭い口を即座に閉じろ (?△?;)』  
『……………』

あつ…

その後、オレたちは凹んでしまった珈琲好きの少年を三人がかりで  
宥める羽目になったのだが。

一方少女はというと、何故か上機嫌で終始ニコニコしているようで  
すらあった。……………解せぬ。

誰のせいでこんな状況になったと思ってるんだか。……………はい、オレ  
のせいですね。すみません！

『えー… 海鳴総合病院前でございませーす。お忘れ物のないように気  
を付けてお降り下さーい』

「……………んが？ ……到着したか」

1秒間に16土下座という神業を成し遂げた頃、オレを乗せたバス  
は病院に到着したのだった。

涎を拭きつつ下車。さーて、今日も1日頑張るぞい。

## 少年と友達・下

「そろそろハッキリさせておきませんか？ 桜庭くん」

「……………」

目の前には白衣を身につけた壮年の男性。その光る眼鏡がオレの一挙手一投足を見守っている。

オレが今いるここは海鳴総合病院の内科診察室。断じて取調室などではない。……その筈だ。

このやり取りにうんざりしてるのはお互い様だろう。彼は何度目かとなる質問を口にしてきた。

「もう一度だけ尋ねますよ。キミが口にしてしまったものについて教えて下さい」

「……………ビーフ・ストロガノフです」

嘘はついてないよ？ というより他に言いようがないよ？ 謎の物体Xとでも言えばいいのか。

あかんでしょ… 女の子の手料理を「物体X」呼ばわりしちや。昨日のこと？ 刹那で忘れた。

彼女がビーフ・ストロガノフと主張し、オレがビーフ・ストロガノフと認める。ならばそれは…

そう、ビーフ・ストロガノフ（滅）とかそんな感じのナニカなのだよ。類似品にご注意下さい。

……………

……

…

「……………ふう」

あれから暫しの押し問答を経た末、看護師さんの「次の患者さんがお待ちです」で水入りした。

ナイスだ、笑顔の似合うナースさん。結婚して下さい。……すんません、調子に乗りました。

なんか「未知の毒物の可能性が」とか言ってた気がするけれど、多分オレの聞き間違いだろう。

今回は悠人少年ボディが貧弱だっただけ。それで妹さんに迷惑をかけるわけにはいかないよね。

メシマズくらい各人の男女間で解決すべきだろう。いや、男男間とか女女間かもしれんけど。

調子悪くなったらいつでも来てくださいと言われたけれど、其れは丁重にお断りしたいのです。

そう何回も倒れるわけにもいかないし… よし、明日はちよつと奮発していいもの食べるかな？

ここで身体を鍛えるところにオレらしさを感じる。しんどいのは嫌いです。

そんな情けない決意表明を胸に秘めつつ、薬局窓口を探す。探している… うん、迷いました。

いつものオレですね。安心した（現実逃避）。

「……………」  
なんか違う病棟にやってきちやった気がするぞう。はてさて、全くどうしたものか。……おや？

「……………てちゃ…」  
「そん…、……………ですよ。私も…」

あそこで誰かと話をしているのは… 車椅子のようなシルバー・チャリオッツ銀の戦車、少し柔らかな関西弁。

かつて図書館内の喫茶店でオレの心をこれでもかという程に抉つた、天敵・八神じゃないか。

ヤツは確かこの病院の馴染みだったはず… つまり、薬局へのルートも知っていることになる。

薬局まで案内してもらおうか？ ふと頭に浮かんだ案について、オレは検討を試みる。

「うん、ないな」  
0. 1秒で却下した。全く以てありえない。何が悲しくてわざわざ

ざ心を抉られねばならんのか。

しかも小学校低学年くらいの幼女に。オレはそういう特殊性癖のDMな人じゃないんですよ。

ビビったわけじゃない。ヤツと対峙するには備えが足りない。そう、コレは戦略的撤退なのだ。

さして、元きた道を帰るか。

——ゴスツ!

心の言い訳を完了し、振り返って元きた道を逆行しようとしたオレに鋼鉄の衝撃が襲い掛かる。

「ぎゃぼー」

「あらあ… ぐめんなさいねえ、ボクう? 怪我とかしてないかしらあ?」

看護師さんが押していたカートに衝突してしまった模様。病院内での急反転は気をつけようね!

なんで病院内で負傷しているんだろうか、オレは。ていうか激しく痛いんですけど。マジで。

だが、痛みに悶絶している暇はない。一刻も早くここを立ち去らねばヤツに捕捉されてしまう。

そう、〃ヤツ〃に…

「お? ゆーとんやん」

はい、アウトオ〜〜ツ! というか、なんだよ〃ゆーとん〃って。人違いか? 人違いなのか?

そうと決まればハヤテのごとく! 撤退だ。ヤツが誰と勘違いしたが知らんが些細なことだ。

アダ名の可能性もあるが… ヤツとの浅い付き合いを考えれば真っ先に否定される推論だろう。

「いえ、人違いです。それじゃ」

「桜庭悠人。で、ゆーとん… やろ?」

〃桜庭悠人〃ですけど〃ゆーとん〃ちやいまんがな。いや待て、そもそもオレは悠人少年ではない。

「ごめんねえ、ボクう? 怪我があるといけないしい、一緒に診察室に行こっつかあ?」

「……………」

やけに間延びした喋り方をしてくる看護師さんに、ほんの少しい

ラツとするが今は救いの手だ。

さあ、この蜘蛛の糸に捕まって脱出だ！ また会おう、八神くん！  
気分は怪人二十面相だ。

「いや、大丈夫です。こう見えてゆーとんはほんのり頑丈やし」  
「あら、そお？ でも本当にごめんなさいねえ。それじゃ急ぎだから、失礼するわあ」

だからゆーとんちゃいまんがな。じゃなくて何故おまえが答えるし！ 何故おまえが答えるし！

平気か平気じゃないかって聞かれれば平気だけどき！ 脱出にだけ使う予定だったけどき！

そうこうしているうちに、救いの手という名の看護師さんはカートを押し立て去っていった。

その場には、八神と八神の話し相手だった人とオレ： この3人が残される。

「……………」

さあ、どうする？ 考えろ、考えろ、考えろ： オレはどうすればいいんですか、安西先生!?

——「諦めたら？」 おい、ふざけんな。それゲームセットしちゃうだろ。使えねえ先生だな！

オレは諦めないぞ。そうとも、諦めない心に希望は宿る。希望は絶望なんかに負けないんだっ！

「おーい、どしたゆーとん。さっきのカート、やっぱ痛かったんか？」  
己が危機的状況だからといってただ屈するべきなのか？ 答えは

NOだ。精一杯抗ってやろう。  
そう、人間らしくな！ ……開き直っただけともいう。まあ気持ち

で負けないのが重要だし。  
立ち上がり、何事か語りかけてる八神へ向き直る。 ……ただ、オレ

のすべきことを為すために。  
「よう、八神！ もうかりまっか？」

「？ ……ぼちぼちでんな」

「それはなにより。これはウチで採れた缶コーヒード。是非貰ってく

れ」

「ど、どうも… って、え？ 缶コーヒーって収穫できるモンなん？」  
できるのさ！ 悠人少年の家の冷蔵庫限定でな！ でも、そろそろ  
なくなりそうで嬉しいです！

そして会話の中で自然にブラックの缶コーヒーを持たせるのは紳  
士の嗜み。もう常識だよな？

あとはこのまま爽やかさを維持して、スタイリッシュに立ち去るだ  
け。完璧な計画ではないか！

缶コーヒーは渡した。あとは… お見せしよう、王者の逃げ足をツ  
！

逃げるのに王者とはこれ如何に。まあ、細かいことは捨て置こう。  
そのままムーンウオークを…

「じゃ、そういうことで」

「おう、待たんかい」

——ガシッ

だがオレのムーンウオークは不発に終わった。知らなかったのか  
？ 八神からは逃げられない。

逃げられぬようにしっかりと八神に捕まってしまった自分の腕を  
見て、思わず呟いてしまう。

「ウゾダドンドコドーン」

「何がドンドコドーン、やねん。いきなり逃げようとしくさりよって  
からに」

「……そういうおまえはポンポコポーン」

流石オレ！ 最近調子に乗ってる豆狸さんに、ちよつと上手いこと  
言っただけだぜ！（ドヤッ）

——ゴスッ

「……殴るで？」

「もう既に殴ってるんですが、それは」

いやもうホント勘弁して下さいよ、八神さん。いまどき暴力系ヒロ  
インなんて流行りませんよ？

まあ、そもそもオレと絡んでる時点でヒロインから遠のいてるわけ

だが。もつとこう… ね？

キミには、日常系のゆるゆるで百合百合なハートフルストーリーとか似合ってると思うんです。

分かるかな八神くん？ 断じて“Hurtful”じゃないよ？ “Heartful”だよ？

キミがすべきことは、ここで銀髪オッドアイの色物系少年と漫才を繰り広げることはない。

そのすぐに興奮する癖さえ治まれば、柔らかな関西弁の萌え系美少女として認知されるはずだ。

血で血を洗うバトル漫画にいるような好戦的な性格をしているが、キミの適性はそれじゃない。

…はずだ、多分。うん。きつと。出会った当初は、親切で優しい少女だったじゃないか。

オレは一縷の望みを賭けて彼女の肩に手を置き、可能な限り優しい目で、八神に言い聞かせる。

「…分かるね？ 八神」

「分かるかドアホウ」

恐ろしく速いツツコミ… オレでなきや見逃しちゃうね。

じゃなくて、何0.1秒で切って捨ててはるんですか八神さん！

折角のオレの気遣いをお!?

やっぱリアレか。説明省いたのがアカンかったのか？ そこは分かれよ、イノベイターなら！

ダメか？ ダメなのか？ 緑色の光を当てないとダメなのか？

トランザムバーストすべきか？

だけどもあ、分からなかったものはしょうがない。ここは大人であるオレが譲るべきだろうな。

「まあ、八神は八神だからなあ… 分からないならしょうがない」  
「……………」

「いちからか？ いちからせつめいしないとだめか？」

「よう分かった。つまり喧嘩を売ってんねんな」

何故か、八神の殺気が膨れ上がる。オレは平和的に話し合いをしよう

うとしてたのに： 解せぬ。

とはいえこのままでは危険がピンチだ。 シルバー！チャリオッツ “銀の戦車”を所持する八神の破壊力は侮れない。

どうする、土下座か？ 土下座なのか？ オレの小さなプライド的にいつでもウエルカムだぞ！

「フフツ、とつても仲がいいのね」

「あつ、石田先生」

だがその緊迫した空気は、第三者の発言により雲散霧消を遂げる。そういえばもう一人がいた。

この声： 女性か。この女性のお陰で土下座を免れたならば、こちらもお礼くらい言わねば。

そう思い振り返ったところ： オレは目の前の女性にとんでもない衝撃を受けることになった。

「あ、ども： 桜庭悠人です」

「はい、どうもこんにちは。はやてちゃんの担当をしている石田幸恵です」

思わず見惚れて言葉少なな挨拶をするオレに、笑顔で対応してくれるとんでもない美人がいた。

え？ マジでどうなってるの海鳴。美人しかいないのは分かってたけどさ： これは流石に：

翠屋の桃子さん（苗字は知らない）も相当な美人さんだったが、この人もごつつ美人ですよん。

こんな人がいたら前世（？）なら「美人すぎる女医がいる病院」とかで特集組まれてそうだが：

「随分と仲良しさんみたいだけど、はやてちゃんのお友達かな？」

「まあそんな感じですよるか。……すんません、勝手に盛り上がってしまつてお恥ずかしい」

「えっ？ 友達だっけ」

「ああん？ なんぞ文句でもあるんか？」

「アツ、イイエ。ナンデモナイデス」

「フフツ、本当に仲がいいのね。私じゃ割って入れないみたい」

ちよつ、石田先生イ!? 今、オレってこの豆狸めにあからさまに脅迫されてましたよねえ!?

見逃さないで、目の前の少年のSOSサイン! この先生の担当は眼科じゃないのは確実だ!

てか、オレと八神っていつ友達になりましたっけえ!? 舎弟とか子分じゃないんですかねえ…

「もう、そんなことないですよ。半分腐れ縁みたいなもんやし」  
「……………」

なかなかし崩しに既成事実化された気がする。自分の瞳が淀んでいるのが分かるが致し方ない。

触らぬ神に祟り無し… 実際、目の前に凶暴な野良狸がいたら皆さんはどうするのだろうか?

オレは刺激せずにそつと機をうかがうしかないと思う。そう、今は雌伏の時。忍耐の時なのだ。

見守っててくれ! 友達一号の脳内妄想の夢電波たち! ……うん、少し心折れそうになった。

「これからもはやてちゃんの友達として、色々気を付けてあげてくれるかな?」

「先生、私はそんな…」  
思ったより早くその好機は巡ってきた… 八神も予感をしたのだろうか、表情を曇らせている。

だがユージンⅡRⅡ桜庭、容赦せん! 今こそ反撃の狼煙をあげる時だ! 覚悟しろ、八神!

「石田先生… 残念ですが、それは約束できかねますね」  
「ゆーとん…」

「あら、どうして?」

クツクツクツ… 八神め、不安そうな顔をしてオレを見ているな。やはり告発を恐れているか。

気分は「帰りの会」のイジメを受けた生徒Aだ。そう、普段のヒエラルキーが逆転する瞬間だ!

そこで「ぼくいじめられています」とか発言したらどうなるか? 結

果は火を見るより明らかだ。

悪いな、八神。だがコレもキミの将来のためだ。手を緩めることなどありえん！ フハハハハ！

「オレと八神の関係は本来図書館で二言、三言の言葉を交わす程度のモノです」

「……そう、なの？」

まずは深い仲と誤解されてるようなので、客観的な事実を提示して誤解を解く。会話の基本だ。

「確かに、時に世間話混じりに一緒に外出したり食事を取ったりはしますが……」

「……あの、凄く仲良く感じるのだけど」

誤解を招きかねないとはいえ事実は事実として認めねばならない時もある。認識は悪じやない。

それにコレは更なる事実の布石でしかない。後に公表する事実の説得力を増すための……な。

肉を切らせて骨を断つ。自分にとって不利益な事実を公表するかからこそ、得られる信頼もある。

「何故かオレは大抵殴られたりボコボコに論破されたりします。容赦ありません、この豆狸」

「なんやとう？」

睨まれた。コワイ！ だがもう遅い……イジメの事実は石田先生にしつかりと伝わったはずだ。

あとはオレが無垢で無力ないじめられっ子を装うだけ。そう、喧嘩両成敗ではいかんのだよ。

つまり「ぼくはなかよくしたいんですけど、あのこが」が重要になる。うん、カスだねオレ。

「……確かに彼女は料理も得意だし、頭も良く、性格も親切で心優しい」

「……桜庭くん」

キチンと彼女の良い所をあげていく。何故か？ 先生は妥協点がないがみ合いを嫌うからな。

ならばどうする？ そう、相手の良いところにも目を向けてる生徒に肩入れしたくなるもの。

物分りの良い生徒Aを演じて、必然的に2vs1の状況を作り出す。……卑怯とは言うまいね？

ていうかこの豆狸が親切で心優しいのはオレ以外限定だが。

「だが、オレと彼女の間に限っては気を遣う・遣わないという関係は存在しないのです」

そう： オレとこの豆狸の間には、大人に当然備わっているような気遣いの関係は存在しない！

オレは手を差し伸べた。にも関わらず、凶暴な豆狸に振り払われた。この構図が重要。OK？

ここまでハッキリ言えば、眼科が必要になるレベルの残念美人な石田先生にも伝わっただろう。

「そう、だったのね… まさかキミくらいの年齢の子に教えられちゃうなんて。先生失格かな？」

「気にしないでください。こういうことに年齢は関係ありませんよ」  
イジメは社会現象なのだ。大人は大人で、子供は子供でコミュニケーションは閉鎖されているものだ。

気付かぬのも無理はない。だが石田先生は今気付いてくれたじゃないですか。そうでしょう？

恐らく、石田先生は責任感が強い人なのだろう。だが間違えない完璧な人間なんていやしない。

それに反省は後からでもできる。今すべきことは、分かっていますね？ 満面の笑みで先を促す。

「フフツ… 確かに、これ以上仲良くなることは求められない関係よね」

「違う、そうじゃない」

思わず素で突っ込んでしまった。どうしよう、この先生天然なのか？ 天は二物を与えず、か？

いや、それも萌え要素なんだけど… 違うでしょ？ オレの求めていた回答と違うんですよ。

「そうだったわね… はやてちゃん」  
「ひゃい！」

と思っただら八神の前でしやがみこんで、しっかり目を見て向き合  
う。……ふう、分かってたか。

プークスクス： 八神のヤツ緊張で噛んでやんの。まあ、いよいよ  
となったら助け舟は出す。

それまではその無駄に凶暴なところはしつかりと指摘してもらっ  
て矯正に励むべき！（キリッ）

「ごめんなさい。あなたの背負い込み過ぎるところが心配で、つい…  
ううん、言い訳ね」

「そんな、先生… 頭を上げてください」

んん？ 何故に先生が謝っているのだろうか？

「でもあの子が教えてくれたわ。それも含めてあなた… はやてちゃ  
んなんだって」

「先生…」

なんかいい話になってないかい？ おーい。

「あの子はあなたの全てを、あるがままに受け入れてくれてる。…  
いい友達を持ったわね」

「……はいっ！」

「What's?」（訳：ナニツテルンダアンタイツタイ）」

何故こうなったし。何故こうなったし。……誰かオレに分かるよ  
うに説明して欲しい。三行で。

だが彼女ら二人は混乱に打ち震えるオレのことなんてお構いなし  
に二人の世界を作っている。

百合か？ 百合百合なのか？ でも、ゆるゆるで百合百合な話はも  
う少し後にして欲しかった。

そして石田先生は立ち去り、薬局でお薬を受け取ったオレと八神は  
病院の入口で別れることに。

「あんな、ゆーとん…」

「ハイ、ナンデシヨウ」

そう… オレの謀反をこの凶暴な豆狸が見逃すはずもない。むし

ろこの機会を待っていたのか？

「誕生日、楽しみにしてるで？ ほなな！」

「oh…」

これはアレですよ。 「屋上へ行こうぜ」的な呼び出し文句ですよ  
ね？ オレの処刑のための。

いや待て冷静に考えよう。 幾ら相手が凶暴な豆狸だとしても分類  
上は小学校低学年の女の子。

ボコにされるとしても死ぬことはないんじゃないだろうか？

……でも悠人少年貧弱だしなあ。

いやしかし、八神といえども “友達” と自分から言った相手を死ぬ  
までボコることはないのでは？

そう、そうだよ！ アイツはさつきオレ自身も言ってたとおりの  
ところが一杯あるじゃん！

料理上手だし、お節介だけど親切だし、手の付けられない乱暴者つ  
でだけで。 ……ダメじゃん。

だけど、うん。 友達… 友達か。 夢電波以外では初めての友達か。  
うんまあ… 悪くないかな？

………

………

…

そんなアレコレを考えながら帰り道を進んでいると、何故かいつも  
通りに道場に辿り着いてた。

「おや、今日も来たんだね？ 学校は休んだと聞いたから心配してい  
たんだよ」

「……ええ、はい。 病院行った帰りに、足が自然とこちらに」

習慣ってコワイ！ ていうかなんでこのウェイターさんはオレが  
休んだこと知ってるのだろう。

ストーカーじゃないよね？ 違うと言ってください！ お願いし  
ます、なんでもしますから！

「ははは、いい心がけだ。 じゃあ今日も素振り一千回いつてみようか」  
「ウボアー」

オレは死んだ。スイーツ(笑)。……ちくしょー、明日はいいものを  
食べて栄養を付けるぞう。

## 執務官のファースト・コンタクト

僕はクロノ・ハラオウン。時空管理局執務官として次元空間航行艦船アースラに同行している。

時空管理局執務官とは、事件の捜査や法の執行に介入する権利や現場指揮権を有する役職だ。

執務官として大きな権限を与えられているものの、当然ながら大きな力には義務と責任が伴う。

一筋縄ではいかないが、この次元世界の秩序と平和を守るコトが出来るやり甲斐のある仕事だ。

こんなことを話せば、決まって同僚に茶化されるので口には出さないことにしているけれど。

若年ということでもまだまだ先人の活躍には及ばないが、思いだけなら誰にも負けないつもりだ。

当然、今回の任務に関しても手早く解決することで被害を最小限に抑えてみせるつもりでいる。

「確か… 第97管理外世界で発生したと思われる小規模次元震の調査と解決、でしたっけ？」

「そう、上はロストログアによるものだと睨んでいるわ。だから可能ならその封印と回収もね」

アースラの艦長であり僕の母でもあるリンディ・ハラオウンに確認すると、返事が返ってくる。

「スクライア一族が発掘し運んでた例のロストログアが、あの辺に落ちたんじゃないかって」

「ジュエルシード、か。たった一つ、それも恐らく何万分の1の出力で次元震を起こすとは…」

「おやおやあゝ？ クロノ・ハラオウン執務官ともあろうお方が弱音ですかなく？」

「……からかうなよ、エイミィ。現状を正確に認識しないと任務に支障をきたす。それだけさ」

同僚のエイミィが話に乗ってくる。腕は確かなのだが、何かにつけ

僕をからかうのが玉に瑕だ。

士官学校からの付き合いとはいえ、これでは艦内の風紀にも関わって来るんじゃないだろうか？

執務官とオペレータの癒着… 笑えない三流ゴシップ記事だ。……実母が艦長の時点で今更か。

「観測結果によると、既に現地では二組の捜索者が小競り合いをしているみたいですよ？」

「そうね。一組はスクライア一族の子たちとしても、もう一組はどういった経緯なのかしら…」

「既に現地で活動してる捜索者がいて、所属も目的も不明な組もある。ひと波乱ありそうですね」

「頭が痛い問題ね。友好的であることを祈りたいけれど、互いに小競り合いをしている以上…」

エイミーと母さんが現地の捜索者について思いを馳せて、あれこれと考察を重ねているようだ。

僕も気にならないといえば嘘になる。けど何より大事なのは任務の達成。まずそれが第一だ。

議論に没頭しつつある二人に向かって、僕は、半ば自分にも言い聞かせるような形で口を開く。

「どちらにしても僕達のやることは変わらない。可能な限り穏便な形で封印と回収に尽力する」

「おっ、相変わらず真面目くんだねえ。クロノは」

「だから茶化すなつて。大丈夫だとは思いますが、油断して足元を掬われてもフォローしないからな」

「言ったわねえ。いっつも誰のサポートのお陰で現場でやれてると思ってるんだか！」

売り言葉に買い言葉。やいのやいのと僕とエイミーは腐れ縁宜しくお決まりの口喧嘩を始める。

「艦長、魔導エンジンの起動準備整いました。よろしければ発進のご命令を」

「はいはい、二人共じゃれ合うのはそこまですておきなさい。……」

いいわね？」

「はい！」

ブリッジオペレータのアレックスの言葉に居住まいを正した母さんが、僕達をたしなめてくる。

全く元はといえば誰のせいでも： そう思わないでもないけれど、僕にも非があるのは確かだ。

エイミイと二人で小さくなったまま敬礼。その様子にクスリと微笑むと艦長は発進を命令した。

「次元空間航行艦船アースラ、これより発進します。目標、第97管理外世界： “地球”！」

「了解。アースラ、メイン魔導エンジン起動します」

アレックスがエンジンを起動させ、もう一人のブリッジオペレータであるランデイが補佐する。

——ブウン：

アースラの魔導エンジンが起動する。優秀なクルーたちによって運行し、武装局員も多数配置。

隙も生じぬ二段構え、と言いたいところだが現地で何が起こるか分からない。慢心は禁物だ。

これから僕たちが向かう第97管理外世界： “地球”。其処は一体どんなところなのだろうか？

……

……

……

「現地では既に二者による戦闘が開始： あっ、終わった模様です」「えっ？」

ランデイの報告に思わず聞き返してしまう。……ソレはつまり、瞬殺したということだろうか？

甘く見ていたつもりはなかったけれど、戦力評価を上方修正しないといけないかもしれない。

それともロストログアのランクが低めだったということだろうか？ それならまだありえるが。

「信じられません… 中心となるロストロギアのランクは最低でもA十だったのですが…」

「……一級の武装局員に匹敵するわね。勿論、魔力量だけが実力の全てじゃないけれど」

艦長が感嘆したようにため息をつく。僕だって同じ気持ちだ。ロストロギアはいわば自然災害。

ただの人間が持つ魔力量とは異なり、自然現象を伴うことでその威力を最大限に発揮できる。

往々にしてその逆とはいえ、もしかしたら同ランクの武装局員より強い可能性だってあるのだ。

何にせよ、一瞬で鎮圧できるほど容易な相手ではないのは確かだ。よほどのセンスがあるのか？

「あつ… 一組がそのままジュエルシードを巡り、ノータイムで戦闘を開始した模様！」

「なっ!? ……昨日次元震を起こしたばかりだろうに！ 一体何を考えているんだッ!?!」

思わず怒鳴ってしまった僕は悪くないと思う。とはいえ、状況に臨み冷静さを喪うのは失策だ。

「わお、地球人って好戦的ね。戦闘民族なの？ ……私、上手くやれるのか不安になってきた」

「言ってる場合か！ 艦長、転移座標の特定はできてます！ 命令があればいつでもツ！」

普段は反発することが多いエイミイの軽口に心底同意したくなる。とは、いよいよもって重症だ。

とはいえ仕事は仕事だ。僕はゲートに向かって駆け出しながら、艦長に出撃の許可を求める。

今この場でやるべきコトは、戦闘に介入して即座に停戦を促し協力の下で事情確認をすること。

「クロノ・ハラオウン執務官、やるべきことは分かっていますね？」  
「当然です」

「ですが充分に注意を。貴方と云えど、油断をしていたら… いきな

り墜とされかねません」

「大丈夫。分かっていますよ、艦長」

モニターに目を移せば、不規則な高機動戦闘をしながら弾幕をバラ撒く白い魔導師の少女の姿。

そして、それら全てを躲しながらも果敢に反撃を試みる黒い魔導師の少女の姿が映っている。

オマケに辺りは援護の魔法や何故か刀剣の類が飛び交い、非常に混沌とした状況となっている。

今から“この中”に飛び込まないといけないのか。いや、危険な任務は何度となくこなしてきた。

「それじゃ、気を付けてね〜」

「……はい、いつてきます」

艦長がハンカチを振って見送ってくれる。……何故だかソレがとても不吉なものに感じられた。

……

……

……

「ストップだ!」

結論を言うと、何とか傷付くことも傷付けられることもなく戦闘行為の停止を呼びかけられた。

あまりこういう言い方をしたくはないけれど、運が良かったのも大きな要素と言えるだろう。

勝てないとは決して思わないが、ある意味で暴走体以上に奔放に動き回る極めて厄介な連中だ。

「ここでの戦闘行動は危険過ぎる。……僕は、時空管理局執務官クロノ・ハラオウン」

「……ッ!」

まずはジュエルシードのすぐ傍で戦闘行為に及んだ軽率さを注意しつつ、軽く自己紹介を行う。

二人の少女や剣を投げていた少年、そして使い魔らしき二名が息を呑む様子が伝わってくる。

取り敢えず、直ぐ様激しい抵抗をするという様子はないようだ。内心安堵しつつ言葉を繋げる。

「詳しい事情を聞かせて…」

「そうだよ！ 危険すぎるんだよ！ ジュエルシードのすぐ傍での戦闘行為は危険なんだよ！」

そのまま事情聴取に移ろうとしたところ、イタチ型の使い魔に遮られ… ん？ コレは擬態か。

あ、いや、それより事情を確認したいんだけど。ま、まあ言ってることは間違いじゃないが。

いや、こんなことじゃいけない。時空管理局が低く見られるようではダメだ。ここはビシツと…

「そのとおりだ。だからキミたちの事情を…」

「何やってんの！ 僕言ったよね？ 次元震が起こるとアレだから戦闘は控えるようにって!!」

ビシツと…

「う、うん。だから早く終わらせようかなって…」

「なんでそっち方面に行くの!! 刀真も止めてよ！ なのはの考えてるコト分かるでしょ!?!」

「あ、いや… 同じく、さっさと勝っちゃえば解決するかなって。… すまん、ユーノ」

「あくもう、あくもう！ その管理局の人も何か言ってやってください！ この脳筋たちに！」

「こ、ここで僕に振ってくるのか？ 忘れられていると思ってたが… いや、しかしこれは好機。

「その… うん、彼の言うとおりだ。ロストログア付近での戦闘行為は危険だからこそ事情を…」

「そこ！ 僕たちが話してる際にジュエルシード持って行こうとしない！ 怒るよ、ホントに！」

黒い魔導師の少女がコツソリとジュエルシードを持ち去ろうとしているのが見つかったようだ。

…うん、もはや何も言うまい。

「ッあ… バレちゃった」みたいな顔してもダメだからね!? ていうか、バレバレだからね!」

「イタズラ見付かつちやった子供みたいな表情でしょんぼりしてるフエイちゃん可愛い」

この状況の一因となった白い少女といえば、黒い少女の気まずそうな表情に頬を緩ませている。

ジュエルシードの封印から、ほぼノータイムで戦闘を開始するような付き合いだっただけだ。

もつと殺伐とした間柄を予測していたが違うのか? これが管理外世界の異文化というものか。

ひよつとしたら、彼女らにとって挨拶代わりの攻撃はコミュニケーションの一環かもしれない。

確か… 戦うことでしか分かり合えない人種がいると、以前エイミーから聞いたことがある。

事情聴取後に艦長に提出するレポートには、その辺りの考察を含める必要があるかもしれない。

「なのはも! 自分のしたこと自覚してる? 刀真やそっちの女の子もだよ! 反省してよ!!」

「ご、ごめんね… ユーノくん」  
「すまん、ユーノ…」

「ご、ごめんなさい…」

その場にいる三人が、イタチに擬態している少年に頭を下げる。……なんなんだ、この光景は。

なんとも言えない空気が辺り一帯に漂う。一人、擬態している少年がプリプリと怒っている。

どうやらお説教は長くなりそうだ。少し怒りっぽいものの、感性は僕らに近いようで安心する。

ひよつとしたら、彼こそが艦長の言っていた渦中のスクライア一族の少年なのかもしれないな。

「いつもいつも顔文字の人に遮られてる僕の話なんて、みんな真面目に聞くつもりないんだね…」

「そ、そんなことないよ… うん、ごめんなさい。…反省してます」  
「いや、悪い。その、負けっぱなしで『次こそは』って思ってたからっ  
い…」

「えと、顔文字の人って誰…?」

どうやら彼らの問題も中々に根が深いようだが、いつまでも時間を  
無為にできない。そろそろ…

「……ッ！」

——ドオンツ!!

攻撃魔法を感知して、咄嗟に障壁を展開する。下手人は… 黒い少  
女の使い魔である大型犬か。

「何やってんの、撤退するよ!」

「あつ… うん!」

それはタイルを抉り、黒煙を巻き起こして僕たちの視界を阻む。  
…なるほど、見事な奇襲だ。

だが、無意味だ。僕も随分と舐められたものだ。あの程度の攻撃、  
目眩ましにもなりはしない。

どうやら彼女たちに関しては拘束が必要なようだ。事を荒立てた  
くはなかったが、仕方ない。

ジュエルシードを確保しようと動く黒い少女に対し、黒煙の中から  
射撃魔法の照準を合わせる。

「そうはさせない…ッ!」

その時だった。…僕に迫る『何か』の気配を感じたのは。回避  
のため咄嗟に一步引いてしまう。

それは訓練で染み付いた抗いようなない習性のようなもので、事  
実、その判断は概ね正しい。

今まで幾度となく命を救ってきてくれたし、今回も、ソレが効果的  
に発揮されたと思っていた。

——ブンツ：

目の前をその『何か』が通り過ぎる。何だ、アレは… 果物? い  
や野菜? そうか、玉ねぎか!

コレが魔力弾とかあるいはナイフのようものだったらこのような

醜態を晒さなかつただろう。

だが、あまりにもこの場に似付かわしくないソレに、僕は思わずその行方を目で追ってしまふ。

……致命的な隙を見せながら。

「させるかあー！」

——ドンッ！

そんな声と共に時間差で身体ごとぶつかってきた人物に、僕は反応することすら出来なかつた。

体格的に決して恵まれていない僕はあっさりと姿勢を崩し、もつれ合うように転んでしまふ。

僕の習慣付いてた動きさえも逆手に取った、先ほどのソレとは比べ物にもならない完璧な奇襲。

意地で魔導杖デバイスは手放さなかつたものの、マウントポジションを取られてしまい状況は絶体絶命。

「……落ちた」

夕暮れの残光に照らされた銀髪、まるで獲物を狙うかのように周囲を見渡す鋭い虹彩異色の瞳。

たつたの二手……魔力すら使わずこの僕を組み伏せてみせたその男は、無感動にそう呟いた。

雰囲気呑まれて誰も言葉が発することが出来ない。今、この場は彼に完全に支配されている。

第97管理外世界……地球。どうやら僕は……いや、僕たちはまだまだ認識が甘かつたようだ。

## 少年と管理局・上

やあ… みなさん、こんにちは。それとも、こんばんは？ もしかしたら、おはようだろうか？

いずれにしても、清々しい時を過ごさせていたなら喜ばしい。え？ オレは何をしてるかって？

フフフ、よくぞ聞いてくれました。オレは今なんと… 黒っぽい格好をした少年に土下座中さ！

全くなんでこんなことになったのやら… オレはこうなつた経緯について振り返るのであった。

土下座しながら。土下座しながら。大事なことなので二回言いました。

……

……

……

—— チュンチュン… ガバツ！

小鳥の囀りをBGMにベッドから起き上がる。今日も、青空が澄み渡った気持ちの良い朝だ。

「よし、良い目覚めだ」

今日は「みどりの日」。つまり祝日だ。昨日休んだことにより奇しくも2連休となつてしまった。

そして土日も続いて4連休となる。月曜日は祝日ではないものの、その後更に3連休となる。

ビーフ・ストロガノフ（滅）で崩れた体調も概ね回復しており、この連休をフルに活用できる。

つまり、何が言いたいのか？ そう… ゴールデンウィーク G W 万歳ということだ。者共、宴の準備じゃ！

そしてオレは以前借りてた本を返しに昼頃図書館に向かうと、夕方になるまでそこに籠もり…

新たに2冊ほど借りたその足でスーパーですき焼きの材料を買い込み、帰途についたのである。

借りてきた2冊は「虎よ！ 虎よ！」と「星を継ぐもの」。たまには古典SFにどっぷり浸かろう。

そう、こういうムーブこそがオレ。何が悲しくて汗臭く毎日素振りをしていないといけないのか。

でもチキンだから素振りは午前中のうちに終わらせてきました。図書館というご褒美のために。

なんかウエイターさんが山と一緒に行かないかとか誘ってきたけど、丁重にお断りしておいた。

やはりホモなのか？ 勘弁して下さい。桃子さんがいますよね？ 彼女一筋でお願いします。

ホントにコレさえなければいい人なのに… 凄くいい人なのに。残念過ぎて逃げ出したくなる。

そんなこんなで、オレは解き放たれた気分ですキップ混じりに歩いていた。夕焼けが心地よい。

こんな日は臨海公園を通って景色を楽しみながら帰ろうかな？ そう回り道って訳でもなし。

この決断をオレは死ぬほど後悔することになるのだが、その時のオレは勿論知る由もなかった…

「……………」

最初に感じたのは違和感。まるで薄膜一つ突き破って、別の世界に紛れ込んでしまったような…

まさか!? 今の時刻を確認する。クツ、なんてことだ… まさしく「逢魔が時」じゃないか。

日暮れ時のこれから夜の帳が下りる時間帯… 古来より、「魔に出逢う刻」と恐れられた時間帯。

妖怪が現れて人を喰ったり神隠しや人攫いが出てくるのだ、と恐れられた、それが「逢魔が時」。

「フツ、バカバカしい…」

……なんてな。そんなの迷信だ。ある筈がない。一笑に付して気にせず進もうとしたところで。

——ドオンッ！

「うわおう!?!」

地面が揺れるような爆発音が聞こえてきた。てか揺れた。今地面が揺れた。最近地震多いな!?

やっぱり引き返そう。ビビツたわけじゃないぞ。よく分からん爆発音に近づくのは危険だし…

論理的かつ理性的に撤退を決めたオレだが、パンパンに詰まっていたスーパールの袋が反逆した。

具体的には揺れのせいで玉ねぎがこぼれ落ちた。……ポロツと。

「……あ」

——ポトツ、コロコロコロコロ…

奥に向かってすごい勢いで転がっていく。って待てい! 玉ねぎ抜きすすき焼きなんて嫌だぞ!

一瞬呆然として見送ってしまったオレではあったが、我に返ると慌てて玉ねぎを追いかける。

地面を転がった玉ねぎを食べる気がかって? 剥けばなんとかなるさ! まてえらい、ル〇ン!

奥に向かって大丈夫か? 帰ろうとしていたような… 知るか、そんなことより今は玉ねぎだ!

その後… オレと玉ねぎのレースは暫く続いたが、なんとかヤツを追い詰めることに成功した。

多分普段の素振りとかがなければもっと早く体力ゲージがゼロになり、力尽きていただろう。

てか、スーパールの袋置いてくれば良かった。持ったまま走るの滅茶苦茶しんどいです。泣ける。

「ぜえ、ぜえ… よし、ようやく…」

並走し、空いている方の手で玉ねぎに手を伸ばそうとした時…

——ドオンツ!!

再び、より大きな爆発音があたりに響き渡り… ぎゃあああ! 玉ねぎが進路変更したああ!?

しかも確かこの先は海に続いていたはず! 早く追いつかないと海ぼちやされてしまうやん!

流石のオレも海ほちやした玉ねぎを食べる気はしない。なんとしてもここで追いつかなければ。

だけど、たかが56円の食材に何をムキになってるんだろう。いや、もういい。もはや意地だ。

「アーマージヤケットパージ！」

アーマージヤケットもといスーパの袋を投げ出し、玉ねぎを…ただヤツのみを追い求める。

道無き道を進み、時には茂みをも突き破る。そして、オレたちが向かうその先には光が…!?

いかん、この先はもう海に続いていたはず。やらせるものか！このまま海ほちや玉ねぎなど…

「させるかあ！」

オレは光へと向かって手を伸ばし…

——ゴスツ

その勢いのまま「誰か」と激突し、もつれ合い、激しく転倒するのであった。前方不注意ですね。

どうやらオレは「不運」ハードラックと「踊」ダンス「つちまったらしい。ぶつかった誰かさん、マジすんません。

ところで玉ねぎは…ヤツはどうした？せめてヤツさえ無事なら…だが現実には非情である。

周囲を見渡すオレの目に映ったのは、スローモーションで海に身投げするヤツの最期であった。

——ほちやん…

「…落ちた」

衝撃が突き抜けて、他人事のように眩いた。ああ、オレは一体なんのためにこんなところまで…

こんなところ？　そういえば…と、ここでオレは「周囲の状況」とやらを改めて確認してみる。

例のCG発生装置に手を伸ばす金髪の少女。そしてそのペット。さらに他2名も見知った顔。

名無しの少年とちやつかり系少女だ。最近道場で見ないと思った

らこんなところでサボりか…！

羨ましい！ 是非オレも一緒にサボらせて下さい！ ウエイターさんたち怖いから無理だけど！

「……………」

何故かみなさん沈黙してらっしやる。そしてみなさん揃いも揃ってオレを注視してらっしやる。

無言のまま。無言のまま。大事なことなので二回言いました。……気のせいだと思いたいネ。

だが現実から逃げるわけにはいかない。この場の状況を理解して、最適な回答を導き出さねば！

さあ、キリキリ働け。オレの灰色っぽい脳細胞。

1. 全員日常生活にそぐわぬであろう派手めな衣装を身に纏っている。

2. CG発生装置に手を伸ばしてる金髪少女。

3. 辺りに不自然に残っている破壊やら爆発やらの痕跡っぽい穴とかそんなの。

なるほど、謎は全て解けた。じっちゃんの名にかけて。そう…これは撮影現場だったんだよ！

つまりオレは、奇声を上げながらこの撮影現場に乱入してきた不審人物ということになるな。

……アカン（白目）。うん、そりやみんな注目しますよね。この不審者一体何者なんだよって。

あばばばばばばばばばばばばば！ どうしてこうなった！ どうしてこうなった！

……弁償か？ 弁償なのか？ いや、多少はお金を持たされてるけど無理。損害賠償とか無理！

ご両親に迷惑をかけるしかないのか？ 嗚呼… 自分で責任を取れぬ子供ボデイが恨めしい。

待てよ？ ここには金髪少女がいるじゃないか。そう、公園でちよつと会話もした程度の仲だ。

缶コーヒーやボン太くんを（一方的に）プレゼントした間柄じゃな

いか！　これはもはや絆だ！

「あつ…」

よし、多分覚えていてくれてたっばい。……目が合うと棒に結んだボン太くん撫でてくれたし。

あとは子役女優っぽいこの子に縋って監督さんへの口利き・取り成しをお願いするしかない。

頼む、名も知らぬ金髪の少女よ。ヘルプミー。映像化されたらD V DとかB D 1 0枚買うから。

「……………」

オレは「助けてください」という想いを瞳に込め、金髪少女を見つめる。やがてハツとする彼女。

伝わったようで何よりだ。流石に「弁償したくないので弁護して下さい」と言えないからな。

即座に首を横に振ろうとする彼女に対し、笑顔で微笑み…　頷いた。精一杯の営業スマイルだ。

頼む、頷け。頷いてくれ。頷いて下さい！　でないと悠人少年が借金で社会的に死んでしまう！

酷く長く感じる刹那の時は、その小さな首肯によって締め括られた。ありがとう、金髪少女！

さあ、早く取り成しを…　あれ？　あれれれれ？　金髪少女、帰っていつちやっただんですけど…

「……………」

ペコリとお辞儀をしてから、例の赤い大型犬と一緒にどっかに飛んで行っちゃったんですけど。

これはアレか？　「ごめんなさい、無理です」ってことなのか？　「サヨナラ」ってことなのか？

どないしよう…　唯一の頼みの綱に見捨てられてしまったでガンズ。やっぱ無茶だったのか!?

いや、諦めるのは早い！　こういう時こそ冷静に頭を仕切り直せば、活路は見出だせるはずだ！

まずは落ち着くのだ。周囲の流れに反発するのは下策。周囲を利

用し流れを呼びこむが上策。

「ピンチの時はまず落ち着いて、その後によくものを考えるコト  
“ っってどつかの先生も言ってた！」

「そう、落ち着いて… 周囲を…」

「……………」

「……………」

「そこで、オレが押し倒してる形になってた少年と目が合った。わあ  
い、すっかり忘れてたZE！」

「……………とりあえず、どいてくれないか？」

「あ、はい」

「オレはその少年の上からどくと、即座に土下座をした。」

「……………」

「……………」

「……………」

「それから程なく、オレたちは立体ホログラムの多分偉い人の指示に  
より変な場所を移動してた。」

「……………うん、我ながらふわつとした説明ですまぬ。近未来的な設備つ  
てことしか分からんのよ。」

「そしてこの一件で、オレはこれがハリウッドばりに予算がかかった  
撮影だったことを確信した。」

「ていうか、まんまハリウッドだろうね。わーい… ハリウッドス  
ターと知り合えたぞー（棒）。」

「……………」

「これも魔法… なのか？」

「ユーノくん、ユーノくん… ここっって一体？」

「時空管理局の次元航行船の中だね」

「ノロイ様（仮）が喋っている。だがハリウッドではよくあることだ。  
なんら驚くに値しないな！」

「… とうか、役者のみなさんが演技を続行しているこの場にオレなん  
かがいていいのだろうか？」

「監督採用しちゃったの？ さっきのシーン採用しちゃったの？」

オレ、エキストラになったの？

「簡単に言うとも幾つもある次元世界を自由に移動する… するための船だよ」

「あ、あんま簡単じゃないかも…」

うーん… それじゃ伝わりにくいだろうね。ノロイ様（仮）の説明も間違っていないんだが…。

SF好きとしてソレらしい説明をしたくなってくる。いいかな？  
いいよね？ よしいこう。

オタクつてのは、自分の分野になると語りはじめる生物なんだよ。  
我ながらめっちゃうざいね。

「海で隔てられたり、陸で隔てられたり、そういった断絶された場所と  
いうものがあるだろう？」

「あ… うん、流石にソレはな」

「次元も同様だ。海以上に断絶された、本来決して超えられない断崖  
のようなものだな」

「へえ、そう考えると分かるかも」

黒っぽい格好をした少年を横目で確認するが、特に訂正する気配は  
ない。よし、このままGO！

「だが絶対ではない。何かの拍子に交わってしまうこともあるだろ  
う」

「ふんふん。交わったらどうなるんだ？」

「例えば桃源郷伝説、例えば神隠し伝承… それらもそういったモノ  
が生んだ伝説かもしれない」

「なるほど…」

「つまり次元航行船というのは」

名無しの少年と白っぽい格好をしたちやつかり系少女たちに視線  
をやる。さあ、答えをどうぞ。

「そういった次元同士を行き来できる船… ってことだよな？」

「なかなか りかいが はやい」

ブラボー！ オー！ ブラボー！ オレ、（当てずっぽうだけど）オ  
タク知識を語れて大満足。

そんなオレを観察していたっぽい、黒っぽい格好をした少年が話かけてくる。

「随分と詳しいみたいだな。えっと……」

「……失礼、名乗りがおくれました。桜庭悠人です」

「いや、こちらこそ。時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ」

おお、なんか凄そうな肩書きの人だ。……そんな人にタツクルかましたんだな、さっきのオレ。

取り敢えずもう一回謝っておこう。エキストラかどうか知らんけど、謝って損はないはずだ。

全方位土下座外交を展開して、少しでも弁償をする可能性の潰していくのだ。がんばれ、オレ。

「改めて、先程はご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした」

「……その件も含めて話が聞きたい。どうかこのまま抵抗せずに同行をして欲しい」

「……はい、本当にすみませんでした」

「だが、僕個人としてはその謝罪を受け取っておこう。なに、決して悪いようにはしないさ」

やはりそう上手くは行かないかと落ち込んだオレに対し、彼は微笑んでフオローをしてくれる。

……なんていい人なんだ。後光が差して見えるようだ。執務官さん最高！ 素敵！ 抱いて！

いや落ち着け。確かにこの人はいい人だが抱いてはないだろ、抱いては。ホモは帰ってどうぞ。

それから衣装チェンジをしたり、ノロイ様（仮）が人間になったりと色々あったが省略する。

動物が人間に変身した？ ハリウッドではよくあること。この言葉で全てが解決されるのだ。

ただのエキストラのオレが、大きなアクションを取って他の連中より目立つわけにはいかん。

無心、無心……心を無にするのだ。……そうこうしているうちに、目的地へと到着したようだ。

「艦長、来てもらいました」

ハラオウン執務官がそう言つて近未来風の扉を開けると…

——カポーン…

そこは鹿威ししおどしが鳴り、盆栽が立ち並ぶ和風テイストな場所であった。これは、いい仕事だ。

「お疲れ様。さ、4人共どうぞどうぞ… 楽にして」

優しそうな人だ。オマケに美人だ。ハラオウン執務官の言葉から推測するに、この人が艦長か。

ならば、オレのするべきことは一つ。

「はじめまして、艦長殿。丁寧なお招き恐縮です。自分は聖祥大附属小学校三年、桜庭悠人です」

そう、保身のみ。楽にしろと言われて楽にしているようでは二流！  
少しでも印象を操作せよ！

直立不動のまま、45度のお辞儀をする。他の3名もそれに続いた形で自己紹介を済ませた。

流石にお辞儀まではしなかったけど。彼らはする理由がないしね。オレは土下座も厭わないが。

「あら、ご丁寧に。私はリンディ・ハラオウン。この次元航行艦船アースラの艦長をしています」

「ハラオウン？　ということとは…」

ハラオウン艦長の傍らに立っているハラオウン執務官に視線を移す。……ややこしいな、これ。

すると、彼も頷く。やはり、か… 自分の仮説が確信に至る。そしてオレは口を開く。

「なるほど、ハラオウン執務官の姉君でしたか。ご姉弟揃って優秀なんでしょうね」

もしくは、この二人の家系によつほど大きなコネクションがあるか。まあ、どっちでもいいか。

……？　なんだろう。なんかハラオウン艦長がニコニコしだして、うん、それはいいのだが…

ハラオウン執務官が複雑そうな表情をしている。なんかオレ、失礼

をってしまったのだろうか？

「……母だ」

「はい？ ……あ、後妻さんとかそういう」

「血の繋がった実の母でございます。フフツ、クロノは私がお腹を痛めて産んだ子でしてよ？」

「わーお…」

いいのかこれ。監督、いいのかこれ。ハラオウン艦長、どう見ても二十代前半にしか見えんぞ。

髪の色とか全然違うし。いやまあ、他の誰が言っても悠人少年だけは髪の色指摘できんけど。

とはいえ、二人で説明されてはそういうものだど割り切るしかない。何故か艦長、上機嫌だし。

「コホン… 納得してもらったところで、そろそろ事情を聞かせてもらってもいいだろうか？」

「あ、はい。どうぞ」

優しい人だなあ… 尋問という形ではなく、飽くまで聞き取り調査という形にしてくれる模様。

よし、なんでも聞いてくださいよ！ 執務官さんのために、ゲロっちまう準備は万端でさあ！

オレは気合を入れて聞き取り調査に備える。機嫌を損ねたら、尋問が拷問に変わっちゃうしね！

「まず、あの黒い魔導師の少女との関係は？ 彼女は何者なんだ？」

「え？ ……あの、知りません」

「……あの黒い魔導師の少女の所属は？」

「……存じません」

「……あの黒い魔導師の少女の名前は？」

「……分かりません」

何故か金髪少女について執拗に聞かれた。うん、ごめんなさい。あの子のこと何も知りません。

大きいため息を吐かれる。あかん… 執務官さんの好意を踏み躪る腐れ外道になってますやん。

「ねえねえ桜庭くん。あの子の名前はフェイちゃんって言うんだよ？」

「あ、そうなんだ」

「えっへん！ フェイちゃんから教えてもらったんだよ」

「そっかー。えらいなー。すごいなー」

ちよっぴりドヤ顔可愛らしいけど、そういう助け舟はお兄さんもう少し早く欲しかったかなー。

とりあえず新事実が判明した。可及的速やかに、ハラオウン執務官へと報告せねばなるまい。

こういう地道なポイント稼ぎがオレの疑惑を薄める一步に繋がっていくのだ。がんばれ、オレ。

「ハラオウン執務官、あの黒い魔導師の少女はフェイちゃんというらしいです」

「いや、うん。聞こえてたから。目と鼻の先の距離でのやり取りは流石に聞こえるから」

ですよねー！ ……ぐぬぬ、汚名返上ならずか。

「まあ、その言葉を信じるとして… だったら、なんであの場に割り込んできたんだ？」

「その、玉ねぎを追って…」

「……君は僕を馬鹿にしているのか？」

絶望した！ 時に想いが擦れ違い、真実が人を傷つけてしまう… そんな現代社会に絶望した！

なんだよ、何もかも全部オレが悪いってのかよ？ ……オレは悪くねえ！ オレは悪くぬえ！

いかん、生まれた意味を知るRPGになるところだった。そもそもオレが悪いしね、この状況。

嘘は何一つ言っていないのに疑惑が深まってしまふ。少年たち、助けて！ あ、目え逸らすなよ！

「まあまあ、クロノ… この子は嘘を言っているとは思えないわ。一旦ここまでにしましょう？」

「しかし、艦長」

「それに他に3人もお客さんがいるでしょう？　あまり一人に時間をかけるものではないわ」

「はあ…　仕方ない。君の疑いが晴れたわけじゃないから、そのところは理解するようにね？」

「ははあ…　肝に銘じます」

「ありがてえ、ありがてえ…　美人艦長さんにフオーしてもらった。素敵！　結婚して下さい！」

「…うん、素敵な旦那さんがいるでしょうから無理ですよ。調子に乗ってマジすんません。」

「とはいえ、オレの尋問はこれで一段落か。良かった良かった、安心して腹が減っちゃったよ。」

「お、目の前にお茶と羊羹があるじゃん。」

「では、キミたちの事情も聞かせてもらおうか」

「あ、はい。えっと…」

「ノロイ様（仮）な少年が周囲をキョロキョロと見渡している。まるで、何かを警戒するように。」

「言い難いことか？　確かに証言の記録は取らせてもらうが…」

「あ、いえ、そうではなく…」

「ならば盗聴を心配しているのか。そういった心配もないよ。…ですすよね？　艦長」

「ええ、あなたたちの到着前にひと通りチェック済みよ」

「流石ハラオウン親子だ。出来る人は気遣いも超一流。いよっ！」

「憎いね、ハリウッド・スター！」

「だがノロイ様（仮）な少年の顔色は冴えないままだ。一体何が彼をそこまで苛んでいるのか？」

「傍らの少年少女に視線を移せば、彼らもなんとなく察したような苦笑いの表情を浮かべている。」

「はて、一体何なのだろう？」

「えと、会話に割り込まれないかと心配で…」

「少年、流石に会話を始めようという時に叩き潰すような失礼な人はいないと思うぞ」

羊羹を食べながら思わず突っ込んでしまったオレは悪くないと思う。あ、お行儀は悪いですね。

思うにこのノロイ様（仮）な少年は自分に自信が持てないタイプなのだろう。だが案ずるな。

世間つてのは思ったより優しいもんなんだぞ？ オレはサムズアップをしながら頷いてみせる。

ノロイ様（仮）な少年の緊張が、笑顔とともに解れていくのが伝わった。うむ、善き哉善き哉。

「……何故だろう。何故か『オマエが言うな』って心の底から思ってしまうぞ。桜庭」

「……右に同じくなの」

だが世間の風はオレには冷たかった。名無しの少年と白っぽい少女がオレの言葉に異を唱える。

まるでオレが、ノロイ様（仮）な少年の説明をこれでもかと邪魔してきてかのような口ぶり。

なんとという風評被害。所詮エキストラに、口を挟む権利はないというのか！ うん、知ってた。

「解せぬ」

反省の意を込めつつ、オレは羊羹を頬張りながらエキストラらしく気配を隠すことに専念した。

話長くなるかな。今晚何にしようかな。とか思いながらオレは話を聞き流すのであった。

てか羊羹うめえ。あ、そっちも食べていいんですかハラオウン艦長。やったー！ 管理局万歳！

## 少年と管理局・下

やあ、みなさん。ごきげんよう。オレです。いかがお過ごしですか？ オレは羊羹食ってます。

ハラオウン親子と例の三人組たちは、なんか重苦しい顔で設定とか語り合ってるみたいです。

エキストラなオレにとつては全く以てどうでもいい話だが、要約すると「世界やべえ」らしい。

え？ 乱暴に短くまとめすぎだつて？ じゃあ「黒歴史の遺産っぽいので世界やべえ」らしい。

世界がやばいとかいつものハリウッド過ぎて既に様式美すら感じちゃうつて話ですよ。ええ。

まあ、世界滅びるのはよっぽど扱い方を間違えた最終ケースらしいんで、オレも一安心ですね。

なににせよ、劇中内の登場人物としても一役者としてもオレに出来ることは何もないつて訳だ。

こうなった以上、もう我関せずの姿勢を貫いてお茶でも飲んでボケっとしていくしかないな。

あ、ハラオウン艦長が見ている。会話の邪魔をするつもりはないけれど、お茶のお礼くらいは…

「お点前頂戴します」

「フフツ、はいどうぞ」

会話の邪魔をしない程度の小声でそう言葉をかわすと、左手で茶碗を受けてからお辞儀をする。

右手で小さく茶碗を時計回りに2回回して、茶碗を傾け抹茶を飲み干す。今は音を立てずに。

茶碗の縁を指先で軽く拭ってから、今度は反時計回りに2回回して… 身を屈めて茶碗を確認。

「いいお茶碗ですね」

「あら、ありがとう」

略式ではあるが、作法に則った形でお茶を頂く。飲み終わったあと

はお互いに笑顔を浮かべる。

日本での撮影、そしてこの和風のレイアウトに抹茶と羊羹。なるほど… 監督は日本通だな！

ならばせめてエキストラとして、少しでも和風テイストに近付けるようにサポートしなければ。

ところで日本には“お返し”という文化がある。頂いた恩にはお礼を以て返すことを指すのだ。

お中元、ご歳暮… こういったやり取りが、互いの繋がりを再確認できる作業にもなるのだ。

下らぬ島国のしきたりと侮るなかれ。こういう気遣いこそが和を尊ぶ日本の本質と言えるのだ。

「……………」

——ゴゴゴゴゴゴ……

オレは脇においていた鞆に手をやり中から例のブツを取り出す。そう、ブラック缶コーヒーを。

驚きに目を丸くするハラオウン艦長。わお、美人ってどんな表情しても美人で可愛いですね。

ソレを置いて、赤い敷物の上を滑らせる。ブラック缶コーヒーは艦長の前でピタリと止まった。

「ジャパニーズ返杯です。……貴女の瞳に乾杯」

「あ、ありがとうございます…」

ドヤ顔でクサイコトを言っただけのオレに対し、ハラオウン艦長が引き攣った笑みで礼を言う。

気にしないで下さい、艦長。缶コーヒーが処分できて嬉しい！ なんて全然思ってますから。

ええ、オレ全然思ってますから。とりあえずジャパニーズ付けて断りにくくしようなんて…

そんなこと全然考えてませんから！ 恩を仇で返す行為… まさに外道と呼ぶに相応しい所業！

あ、でもホントに要らなかつたらこっちで処分しておきますんで。いつでも言ってくださいね。

そんな想いを心の中に秘め笑顔を艦長に向ける。と、いつしか注目を浴びていたことに気付く。

「……………」

こんなモブに何を注目する要素があるだろうか。あ、出番かな？  
なんか台詞言えってことか。

えーと、この場面での台詞台詞… そうか！ よし、これで行こう。

「コレクツテモイイカナ？」

「違うな、間違っているぞ！」

隣のノロイ様(仮)の羊羹の皿をさり気なく手元に引き寄せながら言う。しかし違ったらしい。

ハラオウン執務官に怒られてしまった。ふむ… ならばなんと答えるべきだったのだろうか？

頭を使えば脳が糖分を摂れと訴えてくるため、羊羹を頬張りながら考える。うん、羊羹うめえ。

「僕の羊羹… いや、いいんだけど」

「許せ、サスケ」

——トントツ…

ごめんノロイ様(仮)。缶コーヒーあげるんでどうか許して下さい。そつと彼の前に缶を置く。

「サスケじゃなくてユーノ・スクライアです…」

「オレ サクラバ ユウト。ユーノ・スクライア コンゴトモ ヨロシク」

「なんで片言なの…」

ユーノ、ユーノ、YU—NO… もといユーノくんね。よし、覚えた。よろしく、ユーノくん！

缶コーヒー受け取ってくれた。優しい。缶コーヒー飲んで苦そう  
な顔してる。ごめんなさい。

ユーノとユートって似てるよね？ これからソウルブラザーって  
呼んでいいかな？ 心の中で。

…うん、ごめん。ユーノくんはハリウッドスターだしね。オレな  
んかと住む世界が違うよね。

調子に乗ってすみませんでした。

「こうして悠人少年はひっそり小市民○として生きていくのでした。めでたしめでたし」

「いや、終わらせないですよ！ まだ始まってすらいらないよ！」

白い少女がツッコんでくる。中々の反応速度だ。どうあつてもこの話を続けるということか…。

ならばオレも覚悟を決めねばなるまいな。真剣な表情に戻り、居住まいを直し周囲を見返す。

ソレを真っ向から受け止めるハラオウン親子と、少し呑まれた様子で喉を鳴らす少年たち3人。

オレは満足気に唇の端を釣り上げると、身構える面々に対し、用意していたその言葉を紡いだ。

「すみません。全然話聞いてなかったのもう一回お願いします」  
土下座をしながら。

……

……

……

「……ということなんです」

「……なるほど、な」

オレは言葉を漏らすと一つ頷き、皺を深くせんとする眉間を揉みながら大きいため息を吐いた。

説明によれば、今この街で起こっている異変の数々は、大体「ロス・トロギア」のせいだったのだ。

なんとということだ……

オレがちよっぴりアレな外見の少年になってしまったのも……

冷蔵庫が缶ブラック・オブ・カオスコーヒーどもに占拠されているのも……

車シルバー・チャリオッツ 椅子を操る関西弁少女に因縁付けられ轢かれたのも……

スーパーのタイムセールで何度も地獄を見たのも……

翠屋に向かったタイムミングで何故かいつも満席なのも……

クロハラ（飯）さんがなんかもう色々ヤバイのも……

ゴリくんが小学3年生なのに180cm明らかに超えてるのも……

悠人少年の席が聖帝十字陵だったのも…

唐揚げをつくろうとして火事を起こしてしまったのも…

心の弱さから妄想電波と付き合うようになったのも…

金髪少女が大型犬を放し飼いで散歩していたのも…

神社で新しい家族を迎えようとしたら横から搔つ攫われたのも…

キャッチボールしてたら物理法則に反したふっ飛ばされ方したの

も…

何故か望んでもない編みぐるみをする羽目になったのも…

金髪少女がイースターエッグの行事をもう長いこと続けてるのも

…

体育会系とか大嫌いなのに何故か道場に通う羽目になったのも…

その道場の兄妹がどう見ても人間業じゃない動きをしていたのも

…

挙句にその道場で地獄の鍛錬をする羽目になったのも…

その縁で物体Xを食って病院通いをする羽目になったのも…

最近何かと八神こと野良狸の気性が荒いのも…

「全部、『ロストロギア』のせいだったんだな！」

「分かってくれましたかー！」

分かるさ… ユーノくと固く握手を交わす。おのれ、ロストロギ

ア。ゆるぎなきんツッ！

「そして桜庭くん。貴方には既にロストロギアとの関わりが懸念され

ています」

「やはりそうだったんですか、ハラオウン艦長… 自分も何かがおか

しいと思っていたんです」

重々しく告げるハラオウン艦長。だがオレも動揺はしない。そう、

違和感は確かにあったのだ。

身長180cm以上の小学生。都会に馴染めず底知れぬ凶暴性を

見せるクロハラハムスターと豆狸。

そして人外の動きを見せる兄妹。食べられる食材だけで構成され

たはずなのに完成した物体X…

考えてみればおかしいことだらけだったではないか。

「そこで… もし良ければですけど、一度貴方のお家を検索させて貰えないかしら？」

「危険物は時空管理局で保護する必要がある。無理にとは言わないが出来れば協力して欲しい」

ハラオウン親子が提案してくる。オレの答えなどどうの昔に決まっている。

——ガシツ！

「是非… 是非、お願いします。もし見つけた場合はそちらで厳重管理をお願いします…！」

「あ、うん…」

二人の手を掴んで深々と頭を下げた。是非お願いします。こちらからお願いしたいくらいです。

何故かポカンとされた。流星に丸投げ過ぎて呆れられたのか？

いかな、汚名返上せねば！

幸いにして今日の夕食はすき焼き。彼女たちが日本びいきの外国人であることは最早疑いない。

「勿論、お仕事が終わったあとには歓迎も兼ねてご馳走をしますから！ この通り… あれ？」

——スカツ

おかしい。脇においてあるだろうスーパーの買い物袋はどうしたというのだろう。何故ないの？

「……あれ？」

……

……

……

あれから話もそこそこに切り上げて舞台セットから出してもらった。まるで転送してみたようだ。

勿論そんな未来技術があるわけではないので、そこは素直にハリウツドすげーと感心しておく。

臨海公園よ！ 買い物袋よ オレは帰ってきた！ 捧げよ和牛！  
今宵はすき焼きの宴なり！

「oh…」

夕焼けに照らされる臨海公園。その路上で買い物袋さんがその身を野獣どもに蹂躪されていた。

「しっしっ…」

呆然としていたのも束の間。すぐに救出作戦を展開し追い払おうとしたのだが…そこは野獣。

「ナアーオ…」

「フシャー！」

威嚇された。何これ怖い。え？ 多分この2匹の猫、飼い猫ですよ  
ね？ 毛並みも凄くいいし。

なんか、クロハラ（仮）さんや八神でないと対抗できる気がしない  
くらい野生なんですけど。

オレなんかじゃ全く勝てる気がしなです。すまない。許して。  
オレは駄目だ。弱かった……

「おい、勝手に走らないでくれ。この辺りの土地勘はないんだから」  
だが、膝を折ってしまいそうなオレに救いの手が差し伸べられた。  
そう、ハラオウン執務官だ！

さあ、この野獣どもを追っ払ってください！ オレは指差し目の前  
の惨状を説明せんとする。

「猫が…」

「猫？ ……いないが」

あれ？ ホ、ホントにいたんですよ。オレが見たのは幻ではない  
筈。多分。きつと。メイビー。

確かに最近妄想電波が聞こえたりとか、少し心が弱いかな？ っ  
て思うことはあったけれど。

信じて下さい、ハラオウン執務官！ オレは悪くねえ！ オレは悪  
くねえ！ トラスト・ミー！

「いや、疑ってはいないさ。ひどい有様だ… 荒らされたのは事実だ  
ろうね」

そう言いながら散乱した荷物を拾ってくれる。なんてイケメンな  
んだ。流石ハリウッドスター。

そうか： 野獣どもはハリウッドスターのイケメンオーラにビッて思わず退散したのだな。

おっと、いけないいけない。そもそも自分の荷物なんだから自分で片付けないといけないよね。

「私も手伝うわ」

いつの間に現れたのだろう、美人艦長さんことハラOWN艦長も荷物の回収を手伝ってくれた。

ありがてえ、ありがてえ： 美人で可愛いだけでなく心まで美しいなんて。素敵、結婚して！

ごめんなさい、冗談です。でも、ハラOWN執務官は是非兄貴と呼ばたい。非ホモ的な意味で。

そしてオレは無事に： 荷物が無事じゃないけど、なんとか悠人少年の自宅に戻ってきました。

「どうぞ、上がってください」

うむ、ハリウッドスターを招待するなんて緊張するなあ。冷静に考えれば危険物はないはずだ。

そもそも心当たりもないし。やれやれ、映画の設定と現実をごっちゃにしちゃいけないよね。

多分、彼らにしてみても危険物云々は臨場感を盛り上げるための軽いアドリブだったのだろう。

ただ、相手は天下のハリウッドだ。ちよつとしたスパイス程度に家屋爆破くらいはやりかねん。

だからこそ、彼らに「調査をしてもらった」という演技を踏まえれば危険は回避できるはずだ。

そう、別に『日本びいきの外国人』を間近で観察しつつOMOTE NASHIをしたいなんて：

す、少ししか思っていないんだからねツ！ ……うん、キモいねオレ。このフリーズは控えよう。

「では、お手数をお掛けしますが調査のほど宜しくお願いします」

「ごちらこそ、無理を言ってしまったってごめんなさい。すぐに済ませて帰るから」

頭を下げると、ハラオウン艦長が笑顔で応じてくれる。いえいえそんな謝る必要なんて微塵も！

むしろオレが勝手に癒されますから。それに調査だけさせてただ帰すなんてご冗談でしょう？

まだオレのターOMOTENASHIンは終わってないぜ！　むしろまだ始まってすらないぜ！

「もし良かったら晩御飯をご馳走させて下さい」

「あら、いいの？」

「はい。あ、お仕事に差し支えるなら無理は言いませんが」

「ごちらも遊びに来たわけではないんだ。ありがたい申し出だが…」

あらら：　ハラオウン執務官が難色を示しちやったか。ハリウッドスターならしょうがないか。

きつとどつかの高級料亭で予約が入っているのかもしれないし、付き合いつかもあるだろう。

まあどつちにしろ日本を楽しんでさえくれればいいや。多分、悪印象は持つてないだろうしね。

「でも、ご両親は大丈夫なの？　知らない人を勝手に招いたりして」  
「ああ、いませんで大丈夫ですよ。一人暮らしですし気楽なものです」

何処にいるかも分かりませんしね、ご両親。若干暑苦しいほど重い愛情は伝わってきますけど。

それに相手は、世界に名を轟かせるハリウッドスターにも関わらず丁寧に接してくれた人々。

全く問題ない。とはいえ向こうにとってこちらは一エキストラに過ぎない。分を弁えないとね。

「そちらにもご予定があるでしょうに無理を言いました。忘れて下さい」

気にしないでいいよって笑顔を浮かべておく。あ、でもサインは欲しかったな。それだけ残念。

「……いいえ。折角だからお呼ばれしましょう？ クロノ」

「……はい、そうですね。艦長」

？ 気が変わったのかなんか招きに応じてくれることになった。ならば精一杯歓迎しなければ！

「じゃあ、駄目になった分の食材買ってきます。あ、念の為にスペア鍵預けておきますね」

「え？ ちょ、ちよつと…」

「そういえば生卵は大丈夫ですか？ 抵抗感があるなら…」

「ま、待ってくれ！」

大声で遮られる。そんな声を出さなくても、聞こえているのだが：思わず首を傾げてしまう。

「冷静に考えてくれ。得体の知れない連中を家において出かけるのか？ 鍵まで預けて」

「はあ…」

ただのスペアですし。夕飯の買い物をしてこないと困るし。それに、得体の知れない連中とな？

……そいつあ聞き捨てならんな。

「えっと、『時空管理局』は次元世界を守るために頑張る正義の味方なんですよね？」

「それは、そうだが…」

そういう設定だったよね？ そもそもハリウッドスターだし。最初に迷惑かけたのこっちだし。

「だからお任せするんです。別に誰にでもってわけじゃないですよ」

「……」  
「それでも納得しなければ後でサインでもください。記念になりますから」

「それは、構わないけど…」

よっしや！ 自然にサインを貰う約束をゲットしたぜ。すき焼き一食分くらい安いってもんよ！

後でやっぱ嫌だつて言っても聞きませんよ？ ……嘘です、ごめんなさい。少しは聞きます。

とはいえ、やつぱり気が変わられたら元も子もない。さっさと夕飯の買い物に向かわないとな。

「それじゃ行つてきます。留守をお任せして申し訳ありませんけど……」

「ちよつと待つて」

はて？ まだ何か？ そう思いまたも首を傾げていると、ハラオウン親子は目と目を合わせる。

数秒の沈黙の後に、ハラオウン執務官が頷く。……目と目で通じ合う仲ですか。そうですか。

いいなあ、仲の良い親子つて。悠人少年のご両親つてどんな人なんだろうなあ。多分……変人？

オレの中でご両親のイメージが変人で塗り固められてる間に、目と目の会話は終わった模様だ。

「それじゃクロノ、悠人くんの荷物持ちお願いね」

「護衛の任、確かに引き受けました。艦長」

噛み合わない会話をしながら、ハラオウン執務官の同行がオレの意志を無視して決定していた。

一体どういうことだろう？ そもそも、ハリウッドスターに荷物なんて持たせていいのだろうか？

考えても答えの出ない問いに頭を悩ますのを盛大に諦め、オレは買い物に出かけることにした。

しかし、すき焼きか。果たしてオレに、満足の行くOMOTENA SHIが出来るのだろうか？

「あ、そうだ。ハラオウン執務官」

「ん？」

「助っ人を呼んでいいですか？」

「君の知人なら構わないさ。それと、呼びにくいだろうか？ 僕の話はクロノでいいよ」

「では、クロノさんで。自分のこともどうぞ好きに呼んでください」

「……ああ、よろしく悠人」

やはり一流のスターは紳士的でもあるんだなあ。こんな一市民に

まで気を配ってくれるなんて。

オレはクロノさんのお言葉に甘え、若干凶暴だが腕は確かな存在・八神を召喚することにした。

——プルル… ピッ

「あ、拙者拙者拙者く。今、スーパーに向かっただけだけど大至急…」  
『拙者なんて知り合いはおらん』

——ピッ ツー、ツー、ツー…

「えつと、知人… でいいんだよな？」

くつ、あの野良狸め… 野生に染まりすぎて電話という文明の利器の存在すら忘れ果てたか…。

……フン、いいもんいいもん。オレ一人で立派にOMOTENAS HIをしてみせるもんね。

うん、やっぱオレってキモいですね。

クロノさんに肩を叩かれながら、オレはしよんぼりとスーパーに向かうのであった。

## 車椅子の少女は可哀想？

私には少し変わった知り合いがいます。

物静かなように見えておしゃべりで。

真面目なように見えてお調子者で。

捻くれてるように見えて根っこは素直で。

こっちの言葉に飾らぬ反応を返してくれる。そしてありのままの言葉を返してくれる。

隠してるつもりでも、いちいち盛大にキョドったり目が泳いでたりするその反応が面白くて。

悪いこととは思いつつも、こちらもついつい悪ノリして仕舞いにはからかってしまう。

「お？ ゆーとんやん」

突拍子もない我儘を言ってみたりほんのり無茶振りをしてみたり。

何気ない軽口を応酬するだけの、そんな、きつとありふれている筈の会話。

それは私が、「可哀想な車椅子の女の子」から解放されるひと時で。「これからはやてちゃんの友達として、色々気を付けてあげてくれるかな？」

壊れる時はこんなにアツサリしたもんかな… と思いつつ、石田先生の言葉を聞いていた。

……分かってる。石田先生は何も悪くない。私のことをいつも気遣ってくれるええ先生や。

私が「可哀想な車椅子の女の子」であるのは紛れもない事実で、今後も付いて回るもの。

それやったら早めに現実と折り合いをつけて、キチンと向き合っていくべきやとも思うしな。

付き合い方がちよつと変わってしまうだけ。縁が切れるわけでもなし。……そう思つとこ。

「石田先生……残念ですが、それは約束できかねますね」  
……え？

信じられん言葉やった。

今までがそうやったように、これでゆーとんとも壁ができるもんとばかり思ってたから。

せやけど、ゆーとんはその逆を真っ直ぐ突っ走っていった。

石田先生に向かつて……日頃私とどんなことをしているのか、どんな会話をしているのか。

それらを笑顔で語っていった。とても楽しそうに。とても嬉しそうに。

そして、褒めてくれたんや。私自身の良い所を。

「身体が不自由なのに頑張ってるね」とか「ご両親がいないのに偉いね」とかやなしに。

最後に、私とは互いに気を遣わない対等の関係なんやって石田先生に伝えてくれた。

……なんてことはない。

誰よりも一番相手のことを偏見の目で見とったのは他でもない私自身だった、ってことやん。

恥ずかしいなあ……ゆーとんのことを見縊みくびっていた自分自身が。

「ありがとう」

その言葉が素直に言えなくて、ついつい関係ないことを口走って別

れてしまう。

……呆れられたかな？

そして今日。

『あ、拙者拙者拙者。今、スーパーに向かっただけだけど大至急……』  
「拙者なんて知り合いはおらん」

つい切つてしもた。

流石ゆーとん……自分が呆れる前にこちらを呆れさせるなんて、  
狙つても中々出来ん芸当や。

……。

「ったく。しゃあないな……」

なんの用件かは分からんけど、いつものスーパーに来てくれっちゅうことらしい。

苦笑いを浮かべつつ外出の準備を整える。

私にはかなり変わった知り合いがいます。  
物静かなように見えておしゃべりで。

真面目なように見えてお調子者で。

捻くれてるよう見えて根っこは素直で。

冷たいように見えてとても優しく。

ちよっぴり缶コーヒー臭くて。

でも、私にとって最高の……そんな友達<sup>ツレ</sup>が。

## 少年と管理局と豆狸のすき焼き

「えっ？ 私もすき焼きパーティーにお呼ばれしていいん？」

「ああ… しつかり食え。缶コーヒーも付けるよ」

「……缶コーヒーはいらん」

あれからスーパ―にやってきた八神を見事捕獲したオレは、重要ミツシヨンを与えていた。

そう： // すき焼き一食分奢るからウチでご飯を作ってください  
“ という悪魔の取引だ。

流石に唐揚げで火災を発生させたオレでは、ハリウッド・スターにご飯を提供するに心許ない。

そして八神の指導の下、食材を買い集めて帰路へとついた。中々に新しい発見が多かった。

豆腐だったら何でも一緒だろうと絹ごし豆腐を手にとったら叩かれたりした。：豆狸め。

あとモロヘイヤを入れるのは少し違うらしい。残念だ。エスニツクな名前に心惹かれたのだが。

「八神さんはしつかりしているね。あ、いや、悠人がそうじゃないって意味じゃなくて…」

「あはは！ おおきに、クロノさん。せやけどゆるーとんも良いところはぎよーさんあんねんで？」

あれあれ？ なんだかオレの扱いが悪い気がするよ。気のせいだよね。多分きつとメイビー。

というか八神さん、それフォローしてるつもりかもしれないけど否定してないですよね？

オレ、公式に「しつかりしてない子」扱いなんですか？ どうなってるんですか。……解せぬ。

……

……

…

「お帰りなさい。……あらあら、こんな可愛い子を連れて。桜庭く

んも隅に置けないわねえ」

「あ… ど、ども。私、八神はやて言います」

自宅に帰ったら、エプロン姿のリンディさん（心の中で勝手に名前呼び）が出迎えてくれた。

なんでも調査のついでお掃除までしてくれてたらしい。イヤツホおおおおおおおう！

流石です、リンディさん！ 可愛くて美しいだけでなく、優しくて女子力まで高かったなんて！

フハハハ！ 流石の凶暴な豆狸こと八神もその輝かんばかりの美貌に吞まれておるに違いない。

「こちらはハリウッド・スターのリンディⅡハラオウンさん。撮影のために来日されている」

「どうも、リンディⅡハラオウンです。よろしくね？ 八神さん」

「先程お互い自己紹介は済ませていたようだが改めて… こちらがクロノⅡハラオウンさん」

「改めて、クロノⅡハラオウンです。…仕事で母に同行しています」

「こちらこそ改めてよろしゅうに。クロノさん」

うん、恙無く自己紹介も完了したな。失礼のないよう頼むぞ？ 特に八神とか八神とか八神。

「ところで、ゆーとん。なんでハリウッド・スターの人たちと知り合いに…」

「聞くな」

「え？ でも…」

「聞かないでください。お願いします」

手際よくすき焼きの準備をしながら、八神が余計なことを聞いてきた。オレが撮影現場に乱入したことをお二人が思い出したら賠償請求とかされるかもしれないだろ！

やはりコイツはただの天敵だ。オレはそう再認識することにした。そんな天敵の豆狸だが腕は確かだ。オレを使いつつあつという間

に準備を完了させてしまった。

「やっぱりバリアフリーじゃないとちよいと手間取るなく。手伝ってくれておおきにな？」

「気にするな」

マジで気にしないでください。多分オレだったら、すき焼き鍋探すだけで1時間かかってたし。

「いただきまーす」

手を合わせ四名の唱和のもと食事をはじめ。……リンディさんたち箸の使い方達人だなあ。

そういえば、通された部屋も和風庭園をモチーフにしたと思しき情緒溢れる佇まいだった。

リンディさんを始めとする、スタッフの皆さん方の日本通は伊達じゃないのが伝わってくるね！

全員過不足なく行き渡ってるようなので、オレも箸を進める。……おお、めっちゃ旨い。

こう、なんていうか…… 出汁が染み込む肉の蕩けるような柔らかさとジューシーさが卵に絡んで。

……うん、自分のボキャブラリーの貧困さに泣けてくるから食うのに専念しよう。八神GJ。グッジョブ

ガツガツ食べながら親指を立てて隣を見れば、その八神のお椀が空になっていた。

「……………」

ボーツとした表情のまま、所在なさげに鍋を見詰めている。

気付くのが遅れてすまなかった。立つのは面倒だろうから、このオレが菜箸でよそつてやろう。

今回のすき焼き成功の功労者を無碍にしましては各所からクレームが届いてしまう故な。

「おかわりもいいぞー」

「あ… うん」

「遠慮するな。今までの分、食べ…」

「……ありがとな、ゆうとん」

なんか八神がしんみりしながら食べている。そうか、八神もあの鬱い作品を知ってたんだな。

今度語り合おうな？ 分からない人は『狂四郎2030』でグーグル先生に聞いてみよう。

食事を終え、暫しの歓談のあと八神を家まで送ることにした。流石に夜道に放置はできない。

帰り道一人になるのは危険だと、クロノさんも同行してくれることになった。ありがたい。

食事の後片付けも手伝ってくれたし、ハラオウン親子への好感度上昇が留まることを知らない。

そんなこんなで八神の自宅へと向かう道… 当の八神はかなりご機嫌な様子であった。

いや、理由は推測できる。きつとすき焼きのタダ飯が嬉しかったのだろう。

そんな幸運に見舞われればオレだつてご機嫌になる。だが、それは八神の腕あつてのこと。

オレ一人だった場合は八神ほどの成功を収められなかった可能性に目を向けねばなるまい。

ならばこれは正当な報酬だ。

……ひよつとして、まさかとは思うがオレは調理スキルが残念なのだろうか？

いやでもそんなことは… 身近な比較対象の八神がおかしいだけでオレ自身は普通のはず。

御飯と味噌汁くらいは作れる。サラダも作れる。だから普通。きつと、多分、メイビー。

「つと、ついたみたいやな…」

八神の話に生返事を返しつつそんなことを考えていたら、いつの間にか目的地に到着していた。

「おおきに、二人とも。今日はホンマに楽しかったで。リンデイさんにもよろしゅうな？」

「いや、お礼は悠人にだけで充分だ。……けれど、その気持ちは母に伝えておくよ」

おお： クロノさんかけえ。イケメンは心までイケメンで言うこともイケメンだというのか。

「こちらこそ世話になった。ありがとう、八神。……又の機会があればよろしく頼む」

「な、なんや照れるな……でも、ええん？」

「オレが頼んだことだ。気にするな、オレは気にしない。それに……」

「それに？」

「オレたち、友達だろ？」

「……うん、せやな！」

それに引き換え、一食分の値段で凄腕調理師を雇おうとする打算に塗れたオレの卑しいこと！

身も心も発言すらもイケメンのクロノさんとは比べるほうが失礼つてもんだ。嫉妬すら起きん。

——バタム

八神の無事の帰宅を見届けると、オレとクロノさんは並んで帰路へと歩みを進める。

……暫くして、沈黙に耐え切れなくなったオレが口を開く。

「なんか……申し訳ない。わざわざ気を遣わせて同行までして頂いて」

「気にしないでくれ。一般人を守るのは管理局員として当然のことだよ」

あ、その設定まだ生きてたんですね。

「キミは一貫して我々に協力的だ。これに蔑ろにするようでは罰が当たる。母も同意見だろう」

「そう言ってもらえると、こちらとしても気が楽になります」

「それに僕はこう見えても執務官だ。腕には多少なりとも覚えがある。安心して頼って欲しい」

流石です、クロノさん！ 身も心も発言すらもイケメンなだけでなく腕まで立つなんて！

……ん？ 待てよ？

「……クロノさん、ひよつとして武道にも興味がおありで？」

「仕事柄、どうしても求められるからね。やはり疎かには出来ない分野と言えるかな」

なるほどなるほど… フツフツフツ、これは良いことを聞いたぞ。

え？ 何を考えてるんだって？ よくぞ聞いてくれました！ つまりこういうことだ！

クロノさんを道場に紹介する

↓ 日本最頂なクロノさんが日本の剣術に興味を持つ

↓ 真面目でイケメンなクロノさんなのでみんな熱心に指導をし始める

↓ キョーちゃん兄妹はハリウッド・スターからの受講料でウハウハ

↓ 同年代のライバル出現で名無しの少年も大喜び ついでに缶コーヒーを貰ってくれる

そして忘れ去られたオレはサボれる。オレはサボれる。大事なことなので二回言いました。

みんなが幸せになれる理想的なプランじゃないか！ これは早速実行に移さないと！

「実はオレ、剣術道場に通っているのですが…」

「剣術か… 確か日本という国は古来よりサムライの血を引いていると母さんに教わったな」

「ええ、仰るとおりです。……そこで良かったらクロノさん、一度見物でも如何でしょうか？」

「僕が？… しかし、仕事が…」

ぐぬぬぬ… 仕事の壁が立ちはだかるか。いや、待てよ？ 仕事、

仕事か… よし！

「はい、勿論仕事優先で。ただ、クロノさんのお仕事上で武術は大きな割合を占めますよね？」

「それは… 確かに」

「新たな空気に触れて視野を広げることで、お仕事の今後にも活かせるのではないのでしょうか」

「ふむ…」

スター・ウォーズのジエダイの騎士の動きの数々は、剣道の動きを取り入れてることで有名だ。

彼にとつても仕事のプラスになる可能性はある筈だ。伝えることは伝えた。さて、どう出る？

「確かにあの魔導師の少女二人や、剣を出してた少年のスペックは中々のものだったか…」

考えこんでるようなので此処はそつとしておこう。

「日本の文化に触れることで彼女たちへの理解を深められるかもしれない、か。……よし！」

おつ、決まったかな？

「キミからの折角の薦めだしこういう機会も稀だろう。艦長に聞くだけ聞いてみるとするよ」

「おお…」

「ただ、飽くまで仕事第一だ。期待に添えない可能性もあるので、その場合は容赦して欲しい」

「当然の話です。いきなり無茶を言い出したのはこちらなんですから」

受けてくれたらラッキー程度のものだし、クロノさんの意に沿わない押し付けも本意ではない。

合わなそうだったら責任にかけてクロノさんだけでも逃がさないと(使命感)。

例え、キョーちゃんと組手をする羽目になり妹さんの手料理を食べる羽目になっても(絶望)。

……あ、あれ？ ひよつとして薦めないほうが良かったか？ い、いや。きつと大丈夫さ！

常識的に考えれば母でもあり艦長でもあるリンディさんが許可をするわけがないじゃないか。

「あらあら、クロノにも柔軟性が出てきたのかしら？ 親としても艦長としても嬉しいわ」

「まるで僕が柔軟性の欠片もない融通の効かない人間みたいに…」

あ、あれ？ 思った以上に好感触っぽいだと？ いや、さすがに許可は…

「そこまでは言わないけどね。…あ、勿論許可するわ。でも怪我はしないようにね」

「いいんですか？ 自分で申し出ておいてなんですが、僕が抜けるとアースラの戦力が…」

って、いいんかい!? いかん！ 頑張れ、クロノさん！ その設定で押し切るんだ!!

「さつき高町さんたちから連絡があつてね。協力してくれることになったの」

「そう、ですか。確かに彼女たちの才能なら、アースラのバックアップも含めれば或いは…」

おい、どうしたクロノさん！ ハリウツドのイケメンパワーで振り切ってくれ!

リンディさんも同じハリウツド・スターだから効果が薄いのか!?

「但し、万一のためこちらの事情を知っている桜庭くんと一緒に通うこと。これが条件よ」

「分かりました。そういうことなのでよろしく頼むよ、悠人」

「アツハイ」

しかもサボれなくなつた。しかもサボれなくなつた。…大事なことなので二回言いました。

どうしてこうなつた。どうしてこうなつた。ウェイイ、ミトメタクナイ。

こうしてオレは若干真っ白な灰になりながら、状況に流されること

になってしまった。

一体どうしてこうなってしまったんだ。何が悪かったと言うんだ。ぼんやり思考を巡らせる。

その時、脳内でソウルフレンド（だといいなと思ってる）ユーノ君の言葉が再生された。

『今この街で起こっている異変は全部ロストログアの仕業なんです』

なんだって！ ソレは本当かい!?

オレは理解する。いや、理解してしまう。

そうか… なにかもロストログアのせいだったんだな。

くっ、なんてことだ。絶対に許さねえ。

オレに対して理不尽を強いるロストログアへの怒りを募らせるとともに、もし見つけた時のためにリンデイさんとクロノさんと連絡先を交換することにした。

「あ… それとサインにに関してだけ明日には話を通しておくので、良かったらアースラへ」

「行きます」（即答）

「え、ええ… それでは迎えをよこしますね」

行く行く絶対に行きますとも。

イヤッホおおおおう！ 管理局最高おおおおう!!

リンデイさんとクロノさんも最高おおおおう!!!

ロストログア？ なにそれ？ 刹那で忘れた。

## 少年の協力

翌朝、俺はリンディさんの寄越した迎えの人によってアースラへと案内された。

快活で親しみ易い雰囲気こちらの美少女は、エイミーさんというらしい。

美人というより可愛い系だが、やはり顔立ちが整っているのは天下のハリウッド・スター故か。

「そうだったんですか。リミエツタさんは…」

「あはは！ リミエツタさん、なんて柄じゃないよ。エイミーって呼んでよ、桜庭くん」

「失礼、エイミーさん。…では、自分のことも好きに呼んでください」

「そう？ それじゃ… 改めてよろしくね、悠人くん！」

美少女の笑顔は魅力満点だ。しかしただの萌え系美少女と侮ってはいけない。

彼女はハリウッド・スターであり、その役職は最新鋭の次元空間航行艦船のオペレータ。

正確には通信主任兼執務官補佐、だったかな？ 詳しくはあんまり分からないけど。

そんな紛れもないエリートでありながら気取らない人柄は、まさに奇跡の賜物。管理局万歳！

「で、なに？」

おっと。人との会話中に（心の中で）管理局万歳してしまうのは失礼だよね。気をつけよう。

「あ、はい。クロノさんとは同期だったんですねって」

「そ。まあ、腐れ縁ってとこかな？」

その割には少しばかり年齢が離れてる気がしないでもないが。クロノさん飛び級なのかな？

なんてことだ。見た目だけではなく発言も心もイケメンで、更には文武両道だったとは。

まあ腕に自信があるようなことはそれなりに匂わせてたから、大した驚きはないのだけれど。

しかもこんな美少女と腐れ縁だなんて。流石にクロノさんはイケメンだけあってリア充だな。

オレの場合は、八神になるのかな？ ヤツは確かに美少女ではあるのだが恐ろしく凶暴だ。

叶うならば交換を申し出たいところだ。勿論そんなことは許される筈がないので思うだけだが。

「……さて、到着つと。うん、キミが一番乗りみたいだよ？」

え？ マジですか？ じゃあ今のうちにサインなんて貰ってもいいんですかね？

「……よし」

サインを書いて頂いたたくさんの色紙を鞆に仕舞いつつ、小さくガッツポーズをする。

エイミーさんは快く了承してくれたばかりか、その場にいたもう二人にも声をかけてくれた。

オペレータ役のアレックスさんとランディさんである。二人とも当然のようにイケメンだ。

そんなやりとりをしてるうちに多くのクルーが集まってきて、サインに応じてくれたのだ。

「あ、よろしければこちらどうぞ」

こんなモンしかお返しできずに心苦しいが、オレは缶コーヒーを渡すことしか出来ない。

しかし笑顔で受け取ってくれた。なんて素晴らしい人々なんだ。やっぱり管理局は最高だぜ！

ちゃんとリンデイさんにも渡すように促された。無論、偉い人への配慮は忘れませんとも。

「え、えと… 桜庭くん。サインをするのは構わないのだけど…」

「あ、はい。ひよつとして、1本では足りませんでしたか？ 言っただければ…」

確かに艦長は重労働。全く、オレとしたことが気が利かぬ真似をしてしまった。

だが今日は備蓄は充分にある。期待に応えるため2本、3本と鞆から取り出していく。

「ひっ！ いえ、違うの。その… エイミー、喉乾いてないかしら？」

「私は悠人くんに貰ったばかりですから問題ありません。お気遣い頂き光栄です、艦長！」

ビシツと敬礼して答えるエイミーさん。流石、普段はフランクだけど決める時は決めるなあ。

それに真っ先に部下の心配をするなんて… 流石はリンデイ艦長！ 改めて尊敬しますよ！

「あ、あう… そんなキラキラした目で見ないで…。あ、他のみんなはどうかしらッ!？」

「おいイ？ お前らは今の言葉聞こえたか？」

「聞こえてない」

「何か言ったの？」

「俺のログには何もないな」

クルーの人々はそう返すと、缶コーヒーを片手に各々の席でコンソールのチェックを始める。

皆さん仕事熱心だな。けど艦長の声が耳に入らないほど熱心に仕事をするのもどうだろう。

いや、むしろ阿吽の呼吸で互いを尊重してるのかも。今の会話の連携とか凄く息が合ってたし。

——プシユー…

「お邪魔しま… どうしたんだ？」

そこにタイミングが良いのか悪いのか、名無しの少年たち3名が別にクルーに案内され到着。

「いえ、最高のタイミングよ3人とも。桜庭くん、そういうわけで仕事だから…」

「あ、はい。お時間取らせて申し訳ありませんでした。ハラオウン艦長」

こつちとしてはお返しのつもりでも仕事の邪魔しちやったらいけないよね。反省反省。

「最高のタイミング…？」

「あ、これどうぞ」

「え？ ちよつ…」

小首を傾げるユーノ君に、ちよつど取り出していた3つの缶コーヒーを手渡す。

3人連れだしちよつどいいだろう。なんだか他2名が受取拒否しているような気がするけど。

多分、きつと気のせいだろう。…うん。すまん、ユーノ君！

「というわけで、本日0800を以て本艦全クルーの任務は…」

会議室のような場所に通され、リンデイさんが任務の開始を口頭で宣言している。

普段の優しいほんわかした表情も良いが、真面目で凛々しい表情も素敵である。

オレはそんな下衆な思考は表に出さず、真面目な表情で話を聞き流しているのですが。

最低だというツツコミは重々承知の上だ。だが考えても見て欲しい。オレですよ？

ユーノ君たちが協力者として臨時職員の扱いとなるとかそういう話になるのは分かるよ？

しかし、だ。……こんな場に、果たしてオレなんかがいいのだろうか。

サイン貰ったら邪魔にならないうちにさっさと帰ろうかと思つていたのだが…

なんか、流されてるうちにそういうコトを言い出せる雰囲気になつてしまったのだ。

こうなつたら美人さんとか美少女さんを眺めて現実逃避をするしかないではないか！

こつそり握り拳を作つて（心の中で）力説しているオレ。

「……そこで、桜庭くん」

「あ、はい」

そんなオレに、リンディさんから声がかけられる。……もう帰つていいよつてことかな？

「強制ではないけれど、もし良ければ貴方にも協力をお願いしたいのだけど…」

「……………」

絶句する。

え？ 監督、まだオレをエキストラで使う気なんですか？ 無能な

オレに何を期待してるのか。

死に役のモブとかが必要なのかな？ スタントシーンはなるべく痛くないのが嬉しいのだが。

この映画にかかつてる予算は疑いようがないが、この映画の出来栄えが不安になつてくる。

主にオレのせいだ。他の役者さんはバツチりなのに、主にオレのせいで。胃が痛くなつてくる。

「どうかしら？」

「自分に出来る範囲であれば喜んで。……協力は市民の義務でしよう」

まあ、答えなんて決まってるんですけどね。

管理局は警察みたいなものという話だし、協力を要請されたからには応えねばなるまいて。

そうでなくてもリンデイさんとクロノさんには多大な恩があるしね！

「ただ、両親が自分の為に使ってくれたお金を無駄にする訳には行かないので学校は…」

「……分かりました。どうぞ今までどおり通ってください」

良かった。うちの学校って授業料高そうだもんな。無駄にするのは気が引けたし。

ふと見ると名無しの少年とちゃっかり系少女が気まずそうな顔をしている。

どうしたんだろう？ この二人に関してはオレと違って役者という仕事のはずだが…

ああ、撮影が長引いて休みの期間が続くとクラスの話題に遅れそうで不安なのかな？

仲の良さそうな友人たちもいたものね。ぼっちのオレには分からない悩みとあったところか。

「さて、それでは一旦失礼します」

打ち合わせが一段落ついたところで、オレは席を立つ。

「あら桜庭くん、どこへ？」

「これから道場へ。日課の稽古を済ませねばなりません。……クロノさんはどうします？」

「同行させてもらおう。……艦長」

「ええ、行ってらっしゃい。二人とも、気を付けてね」

気遣ってくれるリンデイさんに頭を下げる。

だが、部屋を後にしようとしたところで別の人物から待ったをかけられた。

「おい、待て桜庭。……どういうつもりだ？」

「どういうつもりだ、とは？」

名無しの少年だ。質問に質問で返して悪いが、どういうつもりだはこちらの台詞である。

そっちこそ頑なに缶コーヒーを受け取ろうとしないのはどういうつもりだと問い詰めたい。

小一時間ほど問い詰めたい。

「確かに鍛錬は大事だ。けど今はもっと大事なことがあるんじゃないか」

「……………」

何を言っているんだ、コイツは。

そんなことをしたらウェイターさんとかキョーちゃんとか妹さんに殺されてしまうじゃないか。

死にたくないからこそ毎日欠かさず通ってたのに、オレに死ねというのかコイツは。

「毎日欠かさず続けるように言われているが」

「だとしても…」

言ってなかったつけ？ まあ、似たようなことは言われてた気がするし油断はできまい。

「必要だから言われる。必要でなければ言われない。オレはそう思っている。…………もう、いいか？」

「っ！ ……分かったよ、引き止めて悪かったな」

お仕事で堂々と道場をサボれる名無しの少年が羨ましくて、つい刺々しい物言いをしてしまう。

すまん、少年。

「オレにとっては日々続く日常すらも戦いだ。…………おまえが羨ましいぞ」

いつになったらこの汗臭い体育会系スパイラルから抜け出すことが出来るのだろうか。

オマケにタイムセールは地獄を見るし、たまにエンカウトする八神は凶暴だし。

全く…なんて地獄だ。これでは悠人少年が中々戻りたがらないのも無理からぬところだな。

そんなことを溜め息混じりに考えつつ、クロノさんを案内してオレは道場に向かう。

あとはウエイターさんとかキョーちゃんに押し付ければいいや。

クロノさんほどのスペックならば、きつと道場の皆さんも大歓迎で夢中になることであろう。

……

……

…

「あれ？ どうしたの、桜庭くん。二人なら山籠りに出かけてるけど…」

「……………」

そう言えばこの間そんな話をしましたね！ 当てが外れちゃったよ、畜生！

仕方ないので道場の庭の隅っこを借りて、いつも通り素振りをする。

というわけで、(オレが勝手に)お招きしたクロノさんの指導は妹さん… お願いします！

——ビュオンツ！ ビュオンツ！

オレが無言で素振りを開始するのを受けて、二人は何やら会話を始めたようだ。

よしよし、いいぞ。その調子だ。美少年と美少女が並ぶと絵になるなあ…。

さあ、こんな全自動素振りマシンのことは忘れて、二人の世界を作っちゃってください。

しかし、そんな願いも虚しく…

「なあ、悠人。キミからも指導をお願いしたいのだが…」

「クロノさん、自分はまだまだ未熟な身。誰かを指導することなど、到底出来ません」

クロノさんが近付いてきて話しかけてきた。そっとしておいて欲

しい。

素振りしかしてない下っ端だっで見れば分かるでしょ？

ところで、いつの間にか素振りしながら流暢に喋れるようになってた件。ちよつと嬉しい。

「しかし、美由希さんがキミならば間違いがないからと…」

「……はい？」

思わず素振りをする手を止めて、少し離れた場所に立っている妹さんを凝視してしまう。

妹さんは笑顔で頷いてきた。……いや、可愛いけどそういう無茶振りは求めてませんから。

しかし幾ら可愛く無茶振りされようとできないものはできない。此処はお引取り願おう。

「そう言われても自分は一番の下っ端。熟練の方が戻られるまで待つてみるべきでは？」

「勿論その人達にも教えは乞うぎ。だけど悠人、僕の事情を知るキミにだからこそ頼みたい」

……ふむ、そう言われると弱いな。

確かに、ハリウッド・スターのクロノさんをここまで引つ張ってきた責任がオレにはある。

とはいえ、真面目に修行なんぞしてないオレに指導など出来る筈がない。……困ったな。

考えた結果、クロノさんには申し訳ないが適当ほざいて煙に巻くことにした。

すまぬ、すまぬ…

人外たちが山から戻ってきたら、きつとまともな指導をしてくれるだろうから許してくれ。

「臍<sup>せいかたんでん</sup>下丹田に気持ちいを鎮め、そこから五体を結ぶ」

「セイカ？ タンデン？」

難解中の難解と言われた元祖・安打製造機のお言葉を引用する。

「教える、などという言葉は恐縮ですが… 自分から言えることはそれだけです」

それからは素振りに戻り、何度話しかけられようともスルーを貫いた。……すまぬ、すまぬ。

「臍<sup>せいか</sup>下<sup>か</sup>つていうのはおへソの下のこと。丹田<sup>たんでん</sup>というのは其処にある体の氣を集める器官のこと」

「丹田… 氣を集める器官… そうか、そういうことか!」  
なんか二人で良く分からない話をしている。

まあ、オレをスルーしてくれるならなんでもいいのだが。  
自分の保身しか考えないオレはトコトン屑である。

数日後…

そんなクロノさんが、なんと妹さんとある程度互角に打ち合えるようになった。うになっていた。

「何アレ超怖い」

オレは小さく呟いた。

## 提督と日誌

私はリンディールハラオウン。

時空管理局提督にして次元空間航行艦船アースラの艦長でもある。今回の任務は、ロストロギア〔ジュエルシード〕の搜索及び回収。そのため人員を整えて、第97管理外世界〔地球〕へと降り立った。そこで現地で活動をしている数名と遭遇… 現在へと至っている。

一人は今回の事件の引き金となったスクライア一族の少年。

名前をユーノースクライア（以下、スクライアさんとする）。年齢9歳の少年だ。

発掘作業の現場指揮を任されるなど優秀ではあるものの、やや責任感が強すぎる傾向がある。

捕縛、治癒、結界魔法に適正がある支援型の魔導師。魔導師としてはAランク相当か。

一人はスクライアさんに協力を要請された現地人。

名前を高町なのは（以下、高町さんとする）。こちらも年齢9歳の少女だ。

Aランクに相当するジュエルシードの暴走体を撃退し、封印処理をもこなすなど極めて優秀。

圧倒的な魔力出力を軸に戦う砲撃主体の万能型。魔導師としてはAAAランク相当か。

一人は高町さん同様、スクライアさんに協力を要請された現地人。

名前を御剣刀真（以下、御剣さんとする）。こちらも前述の2人同様9歳の少年だ。

魔力を打ち消すレアスキルと無数に剣を出すレアスキルを保有していると思われる。詳細不明。

空戦を行う魔力はないが場慣れした動きで支える攻守の要。魔導師としてはCランク相当か。

そして最後の一人は…

「……………」

大きく溜め息を吐きタイピングを中断し、モニターから目を離す。後日提出する報告書の草案代わりに日誌を打ち込んでいたが、さて、どう記入したものか……

「悩ましいわね」

彼らとの……正確には、最後の一人である「彼」との距離感を測りあぐねていた。

黒い魔導師の少女……高町さんは「フェイちゃん」と言っていたかしら？

彼女の逃亡を幫助したことはまだ理解は出来る。構図的にこちらが襲撃者に見えても仕方ない。

彼からも謝罪を受けたし、何より彼は事情も知らない現地人。互いのすれ違いの結果だろう。

……そう思っていた。

この地球に来てからの出来事を振り返ってみる。

…

……

……

アースラに案内されても動揺した気配を見せず、また、その機能を正確に解説してみせた。

そして、私とクロノの関係に驚くなど若干の勘違いはあれど基本的に穏やかで理知的な物腰。

開口一番に招待へのお礼と、仕事の邪魔をしてしまったことへの謝罪も口にできる。

少々腰が低すぎるくらいはあるものの、好印象を抱くには十分な少年。そう思っていた。

高町さんたちにより、どうも「彼」がこの事件の影で動いている気配を見せていること。

また、現在は収まっているものの、かつては傍若無人を絵に描いたような性格であったこと。

……これらの話を聞くまでは。

その間、「彼」はというと我関せずと羊羹を口にしたりスクライア

さんと話をしたりしていた。

……まるで他人ごとのように。ならばと「彼」の家の調査を要望して、反応の喚起を試みる。

むしろクロノと二人して、手を握られてまで感謝されてしまった。……わけがわからないわ。

あなたを露骨に疑っていますよ、という意味で言ったつもりだったのに。

とはいえ「彼」本人から承認が出たのも事実。お言葉に甘えてしつかり調べてみようと思う。

罠の可能性もあり、他の局員には任せられないため、私とクロノの二人で出向くことになるが。

出掛けにエイミィに測定された魔力量について報告を受けることにした。

アースラの転送ポータルには、対象の魔力量を測定する機能も内蔵されているのだ。

好意的な人々には甚だ失礼な話だが、全て鵜呑みに信じ込んでいては管理局勤務は務まらない。

そして私は、缶コーヒーを（嫌々）受け取ったエイミィの報告を聞いて……絶句した。

「……なんですって?」

思わず聞き返してしまう。

「信じられませんか? 私もです。……アースラの計測器が故障していない限り事実ですが」

缶コーヒーを手元でいじりながら、エイミィが残酷な言葉を告げている。

「家で例えるなら…… 剣を出してた男の子、御剣君ですか? 彼の魔力が賃貸マンション」

「え、ええ……」

「スクライア一族の子がローンの残った一軒家…… といったところですかね」

家屋に例えて各々の魔力量を解説していくエイミィ。……分かり

易いかどうかはさておいて。

魔力の絶対量とは本来、覆らない才能の格差だと言える。努力を重ねることで後天的に魔力量を増やすことも可能だが、それすら下地あってこそその話だ。

どんなに魔法適正が低く行使に非効率的でも、魔力を注ぎ込めば力 barrier できるケースは多い。

逆に魔力の絶対量が乏しければ、如何に魔法適正があろうとも、息切れしやすくなってしまふ。

そうなつてしまえばオールラウンドに戦うのは難しくなり、一発屋に扱いが近くなるのだ。

「で、えーと…… フェイちゃん？ それにクロノ君も纏めて土地付き一軒家としましょうか」

「やや乱暴なまとめ方だけど…… そうね、妥当だと思つわ」

管理局が魔力ランクの高い者ばかりを優遇するのは、宣伝効果のみを見越してのことではない。

投資に見合うだけの成長を期待するには、魔力値こそが最も信頼できる指標となるからだ。

確かに士官教導センターなどでは、魔力値のみが全てではないと教えている。私も同意したい。

同意したいが…… それを『ただの建前だ』と言える程に、魔力の絶対量は重視されているのだ。

「高町さんは豪邸って感じですかね。いやあ、才能って羨ましい。現時点でAAAランクとは」

「……………」

エイミイの言葉に無言で首肯する。確かに彼女の輝かんばかりの才能は魅力的だ。

集束と放射に高い適性を持ち、今現在で既に砲撃型の魔術として管理局でも上位レベルだろう。

これで魔法に関わって一ヶ月未満というのだから、天賦の才に恵まれた天才児という他ない。

彼女ばかりではない、スクライアさんも御剣さんも同様に素晴らし

く魅力的だ。

高町さんの魔力の高さに霞みそうになるものの、スクライアさんも十分に魔力値は高い。

そればかりか、あらゆるサポート系に高い適性を示し充分に使いこなしているのだ。

荒事がどうしても多くなってしまう管理局としては喉から手が出るほど欲しい人材だろう。

御剣さんは魔力ランクこそCと平均値なものの、年齢を考えれば充分に伸び代はある。

いずれはAにも届き得るかもしれない。何より困難に対して常に前向きな姿勢が素晴らしい。

そして一撃の破壊力では高町さんにも引けを取らない。サポート次第では化けるだろう。

三人が三人共に魅力的な人材で、本来ならばすぐにでも勧誘をしたいところなのだが：

「で、最後の彼… 桜庭くんですが、島一つつてどこですね。…：下手すれば大陸？」

「既に家屋ですらないのだけど。…：ふう、さっきの計測値は聞き間違いではなかったのね」

…：最後の一人が規格外すぎた。優秀を通り越してもはや怪物、いや災害レベルですらある。

そういえば歴戦の勇士、ギルⅡグレアム提督もこの第97管理外世界が出身であったかと思ひ出す。

氏とは幾度か交流する機会に恵まれたが、叶うならばその時には是非忠告を頂きたかったです。

…：『第97管理外世界では魔力オバケに遭遇してしまうことは稀によくあることである』とか。

いや、流石の氏もこういった事態は想定の外だったであろう。…：そうであったかと思ひたい。

「それじゃエイミィ、行ってくるわ。…：私とクロノが戻らなかった時は後のことはお願い」

「……聞きたくありませんが、承知しました。ですが、必ず戻ってきてくださいね?」

彼女の言葉に苦笑いを返して、転送ポータルに身を委ねる。……さて、鬼が出るか蛇が出るか。

結果は驚くほどの歓待ぶりであった。社交辞令かと思っていた食事の招待を本気で行う。

そればかりか、天涯孤独の身の上だというのに他人を家に上げたまま買い物に出ようとすする。

指摘すれば、さも、それが当然かのようにスペアの鍵をこちらに預けようとしてきた。

その距離感にこちらが戸惑い、慌ててしまったほどだ。

“彼”の一瞬見せた影のある表情から、両親と暮らしていないという話に嘘はないのだろう。

なのに、あろうことか「あなた方が管理局だから信じます」と笑顔で言ってきたのだ。

勿論そうあろうと平日頃心掛けているが、管理局の強すぎる権力は嫌われることも少なくない。

そんな私たち管理局に対して、開けっぴろげな無償の信頼など寄せられてはたまらない。

事実クロノは念話で“彼”の買い物への同行と護衛を志願するほどに、すっかり参ってしまった。

監視もすることを条件に許可したが、これが狙ったことならば侮れない人証ひとたからした。

——悪のカリスマ：高町さんから聞いた“彼”の異名が真実味を帯びてくる。

“彼”がその気になれば恐るべき魔法を使えることは、高町さんや御剣さんから聞いている。

翻れば、それはその気になれば私たちなど簡単に始末できるということに他ならない。

それを忘れず気を引き締めて、「彼」の威に呑まれないようにしっかりと調査を始めようと思う。

使われなくなって久しいのか、ご両親の寝室には埃が積もっていた。なのに部屋はそのまま。

「あの事件」でクライドを失った時の自室の有り様に似ている気がして、少し気が重くなった。

両親のうち恐らく母親が残したと思われる直筆の書き置きが、「彼の自室枕元に置かれていた。

「彼」の「今は亡き両親への想い」に土足で踏み入った気がしてしまい、少し心が苦しくなった。

起動せず使えないパソコン。これが何故自室に置かれているか、その意味は想像しかできない。

台所に残った焦げ跡が生々しい。ここで…この家で、どんな惨劇が起こったのだろうか。

引きこまれそうになる思考を並列思考マルチタスクから追い出して、ロストログアの探索のみに専念する。

…結局、ロストログアは見つからなかった。

探すだけ探して放置というものなんなので、そのまま家の掃除をさせてもらうことにした。

こうしていると、クライドと一緒に暮らしていた時のことを思い出す。

お互い忙しく休みは少なかったが、それでもたまの休日にはこうして掃除をして、それで…

そんなことを考えている時に、「彼」らが戻ってきた。…新しいお客さんを連れて。

「お帰りなさい。…あらあら、こんな可愛い子を連れて。桜庭く

んも隅に置けないわねえ」

「あ……ど、ども。私、八神はやて言います」

“彼”はというと、少し驚いた表情を見せてから本当に嬉しそうな表情で私にお礼を言ってきた。

そしてそのまま、私たちを『ハリウッド・スター』として女の子：八神さんに紹介した。

ハリウッド……第97管理外世界での映画の本場だったかしら？  
粹なはからいもあつたものだ。

これでは仕事の話をするわけにはいかなかった。管理局の提督から離れるのはいつ振りか。

八神さんからの追求をかわすのには、苦勞していたみたいだったけど。……フフツ、ご愁傷様。

「いただきますーす」

助っ人の八神さんが“彼”に指示を出しながら手際よく調理を行い、準備を整える。

あつという間に食事の時間となり、四人揃って手を合わせてから“すき焼き”を食べ始める。

とても、暖かくて美味しかった。……そう、まるで家族が揃って食事をするみたいに。

こんな時間に一人で来るということは、八神さんのご家庭も何かワケありなのかもしれない。

“彼”におかわりを勧められていた時、少し涙ぐんでいたから。けれど“彼”は何も言わない。

ならば私たちも何も言うべきではないだろう。  
「艦長……いや、母さん」

不意にクロノから声をかけられる。この場では艦長という呼び方は確かに憚られる。

けれど、それが普段の任務中にならない距離の近さを感じさせてくれた。

「ん…何かしら、クロノ」

「その…暖かくて、美味しいね」

その笑顔の中にほんの一瞬、クライドの面影が見えた気がした。そう…そうだったのね。

クライドは…あの人は、ずっと、一緒にいたのね。私たちを見守って。

「……ええ、本当に」

思えば、こうしてプライベートでクロノと食事を摂るのは久し振りだ。

互いに忙しい、というのは言い訳だ。クロノの中に宿るあの人の面影すら忘れていたのだから。

いや、なんのために管理局にいるのか、その理由を今一度思い返せば言い訳にすらならない。

食後に何気ない会話を交わしながら後片付けをして、そして笑い合う。

けれど楽しい時間は早く終わるもの。やがて夜も更け、**彼**が八神さんを送ると席を立った。

すかさず同行を申し出るクロノ。すっかり心を許したその姿に苦笑いしか浮かべられない。

手を振り、見送るとこの家には私一人になった。

先程までの心地良い賑やかさがまるで嘘のような静寂…孤独感。

これを、彼は毎日抱えているのだろう。……誰の理解も求めず、ただ己が道を進むためだけに。

そんなことを考えていると、高町さんのデバイスを通じて私の直通回線に通信が入った。

高町さん、スクライアさん、そして御剣さんたち三人からの協力の申し出であった。

それを受け入れる旨を伝えて、彼らには丁重にお礼を言う。彼らの戦力はともありがたい。

けれど三人共まだ幼い少年少女だ。怪我をさせないよう、こちらも気を引き締めなければ。

受け入れに関する諸注意事項を伝達し、回線を閉じる。と同時に「彼ら」が戻ってきたようだ。

驚いたことに、クロノが「彼」と一緒に道場に通いたいと申し出てきた。

あの何事も任務第一で他の要素は極力排除しようとするクロノが。自分でも自覚はあったようで、そのことについて触れると罰が悪そうな表情で拗ねってしまった。

今まで任務中には滅多に見せなかつた歳相応の表情を微笑ましく思いつつ、許可を出す。

本来ならば、任務中に不確定な意図のもと別行動を取るのは好ましくはない。

ただ、「彼」は放置するには余りにも危険要素が大き過ぎることもある。

誰かは監視を付けたいと思っていたところだったので、この結果は望ましい形でもあるのだ。

少々浮かれ気味のクロノを尻目に、「彼」と翌日の約束をしてお暇することにした。

そして翌日、執拗に缶コーヒーを勧められるなどのトラブルに見舞われつつも協力を要請。

それを「彼」は意外そうな表情で受け止めていた。

「彼」の思惑としては、この一件からは適度に距離を取るというものがあつたのかもしれない。

しかし、その脅威を知れば知るほど野放しにするわけにはいかない存在だ。

どう出る？ という緊張も束の間、「彼」はあっさりと協力を受諾する。

肩透かしを食らつたと思う暇もあればこそ、「彼」は様々な条件を出して接触を最小限に抑える。

「(やられた…!)」

他三名を民間協力者として扱うという姿勢を取る以上、その生活は尊重しなければならぬ。

ならば「彼」が今までどおり学校に通うことも、道場に通うことも止めることは出来ない。

こちらに抱え込み完全な監視下に置く道は、いとも容易く塞がれてしまった。やはり悔れない。

恐らくこちらの思惑を理解しているのだろう。クロノについては、特に言及はされなかった。

顔を立てて貰った形になるが、最低限の監視ができるなら問題は無い。この辺りが落とし所か。

水を向けられたクロノが同行を申し出て、私もそれに頷く形で「彼ら」を見送ることになった。

……  
……  
……

そして今日、先程までクロノが興奮気味に語っていた。

「だから艦長。つまりリンカーコアを励起れいきさせて、心身に魔力を行き渡らせて同調するんだ」

「ええ、凄いわね。……つまり、ベルカ式の流れを汲んだということかしら？」

「いや、似てるようで違う。アレは魔力を込めて破壊力を増したり防御力を増すのだけど……」

「ええ、凄いわね」

「こちらは感覚のギアを上げるといふか……あらゆる攻撃に対し、後の先を取れる極意というか」

「ええ、凄いわね」

結局、息子が何を言っているかサッパリ分からなかった。けど何かに開眼したのは事実らしい。

そして重要なのは、それを導いたのは「彼」のたった一言の助言だったということだ。

つまり「彼」はクロノを道場に連れて行き、鍛えるだけの理由が

あつたということになる。

それは一体何故？　そこで、あの応接室での御剣さんの「彼」についての話を思い出す。

御剣さんは、「彼」に一度は勝ったと言っていた。彼には悪いが常識的に考えればありえない。

「彼」は年齢に似合わぬ機転と視野を持ち合わせている。幾ら慢心したといえども限度がある。

そもそも「彼」は弁舌を好む。『力に訴えるという行為そのものが「彼」らしくはない』のだ。

ならばどうなる？　そう：『わざと挑発し、そして敗北した』と見るのが妥当になってくる。

なんのために？　それはクロノへの対応を見る限り、成長を促すためと見るのが自然だろう。

思考のピースが繋がっていく。あるいは私がここまで辿り着くことすら想定通りなのだろうか？

「彼」が無意味な手で時間を浪費するとは思えない。ならば、それは「彼」なりに意味がある行為。

戦力の増強を施す必要があると仮定した場合、想定される真実とはなんだろうか？

そう：　現有戦力では足りないほどの脅威が迫っている。ソレを知っていることに他ならない。

それがこの一件に関係するのか、あるいは別の何かによるものかまでは今は分からない。

そう：　「今は」だ。  
これでも時空管理局の提督として、今日までやってきた矜持というものがある。

いつまでも自分の息子よりも小さな子に翻弄され続けるのも、本意ではない。

「彼」が何を見据え、何を考えているのか…　警戒は怠らずじっくりと観察していく必要がある。

「全く…　悩ましいわね。　「彼」…　桜庭くんと距離感は」

コンソール脇に置かれた缶コーヒーを指で弾きながら、ふつと溜め息混じりの笑みを浮かべる。

“今は” まだ考えても仕方ないと気を取り直して、私は日誌の続きを書き始めるのであった。

## 少年と魔導師と魔法使い

みなさん、ごきげんよう。いかがお過ごしでしょうか。あ、はい。オレですか？ オレは…

「桜庭くん、今日もわざわざごめんなさいね」

「あ、いえ。協力させていただくという話ですし… こちらこそ大したお役に立てず」

今日もアースラのブリッジにおります。しかも、オレ一人だけ通いなので目立ちます。

けれど、みなさん何も言わずそんなオレを暖かく迎え入れてくれます。

わざわざオレ一人のために迎えを寄越すのも大変だろうに… ええ人たちやで、ホンマに。

「フフツ、そんなことないわ。あなたが来るとクロノもエイミイも嬉しそうだもの」

「ちよつ… 艦長！」

「…：そう言っていただけると、こんな自分でもみなさんの一員になれたようで光栄です」

「もう、堅いなあ… 悠人くんは。いくらお仕事とはいえ、もう少し楽しくいけばいいのに」

「いやエイミイ、君が緩すぎるんだ。まったく… 少しは悠人を見習ったらどうなんだ？」

「あちやく… ヤブヘビだったか」  
「恐縮です」

場を和ませるリンディさんはじめとするみなさんのナイスフオローに、思わず頭を下げる。

あからさまなリップサービスだが言われた側としては悪い気はしないけどね。ありがたいし。

本来、ハリウッド・スターのみなさんと一般人のオレとでは言うまでもなく住む世界が違う。

こうした触れ合いが出来るのも撮影が終わるまでの僅かな期間。

いずれ終わりの時が来る。

けれど、同じ時を過ごしたという余韻には出来るだけ長く浸っていたいのも、一般人の人情だ。

こんなオレでも何かの役に立てるなら全力で頑張りますよ、みなさん！

……まあ、現状何の役にも立たない置物と化してるんですけどね。はい、マジで何もしてません。たまにリンディさんに話を振られるので答えているだけです。

と言つても、ロストログアの搜索方針について聞かれたんでちよいと言つただけですけどね。

折角人員で優ってるんだから現地に私服局員を配備して巡回させたらどうでしょう、的な。

そりやアースラで調べてすぐに飛んでいけるのは大事ですけど、対抗勢力がいるみたいですし。

むしろ、その対抗勢力側に思うように動かせないようにするのも大事なんじゃないですかね？

管理局から逃げ回るような相手なら接触を避け動き難くなるし、逆なら囲んで袋にしちまえ。

的なことを言葉遣いに気を付けつつ具申した。この程度みなさんが思いつかない筈もないよね。

まあ、却下されたとしても思うところを言ってみるのは大事だろう。そう思ってた。そしたら……

「うわ、えっぐ」

「け、結構えげつない手を考えつくのね」

「桜庭、おまえってやつは……」

「……流石にソレにはドン引きなの、桜庭くん」

「でも効果的、なのかな」

「ああ、呆れるほどに有効な戦略だと思う。流石は悠人だ」

上からエイミイさん、リンディさん、名無しの少年、白い少女、ユーノ君、クロノさんです。

このようにみなさんに言われてしまう始末。みなさん結構遠慮し

ないですね。……解せぬ。

まあ、その言葉をそのまま真に受けるほど子供じゃありませんけどね。もうちよつと、こう……

何故か採用されたんですけどね。オレの苦し紛れの戯言なんて普通に却下すれば良かったのに。

というかこれ、むしろみなさんに気を遣われてるってことですよね？ オレだけ浮いてるし。

クロノさんはじめとする他のみなさんのようにたまに出動するということすらしませんし。

いやまあ、オレみたいな一エキストラが俳優の見せ場に出て行つて何をするんだって話ですが。

ロストログアとやらが出現した時に対処するために待機中……と言えは聞こえはいいけれど。

実際はブーツと突っ立ってるだけのニートです。肩身が狭い。何故オレはここにいるのか？

そんなニートをやってて暇してるオレの見せ場を、みなさんで作ってくれてたつてことですね！

うわ、自分のあまりのダメさ加減に死にたくなってくる。……いや、死んじやダメだけどさ。

……

……

……

そして今日。

「立て続けに3つ持つて行かれた時はどうなるかと思つたけど、瀬戸際に踏み止まれたわね」

「ええ、悠人の案のおかげでその後2つを確保することに成功しました。残りはあと6つか……」

「探してはいるのだけど、中々見つからないのよねえ」

フォローしてくれる管理局のみなさんの優しさが心に痛い！

もうやめて！ とつくにオレのライフはゼロよ！

あとクロノさん、最近やたらとオレをageてくれてませんか？

気のせいだろうけれどさ。

クロノさんの方がはるかにイケメンで文武両道で社会的地位もあるというのに、一体何故…

も、もしや… クロノさんもホモなのか？ くっ、ウエイターさんだけでお腹いっぱいなのに。

なんてことだ。悠人少年が心を閉ざしたのは、周囲がホモだらけだったからという可能性も…

いや、絶望するのは早い！ クロノさんには萌え美少女のエイミーさんがいるじゃないか！

ダメだ、ウエイターさんも桃子さんっていう超絶美人の彼女がいるのにモーシヨンかけてきた！

そういえばゴリ君とメガネ君も、こちらを見る視線に妙に熱っぽいものが混じってた気がする。

くそっ！ 一人を疑い出すと際限なく誰も彼もが怪しくなってくる！ ここだけ世紀末かよ！

このままじや夏に海水浴とかに出掛けたら男にナンパされてしまうのか？ そんなの嫌過ぎる！

いや、出かけなければいいじゃん。そうそう、それがいい。……いやいや、ここは海鳴市。

海辺の都市で観光も盛ん。そして近隣の学校には夏場の必修項目として海水浴があげられてた。

図書館で調べた知識を脳味噌から引き出すとともに、絶望する。……詰んだ。あかんやん。

「はあ、海か… 憂鬱だ…」  
思わずボヤきたくなるってもんですよ。

「海… やっぱりそうなるわね。捜査区域を地上から広げてみましょうか」

「今、エイミーがやってくれています。例の黒い魔導師の少女は巡回班に任せているので…」

「ビンゴ！ 見つけました！ …って、ええ!？」

いやいや、そもそもクロノさんがホモだと決め付けるのがおかしい

話じゃないか。そうとも。

単に、オレみたいな一般人にも優しく接してくれるナイスガイという可能性が一番高いさ。

なんか色々騒がしくなってる背景を尻目に、オレは自身の価値観を左右する思考に没頭中だ。

うん、クロノさんから正式に「僕はホモだ！」ってカミングアウトされたわけでもなし。

彼のことは、ただの紳士的でイケメンなナイスガイなのだと考えておくことにしよう。

ウエイターさんやゴリ君、メガネ君たちも同様にね。そう、心に柵を作って置いておくんだ。

考えないことで問題を先送りにしたなんて言わないで欲しい。今はこれが精一杯なのだから…。

「なんてことしてるの！ あの子達…っ！」

「なんとも呆れた無茶をする子だわ…！」

背景が妙に騒がしいな… そう思っただけ顔を上げると、モニターいっぱい金髪少女が映ってた。

クルクル回りながら竜巻に向かって飛び回ってる模様。意味は理解できないが、なんか凄い。

彼女もイースターの行事に参加しながら、こうして撮影をまこなしてて凄と思う。尊敬する。

だが5月に入っている。ゆで卵は衛生的に大丈夫なのだろうか？

…考えないようにしよう。

「海中に魔力を叩き込んで、ロストロギアを無理やり起動した模様！」「無謀だ… ただでさえ消耗した魔力に加え、6つの暴走体。その先にあるのは自滅のみだ」

「局員は警戒態勢を維持したまま待機。巡回中の武装局員は各自、現場に急行させるように」

「了解！」

「エイミー、周辺に被害が及ばないように結界の様子には常に気を配って。それから…」

エイミイさん、クロノさん、説明アザッス！　そしてテキパキと指示を出すリンデイさん素敵！

やはり金髪少女の見せ場らしい。彼女の活躍する場面も入れるのは映画的に重要なのだろう。

他人の見せ場は奪わないことに定評がある管理局。つまりここは待機一択ということになるか。

——プシュー…

「フエイちゃん！」

ドスッ！

「あべしっ!?!」

身を乗り出し見物しようとしてたら、扉の開く音と共に現れた白い少女に跳ねられてしまった。

は、跳ねたね…。そんなことを思いつつ、立ち上がる。ここは一言、文句を言っつてやらねば！

「高町、突っ走るなっつて！」

ゴスッ！

「もののべしっ!?!」

二度も跳ねた！　親父にも跳ねられたことないのにツ！　……ないよね？　多分、ないよね？

悠人少年の貧弱ボディは壊れ物のように慎重に扱う必要があるというのに、この蛮族どもは…！

「ご、ごめんよ。大丈夫？　立てるかい？」

「……ありがとう」

そんなオレにそつと手を差し伸べてくれるユーノ君。何これ？

天使なの？　結婚してくれ！

待て、落ち着け。可愛らしい容姿だがユーノ君は男だ。結婚したらオレがホモになってしまう。

「む…」

「どうしたんだい？」

「いや、なんでも…　ありがとう、助かった」

差し出された手を取りつつ自分の腕時計を見れば、そろそろ道場に

向かう時間に近付いていた。

ユーノ君にはあまり関係ない話なので、話されても困るだろう。適当にごまかしお礼を言う。

そしてそのままさり気なく出口付近に移動。後はタイミングを見てリンデイさんに伝えるのみ。

今日はクロノさん忙しそうだし徐々に一人で行くことになるのかな。まあ、それもいいだろう。

そんなことを考えていると、白い少女たちがこっちに駆け寄ってきた。え？ また跳ねるの？

思わず身構えてしまいそうになる。ビビり過ぎとは思うが、流石に三回目はノーサンキューだ。

「っ！ ……桜庭くん、お願い。其処を通して！」

「……………」

だが、少女はオレに気付くと立ち止まり、瞳を真っ直ぐと見上げながらこうのたまってきた。

え？ どゆこと？ 通してって… あ、なるほど。3人とも出口に用があつたってことか。

ふう… 一瞬、なにがなんでもオレを跳ね飛ばさないと気がすまないのかと思つてしまつたぜ。

どうも邪魔にならないようにと移動してた場所が、ピンポイントで邪魔な位置だったようだ。

さて、どうしたものか… 彼らを通すのは一向にかまわないが映画的にはどうなのだろう？

そもそも悠人少年は貧弱ボディ。本当に通る必要があるなら先程のように跳ねればいいのか？

いや、跳ねられたいわけじゃないけどね。決して。決して。大事なことなので二回言いました。

「用がないなら邪魔しないでくれ、桜庭。こんなことをしている時間も惜しいんだ！」

「……………」

ポケットと考えこんでたら怒られた。ごめんちゃい。そうだよね、撮

影のロスは問題外だよ。

自分で結論を出すのを諦め、どうすべきか視線でリンデイさんとクロノさんに問いかける。

二人とも首を左右に振った。だよな！ やっぱり、映画的にここでの特攻はNGだったんだね！

「あの子は目的の障害で敵… なのかもしれない。けど、あんな姿を見たら放っておけないよ」

「ユーノ…」

「ユーノ君…」

おっと。

そうこうしているうちに、(心の中で)ソウルフレンドと認定してるユーノ君が口火を切る。

なるほど、あの金髪の少女は管理局のライバルポジションだったのか。状況説明サンクス！

流星は出来るハリウッド・スター。オレが理解してないと見るやさり気ないフォローを入れる。

あとは特攻しちやまずいよってことを、それとなく、ふわっと伝えていかなければならない。

いや、そもそもオレが答える流れでいいのだろうか？ 脇役がでしやばり過ぎてないかな？

でも、リンデイさんとクロノさん沈黙してるし… うーん、間違えたらフォローされるだろう！

これ以上ここに尺を取るのも不味そう。

「管理局の人たちは間違ってるという。…君も、そうなの？」  
となれば… いくしかないか！

「ああ、そうだ。間違っているのは君たちで… この場では、管理局の判断が正しい」

オレはふてぶてしい笑みを浮かべて、両手を広げつつ、そう言った。瞬時に強張る彼ら3人の表情… あれ？ なんかオレ、悪役になっ

てない？

………

……

…

その後、なんで彼らが間違っているのかということをおレなりに丁寧に説明しておいた。

人情としては即時の救助は理解できるけど、任務がある以上そうはいかないね、とか。

その任務と金髪少女の保護の両立を考えた上での待機指示だったんだよとか、とか色々よね。

うん、勝手に拡大解釈してマジすんません。でも、リンデイさんたちなら保護すると思うし。

それで理解できるとは言ったが人情大事だからって勝手に動いちやったらあかんよね、とか。

正しいと思って動いた結果で人の好意を台無しにしたら黒歴史なんてもんじゃない、とか。

その辺のことをふわっと語ってたんだけど、泣きそうになってたんで最後は背中押しちやった。

結果、少女たちは笑顔で出口を突破。この場には、オレと管理局のみなさんが取り残された。

「……………」

「……………」

き、気不味い…！

いや、うん、ダメなのは解ってるよ。でもしょうがないじゃん！

泣く子と地頭には勝てんよ！

「まったく… こんでもないことをしてくれた。止められないならまだしも、背中を押すなんて」

「申し訳ない」

「分かっているのか、君は！ 魔導師とは法と任務を護るべき存在なのに、それを…」

クロノさんが怒ってる。やっぱり通すのはあかんかったのか？  
すまぬ、すまぬ。

「まあまあ、クロノ。桜庭くんもなにか思うところがあったんでしょ  
う？ 仕方ないじゃない」

「しかし、艦長……いや、すまない。……確かに、理由も聞かずに責め  
るべきではなかった」

「いえ、悪かったのは自分ですから」

「そう自虐的にならないの。でも桜庭くん、聞かせてくれる？ なん  
で彼女たちを行かせたのか」

え、理由を説明しないといけない流れっすか？ 3人がかりの涙目  
に押されましたじゃダメ？

……いや、うん、ダメだろうね。クロノさんがますますキレてしま  
う未来しか見えないし。

と、とりあえず待たせたらますます印象が悪化するし、会話を繋げ  
ながら言い訳を考えないと！

「先程クロノさんは、魔導師とは法と任務を護るべき存在である……  
と、そう仰せになった」

「……ああ、確かに言った」

考えろ、考えろ、考えろ、考えろ、考えろ、考えろ、考えろ、考え  
ろ……！

「ですが、彼らはここ地球の『魔法使い』。……管理局の『魔導師』  
とは異なる存在なのです」

アカン、時間が止まった（白目）。

や………

や………

や…

やつちまったあー！ 追い詰められたからって何斜め上の回答しちゃってんだよ、オレは!?

そりや「魔導師じゃないから法と任務を破っても仕方ないね」って理屈が通れば一番だよ！

通ればな！ むしろこれ火に油注いだ状態になってんじやねえか！ あばばばばばばばばば！

「ば… バカなことを言うなっ！」

ほら、やつぱり怒った！ 土下座か？ 土下座すべきなのか？ いや、もう押し通すしかない！

「事実です。地球では魔法使いとは『夢と希望を叶える存在』… 故に、彼らは止まらない」

「それは屁理屈だ！ 彼らは魔導師だし… なにもかもを救うなんてただの夢物語だ！」

乗ってくれた。クロノさん優しい！ 心の中で管理局万歳を叫びながら、更に舌を回転させる。

「そのとおりでしょう。だけど、子供は夢を見る」

——ガンツ！

クロノさんが左拳を壁に叩きつける。コワイ！ 思わず、ヒュンツとなつてしまいそうになる。

「夢で任務は果たせない。…夢は、いつか覚める。子供は、辛い現実」に押し潰されるツー！」

「そうはならない、と信じています」

「何故だ!？」

「ここに、頼りになるみなさんがいますから」

「な…っ!？」

ドヤ顔で言つてのける。…うん、ここまで引つ張つておいて丸投げなんだ。すまない。

自分が最低のクズ野郎というのは重々承知しているので、どうか石を投げず見逃して欲しい。

あ、クロノさん呆気にとられて固まつちやったよ。すまぬ、すまぬ

… 大根役者ですまぬ。

「フフツ… あなたの負けよ、クロノ」

「もしかして今まで一人で生きてきたつもり？ それって冷たくないかな、クロノ君」

「子供の夢を支える。任務もこなす。両方やらなくちゃならないのが管理局の辛いところだな」

「ま、大人である以上… 多少はね？」

「母さん、エイミイ、アレックス、ランディ… みんな」

けれど、丸投げすればここにおられる一流のハリウッド・スターのみなさんが拾ってくれる。

信じてた！ ありがとうランディさん！ エイミイさん！ アレックスさん！ ランディさん！

「それに、ほら… 彼女たちの方も終わったみたいよ。色々と言いたいことはあるけど、ね？」

ランディさんの言葉に振り返り、モニターを見る。

そこには金髪少女に合流し、なんか不思議な合体攻撃を披露する白い少女の様子が映っていた。

よくわからないけど、なんかすごいなとおもった（小並感）。

「もう一度あの黒い魔導師の少女に対話を呼びかけます。引き続き、警戒を厳にせよ！」

「了解！」

ランディさんの指令に対して、みなさんが唱和を以って応える。一糸乱れぬとはこの事か。

なんか良く分からないけれどさっきまでの件は解決したみたいだ。良かった良かった。

…おっと、話し込んでる間にもうこんな時間か。オレも、もうそろそろ道場に行かないとね。

「それじゃ、そろそろ行きます」

「……桜庭くん？」

ランディさんに軽く挨拶をして、出口となっている床に足を踏み入れる。

この床の上に乗ると、なんか知らない間に外に出ているんだよね。ハリウツドの超技術って凄いと思った。……ハリウツドの超技術でいいんだよね？ これ。

「あ、待って。まだユーノ君が設定した座標のまま」

——ブオン：

エイミーさんが止めてくれるも時すでに遅し。

何故かオレは奇妙な浮遊感とともに、大海原の上空に踊り出た。え？ なんて、これ？

いずれモブとして適当な場面でアツサリと死ぬ役が与えられるのだろうと思っただけ！

事前に心の準備とかさせてくれませんかね、監督!? いやあああ

あ！ 死にたくない!!

せめて悠人少年が戻ってくるなら涙を飲もう…… でもこれ、100%犬死にじゃねえか!?

「うわああああああああ!?!」

——ドンツ！

「え…… きやつ!」

パニックに陥ったオレは暴れ回り、落下線上にいた白い少女を蹴飛ばしてしまう。

しまった！ あの白い少女に縋り付けばよかった！ なんて下らない凡ミスしてんだオレは！

セクハラだ？ 緊急避難って言葉もある！ ……ちゃんと紐ついてるよね？ 安全だよな？

あばばばばばばば！ 脳裏に浮かぶろくでもない思い出の数々。これは走馬灯じゃないはず。

——ピシャアアアアンツ!!!

その時、何かが光って… ビリツと来た。

「あ… れ…」

身体から力が抜けていく。

後はもう、落ちるに任せるのみ。

なんか、焦げ臭い匂いがする。

どこから匂ってくるんだろうか、これは。

ああ… 何故か無性に焼き肉が食べたくなってきた。

そこに、ぐいっと持ちあげられる感覚。

「しっかり… しっかりしてください！ こんな、こんな… いやあ

ああああああ！」

この声は… 金髪少女だったかな？

そういえば、親御さんとは上手くいったのだろうか。

うん、オレの見当違いのアドバイスで迷惑かけてたら…

なんか、申し訳ないからね。

「……すま、ない」

そんな、まとまらない思考を最後に…

オレの意識は、闇に、吞まれた。

## 彼の決意

血塗れの「アイツ」が、まるで肉が焦げたみたいな嫌な匂いを出しながら落下していく。

糸の切れた人形のように意思を感じさせず、されるがままに海面へと落ちていく。

俺は動けない。俺だけじゃなく、高町も、スクライアも、みんな目の前の光景に固まっている。

いや、この場において一人だけ例外がいた。……「フエイ」と名乗っていた黒い魔法少女だ。

これまでジュエルシードを巡って、幾度と無く戦いを繰り返してきた宿敵のような存在。

正直、ジュエルシードのためなら手段を選ばず、感情を捨てられる冷酷な人間だと思っていた。

なのに……その彼女が、敵である筈のアイツを抱きかかえて悲鳴をあげている。

「しっかり……しっかりしてください！　こんな、こんな……いやああああああ！」

……それに引き換え、俺の体たらくっぷりはなんだ。

敵である人間を支え、想い慟哭する彼女。仮にも味方の危機のはずなのに動けないでいる俺。

アイツが高町を突き飛ばして代わりにあの落雷を受けたのは明白。身代わりになったのだ。

まるで現実味というものがなく、目前で起こっているソレが出来る悪い人形劇のように思えて。

「あ……あ、桜庭……？」

俺は動けないでいる。理解が追いつけない光景に、ただ呆然とするばかりで。

考える前に動かなくてはという想いと、動く前に考えなくてはという想いがせめぎ合い……

体は鉛のように重く動きを堰き止め、口は全ての言葉を忘れたよう

に声が出ない。

結局何も出来ないまま、ただ、漠然と時間を浪費する。

なのに、それなのに…

「…すま、ない」

絞り出したという表現がピツタリのアイツの声は、別人のよう  
しやがれ、ひび割れていて。

そこに、現実感などありはしない。…それはきつと、みんな同じ  
だったのだろう。

誰も動けなかった。彼女がアイツを抱えたまま、どこかへ姿を消し  
てしまったも。

彼女の使い魔がジュエルシードを全て回収してしまっても。誰も、  
動くことなど出来なかった。

最後まで誰一人動くことが出来なかった。…動けばあの光景を  
現実と認めてしまう気がして。

先程の落雷の衝撃で巻き上げられた海水が水蒸気となって立ち昇  
り、やがてそれは雨を呼ぶ。

まず数滴の水飛沫が頬を濡らし、程無く土砂降りとなって全身を容  
赦なく打ち付けてくる。

それでも俺たちは動けないままで、リンデイさんに促されて漸く帰  
投するに至ったのであった。

水飛沫を浴びても、雨に打たれても、目の前の現実是不変ならない。  
…否定されることはない。

管理局の静止も聞かずに飛び出したにもかかわらず、油断して敵の  
攻撃を受けそうになる。

動けなかった俺たちを身を挺して庇ったのは、よりによって俺たち  
を諭したアイツで…

その結果、アイツは瀕死の重傷を負った上で攫われ、ジュエルシ  
ードも持ち去られてしまった。

これなら何もしない方が良かった。思い込みで動き、みんなを危険

に晒し、そして傷付けた。

管理局の指示に逆らって好き勝手に戦場にしゃしゃり出てきて、拳の果てにこれかよ……!

無様……なんて無様で情けない姿なのか。噛み締めた唇が裂けて、口の中に錆鉄の味が広がる。

「クソツ……何をやっているんだよ、俺は!」

俺の呟きは雨音の中に掻き消えていく。

どうしてこんなことになってしまったんだろう。……俺は、出撃前の出来事を思い返していた。

……

……

……

「フェイちゃん?! あの時、私助けに……」

「俺も出る! いいだろう、クロノ?」

「その必要はない」

高町を追ってブリッジに到着した俺たちは、其処にいた桜庭を押し退けて出撃許可を求めた。

だが、返ってきた返事は否定。……彼女の消耗を待ち、安全に確保することを管理局は選んだ。

「私たちは常に最善の選択をしないとイケないの。残酷に見えるかもしれないけれど……」

「そんなの、絶対に間違ってる!」

思わず言葉を遮り叫んでしまう。リンデイさんには悪いけど、俺はそんなのおかしいと思う。

確かにあの女の子には今までだって何度も邪魔されてきた。敵つてことで間違いないんだろう。

けれど、それでも……

「最善の選択ってのは彼女も救って、暴走体も封印することだろうか?」

「そうあれもこれもと上手くいくものか。現実を見るんだ、刀真」

「挑戦もしないでなんでそんなことが言える！ 目の前の人間一人救えなくて何が現実だ！」

「空虚な理想論は結構だ。全ての人間が僅か数名の素人の理屈で救えるならば管理局は要らない」

「っ！ ……でも、それでもっ！」

「刀真くん……」

クロノの言ってることは分かる。俺には高町みたいな魔力もスクライアのような知識もない。

そもそも俺みたいな未熟者が出て行ったところで、出来ることなかたかが知れているだろう。

でもっ！

「……行こう、二人とも」

そのタイミングで、これまで沈黙を守ってきたスクライアが口を開く。

「ユーノ、君もそうなのか？ 君の役目は何だったのか、もう一度だけ思い出してくれ」

「……僕には何が正しいか分からない。でも、アレを見て何もしないままなのは… 僕は、嫌だ」

論すようなクロノの口調にスクライアは迷いを見せながら、それでもキツパリと言い切った。

そして三人で目を合わせ、それぞれ頷くと… 不意をついて転送ポータルに向けて駆け出した。

「あつ、待て！」

しかし…

そんな俺たちの行動を読んでいたのか、いつの間にかアイツ… 桜庭がその前に陣取っていた。

「っ！ ……桜庭くん、お願い。其処を通して！」

「……………」

以前ならすぐに応じていたであろう高町の声にも何の反応も見せない。悪感情も見せないが。

…改めて考えてみると、ここ最近のコイツの変貌ぶりは以前から考えれば異常の一言だ。

けど、そんな今だからこそ話が通じるかもしれない。一縷の望みをかけて俺も呼びかけてみる。

流石に協力を求めるのは望み過ぎだろうが、今のコイツならば通してくれるかもしれない。

しかし、やはり返事はなく無言のままだ。…いや、僅かに思案するような様子を見せたか。

少なくとも、俺たちの言葉は通じているはずだ。あと少しで分かってくれるかもしれない。

「あの子は、目的の障害で敵…なのかもしれない。けど、あんな姿を見たら放っておけないよ」

そこにスクライアが言葉を被せる。常日頃友好的な者の言葉ならコイツに届くかもしれない。

馬が合ったとか波長が合ったとかと言うべきか、初対面から仲良くしている様子だったし…

スクライア自身もコイツについて「そう悪い人じゃないと思う」と庇うような姿勢を見せてた。

そのスクライアの言葉ならあるいは…

「ああ、そうだ。間違っているのは君たちで…この場では、管理局の判断が正しい」

けれどコイツは…桜庭は冷笑とも受け取れる邪悪な笑みを浮かべつつ、それを否定した。

人を小馬鹿にするような大仰な仕草を交え、スクライアの友情すらも踏みにじったんだ。

コイツを少しでも信じようと思った俺がバカだった。やはりコイツは何一つ変わっちゃいない。

感じた気持ちは怒りと失望。最悪のタイミングで嫌がらせをする

コイツは、コイツだけは……!

今にもコイツに飛び掛かりたくなるが、今は一刻を争う。内輪もめをしてる場合じゃない。

……そう自分の気持ちを抑えつけ、桜庭を真つ直ぐ睨みつつ怒りに震える声で最後通牒を行う。

「これが最後だ。……そこをどけ、桜庭」

「少年」

だが返ってきた声はからかいなど微塵も含まない、真摯な、こちらを慮る色おもんばかに満ちていた。

真つ直ぐと見返されたその深い瞳に虚を突かれ、怒りの感情が一瞬にして霧散してしまう。

「少女も……そしてユーノ君も、どうかよく聞いて欲しい」

「……………」

俺たち一人一人をしつかりと見据えてから、静かに、だがよく通る声でアイツは語りだす。

誰もそれを邪魔できない。

「管理局は確かにこの場で待機することを命じた。……それは何故だと思う?」

「そ、それは…… フェイちゃんを捕まえるためで!」

問いかけに対して、高町が我を取り戻して食って掛かるも…… アイツは、静かに首を横に振る。

「その回答では五十点だ。あの黒い少女を捕らえることは十分条件であつても必要条件ではない」

「……必要条件じゃない、って?」

「彼女を攻撃することが主眼なら、今この機会を包囲殲滅に使わないのは非効率的だといえる」

「そんな……」

「そうだろうか? まず黒い少女を確実に排除。後に、ゆつくり封印作業に当たればいいのだから」

「そんなのってないよ! あんまりだよ!」

高町が叫ぶ。俺も同じ気持ちだ。それが正しいことだとしても、到

底納得なんて出来やしない。

「そうだな。だが、その命令をハラオウン艦長は出さなかった」

「そ、それはそうだけど……」

確かにそうだった。本当にあの黒い少女……「フエイ」のことが邪魔なら攻撃をしていたはずだ。

ならば、一体どういうことなんだろう？

「管理局の目的は一貫している。それは何か……ユーノ君ならば分かるだろう」

「……この第97管理外世界への影響を最小限に抑えた上での、危険なロストロギアの確保」

「Exacley」  
そのとおりでございます

芝居がかった仕草でスクライアの言葉を肯定する。ますます意味が分からなくなってきたぞ。

管理局の……リンデイさんたちの目的がロストロギアの確保なら、何故すぐに出撃しないんだ？

「フエイ」が首尾よく封印に成功してしまう可能性だつてゼロじゃないのに……

けど、俺たちはただの思い込みでクロノやみんなに酷いことを言ってしまったんじゃないか？

ひよつとしたら俺たちはとんでもない思い違いをしていたのか？  
そんな気持ち湧いてくる。

「黒い少女は確かに重要参考人だ。だが裏を返せば、現状それ以上の意味は持たないだろう」

「……………」

いや、ジュエルシードを持ち去つてたり色々重要だとは思うが……  
まあ黙っておこう。

「目の前の、それも6個もあるロストロギアへの対処以上に優先する意味は無い。……本来はな」

「それって……フエイちゃんについての命令を先に出すのはおかしい、ってこと？」

高町の問いかけに対してアイツは無言で頷くと、続いて驚くべきこ

とを口に出してきた。

「意味があるとすればただ一つ。管理局もまた、彼女を保護したい：そう考えていたのさ」

「なん… だと…!？」

頭を鈍器で殴られたかのような衝撃に、思わず言葉を漏らしてしま  
う。

もしそれが本当だとしたら、そんなことを考えもしなかった俺は道  
化と呼ぶのも烏漕がましい。

「若い少女がロストログア回収という危険な作業に関わっている。裏  
を考えるのが当然だろう？」

「それは… うん」

高町も、以前から気にはなっていたのだろう。アイツの言葉に対し  
て、沈んだ面持ちで頷く。

でも年齢については俺たち全員似たようなもんじゃないかな？

…言うつもりはないけどさ。

「任務と人情の両立を現場レベルで折り合い付けたこの命令を… オ  
レは『最善の判断』だと思う」

「っ！ でも、それなら… 今フエイちゃんを助けても…!」

「なのは…」

「高町…」

それでも高町は諦めない。自分に出来る最善を尽くそうとする。  
その姿勢は眩しいと思う。

恐らくコイツにしても同じなんだろう。少しだけ悼<sup>いた</sup>ましそうな顔  
をして、ゆっくり首を振った。

「どうして!？」

「少女が余力を残した結果、逃げられたらどうする？ あるいは抵抗  
されて負傷者が出たら？」

「そ、それは…」

「あの少女はクロノさんに匹敵する力を持つと聞いている。…：簡単  
に対処できる相手なのか？」

出来るわけがない。何故ならあの黒い少女… 『フエイ』には、初

遭遇時以来勝ててないのだ。

そも追いつめられた相手が、後生大事に非殺傷設定を続けてくれる保証など何処にもない。

包囲を突破するための脅しとして、または、動揺を誘うため使ってくる可能性もあるのだから。

「確かに少女が傷付き消耗するのを待つこの命令は、人道という観点からは好ましくないだろう」

「……………」

「しかし、それを嫌った結果、局員が消耗してしまったら誰がロストロギアに対処する?」

「そ、それは……」

誰も言い返せない。言い返せるはずがない。きっと、誰も何も考えてなかった。

だって、あの子を放っておけないって思ったのは理性じゃなくて感情による動きだったから。

「ユーノ君が先ほど言ったとおり、ここが管理“外”世界ならば……

消耗時の補給は? 応援は?」

「……………」

「容易には届くまい。その間、この世界に生きる無数の人々をロストロギアの脅威に晒すのか?」

「……………」

勝手な行動は、事件に関わる多くの人々の気持ちを踏みにじる間違った行為であること。

それをコイツは激情に任せるでもなく、言ってみかせるように切々と語ってくる。

コイツは状況を冷静に観察し全てを理解していた。その意図も含めて。だから俺たちを止めた。

……………やつと、そう理解できた。

「それらの責任と向き合うこと、それが管理局の仕事だ。彼らはそういう視点のもと動いている」

「あ……うう」

「だから、君たちは間違っている」

完全に打ちのめされ、ガツクリと肩を落とす。浅はかな俺は、物事の表面しか見てなかった。

友達のアイツにも、正義の反対はもう一つの正義かもしれない……そう教えられてたのに。

結局俺は何も分かつちやいかなかった。分かっていると思い込んでるだけ、より性質が悪かった。

「目の前の人間一人救えなくて何が現実だ」と、先程吐いていた言葉が自分自身に突き刺さる。

目の前の仲間たちの真意一つ汲み取らずしくて、どうして敵の少女と分かり合えるのだろうか。

今にも溢れ出そうな涙を、俯きながらグツと堪える。これ以上、無様を晒すわけにはいかない。

「けれど、その想いはきつと尊い」

紡がれた意外な言葉に、三人揃って顔を上げる。

高町もスクライアも表情に疑問符が張り付いている。きつと、俺自身も表情も同様なだろう。

「それが正しいことじゃないと理解した今でも、一人の少女が傷付くのが放っておけないか？」

「え……う、うん。一人の寂しさは、よく知ってるから」

アイツはスクライアに問いかける。

「それが悪いことかもしれないと理解した今でも、手を差し伸べることは止められないか？」

「う、うん。……やっぱり、放っておけないもの。私は、あの子と分かり合いたい」

アイツは高町に問いかける。

「それが無意味に終わり周囲に迷惑をかけるかも知れなくても、足掻き続けるつもりか？」

「ああ… 間違っているかもしれないけれど。自分の心には、信念には、まっすぐ生きたいんだ」

アイツの問いかけに、俺はまっすぐ瞳を見返してそう答えた。そしてアイツは…

「それでこそ、だ」

ぎこちない笑みを浮かべながら、そう言った。

「君たちが、心からそう思えるのなら」

乱暴に自らの銀髪を掻きながら言葉を紡ぐ。

「正しくなくとも、間違っているても、無意味であろうとも… きつと、その想いは尊いのだろう」

そう言いながら、諦めたように大きく息を吐くと… アイツは一步横にずれて道を譲った。

「…え？」

「イキナサイ」

その我が子を見守る父のような瞳に背を押され、俺たちは転送ポータルにたどり着いた。

転送の間際、アイツの方へと振り返る。声を掛けたかったが… 言葉にならなかった。

きつと、みんなも… 孤独なアイツの背中が、俺たちに声をかけさせることを躊躇させた。

その姿からは、アイツの表情は想像することしかできない。

正しくなくとも、間違っているても、無意味であろうとも想いを貫くこと。

きつとあの話に出てきた“ミストさん”とやらも同じ気持ちだったんだろう。

なるほど、それが“悪”で。アレが… “悪のカリスマ”の背中か。

すべてを認めるつもりはないし、俺自身反省点は多いけれど。

この戦いが終わって無事に戻ってこれたら、アイツと、少し話をしてみたい。……そう思った。

そして今、俺たちは本来ならば脅威のはずの6つの暴走体を相手に優位に戦闘を進めている。

「うわっ！ とと… この、おとなしくしやがれえ!!」

俺が出した剣がスクライアとあの赤い犬に縛られた暴走体に突き刺さり、更に動きを抑える。

物心ついた時から備わっていた、不思議な力… 一時は不気味な力だと嘆いたものだけど。

この力の抑え方を知ろうと剣術道場に通うことで土郎さんたちと出会い、高町とも知り合えた。

「刀真、落ち着いて！ 敵は一人じゃない。周囲を見ながら冷静に戦うんだ」

「すまない、スクライア。背中には任せる！」

そしてスクライアとも出会い魔法の存在を知った。この出会いが絆が俺に力を与えてくれる。

俺は大して役に立てなかったが、スクライアに足場を作ってもらい主に牽制役を担当した。

バインドを決めて動きを抑えられれば、気力が充実した高町と回復した「フェイ」の敵ではない。

「ジュエルシードは3つずつ半分こ。せーので決めるよ、フェイちゃん？ せー…」

「全部貫うからお先に… あと、フェイちゃんじゃない」

「にゃあああああ！ なんで無視するの!? ここは友情パワーに目覚めるところじゃないの?!」

「そんなものは、ない」

だ： 大丈夫だよな？ あの二人に任せてて。頼むぞ、ほんとに頼むぞ？

「フエイ」が黒いマントをなびかせると、デバイスとともに戦場を縦横無尽に飛び回る。

暴走体とすれ違う毎に、確実な攻撃によってそれらは削られていき力を失っていく。

スピードはあの時の高町の方が上かもしれないけれど、高機動戦闘ではさすがに分が悪いか。

そこに躊躇なく高町が二度、三度と砲撃を打ち込む： つてオイ!? 「い、今… 私ごと狙った…?」

「それくらいで当たるなら今まで苦労してないよ！ 無視するなら勝手に協力するんだから！」

ふんすつ！ と鼻息荒く言い切った。流星の「フエイ」も思わず動きを止めてドン引きである。

高町よ、言っていることは戦友としては理解できるが、人としてはちよつとどうかと思うぞ。

あとそれ協力というか脅迫だから…。

だが、それらの動きから脅威を感じたのかジュエルシードが縛られながら互いに合流を試みる。

「つて、まずい！ 暴走体が融合しようとしている！ そうなったらバインドも危ういぞ！」

「…もういい。たとえ背中から狙われてても落ちる前に落とせばいい」

「私たち二人の協力攻撃だね、フエイちゃん！」

「…絶対違う。これは、もつとおぞましい何か」

俺の呼びかけに二人は、改めて暴走体に対して向き直る。

致命的に噛み合わないが目的は一致している、凄腕の二人。それが暴走体鎮圧に動き出す。

すまない、クロノ。どうやら地球人は本当に戦闘民族だったようだ。

出会った当初の問いかけに、俺はもはや言い訳すらも持ち得なく

なってしまった。

「……行く」

「うん、フエイちゃん！」

「フエイ」の姿がフツと掻き消えると、今まさに融合を果たそうとする暴走体の懐に入り込む。

一閃し… 再び掻き消える。そのタイミングで3発のデイバインシューターが襲いかかる。

それを繰り返すこと三度。まるで長年組んできた熟練のコンビのように二人の息は合っている。

そして、ダメージを受けながらもなんとか融合を果たした暴走体のもとに… 二人が迫る！

「ゼロ距離…」

「フルパワー…」

「デイバイン… バスタアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」

「サンダー… レイジイイイイイイイイイイイイイツ!!!」

暴走体は塵も残さず消滅した。

……うん、知ってた。

高町よ、頼むからそれを人に向ける時は絶対に非殺傷設定を忘れるなよ？ 絶対だからな？

そして、あとに残るのは封印済みの6つのジュエルシード。ソレを挟んで対峙する二人の少女。

「じゃあ、フエイちゃん。このジュエルシードを巡って… 恨みっこなしの勝負だよ」

「……………」

高町の言葉に対して、無言で構えをとることでその応えとする黒い魔法少女… 「フエイ」。

また戦うことになったけれど、これは今までのソレとは違う。理解するための戦いだ。

少なくとも俺たち3人にとってはそうだ。そして、二人がぶつかろうとするまさにその時…

「うおおおおおおおおおおおッ！」

「え… きやつ！」

何処からともなく現れた桜庭が、高町の背中を突き飛ばした。

「おい、なにを…」

やっっているんだ、と問い掛けようとして… 世界が目映い光りに包まれる。

これは… 落雷か？ 光が収まった時、俺の目に飛び込んできたのは…

間一髪で難を逃れた高町の姿と、焼け焦げて力を喪い、海面へと落ちていくアイツの姿だった。

……

……

…

雨に濡れた状態でブリッジへと戻った俺たちを、リンデイさんたちが出迎えてくれた。

「その、勝手なことをして… ごめんなさい」

リンデイさんと目を合わせることも出来ず、俯いたまま、ただただ謝ることしかできない。

けど、謝ってもアイツは… 桜庭は帰ってこない。これもただの自己満足に過ぎないのだろう。

そんな俺たち3人が、不意に温かい何かに包まれる。

「……え？」

「良かった。あなた達だけでも無事に戻ってきて」

やがて、リンデイさんに抱き締められていることに気付く。

でも、俺たちに… 俺に、そんな価値は。

「さっきはキツイことを言ってすまなかった。僕も、君たちの存在に甘えていたんだろう」

「クロノ…」

「ここから先は僕達管理局だけでやる。……心配しないでくれ。彼は、僕が必ず助け出すから」

「ま、待ってくれ！俺たちが悪かったけど、そんな…」

思わずクロノに駆け寄ろうとするが、それをリンディさんに止められる。

「違うの… 判断を間違えたのは私。あなたたちを巻き込んだ軽率さが、この事態を招いたの」

「そんなのって… リンディさんは悪くありません！」

高町が叫ぶ。スクライアも悲しそうな表情を浮かべている。俺は… 俺は、どうなのだろう？

「責任者はね、責任を取るためにいるの。狡すいかもしれないけれど、これが大人の理屈」

「そんな… そんなのって、ないですよ…」

「ごめんなさい、許して欲しいとは言わないわ。……けれど、彼の残した言葉を聞いて頂戴？」

そして聞かされた… アイツの真意を。

アイツは、夢を希望を… 理想を俺たちに託し、その支えとなることを管理局に頼んでいた。

そして最後に、まるで散歩にでも行くような軽い足取りであの場所に飛び込み…

身を挺して高町を庇い、その身に落雷… 時空跳躍魔法とやらを受けたのだった。

「アレが最善だったなんて信じたくはない。けど、彼の行動のお陰で多くが救われたのも事実よ」

それが、真実。知るには遅すぎた、アイツの本音だったのだ。

「なんで、桜庭くんは私なんかを… 私は、ただ、勝手な行動をしただけなの…っ！」

「…なんか」なんて言わないの。彼の言った通り、あなたたちの想いはとても尊いものなのよ？」

雨滴に濡れることなど気にも留めず、リンディさんは高町を優しく抱きしめて頭を撫でた。

二度、三度：… ゆっくりと撫でてから立ち上がる。

「そのまま真つ直ぐ成長して誇れる大人になって。……そのための時間、私たちが作るから」

「あ……」

「ま、シャワーでも浴びて休んでから決めてよ。さっきの魔法の影響でこつちも暫く動けないし」

「ああ、君たちは不甲斐ない僕らの分まで充分に働いてくれた。……今は休息が必要な時だろう」

そのままエイミイとクロノにも促されて、一度、割り当てられた個室へと戻ることになった。

……道中、高町とスクライアともども一言も声を発することはなかった。

言われたとおりにシャワーを浴びてから、ベッドの縁に腰掛ける。

「はは、は……」

なんてことはない。最後にアイツが俺たちに向かって言った「イキナサイ」って言葉……

「行きなさい」だけじゃなくて、「生きなさい」って意味でもあったんだな。

……全てを理解して計算した上で、アイツは俺たちと世界のために捨て駒となることを選んだ。

「自分一人を犠牲にすることで全てを救うために、つてか？ ……ハッ、なんだよそれ」

恐らくは、俺たちの道を塞いだ時からなんらかの予兆は感じ取っていたのだろう。

正確にあの落雷：… 時空跳躍魔法の来るタイミングを見切り、高町を庇った手腕から見ても。

遅すぎても早すぎてもダメというあのタイミングは、本来は狙ってできることじゃない。

だが、アイツの神業的技量がソレを可能にしたのだろう。……可能

に、してしまったのだろう。

「畜生… 畜生、畜生、畜生、畜生、畜生ッ！」

スクライアも指摘していたはずだ。 “フェイ” の背後にいるであろうブレインの存在を。

俺たちにとって分かる機会があったんだ。あのタイミングで攻撃が来ることを。

なのに、俺は何も考えようとせずに目の前のことにばかり心を奪われて… その結果が…ッ！

『その結果が…ッ！』

『おっすおっす！ やっはろー！ なんか荒れてるねえ？ 大丈夫？

(?・▽?) (v ニユウサンキン トツテルウ?)』

『…え？ あ、おう』

そんな時、不意にコイツに… 名前も知らない “もう一人の友達” に声をかけられた。

『見たトコいない感じだけど、他のみんなは？ てかテンション低いなおい ( ^ ▽ ^ ) σ ツンツン』

『あ、うん… 他のみんなは疲れてるんだと思う。…今日はずっと、色々あつてな』

『そうなん？ 良かったら友達に【ともだち】にいちよ語ってみ？ん？ ( . . . ω . . . ) ドヤア…』

『…じゃあ、少し聞いてもらっていいか？ あと、どうでもいいけどちよつとウザいぞおまえ』

『来いよダチ公！ 羞恥心なんて捨ててかかってこいよ！ …って、ウザいかな Σ (?・□?・…)』

『ああ、ウザいな。…けど、ありがとうな』

コイツとこうして話しているだけで気が楽になってくる。…

ああ、ホントに良い奴だと思う。

『なんか礼言われる要素あつたつけ？ あ、ひよつとしてウザいのがお好み？ ○(≡▽≡)○ウキウキ♪』

『いや、違うから』

『オレのウザ芸は百八式まであるぞー！ ……ダメ？ (´・ω・´)…ダメ？』

『ダメ。……さあて、どこから話したもんかな』

全く、コイツは…。取り敢えず、個人名を出さないように気を付けながら知る限りで語った。

名前の記憶がないっていうコイツに気を遣わせちゃいけないしな。自己紹介はまた改めて、だ。

『というわけで、そいつの犠牲のお陰で全員無事。……俺はこうして生き恥晒してるとってわけさ』

『ふーん、オレには絶対にそんな真似できんわー。ま、おまえが無事でよかったよ (´?ω?) フーン』

『……やけに淡泊な反応だな？ もっと、こう、驚いたり何やってんだって責められるかと』

『なんで？ おまえはおまえの最善を尽くしたんだろ？ ならソレでいいじゃん ぐ(@。▽。@)ノ』

当たり前のように俺の無事を喜ばれる。俺の過失やなんかもアツサリと流される。

そりや確かにコイツにとっては他人ごとかも知れないけれど、それで納得いくかどうかは別だ。

『そういうわけにもいかないだろ。だって、アイツは…』  
『んー… あのさ、ちよつといいか？ (´?ω?) ニョローン』

『……なんだよ』

言葉の出鼻を遮られて、少しだけ不機嫌になる。

『おまえさんはその人のこと英雄かなんかだと思ってるみたいだけど… へ(´?□?#)へムカムカ』

『あ、いや… おう』

アイツを英雄視している？ ……言われてみればそうだったかも

しれない。

『オレにとつちや違うから！ それ、全然！ ○(、ω、\* )○ボア!!』  
『はあ!? なんてだよっ!!』

『ダボが！ ホントの英雄だったら人に丸投げしてアツサリ消えたりしねえよ！ (ノ。□□) ノムギヤオー』

『いや、それは俺たちのせいで…』

な、なんか急に怒りだしたぞ？ お、俺のせいなんだろうか…。

『よくRPGとかであるよな？ 魔王を倒してハッピーエンドっていうアレ εー (?、?A) フウー』

『あ、ああ… あるな』

『あれ、終わりじゃなくて始まりだからな？ 』 (?へ?) 「ヤレヤレ…』

『ど、どういうことだ?』

『戦乱で荒れた国の復興、難民や遺族の保護、食料問題の解決… ○

(?□?○)(○?□?) ○アレコレ』

『お、おう…』

『すつげーつまなくて地味だけどもめつちや大変な作業が待ってるの。普通は (、(、○、) / オワタ』

『そ、そうだったのか… いや、まあ、言われてみればそうだよな』

『でもそんなのゲームにならないだろ。いや、別の層には受けるかもだけど (、く)。□□) □ ドテツ』

『ま、まあ… もはや別のゲームになってしまふな。……ていうか、ほんとに詐欺だよなソレ』

『そういう罰ゲームを最後まで生き残ってやり遂げるのがオレにとつての英雄 (・ω・) ダナ』

『……』

『友達としては、おまえさんにはそういう英雄を目指して欲しいな (。+・・ω・) キリッ』

『そう、か… そうだな、うん』

『ま、よく言うだろ？ 誰かの為に強くなって守り抜ければ英雄だ、つてさ (、(、ω、) + ドヤツ』

『初めて聞いたよ。……でも、いい言葉だな』

誰かの為に強くなる、か。そうか…… そうだよな。俺には、まだ守りたい人々が残っている。

誰かに背負わせるのではなく、ちゃんと自分で背負って…… 最後まで、足掻いていきたい。

まだ俺は折れちやいない。こうして生きている。だったら…… うん、やってみるしかないよな。

『ありがとうな、愚痴聞いてくれて。もっと強くないとな…… 恥ずかしながら、俺、弱いし』

『あー…… さっきのアレ？ 剣が1本2本じゃ効かないし投げてても避けられるって（？へ？）アー……』

『ああ、最近みんなの足を引っ張ってる感じがしてな……』

『気合だ！ 気合を入れて頑張れ！（\*・ω・）b グツ☆』

『ははっ、まあそうだな。ここが気合の見せ所……』

『応よ！ 1本2本でダメなら何十本と束ねればいい！（？・？

・?? ソウダロ？』

『……ん？ 束ねる？』

『投げてダメなら手に持って突撃だ！ 刺さらないなら穿ち抜くのだ！（○≡≡≡）〇 オルア！』

……なるほどな。確かに試してみる価値はあるかも知れない。

高町もコイツのアドバイスで新たな境地に辿り着いたと言うし、恐らく偶然じゃないだろう。

とはいえ、それを指摘してもきつと素直に礼を受け取ってくれないか。……先ほどのように。

不器用な優しさとの確な助言は、どことなくアイツのことを思い出させる。声も似てるからか？

『ははっ、何をバカな……』

『ん？ どったの？（・ω・）What？』

『いや、こつちの話だ。それより話しかけてきたそつちからは何か用事はなかったのか？』

『おお、それぞれ。実は気が付いたら変な場所に来てさー… (？) (？) ココドコ?』

『変な場所?』

『でっかい試験管みたいなのに入ってて水の中でプカプカ浮いてんの、オレ (？) (？) (？) ビビッタ』

『いや、おい… それってヤバくないか? 息とか大丈夫なのか、オイ?』

『あ、息とか出来るみたいで平気ー。EVAのLCLみたいだよ、これ v (？) v、\*v) ピース!』

いや、エヴァってなんだよ。エルシーエルってなにさ。知らんし。なに喜んでんの、コイツ。

『それよか無事か? 無事なんだな? 身体はなんともないんだな?』

『や、それがさつきまで身体がめつき痛くてさー。痛みで気が遠くなって… ( ⊠ ω ⊠ ) スヤア…』

『…え、おい?』

『気付いたら通話モードになってました、まる (？) ω (？) ノ ヨウ、ユメデンパ』

無事じゃねえ! おわいと 超大事じゃねえか! なに他人ごとみたいなのにきに会話してんの!?

ていうか、なんでそんなことになってんだよ! 色々とツツコミが追いつかねえよ!?

『と、とにかくすぐに助けに行くからそこで…』

『いや、いいよー。何処か分からんし、あの時みたいに火事になったわけでもないし — ω (？) コソ』

『…おまえにとつて得体の知れない試験官の中で浮いてることより火事のほうが一大事なの?』

『うん (？) ω (？) ゴキンジョサンニ メイワクカケルシネ』

…キツパリ言われてしまったては返す言葉もない。

確かにコイツなら、なんとなくどこでも上手くやっていけそうな雰囲気はあるが。

『まあ、そういうことなら気にしないけど。助けが必要だったらいつでも言ってくれよ。』

『オツケー！　もしもの時は頼りにしてるぜ、マイフレンド！　（ ≧▽≦ ） b』

全く、コイツは… お調子者でたまにウザいけど。…ま、俺にとって大事な友達なんだよな。

……

……

…

「……くん」

揺さぶられている。誰かの呼ぶ声が聞こえる。

「……まくん」

その声をもう少しだけ聞きたくて、俺は耳を澄ましてみる。

「……うまくん」

ああ、この声は… そうだ。

「とーまくん… 刀真くん！」

「んあ… 高町、か？」

まだ少し重い頭を振りながら周囲を見渡す。ここは… アースラで割り当てられた個室か。

「……俺、寝てたんだな」

「う、うん。ごめんね… リンデイさんが呼んでて」

「リンデイさんが？」

「うん… 転送ポータルだけは急ピッチで修理したからって」

ああ、そういえば… そういう話になっていたか。

身体を起こしてベッドの縁に腰掛け、気合を入れるために両頬を思いつ切り張る。

パァン！ と乾いた良い音がした。よし、気合充填。行くとするか。

「……刀真、くん？」

「よし、行くか！ 起こしてくれてありがとな、高町」

「あ……う、うんっ！」

俺が立ち上がって礼を言うと、高町は笑顔を浮かべてくれた。

アイツもこれくらい素直な反応ならなあ……と、さつきまで会話していた人物を思い浮かべる。

ま、アイツはアイツ。高町は高町。そして俺は俺……か。それでいいし、それがいい。

ブリッジに到着すると、みんなが待っていた。

俺の顔を見て、何故かスクライアが不思議そうな顔をしている。

……何かついてるのか？

顔をゴシゴシ拭ってみても何も取れないようだが……まあ、いいか。

「……刀真？」

「待たせた、スクライア。それにリンデイさんもクロノも、待たせてしまつてごめんなさい」

頭を下げる。

「気にしないで、御剣君。こちらこそ寝ていたところを起こしてしまつたみたいでごめんなさい」

「あつ……これは、その……」

寝癖をリンデイさんの手榴で直される。バツが悪くて、そつぽを向くと高町の笑顔が映った。

「起き抜けで悪いけれど転送ポータルが直つたわ。……これからあなたたちを地球に送ります」

その言葉に、高町とスクライアの表情が強張る。

「だけど、俺には動揺はない。何故なら、もう答えは決まっているから。」

「はい、分かりました。俺は、アースラを降ります」

「……刀真」

「……刀真、くん」

「そして、強くなって戻ってきます。アイツを助け出すため……この事件を終わらせるために」

「えっ?」

その疑問の声は誰のものだっただろう。いや、誰であっても構わない。俺は、決めたのだから。」

「刀真……君は自分の言っていることの意味が理解できているのか?」

「ああ、この上なく理解しているさ。クロノ」

「さっきのことは記憶の彼方か? いいようにしてやられたじゃないか」

「ああ、そのとおり。たかが、一度いいようにしてやられた……それだけの話だろう?」

「……っ! これはもともと巻き込まれただけの君たちには関係ない話なんだ。だから」

「違うな、クロノ。確かに最初は巻き込まれただけかもしれない……けれど、今は違うんだ」

大きく息を吸って、真っ直ぐ瞳を見返してから言葉を紡ぐ。

「これはもう、俺たちの戦いなんだ。ジュエルシードのことも、フェイのことも、桜庭のことも」

「刀真くん……! うん…… うんっ!」

クロノはため息をつくとき、頭をかきながら俺を横目で睨んでくる。

「……中途半端な仕上がりなら叩き返すぞ?」

「おまえを叩きのめせるくらいに強くなればいいんだろう?」

「……間に合わなかつたら容赦なく置いていくぞ?」

「上等だ。その時は次元の果てまでだって追いかけてみせるさ」

再度大きなため息をつく、クロノはお手上げといった感じで両手を上げる。

「……だったら好きにするがいいさ。決めるのは艦長だ」

「あらあら、クロノったら。私に丸投げするなんて悪い子ね?」

「リンディさん…… お願いします!」

俺はリンディさんの前に進み出て、頭を下げた。

「ふう…… 御剣くん、さっきの次元跳躍魔法のことは覚えているわね?」

「はい」

「あの魔法を撃てるほどの力量を持った魔導師は推定だけれど、最低でもSランク以上……」

「S…… ってことは高町やクロノ以上なのか」

「誤解があるようだから説明すると、Sとは【Strat<sup>ス</sup>ate<sup>ト</sup>gy<sup>テ</sup>ジー】即ち戦略を示す指標なの」

「戦略?」

「単にAランクより魔力があるというわけではなく、個人で戦略級の力を持つ別格の存在」

「……」

「それがSランク以上の魔導師というものよ。これまでの作業が遊びに思えるほどの強敵なの」

「今までの封印作業が…… 遊び?」

今まで見たこともない厳しい表情で説明するリンディさんの前で、思わずゴクリと喉を鳴らす。

けれど……

「それでも、俺の気持ちは変わりません。……覚悟はできています」  
「命を捨てる覚悟かしら?」

冷たい目で見据えられる。だけど怯む必要なんてない。俺は胸を張って言うてやる。

「……背負ったものを自分で背負い続ける覚悟。そして、最後の最後まで生き続ける覚悟です！」

「僕も、自分の荷物を誰かに預けるのは嫌です。……弱くても、せめて最後まで見届けます！」

「私も、二人と一緒に戦います。投げ出したりしたくないんです。お願いです、リンディさん！」

俺に続いて、スクライアが、高町がリンディさんに頭を下げる。

「……わかりました。私の負けみたいね、これは」

思わず顔を上げると、そこには苦笑いを浮かべているリンディさんの姿があった。

「リンディさん！ それじゃ……」

「ええ、あなたたちの同行を私の名において認めます」

わっ！ と、三人で顔を見合わせて歓声が沸き起こる。

「ただし！ ……全員一度アースラを降りて、もう一度だけゆっくりと考えること」

「……」

「もし戻ってこなくても誰も責めないわ。ううん、戦いよりもそれはきつと尊い判断と言える」

「……」

「そのことを胸にこれからのことを考えて。これは艦長ではなく、一人の大人としてのお願い」

「はいー！」

全員、真っ直ぐリンディさんの目を見て頷いた。

そして今、俺たちは海鳴市に戻ってきた。ほんの数日なのに、随分  
久し振りに感じてしまう。

待っているよ、桜庭。おまえが自分一人を犠牲にしてみんなを助け  
ようとするなら…

俺は、おまえも含めて全員を助ける道を探してやる。そのために  
もつともつと強くなってやる！

と、そこまで考えてから俺は自分の感情に気づいた。

今までアイツに、桜庭に抱いてきた複雑な感情。それは友情でも、  
ましてや憎悪でもなくて…

「そうか… 俺は、アイツに勝ちたかったんだな…」

グツと拳を握りしめて、空を見上げる。

目指す先は遥か彼方かもしれない。けれど、いつかきつと辿り着い  
てみせる。

春らしい晴れ上がった空には虹が架かり、先に進んでた高町とスク  
ライアの呼ぶ声が聞こえた。

## 少年とめんどくさい親子

みなさん、ごきげんよう。いかがお過ごしでしょうか？ ……突然ですが、オレはピンチです。

「この私にそんな舐めた口を利用してくれるなんて… 命が惜しくないのかしら？」

ゴゴゴゴゴ… という擬音が聞こえてきそうな迫力で、今現在、威嚇されておるからです。

流石はハリウッドの大女優。ここ一番の演技には圧倒的なオーラを伴います。

そんな現実知りとうなかった。だが、幾らクソゲーとはいえ現実は現実。立ち向かわないと！

これはきつと些細なすれ違いの筈。話せば分かるさ。希望は絶望なんかに負けやしないんだ。

オレは目の前の女性の眼をしっかりと見詰めると、唇の端を吊り上げて、ニヤリと笑ってみせた。

「…フツ、それはどうかな？」

尊敬する綾里千尋さんも言ってた。「弁護士はピンチの時ほどぶてぶてしく笑いなさい」つて。

さあ、この圧倒的な窮地を見事「逆転」してくれ！

「ふう… なるほど、よく分かったわ。理解が遅くてごめんなさい」

ため息をついて、ニッコリと美しい笑顔を浮かべてくれる。そんな、謝るなんてとんでもない！

やったぜ、誠意が通じた！ 人間は笑顔で分かり合える。そうとも、ラブ&ピースが一番さ。

「あなたはこの私、大魔導師プレシァーテストロッサをバカにしている… というわけなのね？」

そのまま美しい笑顔がどす黒いオーラに包まれる。

笑顔とは本来攻撃的な… って、あばばばばばばばばー!? 全然ダメじゃねえですか！

どうなってますか、カプコン！ あ、オレが弁護士じゃないから

ダメなんですかね!?

ていうか美人さんの怒りの笑顔こええ！ か、考える… 何かうまく言い訳を考えなくては…!

キリキリ働け、オレの灰色っぽい脳細胞！ この場をふわっと切り抜ける選択肢を示すのだ！

ピコーン！ とオレの脳内に選択肢が浮かび上がる。よし、いいぞ。やれば出来るじゃないか。

1. オマエがそう思うならそうなんだろう。…オマエの中ではな。

2. 黙れ！ そして聞け！ 我が名はユージンⅡRⅡ桜庭！ 魔を断つ剣なり!!

3. チツ、ウツセーナ。反省してマース。

…ダメだ！ オレの脳内選択肢が全力でオレの生存戦略を邪魔している！

そんなことを吐こうものなら素敵nice boatな船に乗せられそうな予感で一杯だ！

目の前のモンペ： ゲフゲフ、プレシアⅡテストタロツサさんは尚もオレを睨んでいるというのに。

どうしてこうなった… どうしてこうなった！

心の中で滂沱の涙を流しながら、オレはこれまでの出来事を振り返っていた。

…  
…  
…

目が覚めると、なんか水の中で浮かんでいた。

「……………」

うん、意味不明ですね。とはいえ息苦しくはない以上、恐らく害はないと判断するしかない。

害があつたら？ そりや一大事だがこの状況で何ができます？  
だから害はない。いいね？

やや現実逃避気味に自分を納得させると、オレは有益な情報を得るため周囲の様子を確認した。

周囲にはなんかモニターやらよく分からん様々な機材が並んでいる。まるで研究室みたいだ。

そしてオレは、どうやら身体ごと悠々と収まる大きなカプセルっぽい物の中にいるらしい。

うーん、これは一体どういう状況なのか？ なんか身体がバリバリ張り付く感じで妙に痛いし。

そもそも、昨晚… 昨晚でいいんだよな？ は、何があつたんだっけな。記憶を探ってみる。

えっと、いつもどおりリンデイさんたちの収録に脇役として参加して、帰ろうという時間で、

それから… それから？ ふむ、思い出せぬ。思い出せないということは大したことないのか？

なんだかそれで流していることが多い気がするが、思い出せない以上は考えても仕方ないしね。

多分事故かなんか遭遇して回収されたんだろう。うん、この予想は当たってる気がする。

だとしたら、このカプセルは一体なんだろうか？ しかもオレ、なんか裸で放り込まれてるし…

…あ、風呂か。

お邪魔したお宅の風呂場で滑って頭を打って（多分ここで記憶をなくした）、そのまま睡眠。

身体がバリバリしているのは、水中浮遊睡眠という前衛的な試みで寝違えてしまったから。

どうやら全ての点が一つの線につながったようだな… なんと

う冷静で的確な推理力なんだ！

「ガボゴボオツ!? (つて、んなわけねーだろ!?)」

思わずツツコミを入れようとして全身に痛みが走る。

記憶を探ろうとすると頭もズキズキ痛むし。……あ、やべ。なんか、気が遠くなってきた。

そして夢電波といつも通り駄弁ることになった。うん、知ってた。今日は一人だったけど。

助けようか的なこと言われたけれど、妄想に助けを求めるのもアレだし遠慮しておいた。

火事の時は藁にも縋ったけどね。まあ、火事じゃないならなんともなるだろうしね。多分。

まあ、あつちもあつちでなんか大変そうだったし頼るのも大人してどうなんだって話だしね。

適当に「友達大事にしろよ」とか「最後まで頑張れろうな」的な言葉を投げかけておいた。

いい加減なオレのふわっとした言葉だが、彼ならばきつと正しく受け止めてくれることだろう。

まあ、全部夢電波なんですけどね! ……はあ、いい加減一度メンタルに相談すべきかなあ。

でも親御さんたち過保護みたいだしあんまり心配させるのもなあ。けど悪化しても問題で…

そんなこんななアレコレを考えつつ目を開けてみると、カプセルの水は抜けて蓋が開いていた。

「……へーちよ」

……とりあえず、拭くものと着替えがないことには。あ、なんかテーブルの上に置いてある。

見たところ、男物(というか男児用)の服一式のようだ。用意のいいことにタオルもある。

勝手に使うのは悪いが多分オレのために用意されたものだろうし、  
そも裸のままの方が失礼だ。

ペタペタとテーブルに向かってるその時、出入口らしき扉がプ  
シュー…と音を立てて開いた。

公園で幾度か言葉を交わしていた金髪の少女だ。いつも通り赤い  
大型犬を脇に侍<sup>はべ</sup>らせてる。

なんだかクロノさんとのファーストコンタクトの時には、見捨てら  
れてたような気もするけど。

でも今は、そんなことどうでも良いんだ。重要なことじゃない。

「あつ！ 目を覚まし…」

「……あつ」

少女が固まる。犬が固まる。そしてオレが固まる。

タオルを握り締めつつ裸のまま。裸のまま。……大事なこと  
なので二回言いました。

OH MY GOD.

「ヴオグルルルルル… ワンワンワンワンッ！」

「イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!」

狂ったように吠え猛る赤い大型犬。絹を切り裂く「をのこ」の悲  
鳴。……はい、オレですね。

一体誰得だよ… こういうのは、こう… 少なくともオレの役柄  
じゃない筈ですよね!?

「ご、ごめんなさいっ！」

真つ赤になって謝りつつ、吠える犬を連れてドアの外に出て行って  
くれる金髪少女。紳士だ。

だが何もかも虚しい。この気持ちは一体…

「……へーちよ」

またくしゃみが出た。とりあえず、着替えるでしょう。忘れろ…  
あの黒歴史は忘れるのだ。

用意された服は、白無地のシャツと黒のスラックスか…

うん、まあ銀髪オッドアイの悠人少年に全く似合わない制服よりは  
外観的にマシになるだろう。

「あの… 本当にごめんなさい」

「いや、こちらこそ。できればお互いに忘れてそれで解決としたい。…むしろ忘れてください」

「は、はい… でも、本当にごめんなさい」

そして着替え終わった後、互いに顔を合わせてからコメツキムシのように謝り倒して今に至る。

「それで、どうしてここに？」

罅が明かないので強引に話題を切り替える。彼女が何故ここにいるのか疑問なのは事実だし。

尋ねると、彼女は思い出したように手に持っていたトレイを差し出してきた。おや？ これは…

「あ、はい。そろそろ目が覚める頃かなと、お預かりしていた荷物を…」

「なるほど、そうだったのか。わざわざすまなかつた… 確認させてもらっても？」

「はい、勿論です。どうぞ」

彼女はテーブルにトレイを置くと、一步離れる。

家の鍵、よし。鞆、なんか焦げ跡ついてるがよし。財布、なんか中のお札が血塗れだがよし。

…いや、よくねえよ。なんでちよつと見ない間にこの財布、いきなり呪われてるんだよ。

気になる… 果てしなく気になるが聞くのも怖い気がする。まあ、使えないこともないだろう。

深く考えないようにしよう。ホラ、赤くなつたし通常の3倍の価値になるかもしれないし。

ははははははは… はははは、はあ…。

乾いた笑みを浮かべつつ持ち物チェックをする。そして気付いた。おかしいな、アレがないぞ？

チラツと金髪少女を見遣ると気不味そうに俯いた。どうやら彼女は事情を知っているようだ。

「その、他に荷物はなかつただろうか？」

「ごめんなさい。私の力不足のせいで、あなたの大事な缶コーヒーは…」

「違う、それじゃない」

缶コーヒーは別にちつとも大事じゃないし、ぶっちゃけ果てしなくどうでもいい存在だよ！

仮に連中が駆逐されてしまってもオレの人生には何のしこりも残らないと断言できるね！

むしろ、新しいパンツを履いたばかりの正月元旦の朝のように爽やかな気分になるだけだよ！

「え、違うんですか？」

「そうじゃなくてだな… その、機械的なモノで持ち運びできる端末的な、ね？」

キョトンと首を傾げる金髪少女。うん、すまない。違うんだ。

幼い少女の天然ボケを真顔で指摘するのも大人として申し訳ないので、やや遠回しに伝える。

まあ、なんだ… 要するにスマホ君のことだよ。言わせんな恥ずかしい。

「あ、はい。デバイスのことですね？ 気付くのが遅れてごめんなさい」

「いや、気にしないでくれ。ハッキリ言わなかったこっちは悪いんだ」  
しかしデバイスか。海外じゃ小洒落た言い回しをするんだな。今度オレも真似してみようかな？

そんなことを考えてるオレの前に、ゴトリと鈍い音を立てて何かが置かれた。

お、スマホ君… じゃないよな？ なんだこれ？

「…オレの知ってるスマホ君と違う」

「残念ながらあなたのデバイスは例の一件の影響で機能を失ってしまいました」

「そうか… 何が原因かわからないけどまた壊れたのか。してこれは？」

「私では地球にありふれた携帯端末に過ぎない機能までしか復元でき

ず…」

うん… うん？　なんかおかしいな方向に話が進んでないかな？

「そこで新たに生まれ変わったのがこの『バルディッシュユリアサルトバスター』です」

「OK、ちよつと待とうか」

「あ、はい」

なに、この…　なに？

眉間を揉み解しながら思考を纏めようにも、何故こうなったのかがそもそも理解できない。

……うん、分からないなら聞いてみよう。

唐突なことで面食らったが、こうなった事情があるはず。聞いてみれば分かるかもしれない。

「すまない。二度手間ですり訳ないが、もう一度、最初から順に説明してくれるかな？」

「あ、いえ。こつちこそ説明の仕方が悪くてごめんなさい」

やや謝り癖があるのが気になるどころだが、素直で心優しい、出来た娘さんだ。

そんな彼女の説明を改めて聞けるのであれば、きっとこのよく分からん事態も理解できるさ。

「まず最初に、あなたのデバイスは破損によりその機能を停止してしまいました」

「ふむふむ」

「最初は私が直そうとしたのですが、携帯端末程度の機能しか取り戻せませんでした」

「なるほど」

いや、それで充分なのですが。この子すごいな。専門家か？

「無論、それは迷彩機能だと理解しています。あなたのデバイスがそ

の程度のはずがない」

「そうだったのか」

よくわからないがそうだったのか。専門家っぽい子に断言されては頷く他ない。

「母さんにも相談しました。しかし、その真の機能は巧妙に隠蔽されており復元は絶望的」

「ほうほう」

巧妙に隠蔽も何も、徹頭徹尾ただのスマホだった気がするのだが。

いや… もう少し様子を見よう。俺の予想だけでみんなを混乱させたくない。

「そこで新たに生まれ変わったのがこの『バルディッシュIIアサルトバスター』です」

「お、おう…」

ドヤ顔で言われる。

……うん、さっぱり分からないな。いや、彼女は悪くない。きっとオレの頭が悪いのだろう。

ま、まあ落ち着いて考えよう。

ちよつとゴツくなったけど、言われてみればスマホ君の面影が…

あるような、ないような？

ならスマホ君ではあるのだろう。多分、きっと、メイビー。

「前回の反省を踏まえ、時空跳躍魔法の直撃を受けても耐え得る耐久性を実現」

オレが自分の気持を整理している間にバルなんとかの解説を始める金髪少女。

まあ、よくわからないが堅いということらしい。正直、スマホとして使えるならどうでも…

「アサルトモードでは周囲の魔力を吸収することで推進力を増し、理

論上は亜光速まで加速可能。

バスターモードは内包魔力にも依りますが、地形を変える程度ならば容易い最大出力を実現……」

なんでそんな余計な機能をつけた！ 言え！

考えてみて欲しい。一体誰がちよつと目を離れた際に危険物に改造されたスマホを喜ぶのか。

流星のオレもこれはちよつとないと思った。善意が常に良い結果を生むとは限らないのだ。

この金髪の少女には常日頃缶コーヒーの消費で世話になっていたが、一言物申さねばなるまい。

「おいアンター！ ふざけたこと言ってるじゃ…… あれ？」

「はい？」

「いや、その…… 目の下がクマになってるのが大丈夫か？ きちんと眠れているか？」

「あ、クマになってましたか？ その、母さんが全部一晩でやってくれたんですけど……」

少女の目元にあるクマが気になって尋ねると、彼女は恥ずかしそうに頭を掻きながら答える。

「それで、どうして君まで……」

「恥ずかしながら、私、なんの役にも立てなくて。……側で見てるだけしか出来なくて」

「そ、そうか……」

オウフ……

きつと親御さんに必死に頼み込んで、オレのスマホをなんとかしようとしてくれたんだな。

上手く行ってないみたいなのを以前言ってたから、気まずかっただろうに。

……その結果、 “なんとかなっちゃった” なんだな。スマホ君。

「あの、なにか言い掛けていたのでは……？」

「……いや、素敵な機能をありがとう。大切にに使わせてもらうよ。いい親御さんを持ったね」

「はいっ！」

金髪少女は花も綻ぶような笑顔を浮かべると、元気に一つ大きく頷いた。

……………。

もはや何も言うまい。さつきはああ言われたものの、あんな機能は現実的とは思えない。

きつと仮面ライダーやプリキュアの変身グッズみたいなのに、ちよつと音と光が出るくらいのはず。

親御さんも娘さんの頼みに圧されて、止むに止まれず付ける羽目になつてしまったのだろう。

使うにはちよつと… いや、かなり勇気がいるが、まあ、我慢出来ないこともないさ。うん。

「あ、あの… その…！」  
「うん？」

何やら思い詰めた様子で少女が顔を上げると、真剣な眼差しで話しかけてくる。なんだろう？

「あのっ！ 私の名前は…」

「ああ、『フェイちゃん』だったな？ オレは桜庭悠人… を名乗っている。覚えているか？」

「……ハイ オボエテマス」

ピシリと空気が凍ったかと思えば、目の前の少女がひどくどんよりした表情を浮かべている。

な、なにか間違つたのだろうか？

おかしいな… アースラであの白い女の子に散々語つて聞かせられたから間違いないはずだが。

「あの、それ、誰から聞いたんですか…？」

「あ、ああ… ツインテールっぽい髪型の白い服着た女の子からなんだが、知っているかな？」

「……はい、一応」

良かった。全くの赤の他人のことだったらどうしようかと思つたぜ。顔見知りなら大丈夫だな。

「彼女から聞いたのさ。曰く、『幾度も決闘を交わした切っても切れぬ仲』だとか」

「へえ…」

『私とフェイちゃんは強敵ともなの！』とも言ってたかな。はは、仲が良くて微笑ましいな」

「ふうん…」

なんせアースラの自由時間でエイミイさんに淹れてもらったお茶を片手に何度も聞いた話だ。

耳にタコが出来るほど聞かされ、忘れようがないほどだ。彼女たちの絆は疑いようがない。

金髪少女も話を聞きたびに嬉しそうな笑顔を浮かべている。……犬は何故か距離とつてるけど。

しかしさつきから妙に背筋が寒いが風邪引いたかな？ ……まあ、長時間素っ裸だったしなあ。

「改めて自己紹介しますね？ 私はフェイトⅡテストロッサ。どうぞフェイトと呼んでください」

「なんだ、アダ名だったのか。……よろしく頼む、フェイト」

「はい、こちらこそ！ ……あの子はやっぱり敵だったんだ」

「え？ なんだった？」

「いえ、なんでも」

なんかボソツと呟いたので聞き逃してしまったが、まあ、なんでもないならいいかな。

それよりさつきから気になっていることがあるので、そっちを指摘するほうが先だろう。

「……見たところお互い同じ年くらいだろう？ だったら喋り方は普通で構わない」

「はい！ ……じゃなくて、うん！ よろしくね、悠人！」

「ああ」

同じ年どころかフェイトは年下にしか見えないし感じないが、今のオレのガワは悠人少年だ。

それに合わせた振る舞いが求められる。少女にいつまでも敬語を

使わせるなど以ての外だ。

いずれゴリ君とメガネ君にも指摘しないと……でも怖いからもうちよつとこのままでもいいかな。

もともと顔見知りであっただろうフェイトの名前を知らない素振りを見せるなど凡ミスだった。

不審を抱かせてしまったら元も子もない。

フェイトが素直だから助かったが、推定厨二病の悠人少年を演じるというのも中々に難しい。

いずれはかつての悠人少年との違いを暴かれる日が来るかもしれない。せめてその日まで……

いや、例えその日が来ても足掻かないとな。……悠人少年がこの身体に再び戻ってくるまでは。

「あの……悠人。母さんが少し話をしたいって……でもまだ本調子じゃないなら、その」

「む、そうか。……いや、気遣いは無用だ。こちらも是非お礼を言いたい。案内を頼めるか？」

「う、うん」

決意を新たにしていると遠慮がちに話しかけられる。なんでも親御さんが話がしたいそうさだ。

世話になっているこちらとしては否やはない。二つ返事で了承し、部屋まで二人で向かう。

いや、犬もいたけど。その道中、二人で軽く雑談に花を咲かせる。……いや、犬もいたけどね。

物静かな子だと勝手に思ってたけど意外と話好きな子だったな。気立てもいいし器量もいい。

将来は……いや、既に引く手あまただろう。流石は子役とはいえハリウッド・スターだな。

だが当方は異形じみた銀髪オッドアイ。世の中つてのは不公平にできてる。悠人少年、生きろ。

そんなこんなを考えてるうちに、応接室のような場所に通される。

「母さん… 彼を、悠人を連れてきました」

「ご苦労様、フェイト。……部屋で休んでなさい」

「……はい」

退室するフェイトを尻目に声のする方に視線を彷徨わせつつ、挨拶の言葉をかける。

「どうも、この度は突然のおうかがいにもかかわらず大変お世話になりましたして…ッ!？」

「どういたしまして」

だが、声の主を視認した瞬間にオレは固まってしまった。

「はじめまして… 私はプレシアIIテストアロッサ。どうぞ、お掛けなさいな?」

「……………」

この美貌… 更に身に纏う際どさと妖艶さ、そして気品を引き立てるこの黒地のドレス衣装。

思わず圧倒され、オレは人知れず唾を飲み込み… そんな状態にありながら確信していた。

何を? ……言うまでもない。目の前の女性がいかなる存在であるのか… そう、間違いない。

——彼女は… ハリウッドの大女優だ。

リンデイさんよりは明らかに年上だろうが、重ねた年齢は老いよりむしろ年輪を感じさせる。

どうやら本場のハリウッドの大女優が満を持して登場したらしい。

……………」

いや、なんか最近おかしいと思ってたんだ。何処でカメラ撮影をしているかも分からないし。

リンデイさんやクロノさんにそれとなく収録について話を振っても、要領を得なかったし。

ひよつとしたら映画撮影云々はオレの勘違いで、もっと別の事態が進行しているんじゃないか?

そんなことを考え始めていたのだが、オレのちっぽけな懸念などこの大女優に吹き飛ばされた。

マレフィセントやらのディズニー映画にそのまま出てもおかしくない、この圧倒的なオーラ。

彼女ほどの威厳を持つ女性を、一体誰が大女優でないと否定できるというのだろうか？

きつとアンジェリーナ・ジョリーとかとも顔見知りには違いない。さ、サインとか貰えるかな…？

「私にだけ名乗らせるつもり？ ……そうね、ハッキリ聞いてあげる。あなたは、何？」

おっと、大女優をいつまでも待たせるわけにはいかない。オレも一世一代の演技で応えよう。

「これは失礼、時を忘れていました。 ……桜庭悠人、今はそう名乗っております」

「今は？ 持って回った言い回しね… いえ、その魔力量。あなたがハツタリでもない、か」

おお、拾ってくれた。なんか嬉しい。

まあ、自分は本物の悠人少年じゃないですよってだけなんですけどね。

広げようのない話だし、ここはサラッと流しておきますか。

「どうぞ、ご想像のままに。否定も肯定もしませんが」

「フン… 食えない男ね。でも調べは付いているのよ。いつまでその余裕が続くかしら？」

「ほう？」

「確かに類を見ないほど圧倒的な魔力をあなたは持っている。けれど、それはただのハリボテ」

どうしよう。なんか設定が生えてきた。

「実際は壊れかけのリンカーコアが魂と癒着していて、ロクに魔法を行使できるものじゃない」

「それに何の問題が？」

「何って… 魔法を使おうとすれば激痛が走る。無理に使えば良くて

「廃人、最悪死ぬことも…」

「たかが『その程度』でしょう？ 現に自分は生きている。それだけで充分過ぎますな」

「ッ！」

「なんか凄いや目付きで睨まれた。ごめんなさいごめんなさい。今すぐ土下座したくなってくる。」

「でも、オマエは凄いや魔力持ってるけど魔法使えないんだぜ！ 悔しいか？ って言われても…」

「もともと使えた訳でもなからうし… どうしよう？ 悔しがった方が良かったんだろうか。」

「でもなあ、オレなんかのダイコン演技で悔しがるふりとかしても、余計苛立たせるだけだよな。」

「大した口車ね… それでフェイトを、あの『人形』を誑かしてくれたのかしら？」

「……………」

「うわあ…。」

「間違いない… この人親バカだ。しかも拗らせちゃってモンスターペアレント化一歩手前だ。」

「差し詰めオレは、『人形みたいに可愛いうちの娘にたかる悪い虫め！』って立ち位置かな。」

「だが、幾ら人形のように可愛がっても服まで似た感じにコーディネートイトするのはやり過ぎだ。」

「(推定小学生にあの格好は) イカンでしょ。このままでは海鳴市の公序良俗が乱れてしまう！」

「なんとか穏便な形で諦めてもらわないと。ここは色々フリーダムな欧米とは違うのだから。」

「オレはなんとか言葉を選びつつ、ハリウッドが世界に誇る大女優プレシアさんの説得を試みる。」

「部外者ながら、貴女が娘さんを大事に想う気持ちは察するに余りあります」

「……………」

「今はまだそれで良いでしょう。……ですが、娘さんの将来はどうお考えで？」

あんな純真な子が将来「痴女」だの「脱ぎ魔」だの言われてしまうことを想像すると忍びない。

そう言うと、プレシアさんは顔の半分に手を当てながら何かを悔やむような表情を見せた。

だがオレに観察されていることに気付いたのだろう。すぐに表情を戻し、強く睨みつけてくる。

「あなた……知っているの？」

知っている？ 何を？ いや、思い返せば彼女たち親子の名前には聞き覚えがあったのだ。

オレは確かに知ってるはずなんだ。プレシアⅡテストタロッサ、フェイトⅡテストタロッサ。

この二人の名前からオレは何かを思い出さねばならない。……忘れてしまった大切な何かを。

!?!? そして、電流が走る。

「まさか事故の件……」

「やはり、知っていたのね」

「確信したのは今です。いえ、正直申し上げると貴女に言われるまで忘れていた」

「藪蛇やぶへびだったわね。……まんまと乗せられたわ」

プレシアさんが苦い顔をするのも無理は無い。今となつては覚えている人も少ないだろう。

だが遠い記憶の彼方になろうとも、オレの心の底にはその事故が確かに焼き付いていた。

かつてフェラーリと共に、その優雅さ美しさから日本を席卷したイタリア車「テストタロッサ」。

しかしその権威はリコールにより失墜した。今となつては最早事故の代名詞でしかない。

きっとこの親子もそのことが原因で学校や職場で苛められてきたのだろう。やっかい、事故車と。

なんてことだ。その心の傷を露出狂一步手前の衣装を身に纏うことで発散させていたなんて。

けれど、それじゃダメなんだ。それじゃ誰も幸せになれない。だがオレに止められるのか？

……いや、弱気になっちゃいけない。ちっぽけなオレだけど、それは諦める理由にはならない。

「事故の件、お悔やみ申し上げます。ですが……」

「あなたに何がわかるの!?!」

オレの言葉は遮られ思い切り机を叩かれる。コワイ!

「上の都合で無茶な工程で作業をやらされて…… やつと休暇が取れると思つた矢先に、あんな……」

「……………」

ぎやあああああああ! プレシアさん、まさかの関係者でしたー! すんませんすんません!

やべえよ、関係者の方の地雷にドンピシャだよ。オレってやつは無神経にも程があるだろ。

あばばばばばば…… プレシアさんマジ泣きしてる。どうする?

土下座か? 土下座なのか?

もうオレなんかじゃこの心の傷の前に無力なのか? いやしかし、オレでダメならば共演者に!

「そ、その…… 管理局のみなさんに相談したりは……」

「できると思う? 連中、上に丸め込まれて私一人を悪者扱い…… 信用なんてできるわけないわ!」

お、重てええええええ! クツ、なんてことだ…… 既に注意された後だったとは。万事休すか?

片や大型犬に意地でもリードを付けない娘。片や露出ちつくな衣装を意地でも押し通す親。

クソツ、なんてめんどくさい親子なんだ! これ以上ないほど血のつながりを感じさせるよね!

「ふう…… 見苦しいところを見せたわね」

「いえ、そんなことは……」

「でも今のことは忘れなさい？」

「アツハイ」

首をカクカク動かしながら頷く。

悲しい… 悲しい話だった。そう、お互いに忘れたい出来事だった。

だから忘れるのは建設的な判断だね。何もなかった。いいね？

「良い返事ね。それと一つお願いがあるの。聞いてもらえるかしら？」

「はい、なんででしょう？」

今のオレはイエスマンだ。どんな無茶振りだってホイホイ頷いてみせるぜー！

「私の計画に、協力して欲しいの」

「ごめん、無理」

……あつ。

思わず素で答えてしまった。やつちやつたZE！

………

…

そして今、目の前には美しい笑顔を浮かべたプレシアさんが夜叉の如きオーラを纏ってます。

どうしてこんなことに… オレはただ人類露出計画に巻き込まれなくなっただけなのに。

確かに人類みんな露出狂になれば心の傷は紛れるかもしれないけど、それは欺瞞に過ぎない。

ていうかぶつちやけあんな恰好したくありません。させられたら泣きます。恥も外聞もなく。

「さて、覚悟は… ゴフツ！ ゲホツゴホツ！」

「プレシアさん!？」

立ち上がろうとしたプレシアさんが、急に口元を抑えて咳き込みつつ蹲る。

大声で怒鳴ってたからか… とりあえず背中でも擦ろうと席を立ったオレの前に影が割り込む。

「母さん… 抑えて!」

「ゲホッ!… ときな、さい… フェイ、ト…」

言うまでもなくフェイトだ。肉親の危機を感じて咄嗟に駆け付けたのだろう。凄く愛の力だ。

やはり、この親子の絆に割って入ることなど不可能なのか? オレは無力感に打ちひしがれる。

「悠人… ここは任せて。あなたは一旦部屋に…」

「いや、しかし…」

部屋と言われても何処に行けば… オレ、この屋敷はあのお風呂場(仮)しか知らんですよ?

「母さんが本気になったら私じゃ止められない! 急いで!」

「アッハイ」

なんだか切羽詰まってる様子なので、取り急ぎ応接室から駆け出す。

「こつちだよ!… アタイについてきて!」

「ああ!」

……例の赤い大型犬が喋っておる。つい反射的に返事してしまったが、いいのだろうか?

いやまあ、イタチが喋って変身するくらいだから今更な世界観なんだろうけどさ。

ワンコに導かれつつも、不用意な発言で怒らせてしまったプレシアさんに心中で詫び続ける。

すまぬ、すまぬ…。

やがて部屋に案内され、赤いワンコ… アルフというらしい彼女としばし雑談する。

オマエはどここのメルマック星人だと言いたくなる名前だ。

どうやら彼女たちはプレシアさんとの話を聞いてたらしい。いやまあ、どうでもいいけどさ。

何故誘いを断ったのかを聞かれたので、「倫理的にアウトだからです」と回答しておいた。

フリーダムな欧米ならいざしらず、日本では許されない恰好なのだ。出る杭は打たれるのだよ。

そんなことを語っていると幾らも経たぬうちに眠気が襲ってくる。実は身体も結構痛かった。

眠ってもいいとのお言葉に甘えて横になると、夢も見ないほどの深い眠りに落ちていった。

なんか人の屋敷に来たというのに寝てばかりだな、オレ。オマケに家主を怒らせちやう始末。

いつかちやんと謝らないと…。

チュンチュンチュン…。

「ふわあ…」

小鳥の囀る声ツルギをBGMに目を覚ます。うん、気分爽快！

まるで上等なベッドで充分な睡眠をとったかのような爽快感だ。素晴らしい気分だな。

さて、今日はこの気分のまま何をしようかな… と、周囲を見渡せば。

見慣れない大きな部屋。このベッドを覆っていると思われる天蓋。そして何より…

「ニャア」

「ニャア」

「ニャア」

猫がいた。それもたくさん。

「……What happened? (訳:何が起こったの?)」  
どうしてこうなった。……割りとマジで。

## 金髪少女の『約束』・上

「うん、私は大丈夫。だから…」

私は今、ちゃんと笑顔を浮かべられているだろうか？

大切な人を心配させないための笑顔を。

「お願い。あなたにしか頼めないの」

これは一時の別れに過ぎない。

悲しむ理由なんてどこにもないし、いつか必ず再び道は交わる。

だから、その日のために私は一つの約束をすることにした。

……うん、悪くない。こういうのは、悪くないよね。

今までの私じゃ信じられないことだけど、こんな私なら少しは好きになれるかもしれない。

「フフッ…」

私はこの二日間の出来事を振り返っていた。

……

……

…

アルフと協力しての広範囲索敵を行うことにより、ジュエルシードの場所が明らかになった。

その場所は海中。手掛かりが掴めなかったジュエルシードが複数眠っている可能性は高い。

ただ、管理局が本格的に介入してきたせいで時間的余裕は少ない。程無く彼らも気付くだろう。

当初は上手く出し抜けていたが、ここ最近はこちらの動きを制限する方向にシフトしている。

マンパワーを駆使した牽制と索敵。地道ではあるが対処の仕様がなない戦法と言えるだろう。

幾らスピードで優っていても厳しいものがある。ましてこちらは一度負ければおしまいなのだ。

「二度、二度ならあの黒いのが出てこない限りあしらせるんだけどねえ…」

「……油断は禁物だよ、アルフ。あの白い子たちもますます強くなっている」

「確かにね。今回のジュエルシードを確保したら一度、時の庭園に戻るべきかもしれないね」

「……ん」

アルフの提案は一理ある。既に管理局はこちらを完全に敵性勢力として認識しているだろう。

出し抜きジュエルシードを確保するならまだしも、確保されたソレを奪うのは至難の業だ。

母さんと一度対応を相談すべきかも。……いや、久しぶりに母さんの顔を見たいとかではなく。

「顔、ニヤけてるよ?」

「……ニヤけてない」

「あつははは! 全く、おすまじさんなフェイトが随分と表情豊かになったもんだよ」

何がおかしいのか、グリグリと頭を撫でられる。むう… 今日のアルフはちよつと意地悪だ。

そんなことを話しながら目標地点の海上まで到着。念の為に探知を… うん、間違いない。

飽きもせず私を撫で続けているアルフを身体から引き剥がし、本日の作戦のおさらいを始める。

「眠っているジュエルシードに魔力波を打ち込み、強制的に活性化させる」

「その上で位置を特定し、速やかに封印。管理局が来る前にずらかるって寸法ね」

「うん。介入された場合は、相手戦力にもよるけど撤退も視野にいれること」

私たちが捕まることは母さんに不利益しかもたらさない。そう、あの人”に気付かされたから。

魔力波を打ち込むのはアルフの役割だ。私は直後に控えるだろう。暴走体との戦闘に備える。

アルフはそのまま私のサポートと周囲の警戒を行う。そういった作戦の手順の確認を済ませる。

そして準備を整え、作戦を決行……アルフが目標地点の近辺に大規模な魔力波を打ち込む。

「っ！ ジュエルシード、複数だとは思っていたけど6つ……」

「少しヤバイ感じだね…… どうするの、フェイト？」

「……むしろ好都合」

「けど、管理局に挟み撃ちにされるかもしれない状況じゃ無茶だよ！」

「無茶は承知の上。アルフ、サポートをよろしく…… 信じてる」

返事を待たずに荒れ狂う竜巻の中に飛び込む。

「あ…… もうっ！ わかったよ、やるよ！ アタシはフェイトのパートナーなんだから！」

自棄になったような諦めたようなアルフの声に、自然、笑みが浮かぶ。

アルフはさつき私の表情が豊かになったと言っていたけれど、本当にそうなのかも知れない。

ジュエルシードのことが片付いたら、母さんとアルフと3人でゆっくり話してみたい。

きつと、それは今までよりももっともっと楽しく感じられる筈だから。

それから、想像以上に厄介な6つの暴走体の攻守を前に私たちは突破口を見出だせずにいた。

……判断を誤ったかもしれない。程無く管理局もこちらに気付き介入を始めることだろう。

いや、既に気付いた上でこちらの消耗を待っているかも。いずれにせよ状況はジリ貧と言える。

「っ！」

思考に没頭しかけた私に向かって伸びた海水の鞭が身体を掠める。辛くも回避に成功した。

「フェイトツ!？」

「大丈夫……！」

落ち着け、落ち着け……焦っても良いことは一つもない。落ち着いて、戦場を支配するんだ。

「フェイちゃん!」

けど悪い時に悪いことは重なるもので、気合を入れ直そうとした私の背後に“彼女”が現れる。

……ジュエルシードを巡って戦う魔導師の少女が、その仲間である少年と使い魔とともに。

管理局員の姿が見えないのは不幸中の幸いだが……暴走体の片手間にあしらえる相手ではない。

「……………」

暴走体への攻撃を中断して、彼女たちの攻撃に備えて身構える。

先に動くのは彼女か、彼女の仲間たちか……いずれにせよ格上の相手だ。油断も慢心もしない。

先に動いたのは少年と使い魔の二人。

けれど、それは私やアルフを捕獲するためのモノではなく……

未だ猛威を奮っている暴走体へ攻撃を加え、バインドで縛ろうとするものだった。

一体どういうこと？

不可思議な光景を前に、アルフとともについ目で追ってしまう。

だが、この状況でその隙を晒すことは余りに致命的だった。

「フェイちゃん」

「っ！」

慌てて私がバルディッシュを構え直すより早く、彼女のデバイスに制される形で抑えられた。

迂闊： クロスレンジまで接近を許すとは。

そう焦る私の想いと裏腹に、彼女はいつまで経っても攻撃を仕掛けてこない。

訝しみつつ彼女を見るのと、バルディッシュを通じて魔力が流れ込んでくるのはほぼ同時。

どうということだろう？ また分からないことが増えた。

おかげで減衰していた私の魔力は万全な状態へと戻ったが、彼女の意図が読めない。

呆気にとられる私に対して、彼女は笑顔を浮かべながら声をかけてくる。

「ジュエルシードは3つずつ半分こ。せーので決めるよ、フェイちゃん？」

何かと思えば： 魔力を分けてくれたことには感謝するけれどソレはソレだ。

そもそもジュエルシードは母さんのために集めているもの。感謝はするが譲れるものではない。

……ならば、返事は決まっている。

「せー…」

「全部貰うからお先に： あと、フェイちゃんじゃない」

「にやああああ！ なんて無視するの?! ここは友情パワーに目覚めるところじゃないの?!」

「そんなものは、ない」

この場ではこちらからは攻撃しないこと・騙し打ちはしないことがせめてもの誠意だろうか。

なんか友情パワーとか叫んでいたが、今までの戦闘の何処にそんな要素があったのだろうか？

彼女には悪いけれど、私にとって彼女はジュエルシードを巡る上での厄介な障害でしかないし。

そのまま勢いに乗り暴走体を攻撃する。二度、三度… 手応えは十分。これなら行けるかも。

……これも彼女の魔力のおかげだろう。

流石にジュエルシードは譲ることは出来ないが、好意に応えて多少の友誼を交わすくらいは…

「!?」

そんな時、ふと悪寒がして慌ててその場から飛び退く。何故だかとても不味い気がしたのだ。

案の定というべきか、先程まで私がいた場所を極太の魔力砲が通過し暴走体へと直撃する。

……ソレが意味するものは一つ。私が恐る恐る件の少女を振り返れば、彼女は笑顔を浮かべる。

え？ この状況でなんで笑うの…。

「い、今… 私ごと狙った…?」

「それくらいで当たるなら今まで苦労してないよ！ 無視するなら勝手に協力するんだから！」

どうしよう、ちよつと言っている意味がわからない。言葉は通じられるけれど気持ちに通じない。

ふと彼女の使い魔と目が合う。目線で助けを求めたものの、静かに頭を下げられてしまう。

……うん、知ってた。使い魔の彼も彼女にはしばしば振り回されている様子だった。諦めよう。

敵とちよつとでも馴れ合おうと思っただけが悪かったんだ。……うん、そう思うことにしよう。

「つて、まずい！ 暴走体が融合しようとしている！ そうなったらバインドも危ういぞ！」

遠い目をしていただであろう私の耳に、アルフと連携して暴走体を拘束していた少年の声が届く。

「……もういい。たとえ背中から狙われてても落ちる前に落とせばいい」

色々と思うところはあっても、今はジュエルシードへの対処を何よりも優先すべきだろう。

「私たち二人の協力攻撃だね、フェイちゃん！」

「……絶対に違う。これは、もつとおぞましい何か」

彼女の寝言を斬り捨てて暴走体に接近する。前方と後方からの攻撃をかわしながら封印作業。

私にやれるだろうか？ ……いや、やってみせるしかない！ 来ると分かっているのならっ!!

「ッー」

融合の兆しを見せる暴走体へと得意のスピードで割り込み、一閃。崩れたところをもう一閃。

更にもう一閃… を加えることなく、距離を取る。直後に暴走体を飲み込む極太の魔力砲。

この連携とも言えぬ動きを二度三度繰り返すことで確信した。彼女は私を目印に狙っている。

そう… 彼女は、この場で暴走体ごと私を始末するつもりに相違ない。

思い通りにさせるわけにはいかない。私には母さんがいて、帰るべき場所があるのだから。

私を信じてくれたアルフのためにも、何より“あの人”のためにも、私は負けるわけにいかない。

気合負けしないように彼女を睨みつける。  
なのに彼女は笑顔で応じてくる。楽しくてたまらないというように。

…どうしよう、怖い。

いや、慌てる必要はない。落ち着いて、的確に、迅速に問題を片付けよう。

それがこの恐怖の時間を少しでも早く終わらせる結果へと繋がる。

そして程無く…

私たちは暴走体を消滅させ、ジュエルシードを封印することに成功した。

今、私たちの目の前には6つのジュエルシールドが浮かんでいる。

「じゃあ、フェイちゃん。このジュエルシールドを巡って…恨みつこなしの勝負だよ」

笑顔でそう告げてくる、白い魔導師の少女。

戦うのは何度目になるだろうか？

…彼女が強い。目の前の少女の強さは私が誰よりも知っているつもりだ。

どれだけ叩いても諦めず、そして以前より確実に成長して立ちはだかる。

今やまともに戦ったところで、私の勝ち目は限りなく低いだろう。

けれど、それが私の諦める理由になることはない。

私は大魔導師プレシアⅡテスタロッサの娘で、

リニスの一番弟子で、

アルフの信頼を背負っていて、

「頼りになる相棒」をその手に持ち…

そして、「あの人」の教えを胸に抱いているのだ。

だからこそ。

そう…たとえ勝機が那由多の彼方であろうとも、それだけで、私には充分すぎる。

「……………」

無言で構えることで彼女への返事とする。

互いの了承を認識し、戦闘行動に移るまでの僅かな静寂。

それは突然、思いもよらぬところから破られることになる。

「うおおおおおおおおおッー！」

その場に突如乱入してきた「あの人」の叫び声。

そして直後に耳朵を打った次元跳躍魔法がもたらす雷鳴によって。

頭が真っ白になる。

焼け焦げた「あの人」は力なく落下していき…… なんとか捕まえて抱き上げる。

「あ、ああああああああああ……」

冗談だよと言って欲しい。なんともないと笑って欲しい。

なのに、伝わってくるのは残酷な現実ばかりで。

彼は母さんの…… 大魔導師プレシアⅡテストロッサの魔法を受けてしまった。

その身にバリアジャケットすら纏わず、己の身を投げ出すようにして。

「しっかり…… しっかりしてください！ こんな、こんな……」

こんな…… 血が、こんなに…… 意識もない…… 呼吸は浅く、脈拍も低下している。

なんとか、私がなんとかしないと…… この人をこんなところで死なせるわけにはいかない。

なのに…… それなのに！

頭が真っ白になるばかりで動けない。涙が溢れて思考がぐちゃぐちゃになってしまう。

「……すま、ない」

その時、やけにハッキリとした声が届いた。

この人は、こんな時にも…… ううん、違う。今考えるべきはそれではない。

しっかりしろ、フェイトⅡテストロッサ。

この人を救うために自分の持てる全ての力を使うべき時だろう。

もう大丈夫。迷うことはない。

『アルフ、ジュエルシールドを回収して』

『……フエイト?』

念話を送り、アルフに指示を出す。

理解した。認識した。私では、この人を救うことは出来ない。

いや、今それが出来るのはきっと世界で一人だけ。

大魔導師プレシアⅡ テスタロッサ… 私の母さんを置いて他にはない。

『全速力で時の庭園へと帰還する』

今、私に出来ることは… 少しでも早く動くことでこの人の命を繋ぐことだ。

アルフのサポートによる最低限の隠蔽を施し、私たちは時の庭園へと… 跳んだ。

「死なせない… 私たちを救ってくれた、この人を…」

## 金髪少女の『約束』・下

私は時の庭園を駆ける。少しでも早く玉座の間にいる母さんに彼のことをお願いするために。

「母さんっー！」

ノックをするのももどかしく部屋の中へ転がり込む。いつもは外で待つアルフも今は一緒だ。

そんな私たちの様子に驚いた様子はなく、しかし、咎めるようにキツと睨みつける母さん。

その視線に怯みそうになる。嫌われるかもしれない… そんな暗い未来に心臓は早鐘を鳴らす。

けれど、この人を救うにはこれしか… 母さんに縋るしかないんだ。私は真つ直ぐ前を向く。

「母さん、お願い。この人を助けて下さい。……私の恩人なの、お願い」

「……………」

互いに真つ直ぐ瞳を見つめ合う。

そんな私たちの姿を、アルフはオロオロとした様子で見守る。

十秒、二十秒… もつと時間が過ぎただろうか？

ひよつとしたら、それは刹那にも満たぬ時間だったかもしれない。やがて母さんは無言のまま席を立つ。

「あっ……」

拒絶された… そう感じて思わず顔を伏せてしまう。どうしよう、このままじゃこの人は…。

「……………どうしたの？ ソレを治療するのでしょうか。さっさとついてきなさい」

「！……………う、うん！」

アルフと顔を見合わせ、笑顔を浮かべる。

「母さん、ありがとう！」

「いやあ、アンタも良いところあるじゃないか。正直、見直したよ！」

あ、あのアルフ… 幾らなんでもそれは失礼じゃ…。

母さんはちよつと不器用なだけで…… あわわ、母さんのこめかみがピクピクしてる。

「アルフ。あなた、フェイトの使い魔でしょう？　いつまでその子に荷物を持たせる気なの」

「なっ！　そ、それくらい分かつてるよ……　ったく、一言おおいんだよ」

「フン、自覚の足りない使い魔にはこれでも足りないくらいよ。口より先に手を動かさなさい」

母さんの指摘に対して不満気にブツブツ言いながら、私からこの人を奪い取るアルフ。

ああ、襟首摘んで持ち上げるのはやめて！　この人が死んじゃうから！　ゆっくり、丁寧に！

そして奥の研究室に通される。……私もアルフも、この部屋に入つたのは初めてだ。

良く分からない様々な機材に幾つかの培養槽？　おそらくは最新の医療設備なのだろう。

でも、何故こんなものが時の庭園に？　そういえば私は母さんのことを何も知らない。

私たちが物珍しげに周囲を見ている間に母さんはテキパキと機材の用意をする。

そしてアルフから彼を受け取って、手際よく応急処置を施してから詳しい診察を始める。

機材に映しだされる記号を読み取るにつれ、母さんの顔色が変化する。

眉を顰めてため息をつく。けれどコンソールパネルの操作は止まらない。

……そんなに絶望的な検査結果だったのだろうか？

「あの、母さん… なにか、あったの？」

「……命に別状があるというわけではないわ。あなたは気にしなくてもいいことよ」

「う、うん…」

でも、だったらなんで… 母さんの表情は険しいままなの？

「アルフ、残りの服を剥いでその医療ポッドに放り込んでおいて」

「あいよっ！」

だ、だからアルフ… もっと丁寧に…。

医療ポッド… 私が培養槽だと思っていたソレに何らかの液体が満たされる。

良かった… 母さんが処置したならばもう安心だ。きつと彼は良くなるに違いない。

ふと視線を感じて振り返ると、母さんがこちらを睨んでいた。

「……………」

「えつと…っ」

な、なんだろう… 私、なにか怒らせるようなことを… って怒らせることだらけだ!?

挨拶もなのままいきなり玉座の間に飛び込んで、無理なお願いをしたり、アルフが失礼をした。

ど、どうしよう… 私、嫌われちゃうのかな…？ 少し覚悟していたけれど、やっぱり辛い。

「……なんで、何も言わないの？」

「!？」

しまった… 気付いた、気付いてしまった。私、ジュエルシードのことを報告してなかった。

それは確かに優しい母さんが怒ってしまったても無理はない。怠慢だ。失態だ。弁解不能だ。

ジュエルシードの報告を待っていた母さんにいきなり治療を押し付け、素知らぬ顔をしている。

うん… これはない。あの白い魔導師の少女に勝るとも劣らない  
蛮行と言って差し支えない。

「あ、あの…」

「私は次元跳躍魔法であなたの恩人の命を奪いかけたのよ。……なん  
でも言わないの?」

……え? そっち?

「あの、母さん…」

「何よ!」

「その、私を助けようとして魔法を使ってくれたって… 私、気付いて  
るよ?」

「……………」

これは本心だ。でないとなあのタイミングで次元跳躍魔法が発動す  
る必要がそもそもないのだ。

「それに母さんが手加減してたってことも」

「……………」

大魔導師プレシアⅡテストアロツサの本気の一撃を受けてしまった  
なら…

バリアジャケットを纏わない状況では、幾ら“あの人”と云えど即  
死は免れなかっただろう。

殺さない程度に手加減をする形で次元跳躍魔法を行使した理由な  
ど一つしか考えられない。

「ごめんなさい、母さん。私じゃあの子に勝てないって思われたんだ  
よね…」

……そう、私自身の不甲斐なさ。恐らくあのまま戦ったら私は負け  
ていた。

だから母さんは自分という最大の切り札を晒してまで、私を助ける  
ために介入してくれたのだ。

「だから… ありがとう、母さん。あなたのおかげで、私は、今ここに  
います」

感謝の気持ちを含めて、精一杯の笑顔を浮かべる。

母さんはしかめつ面のまま……でも心なしか、表情が少しだけ柔らかくなった気がする。

そして、ゆつくりと私の頭に手を伸ばしてきて……え？　これってそういうこと？

ドキドキする……。

デコピンをされた。

「い、いたい……」

「フン、口ばかり達者になったものね。気を使ったつもり？　余計なお世話よ」

「コラー！　フェイトになんて真似するんだ、この鬼ババア！」

食って掛かるアルフを軽くないしながら、母さんは口を開く。

「あなたももう休みなさい。完治したらデバイスに通達が行くようにしておいたから」

「え……？」

「身体的には明日の暮れ頃には完治しているはずよ。……あなたの恩人さん」

軽く微笑みながら母さんは研究室を後にした。あとには私とアルフだけが残される。

「まったく、アイツめ……」

「うん、母さん……笑ってくれたよね」

「え？　そこなの？」

母さん、優しい。凄いい嬉しい。私、こんなに幸せでいいのかな？

頑張らないと……もつと頑張らないと！

ふと視線の先に並べられていた“あの人”の私物に目がとまる。  
この携帯端末型のデバイス……

そうだ！

「あ、ちよつと！ フェイト！」

私はリニスの部屋に向かって駆け出した。あそこなら…

「中々上手くいかない…」

時刻はすでに深夜を回っている。……アルフを無理矢理に先に寝かしたのは何時間前だったか。

リニスの部屋に残されたデバイス用の機材を借りて修復しているのだが、状況は芳しくない。

どうしても第97管理外世界で一般人に使われる携帯端末程度にしか機能が回復しないのだ。

“あの人”のデバイスがこの程度の性能のはずがない。恐らく高度なプロテクトがあるのだろう。

「いつまで起きているの？」

そんな時、背後から声をかけられた。

恐る恐る振り返れば、予想通り、部屋の扉を背もたれにした母さんがそこに立っていた。

「ジュエルシードについての報告がまだだったと思ったけれど、もう時間も時間だからね」

「あ、あの…」

「明日にしようと結論付けたところ、ふと気付けば主不在のリニスの部屋に生体反応が」

「あ、あう…」

「様子を見に来ればこんな時間まで何かをやっている娘。フェイト、私は休めと言ったはずよ？」

「……………めんなさい」

返す言葉もなく、私は小さくなって謝罪する。

「ふう…で、何をしていたの？」

「えっと…」

私は半身をずらす形で身体をどけて、「あの人」の携帯端末型のデバイスを母さんに示す。

「…それは？」

「えっと、彼のデバイスです」

そう説明すれば母さんは眉を顰めて、私が用意したデバイスの分析データを手に取り観察する。

「ただの旧式… ああ、この世界では標準的だったかしら？ の、携帯端末にしか思えないけど」

「恐らく偽装です。私ではその機能を開放するためのプロテクトを突破できませんでした…」

自らの無力感に押し潰されそうになり、俯く。

その様子を見た母さんは、面倒そうな様子でため息をつくと下を向いている私へと口を開いた。

「そこをどきなさい」

「…え？」

「そこをどきなさいと言ったのよ。いいわ、退屈のぎに遊んであげる」

私が慌てて席を譲ると、母さんはそこに腰掛けて機材でデバイスをいじり始める。

その流れるような手際の良さは私なんかとは雲泥の差で… 母さんならきつと大丈夫だ。

そう私に確信させてくれる程のものであった。

「……………」

「……………」

それから程無く、母さんほどの人でも苦戦をしているのだという様子が私にも伝わってきた。

「いや、これ、本当にただの携帯端末なんじゃ…」

小声で何事かを呟いている。

「……母さん？」

不安げな私の様子が伝わったのだろう。だが母さんは気にも留めず挑むような表情を見せる。

「デバイスとしての機能の復元は私にも難しいわね」

「そんな…」

「ただ、デバイスとしてかつて以上の機能を持たせることは私にとつては容易よ」

え？ それは…

かつて母さんが基本設計を組んでくれて、リニスが組み上げてくれたバルデイツシュのようによ？

つまり、あの人は… バルデイツシュ “私の相棒” の兄弟のようなデバイスを持つということになるの？

「母さん、ありがとう！」

「別に… ジュエルシードの一部解析も出来たからその技術を試したかっただけ。気まぐれよ」

「それでも… ありがとう」

暖かい気持ちになって、心の命じるままにお礼を口にする。

「フン… 今夜は長くなりそうね。インテリジェント機能を付加する時間は流石にないけれど…」

「でも、母さんならきつと作れる！ 最高のアームド・デバイスを！」

「当然よ。私を誰だと思っているの？」

そんなの決まっている。

大魔導師プレシアⅡテストタロッサ。……最高の魔導師にして私の自慢の母さんだ。

「……あら、ちょうどいい物があるじゃない」

「え… あっ！」

母さんは机に並べていた彼の私物の一つに目をやると、そのまま手にとりプルタブを開けた。

そして口をつける… そう、彼の缶コーヒーだ。今更返すわけには  
いかない。……どうしよう。

「いつまで起きているつもり？ ……ここは私に任せてもう寝なさい」

「あ、あの… その、見てちゃダメですか？」

「……なんで？」

「その、少しでも母さんに近付きたいなって… じゃ、邪魔はしませんから！」

母さんの表情が不機嫌そうに歪められる。お、怒らせちゃっただろうか？

そのまま私の頭に向かって手が伸びてくる。

……叩かれる？ 先ほどのことを思い出して、ギュツと目をつむつ  
たまま身構える。

くしゃつ。

何かが頭を撫でる感覚に驚いて目を開けると、そこには母さんの不  
器用そうな笑顔。

「バカな子ね… 明日が辛くなっても知らないわよ」

そう言つて彼の私物から残る1つの缶コーヒーを持ち上げると、私  
の前に置いた。

先ほどの私の視線のせい何かを勘違いさせちゃったのかもしれない…  
ごめんなさい。

でも、それを指摘することでこの幸せな空間を壊してしまう勇気な  
んて私にはない。

「えへへ…」

母さんに倣<sup>なら</sup>つて私もプルタブを開ける。臆病な私でごめんなさい。  
幸せすぎでごめんなさい。

……。

でも、なんで次元跳躍魔法の直撃を受けたのにこの缶コーヒーは無傷だったのだろうか？

……母さんが手加減をしていたからかな？ うん、多分そうだろう。

そんなこんなで翌朝には母さんの最高傑作『バルディッシュIIアサルトバスター』が完成した。

素晴らしい出来栄えだと思う。これならきつと彼も喜んでくれるに違いない。

そして、翌日の夕暮れ頃……彼の怪我が概ね完治したとの通達がバルディッシュユへと届いた。

それまで1時間おきに目覚めては通達がないか確認していたが漸くだ。……おかげで少し眠い。

でも一刻も早く会いたい。お礼を言いたいし自己紹介もしたいし……とにかく急がないと！

私は彼の私物をかき集めると部屋を飛び出した。向かうは彼が留め置かれた研究室だ。

扉の前まで来ると、確かに人の気配が中からする。私は息を整えようと、意を決して扉を開ける。

「あっ！ 目を覚まし……」

「……あっ」

……失敗した。私は扉の外で火照った頬を冷ましている。なんて間が悪いのだろう。

「まったく、アイツめ……フェイトにとんでもないモノを見せて。噛

んでやろうか?」

「やめて、アルフ。……そもそも悪いのはいきなり扉を開けた私なんだから」

だから気にするのは彼であって私ではない。

あんな、あんな……もう！ 頭を振って、脳裏に焼き付いたさっきの光景をかき消す。

そんな時、母さんから念話が入る。

『フェイト、頼みがあるのだけど……どうかした?』

『い、いえ！ なんでもないです！ ……頼みってなんですか?』

『……まあ、いいわ。話が一段落したらで構わないけど、彼を応接室に通してくれる?』

『えっ? 何かあったんですか?』

『あなたが知る必要はないわ。……それじゃ頼んだわよ』

念話が途切れて、暫し取り残される。

昨日、彼のデータを取った時に見せた母さんの表情……どうにも良くない予感がする。

だからといって私に何が出来るというわけでもないのだけど。

モヤモヤとした悩みを抱えていると、程無く彼から入室の許可が得られた。

とにかく誠意を持って謝罪しよう。そうすると、何故か彼の方からも謝罪されてしまう。

それはおかしい。悪いのは私の方なのだ。

互いに謝り続ける私たちを、アルフが一人、呆れたような目で見ている。

他人ごとのような顔をしているけれど、いきなり吠えつけたアルフも十分失礼だからね?

「それで、どうして……?」

恨みがましい表情でアルフを見つめていると、彼は困ったような仕草で話題を変えてくる。

……しまった、気を使わせてしまったか。

「あ、はい。そろそろ目が覚める頃かなと、お預かりしていた荷物を

…」

「なるほど、そうだったのか。わざわざすまなかった… 確認させてもらってもっ…」

「はい、勿論です。どうぞ」

彼は私が差し出した私物類を、一つ一つ丁寧に確認していく。

……このタイミングなら自己紹介できるだろうか？ よし、女は度胸。やってみろ、フエイト！

「あの…」

「他に荷物はなかっただろうか？」

「ごめんなさい。私の力不足のせいで、あなたの大事な缶コーヒーは…」

「違う、それじゃない」

上擦うわすった小声で発した私の言葉は気付かれぬまま、彼にかき消される。

けれど仕方ない。彼が大事に思っているだろう缶コーヒーの安否のほうは何倍も重要だろう。

申し訳ない気持ちで心持ち小さくなりながら、事実を告げる… しかし、斬り捨てられた。

「え、違うんですか？」

思わずといった感じに呟いてしまった私の言葉に対して小さく頷く。

「そうじゃなくてだな… その、機械的なモノで持ち運びできる端末的な、ね？」

「あ、はい。デバイスのことですね？ 気付くのが遅れてごめんなさい」

「いや、気にしないでくれ。ハッキリ言わなかったこっちは悪いんだ」  
勘違いをしていた私に対して苦笑いで許してくれる。心が広い。きつと器が大きいのだろう。

確かにデバイスも大事だ。ある意味では彼にとっての缶コーヒーに匹敵するほどに。

私は預けられていた母さんの『最高傑作』をポケットから取り出す

と、彼の前にそつと置いた。

「……オレの知っているスマ・ホークと違う」

流石だ。ひと目見ただけでこのデバイスが今までのそれと違うことに気付くとは。

スマ・ホーク： おそらくは彼のデバイスの名前だろう。

彼とデバイスの間に一体どのような関係があつたのか… もう想像することしかできない。

きつと彼のことだ。いつも大事に扱って確かな絆を結んでいたのだろう。

だが、彼らの絆は断ち切られてしまった… 他でもない私たちのせいで。

もし私自身がバルディッシュとそのような別れを経験してしまつたら、耐えられるかどうか。

けれど、恨まれることになつても話さなければならぬ。……逃げ回るわけにはいかない。

私は顔を上げて、説明する。

「残念ながらあなたのデバイスは例の一件の影響で機能を失つてしまいました」

彼のスマ・ホークが一度死んでしまったことを。

バルディッシュIIアサルトバスターとして生まれ変わったことを。

そして、その新たな機能を…。

彼は「バルディッシュIIアサルトバスター」の機能に興味をもつたよう説明を求めてくれた。

途中に幾つかの雑談を挟んだが、最終的には満足してくれたよう母さんを褒めてくれた。

言ってくれたのだ：「いい親御さんを持ったね」と。母さんの良さを分かってくれて嬉しい。

彼はデバイスを眺めたまま何かを考えこんでいる。……自己紹介をするなら今しかないだろう。

「あ、あの… その…！」

「うん？」

「あのっ！ 私の名前は…」

慌てて舌を噛みそうになる私の様子に笑みを浮かべながら、合点がいったという風に口を開く。

「ああ、『フェイちゃん』だったな？ オレは桜庭悠人さくらばゆうと… を名乗っている。覚えてるか？」

……え？

「……ハイ オボエテマス」

なんとか絞り出した私の声は、無機質で、機械の発する電子音声のようなものになっていた。

彼から詳しく事情を聞き出してみれば、予想通り、情報源はあの白い魔導師の少女だった。

オマケに友達だの何だのとあることないことをこの人に吹き込んでいたらしい。……なるほど。

どうやら彼女とは一度ハッキリと決着をつける必要があるみたいだ。

真正面から戦う必要はないだろうと放置し続けた結果がこれだ。もう逃げるのはやめにしよう。

彼女は障害だ。それも、避けて通ることは出来ない… 私自身が乗り越えなければならぬ。

「改めて自己紹介しますね？ 私はフェイトIIテストアロッサ。どうぞフェイトと呼んでください」

その怒りの勢いに乗ってというべきか、無事に自己紹介を済ませることが出来たのは幸いだ。

彼も理解してくれたようで、以後、キチンと名前で呼んでくれるよ

うになった。嬉しいな。

オマケに普通の喋り方で構わないとまで言ってくれた。お互いの距離が少し近付いた気がした。

だけど、楽しい時間というものには終わりがつきものだ。母さんからの頼み事があったのだ。

「あの… 悠人。母さんが少し話をしたいって… でもまだ本調子じゃないなら、その」

「む、そうか。…いや、気遣いは無用だ。こちらも是非お礼を言いたい。案内を頼めるか？」

「う、うん」

彼は気分を害した様子もなく笑って頷くと、誘いに応じる旨を示しつつ私に案内を頼んできた。

応接室に向かう道中、色んなお話をした。母さんのことや、もういないけれどリニスのこと。

彼… 悠人はとつても聞き上手で、私は余り喋ることが得意じゃないと思っていたのに…

気付いたら私ばかりが喋ることになっていた。それでも、彼は嫌がる素振りも見せずに頷いて。

「…あつ」

応接室の扉が見えてきた時、思わず残念そうな声が漏れでてしまった。

狼の姿をとっているアルフにはそれに気付かれニヤニヤと器用に笑みを浮かべられてしまった。

…もう、アルフったら。

母さんに悠人を引きあわせて言われたとおりに部屋で休もうとした時、念話が入ってきた。

目の前のアルフから。…なんだろう？ 目の前にいるのだから普通に喋ればいいのに。

『ねえ、フェイト… ちょっと盗み聞きしない？』

「ぬすっ…!?!」

『しっ！ 声大きい… よし、気付かれなかったようだね』

思わず声を上げてしまった私を叱るアルフ… って、そうじゃなくて。

『ダメだよ、アルフ。それは母さんにも悠人にも失礼なこと。ね？ 部屋で待ってよう』

『そりやそうだけど… フェイトは気にならないのかい？ …… “二人の秘密” がさ』

それは、気になるけど… でも、それとこれとは話が違う。揺れる私の瞳を見逃すアルフではない。

『やっぱり気になるんだ？』

『……母さんも悠人も、キッチンとお願いすれば後から教えてくれるもん』

『そうだろうね。きっとそうだろうとも。でも、だったら今聞いても変わらないじゃないか』

『で、でも…』

『いざとなったら私のせいにしていいからさ。頼むよ、フェイト。ね？ このとおり！』

アルフの言葉を断ち切れない程には好奇心を抱いてしまった私は、結局押し切られてしまった。

……ごめんなさい。母さん、悠人。

……聞かなければ良かったかもしれない。

悠人はリンカーコアと魂が破損状態で癒着していて、とても魔法を扱える状況ではないこと。

無理に使おうとすれば良くて廃人、最悪命を落としかねないということが明らかになった。

自分の身体の中に除去不能な爆弾があることを聞かされた彼の心中たるや、察するに余りある。

リンカーコアと魂はそもそも別の器官だ（魂を「器官」と言っても良いかは迷うところだが）。

仮に何らかの事故でリンカーコアが喪われることになったとして即死亡するわけではない。

だが一方で密接な関係性も示唆されている。例えば魂が弱まればリンカーコアの出力も衰える。

リンカーコアと魂は別々の器官だが、決して無関係ではない。それはもはや常識と言える。

彼の心身を脅かすほどの異常が発生しているのだ。それを彼が理解できないはずがない。

なのに、何故笑えるのだろうか？ 彼はそれを「生きていてだけで充分だ」と笑い飛ばしたのだ。

……やっぱり悠人は凄いな。

自分がそんな状況にもかかわらず私たち家族を救おうとしてくれて、そして見守ってくれて。

本当に強くて優しいのは、きっと悠人のような人間なのだろう。

でも、その在り方は……眩しいけれど、なんだか悲しく感じてしまう。

そんな私の葛藤などお構いなしに二人の話は次へと進んでいく。

それは大きな事故の話だった。母さんはかつて何らかの事故に巻き込まれてしまったらしい。

無茶な工程で作業をさせていたにもかかわらず、事故の関係者は揃って母さん一人を糾弾。

全ての責任は母さんに押し付けられた。傷ついて苦しんだ母さんに……汚い。絶対に許せない。

そんな事故があったなんて知らなかった。本当なら私が母さんを

支えないといけなかったのに。

……え？

ちよつと待って： 口振りから察するに母さんは、そのことにずっと苦しめられていたはず。

うん、私の思い出の中の母さんと最近の母さんは少し様子が違っていた。それは、確かだ。

けれど、私は知らない。……なんで？ なんで私は、その事故のことを何も覚えていない”の？

私という存在は、一体…

そんなことを考えこんでいると、部屋の中で母さんの魔力が膨れ上がる気配を感じた。

いてもたってもいられなくなって部屋に飛び込むと、そこには咳をしながら蹲る母さんの姿が。

駆け寄ろうとしていた悠人の動きを制して、母さんを支えて背中を擦る。

……良かった、幾分かはマシになったようだ。

何かを喋ろうとする母さんを抑えつつ、私は悠人に部屋に戻っておくようにお願いする。

渋っていたが重ねてお願いすると不承不承といった様子で頷き、アルフと共に退室してくれた。

私はそれを見届けると母さんを支えたまま、母さんの寝室へと向かった。

ベッドに横になってもらい水を差し出す。母さんは一口それを飲むと、多少楽になったようだ。

「良かった… 母さん」

「……………」

まだ本調子ではないのだろう。無言のまま険しい表情をしている。

「あの、何かして欲しいことあるかな？ 料理もそんなに得意じゃな

いけど、頑張るから…」

母さんに元気になって欲しくてこんな提案を試してみる。

私自身分かってる。こんなのは欺瞞だ。

けれど、母さんと悠人には出来れば仲良くして欲しいから。そう、ちよつと時間を置けば…

「アレを… 桜庭悠人を、始末するわ」

そんな私に突き付けられたのは残酷な現実で。

「……え？」

「聞こえなかったの？ アレを殺す。……そう言ったのよ」

「でも、あの… 悠人は恩人で、その…」

母さんなら分かってくれる。そう思いたいのに、その瞳は冷たいままで。

「これは『相談』じゃないわ。……『決定』よ」

「………」

そう言われてしまったのは押し黙るしかななくて。

「明朝8時に執り行おう。それに不満なら親でも子でもない。……何処へなりと行きなさい」

「……はい」

母さんの冷たい表情に、思わず頷いてしまった。

そのまま呆然とした足取りで部屋を後にする。

……。

何処をどうやって歩いていたのだろうか？

気付けば悠人のためにあてがわれた部屋の前まで来ていた。

こんな時にまで彼に縋る気か。だとしたら度し難い。

そんな自分の甘さがこんな事態を招いてしまったのだと心の底で理解していた。

本来ならば、戦うことの出来ない彼を守るべき存在が私だろうに。纏まらない頭のまま、ノックを2回。アルフの許しを得て、中に入る。

彼は… 悠人は寝ていた。

「……………」

「どうしたの、フェイト。なんだか顔色が悪いけど…」

「なんでもない。……悠人とはどんな話を？」

「簡単な自己紹介を交わしたことで、母さんからの計画の誘いを断った理由について聞いたそうさだ。」

母さんも彼の力については認めていたのだろう。

でなければ、私たちにも詳細を話していない計画の参加を呼びかけるはずがない。

だが、彼は説明を求めることもなく即座に断ったのだという。

「…………それは、なんで？」

『「人として許されることではない。オレは、ただの人でいたい」…  
だったかな？」

「悠人は、そんなことを…」

そっか。…………どこまで私は思い上がっていたんだろう。

悠人に戦う力がないから、戦えないから、だから私が守らないといけないんだ。

…………なんて無様な思い違いだろう。滑稽でしかない。

彼は最初から最後まで立派に戦っていたのに。

大魔導師プレシアⅡテストアロツサを前にしても一步も譲らず…  
自らの信念を賭して。

「機嫌を損ねれば命はないのに、彼は、その心を折ることはついで一度もなかった。」

「…………アルフ、お願いがあるの」

私は顔を上げる。

「ん？ なんだい、フェイトのお願いならなんだって聞くよ」

「ありがとう。それじゃ悠人を起こさないように抱えて、ついてきてくれる？」

「それはいいけど…」

覚悟は決めた、なんて強い言葉は使えない。

けれどハッキリ分かったことがある。ここで彼を… 悠人を死な

せるわけにはいかない。

そして目的地へと到着する。

「つて、ここ〃外〃へと続く転送ゲートエリアじゃないか!？」

「しっ！ 母さんに気付かれちゃう」

先ほどとは立場が逆転してしまった。こんな状況なのに口元に笑みが浮かんでしまう。

怪訝そうな表情のアルフに経緯を説明する。

母さんが悠人を殺すことを決定したこと。その決行は明朝8時で、母さんは今眠っていること。

「あんの鬼ババア！ ついに血迷ったか… 悠人はアタシたちの恩人だつてのに！」

「お互い譲れないモノがあつたんだと思う。だったら、私たちが何を言っても無駄だと思う」

さっきの悠人の発言で、彼も生半可な覚悟で拒否したわけではないことが伝わってくる。

詳しい事情も知らない第三者が何を口にしたところで、翻意させることは不可能だと思う。

「それでもせめて説明してもらえないと納得出来ないよ！ フェイトは気にならないのかい？」

「……………」

憤りを身体全体で表現できるアルフの素直さが眩しくて、つい、笑みを浮かべてしまう。

「お願いはここからだよ、アルフ。彼を… 悠人を連れてここを脱出して欲しい」

「なっ!？」

「可能なら管理局と接触を。恐らく悠人は管理局と親密だから、悪いようにはされないはず…」

「ちよつと待つてよ！」

でなければ、管理局に協力しているだろうあの白い魔導師の少女を

助けたりはしないはずだ。

そこまで話したところでアルフに待ったをかけられる。

「アルフには面倒をかけるけど… なに？」

「フェイトは… アンタはどうするのさ!？」

「私はここに残るよ」

私は最後まで母さんの傍にいる。決めたことだ。

「それはダメだ！ フェイトも行こうよ！ 行くなら三人一緒じゃないとアタシは嫌だよ！」

「……………」

噛み付かんばかりに詰め寄ってきたアルフに対して、静かに首を振る。

「ねえ、アルフはさつき計画について気にならないのかって言ったよね？」

「そ、そうだよ！ 今からコイツ叩き起こして詳しく聞けば、なにか案だって出てくるかも…」

「変わらないよ。聞いても、聞かなくても」

「なっ…」

絶句するアルフ。

ごめんね、アルフ。確かに全く気にならないといえば嘘になるよ。

聞きたい気持ちはあるもの。出来れば母さんから話してもらえるのが一番嬉しいんだけど。

でも、例えどんな話を聞かされたとしても私の気持ちは決まってる。

「私はフェイトⅡテストアロツサ。プレシアⅡテストアロツサの娘。…だから最後まで一緒だよ」

だから、いいんだ。

「フェイト… どうしても、なのかい？」

泣きそうな顔をするアルフ。そんな顔はしないで欲しい。

私はアルフの笑顔が好き。だからそんな泣きそうな顔は似合わないと思う。

……………まあ、私のせいだけだ。

「うん、私は大丈夫。だから……」

……

目の前には今にも泣き出しそうなアルフ。

私はやれやれといった表情でため息をつくとき、爪先立ちになってそのサラサラの赤毛を撫でる。

そして一歩離れてから振り返る。

「ねえ、アルフ……一つ、約束をしよう？」

「……約束？」

「そう、約束。ジュエルシードの件が片付いたら、みんなでまた会おうの」

「フェイト、それは……」

「母さん、アルフ、私に…… 勿論悠人も入れた4人で。みんなで笑顔で取り留めない話をするの」

「……」

『あの時は大変だったね』『無茶したね』って笑い話にして、みんな仲良く。……どう？』

アルフの顔が歪んでくしゃくしゃになる。

でも、私もそのアルフの顔が滲んで見える。……ダメ、ダメだよ。泣いちゃダメ。

こんな幸せな約束には笑顔しか似合わないんだから。

やがて……

「ああ、そいつはとつても素敵な約束だね。……アタシも、その時は腹一杯食べるよー！」

アルフも笑顔を浮かべてくれた。

暫し二人で笑い合う。ありがとう…… そしてごめんね、アルフ。

そして、アルフが転送ゲートに進む一歩手前で振り返る。

「フェイト…… 強くなったね」

「……そうかな?」

「そうだよ」

笑顔で頷いてくれる。

「約束……絶対だよ? 忘れないでよね、フエイト」

「当然。アルフこそ、忘れたら許してあげないからね?」

最後に互いに笑みを交わす。それだけで、あっさりとアルフと悠人は消えてしまった。

私の前から。

アルフは私が強くなつたって言ってくれたよね?

でも、私は強くなんかないよ。強いふりをしているだけ。けど……

「けど…… 約束、絶対を守るから……。今、今だけは…… うう、つく。うわああああああん!」

その晩、私から涙が止まることはなかった。

翌朝、母さんの寝室に入り母さんが起きるのを待つ。

程無く母さんは目を覚ましたようだ。

「……フエイト?」

「おはよう、母さん」

眉を顰めて不機嫌そうな表情を作る。……勝手に入ったのは失礼だったかも知れない。

「そう。……アレはどうしてるの?」

「探してみましたがいませんでした。アルフも。……ひよつとしたら人質にされたのかも」

「……そう」

アレとは悠人のことだろう。だから用意していた答えを口にする。

「あの…… 恐らくは外に出たんじゃないかと。……その、追跡しますか?」

「……別にいいわ。尻尾を巻いて逃げ出す程度なら、どの道、大した障

害にもならないもの」

母さんが見逃すと言ってくれたことで思わず安堵の溜息を付く。

「残念だったわね?」

「……え?」

「使い魔のこと。アルフといったかしら? ……仲は良かったのでしよう」

「え、あ、はい。残念です。……とても」

ドキリとする。

「フン… フェイト、あなたには管理局からジュエルシードを奪うための駒になってもらうわ」

「……は、はい」

「使い魔を探すことも、ましてアレを探すことも認められないわ」

「……」

「わかったかしら? わかったら下がちなさい。……後でまた呼ぶわ」

「は、はい!」

背筋を正して、部屋を後にする。

「……本当に、バカな子」

何故か母さんの漏らした小さな呟きが聞こえた気がした。

## 少年と『月島さん』

目が覚めたら猫に囲まれていた。大量の猫に。……これは一体どういうことなのだろうか？

悩めど答えは出ない。出ないならば仕方がない。ならば取り敢えず起きるべきだろうか。

「よっ……と」

上等過ぎるベッドから降りると、猫も気を利かせて散っていつてくれる。空気の読める猫だ。

周囲を見渡す。広い間取りに高そうな調度品が飾られている……

全く以て見覚えがないな！

プレシアさんの屋敷とも違うようだし、ここは一体どこなのだろうか？ 途方に暮れる。

最近眠って目が覚めるとこんなものばっかだ。いつそ睡眠を断つべきかと本気で悩んでしまう。

思わず絨毯に手をつきつつ嘆いていると、仔猫が寄ってきてオレの肩に手を乗せてくれる。

「なあーお？」

「慰めてくれるのか… オマエ」

「なあーお！」

「そうか、ありがとう。ところでここは何処なんだ？」

「なあーん？」

うん、聞いても分からないよね。言葉が通じてないよね。そりゃそうだよ、猫だしね。

はてさてどうしたものか。……勝手にうろついてなんか壊したら、弁償させられそうだしな。

「（ん？ 待てよ……）」

その時、オレに電流が走る。

猫とは確かに『言葉』は通じないかもしれない。だが、『想い』は伝わるのではなからうか？

誠意は言葉ではなく金額。もとい、気持ちだ。ならばそれを伝える

にはどうすればいいか。

「それは、そう… オレ自身が猫となることだ！」

「いや、その理屈はおかしい… よね？」

「……………」

綺麗なツツコミを入れられ、思わず声の方向を見る。そこには一人の少女が立っていた。

年は10歳前後だろうか？ 綺麗な濡羽色の髪に清楚かつ上品な

物腰。お嬢様だ、間違いない。

どつかで見たような気もするが、思い出せないということは多分大したことはないのだろう。

「えっと、この家の方ですか？」

「あ、うん」

「すみません。ちよつと猫の気持ちを知ろうとしただけなんです」

「…………えっと、言っている意味が」

「ここが何処か、オレは分からない」

「えっと… うん」

「けれどコイツ… この猫ならば知っているかもしれない」

「うん、まあ… 知ってると思うよ」

「だからオレは猫に尋ねるしかないんだ！」

そう言つて、オレは目の前の猫に向けて語り掛けた。そう一匹の猫として。

「ぶるにやーお…」

「なあーお？」

「ぐるるるるるるなあーおん！ なあーおん！」

「なあーん！ なあーん！」

「あ、あのね… 桜庭くん？」

「ふにや… え？ 今いいトコなんだから邪魔は」

「私に聞けば… いいんじゃないかな？」

……………。

そこに気付くとは、やはり天才か。膝の埃を払い立ち上がると、彼女と固い握手を交わす。

若干アホの子を見るような彼女の瞳に傷付いたが… まあ、きつと些細な問題であろう。

よし、ここは汚名返上だ。彼女の名前をピタリと言い当てて友好的な接触に切り替えるのだ。

オレは笑顔を浮かべて、彼女に声をかけることにする。えーと、確か名前は… 月… 月…

「月島さん！」

「誰!？」

違つたらしい… どうしよう。こんなんじやオレ、思わず呟いてしまふよ。

「オレはついていけるだろうか… 君のいない世界のスピードに」

「知らないよ!？」

「まったく冷たいなあ、ルリルリは」

「いきなり馴れ馴れしいよ! ていうかルリルリって誰!？」

「月島と言えば瑠璃子さん。断じて異論は認めない」

これは世間の常識のはず。

腕を組み直しながらうんうん頷くと、疲れ果てたようにお嬢様が口を開いた。

「…私には月村すずかだよ。今度は忘れないでね?」

「承知、オレは記憶力には自信がある。任せてほしい」

「悲しいほどに欠片も説得力を感じないね…」

「大変そうだな。月村さん」

「うん、誰のせいだと思う?」

しばし悩んでから「…世界、とか?」とつぶやくと彼女は深い溜息を吐いて歩き出した。

何故だか知らないけれど呆れられてしまった気がする。ちよつぴり傷付いた。

手招きされたのでついていく。ご飯でもくれるのだろうか。お金を請求されたらどうしよう。

高そうな調度品が一杯並んだ廊下を歩いて行く。美人なメイドさんが一杯いるし。

凄いなメイドさん。生まれて初めて実物を見た… 気がする。うちにもメイドさんがいてくれれば、あの悲しい火災は起きなかったのではないだろうか。

うーん… でも日本的には家政婦さんだろうか。

まあ、うちは無理にしても八神のところには必要なんじゃないかな？ そう思う。

なんかオレの顔を見ると買い物カゴ持たせようとしてくるし。

きつと、足が動かない車椅子生活というのは想像以上に不自由なのだろう。

八神の世話係に、病院の送り迎え… 家事のあれやこれやをやる人、やっぱり必要だよな。

交代人員も考えれば…

「二人… いや、三人といったところか」

「……………」

「つと、すまない。独り言だ」

驚いたような表情で振り返る月村さんに、謝罪する。

そうだよな、こんな銀髪オツドアイ野郎がいきなりブツブツ独り言つぶやいたら怖いよね。

ましてや招かれている状況なのだ。失礼があつてはいけない。

オレは重ねて謝罪することにした。

「本当に申し訳なかった。こちらのメイドさんを見ていたら、つい… な」

「ううん… いいんだけど、あまりにあつさりだったから驚いちやつて」

「……………なに、そういうこともあるさ。悠人少年には稀によくあることらしいぞ」

流石に八神の名前を出しても伝わらないだろうから、適当に流すに留めておこう。

すると月村さんに驚いた理由について説明される。

ふむふむ、なるほど… あまりにあつさり謝ったから驚いたのか。これは手厳しい。

確かに学校じゃあまり喋らない根暗野郎だもんね。お昼とかいつもぼっち飯だし。

恐らく悠人少年もそうだったのだろう。

だから彼女もそのギャップに戸惑ってしまったというわけだ。これはしたり。

その辺のミスから悠人少年の正体がバレてしまったては、いずれの予定に差し支える。

オレは曖昧に微笑み「そういうことってあるよね？ いや、あるとも（強弁）」と押し通す。

月村さんはちよつと考えた素振りをしてから、一つ頷くと再び歩き出した。

よし、セーフ！

やがて、立派な両開きの扉が備え付けられた部屋の前で立ち止まる。月村さんがノックする。

「どうぞ、開いてるわよ」

中から涼やかな声が響いてくる。声は間違いなく美人さんだ。

何も考えてないが何か考えているような表情でポケットしていると、月村さんが振り返る。

「お姉ちゃん、大丈夫だって」

「ふむ… ここで待ってればいいのか？」

「いや、ついてきてよ。桜庭くんと話すために待ってるんだから」

「……そうなのか」

「そうなの。じゃあ、入るよ？」

こちらの返事を待たず彼女は扉を開ける。

「なっ!？」

部屋に入って真っ先に目が入ったのは、内装でも声が美人な人の姿でもない。

たくさんの猫に囲まれて、もたれかかっている赤い犬… アルフの姿だった。

考えるが早いか、オレは駆け出す。

アルフの周囲で寛いでいた猫たちが散っていく。だが、それでい

い。

『え？ ちよ、ちよつと…』

何故かアルフの声で夢電波が再生されるが、寝てる場合じゃないのだ！ 黙れ！

オレはアルフを自らの身体でガツシリ抑えこむと、月村さんに向かって叫ぶ！

「猫たちを連れてここを逃げるんだ！ 一刻も早く！」

「ど、どういふことなの!?!」

「コイツは赤いんだ！」

「うん、赤いね！」

「フサフサなんだ！」

「うん、フサフサだね！」

「そして、喋るんだ！」

「うん、しゃべ… え？」

「そして名前はアルフという！」

「あの、ちよつと待って？ 喋るって…」

「つまり、メルマツク星人だったんだよ！」

オレが警告しても「な、なんだってー！」と返ってくることはない。それはいい。

しかし、あまりの驚きに呆然と固まっているようだ。

くっ、やはり小学生低学年の女の子に咄嗟の対応をしろというのが無茶だったか…。

歯噛みしながらも、暴れようとするアルフを抑えながらオレは再度警告する。

「だから早く猫たちを連れて逃げるんだっ！ 鈴村さん！」

「はっ… だから、メルマツク星人ってなに！ あと私は月村すずかだよー！」

「ちっ、まさか知らなかったとは…」

「流さないですよ… それに、そんなに危険な子には思えないけど…」

「普段は気のいい、ジョークだって言える小粋なやつなんだ」

「そ、そうなの？ だったら…」

「だけど、猫が好きなんだ！」

「全然問題ないじゃない！」

「食的な意味で！」

「みんな、早く逃げましょう！」

オレの懸念がやつと伝わったらしく、月村さんは両手に溢れんばかりの猫を抱え逃げ出した。

分かってくれたか… 良かった良かった。

恐らくアルフはハリウッド映画のために連れてこられたアクター犬だろう。

だが、万が一… ないと思うが、ハリウッド映画だというのがオレの勘違いだった場合は？

その場合は、『宇宙人』というのが近くなってくるだろう。

高度な科学力に、よく分からない用語を勝手に説明しだす人々… 確かに宇宙人っぽい。

まあそんな人たちがそこらの小学生を巻き込むわけがないので、9%妄想だろうが。

だがしかし、メルマツク星人が実在しないとは限らない。アルフの特徴はあまりに符合する。

むしろ、声が所○ヨージさんだったら100%確定である。

無論言われるまでもなく、アメリカンコメディの大衆ドラマ・アルフは創作だと知っている。

だがクトウルフ神話みたいに「真実を創作として世に伝えた」ならばどうなる？

可愛らしい猫ちゃんたちが頭からボリボリ食われかねないのだ。それは辛すぎるだろう。

1%でも懸念があるならば最善の手を打つべきだろう。鈴村さんが分かってくれてよかった。

「ふう… 行ってくれたか。なんとか猫を守り切れたな」

「ア、アタイは…」

「ん？」

「アタイは猫なんか食べなあーいっ！」

「ぎゃあああああああああああああああつ!?!」

鈍い衝撃を身体に受けて、オレの意識はブラックアウトしようとする。

相変わらず脆いのが悠人少年ボディ。壊れ物につき取り扱い注意である。

薄れ行く意識の中で、三人の男女の叫ぶ声が聞こえてきた。

「……マモレナカッタ」

最後にオレは、小さな声でそうつぶやいた。……特に意味はない。

## 少年と厨二病

「なんかもう、色々すみませんでした。……ホレ、おまえも」

「なんでアタイまで……すーいーまーせーんーでーしーたー」

目が覚めたオレは正座のまま頭を下げていた。

俗にいう土下座スタイルである。

隣には、オレを気絶するまで激しく暴行した自称アルフな美女ことメルマツク星人。

不本意そうな表情ではあるが、手について頭を下げることに抵抗はない様子だ。

きつと心が広いのだろう。和を重んじるスタイル。リンデイさんに通じるものがある。

決して、四つん這いのほうが楽なスタイルであるとかではないだろう。決してだ。

「ふわあ……」

あ、後足であざとい獣耳の後ろ搔いてる。……見なかったことにしよう、うん。

そんなオレたちを見詰めているのは一組の男女。

一人は今すぐにも辞表を提出したい道場でよく合わせる顔、キョーちゃん氏である。

もう一人は十代後半頃の美少女。月、月……月島さんによく似ている。血縁者か？

そんなこちらの様子に、困ったような微笑を浮かべつつキョーちゃん氏が口を開く。

「いや、驚きこそしたが謝られるようなことは何もないさ。気にしないでくれ」

「いえいえ、その凶暴なメルマツク星人を止めてくれたみたいですし」

「だから、アタイは宇宙人なんかじゃ……ん？ 宇宙人なのかな？」

「やっぱりメルマツク星人なんじゃないか！ この屋敷に猫目的で乗り込んだんだな！」

「ちーがーうーつての！ 大体、アタイは無理矢理連れて来られたよ  
うなモンだよ！」

やはり可愛い猫ちゃんを書いて食材と読むそれらを調達しにこの  
屋敷を襲ったのか！

そして現場にオレを残しておけば完全犯罪成立だよ、畜生！

猫を貪り喰らうばかりか、その犯人としてオレを仕立てあげる…

なんて恐ろしい！

その事態を止めてくれたキョーちゃん氏には頭が上がらない。で  
も道場は辞めたいです。

再び睨み合いを始めたオレと自称アルフの耳に、涼やかな耳に心地  
よい声が届いた。

「まさか、人狼とも交わりがあつたなんて…」

ポツリと漏れてしまったという感じのその声の主は、月島さん似の  
美少女。

思わず見詰めれば、彼女の方もその視線に気付き咳払いとともに居  
住まいを正した。

「あ、ごめんなさい。その人狼さんの言うとおり、連れてきたのは私た  
ちです」

「ほれ見ろ、ほれ見ろ。やーいやーい、悠人の早とちりー！」

「ぐぬぬ…」

「ま、まあまあ… 悪いのは私たちなんだから、その、あまり喧嘩しな  
いでね？」

「……はい」

「どうぞ、お掛けになつて？ ケーキも紅茶も用意させるわ」

「どうもすみません…」

月島さん似の美少女にやんわりと窘められ、渋々引き下がる。

調子に乗ってアツカンベーまでしてくる自称アルフが非常にウザ  
いがここは我慢だ。

深呼吸を一つして、口を開く。

「しかし、どうしてオレを？」

「それは… その、あなたが行き倒れていたからだけど覚えてないの

？」

「行き倒れていた？」

「ええ」

「……………」

えつ、なにそれ怖い。

思わず自称アルフを見詰めると、ツイツと視線を逸らされてしまった。

おい、何だその態度。ちよつとこつち向こうか？　おい。

……チツ、答える気がなければ仕方ない。

さつきぶん殴られてビビツたわけじゃないぞ。うん、ビビツてないですよ？

ひとまず目の前の女性が助けてくれたことになるわけだ。

何が何だか分からない以上、詳細は説明できないがせめてお礼くらい言わなくては。

多分プレシアさん怒らせちゃったから屋敷の外に放り出されたんだろうが。

「申し訳ない。事情は説明出来ないのですが、改めてお礼を言わせてください」

「いえ、構わないわ。……なにか困ったことに巻き込まれているよね」

「……………フツ」

美少女の的を射た指摘に、オレは曖昧に微笑むことしか出来ない。

うん、悠人少年のボディに取り憑いちやつてて現在進行形でね！

言えないけどね！

言ったら頭おかしくなつたと思われて黄色い救急車を呼ばれちゃうだろうからね！

「ごめんなさい。……少し、不躰ぶしつけだったみたいね」

「お気になさらず。お世話になつてている身でそこまで気を遣われてはかえつて恐縮です」

「……………」

いや、詳細を説明できないのは飽くまでこちらの事情だしなあ…。

むしろ謝られてしまおうとかえってむず痒いし。  
十中八九、その自称アルフのせいだろうし。  
この人たち善意で助けてくれただけっぽいし。

追い出すにしても、もうちよつとやり方つてのがあると思うよ？  
うん。

「本当に、変わっているのね… 恭也の言うとおり」

「だから言っただろう？」

「……………」

変わっている？ はて、なんのことだろうか？ あ、見た目のことかな？

確かに銀髪オッドアイとか変わり過ぎてる。オレなら関わり合いになりたくないな。

一人納得して頷くオレ。というより、キョーちゃん氏はキョーヤさんと言うのか。

今後の道場生活を充実したものに替えるため、覚えておこう。すぐ辞めるけど。

しかし眼鏡の美少女といい、モテる人はモテるんだな。いや、あれは殺し愛なのか？

考えこんで無言になってしまったオレを気遣うように、美少女さんは言葉を紡ぐ。

「……………実は、折り入って相談したいことがあるの。この家のことで」  
「……………」

オレの聞き間違いだろうか？ 今、突拍子もないことを言われた気がするが。

いや、うん。そりやまあ、相談されたら自分に出来る範囲で真摯に話を聞きますよ？

でもね？ そういうこといきなり言われてもちよつと困ってしま  
うんですよね。

悠人少年はただの見た目痛々しいブラック缶珈琲中毒の厨二病患者。  
者。

そしてオレはそんな彼に取り憑いてしまった状況に振り回される

ただの小市民。

対して見ただけで分かる豪邸と、そこのお嬢様っぽい美少女。

それがいきなり深刻そうな表情をして相談とか言われても、多分お役に立てないだろう。

なんか重そうな話だし、一晩泊めて貰って申し訳ないが期待させてしまうのもアレだ。

ひとまず、ここはしつかりとお断りしよう！

神龍シエンロンも己の力を超えた願いは叶えられないのだ。オレ、神龍シエンロンじゃ  
ないけど。

「なるほど、お話はわかりました。ですが…」

「フツ… 悠人に目を付けるとは中々分かってるじゃないか、アンタ」  
「おい」

そこに不敵な笑みを浮かべた自称アルフさんが割り込んできて、寝  
言をほざいたのだ。

差し出されたロールケーキの2つ目を手掴みで食べつつ。

……うん。オレのだよね、それ。ほっぺにクリームついててあざと  
いけどオレのだよね？

「何より、アタイを人狼だと言つてのけるその目は大したもんさ」

「あら？ 否定はしないのね」

「当たらずとも遠からずってトコさ。訂正するほど間違っちゃいない  
からね」

「そこまでにしておけよ、赤モツプ」

「誰が赤モツプだ」

前が見えねえ…。

拳を顔面にめり込まされつつ、オレは思わず突っ込んでしまった自  
身の迂闊さを呪った。

今度は気絶しなかったのが不幸中の幸いだろうか？

……いや、めちやくちや痛いから幸いじゃないよね。辛いだよね。

そんなオレたちのやり取りが滑稽だったのだろう。美少女はクス  
リと微笑んだ。

そして続けて口を開いた。

「……あなたは、すずかと仲良くしてくれているのかしら？」

「え？ えーと……」

「フフツ、意地悪な質問だったかしら？ ごめんなさい」

「いえ……」

思わず「誰でしたっけ、それ？」と言いつつ、そうになったが言い淀んで正解だった。

確か…… えーと、そう！ 月島さんの下の名前だったはず！

冷静に記憶を探って無事思い出したオレは、自らの成果に満足気に頷く。

こう、なんとというか長いこと喉に詰まっていた魚の骨が取れたかのような爽快感だ。

実に結構！ 満足気に頷いていると、そこで自称アルフさんが口を開いた。

「察するに…… その『スズカ』って妹に関する話かい？」

「……」

「そんなに警戒しなくてもいいって。アタイにとっちゃ所詮他所の家の話さ」

「……それも、そうね」

「それにさ」

何故かこちらを見てニヤリと笑う自称アルフ。猛烈に嫌な予感がある。

他所の家の重そうな話など、関わったところで百害あって一利無しだろう。

なんとしても止めなくては…… そう思いつつ、会話に割り込もうとする。

「おい、アルフさんや。余計なことは……」

「なんてったって、家族間の悩み事なら悠人の得意分野！ スペシャルリストさ！」

「おい」

あまりに突拍子のない言葉に、思わずツツコミを入れてしまう。

ほれ見ろ、美少女さんも目を丸くしているじゃないか。

一体いつそんな面倒くさそうなものを、得意分野にしたというのだろうか。

悠人少年か？ オレの知らない悠人少年のもう一つの素顔なのか？

……と、混乱している場合じゃない。早く誤解を解かないと。

「みなさん、その赤モツプに騙されては……」

「ああ、そうだな。彼女の言うとおりだ…… なんだったら俺も太鼓判を押すぞ？」

「ちよ、ま…… おい」

自称アルフさんの根拠レスな発言に対し、自信満々に語るキョーヤ氏。

太鼓判とはそんな簡単に押しているものではありませんよ？

曖昧な発言に惑わされては真実を見極める目が腐ってしまいます。ご再考を。

思わず抗議の視線を送ると、キョーヤ氏はそれに気付いて力強く頷いてくれた。

……ふう、分かってくれたか。

そう思ったのも束の間。

「コイツはな…… 美由希の料理を残さず食べた」

「!？」

うん、何も知らなかったせいで食う羽目になっただけだからね？

知ってたら絶対にご馳走にならなかったからね？

眼鏡さん泣きそうだったから死ぬ気で完食したけど、もう二度とごめんですからね？

あの件に関してだけはオレ、純然たる被害者ですからね？

「それだけでも凄いのに…… その後、怒りもせず正しい道を諭してくれたんだ」

「まあ……」

「いやいや、怒るとかそんなことできませんから」

機嫌を損ねてしまったら即座に捻り潰されてしまうほどの実力差があるのだ。

あの時は一刻も早く家に戻りたかったし、文句を言ってる暇などありはしない。

事実、病院で『なんで生きてるの、おまえ？（意識）』的なこと言われたし。

巨大なお世話である。泣きたい。

「おかげで美由希はアレからレシピ通りに調理をしているよ」

「あ、それはグッドニュースですね。凄く嬉しいです、被験者の考えるて」

「なるほどね… 人狼さんと恭也、二人の話はよく分かったわ」

和やかなニュースに、オレが思わず気を緩めてしまった刹那の間隙を過たず。

「私も、あなたのことを信じます。…どうか、話を聞いてくれませんか？」

丁寧な言葉づかいで頭を下げる美少女さんの姿があった。

そして期待の眼差しでオレをじっと見詰める自称アルフさんとキョーヤ氏。

そんな彼女らを前にオレにできる返事は…

「……はい。自分で良ければ」

これしかなかった。

……

……

…

門を出て振り返ると、お世話になった気持ちを屋敷に向けたお辞儀で示す。

隣には自称アルフさんが立っている。なんでコイツ、ニヤニヤしてるんだろ？

思わず尋ねる。

「どうしたんだ？」

「いや、やっぱり悠人はすごいなーってね。へへっ！ けっこう大変な

話だったじゃん？」

「……まあ、大変だったな」

ある意味で、だが。そう……主に忍さんの話のジャンルの意味で。

あ、名前呼びの許可いただいています。月島さんと区別つかないですね。

お辞儀の姿勢を解くと、オレは重苦しい溜息とともに言葉を紡いだ。

「まさか彼女が、重度の厨二病患者だったとは……」

「チューニビョウって？」

「んー……『自分は夜の一族だよ』とか『メイドさんロボット娘だよ』ってあたりかな」

「なるほど。つまり、特殊な事情とかワケあり物件ってヤツだね？」

「……うん。まあ、そんなかんじでいいや」

自称アルフさんの言葉を適当に流しつつ、先ほどの会話を振り返る。

……忍さんの話は、まさに衝撃的な内容であった。

自分は『夜の一族』という、吸血鬼的なサムシングの血を引いていると宣ったのだ。

無論、あのツツコミ属性持ちの妹さんも同様にだ。

“吸血鬼狩人なDさん”とか“私を殺した責任とって貰うんだからね”、の世界観である。

多分思春期にラノベとかゲームにどっぷりハマり込んでしまったのだろう。

なんでまたそれをオレに……ああ、悠人少年だからか。なんか納得してしまった。

多分、同じ病に罹った者として何らかのシンパシーを感じちゃったんだろう。

厨二病同士は惹かれ合う……みたいな何かがあるんだろう。きっと、多分、メイビー。

フェイトも初対面の時は大分アレだったしね。うん。

まあ、悠人少年が戻ってきたらすごく話が合いそうな御仁である。「なんにしても少しばかり疲れたなあ…」

妹さんの悩みの原因は判明した。ほぼ100%姉の厨二病が原因と断言できる。

オレの目は節穴ではない。……確かに基本的に可愛いは正義だろう。

オレ個人としての意見ならば、そこらの美少女が厨二病でも萌え要素だと思う。

むしろ、そこにはあざとさすら覚えるであろう。

だが、それが身内……それもこんなでかい屋敷で次期当主だとしたらどうだろうか。

更には、あの打てば響くようなツツコミ属性持ちの妹さんである。きっと生真面目な彼女は悩んでしまったのだろう。

「へえ……アタイにはよく分からないけど、そんな疲れるような話だったんだ?」

「そろそろうよ。厨二病との会話は設定を破綻させないように気を付けて会話しないとだし」

「ふーん……の割りには、スラスラ会話してたようだけど?」

「まあ、オレもかつては発症した痛みだからな。波長を合わせるくらいは出来るさ」

「流石だねえ」

「といってもそれはそれで疲れるんだが……あ、そういうえばよくもケーキを」

「あ、あはは……悪かったよ。そ……それより、あの子たちは今後は大丈夫なのかい?」

引きつった笑いを浮かべながら露骨に話題を逸らしてくる。

……まあ返せ戻せと言ったところで出来るものでもないだろうし、諦めるしかないか。

再び溜息を吐きつつ話に乗ってみる。

「ま、大丈夫だろ……多分だけどな」

「へえ?」

「そもそも論からして、全く悩みのない家族の方が異常なんじゃないか?。」

「なんでや?。」

「そういったもんを乗り越えてお互い成長する。って思ってた方が失敗に怯えないだろ」

「そういうもんなのかねえ」

「そういうもんなんだよ。オレにとってはやな」

話した内容もごくごく簡単なもの。

家族のことを忘れないようにってことと、特別な存在なんてないってこと。

それらを厨二病風にふわっと曖昧に語っただけである。

後者については、まあ、いるにはいるんだろうがいないと思っただ方が健全だと思う。

飽くまでオレの考えなんで、そこは強調しておいた。

無理に他人に合わせる必要はないってね。

恐らく適当かつ曖昧なオレの話なんて参考にすらならないと理解したのでらう。

忍さんとキョーヤ氏は微笑んで頷いてくれた。大人の対応である。

そんなこんなで、今はお屋敷の正門前。大きく伸びをしてからオレは口を開いた。

「ひとまず家に戻って用意したら学校に行くか」

「あいよー」

「え? ついてくんの?。」

そう言つて、歩き出したオレの後についてくる赤毛の女性: 自称アルフさん。

思わず怪訝な表情を浮かべて尋ねてしまったが、逆に自慢気な表情を浮かべられた。

「そりやそうだよ。フェイトに頼まれたもん」

「ふーん。流石に学校の中までは入れないと思うけど…」

「なら表で待つとくさ」

「放課後まで時間かかるぞ」

「んじや時間まで適当に散歩してるよ」

……まあ、いいか。

首を傾げつつもオレは準備を整え、自称アルフさんとともに学校に向かうのであった。

………

………

…

HRにはなんとか間に合った。

何故か扉の前で待機していた、ゴリ君と眼鏡君の二人の挨拶に手を上げて応える。

汗を拭いつつ教室の扉を開けると、深刻そうな表情で話し合ってる者達がいた。

なんだろうと思いつつ近付いてみれば、そこには見知った二人…

即ち名無しの少年とツインテールっぽい髪型の少女だったので気軽に挨拶をした。

オレのイメージする悠人少年っぽくクールかつキラっとした感じ  
で。

「フツ、おはよう」

二人はそんなオレの姿を見るなりに固まってしまった。

あれ？ ……外してしまったのだろうか？

「なんでどうやって助けるか考えてたのにいるんだよ!？」

「へなつぶ!？」

「ちよっ、刀真くん!？」

……何故かいきなり殴られてしまった。解せぬ。

ひよっとして、いては悪かったのだろうか？

纏まらぬ思考に囚われつつも、オレは意識を手放した。

果たして我が残機は大丈夫なのだろうか？ そんな懸念を抱きつつ。

## 夜の一族当主の追想

「ふう…」

額からこぼれ落ちようとする汗を拭いつつ、私は大きく息を吐いた。

焦げ臭い匂いが漂い、ところどころ崩壊している屋敷の惨状。

しかし犠牲者も重傷者もないまま、なんとかこの難局を切り抜けることに成功した。

無力化されて目の前に倒れているのは、恐るべき性能を持った自動人形。

もし屋敷にいる戦える人間が私と恭也だけであつたならば無事では済まなかつた。

その我々の恩人とも言える赤いポニーテールを揺らす彼女が笑顔を浮かべる。

「中々強かつたねえ、コイツ。一対一だつたら危なかつたかもしれない」

「ああ、そうだつたらうな。助力に感謝する、アルフさん」

「あははっ！ 良いつてことさ。こつちもやれ寝床だ食事だつて世話になつたしね」

言葉少なに頭を下げる、無骨ばつた恭也の礼。

それに気持ちよく応える彼女。

彼女： アルフさんのそんな姿を見て自分の心にも爽やかな風が吹くのを感じる。

きっと男性はこういう気っ風の良い女性のことを快く思うのではないだろうか？

そんなにももないことを考えつつ、私は彼女に御礼の言葉を述べようと口を開いた。

「ううん、そんなことないわ。むしろお世話になつたのはこつちの方よ」

「でも、戦うためとは言え屋敷のあつちこつち壊しちゃつたんだ。おあいこだよ」

「でも…」

まだ事件が起こったばかりで、明確なことはこれから調査しないと判明はしない。

しかし今回の襲撃は、親族である月村安次郎によるものだとも直感していた。

彼は過去の財産配分の一件から、私たち本家の人間に良い感情を抱いていない。

月村家の有する特殊な血筋や技術についても権力を増やす道具と考えている節がある。

まだ、ことを起こしてないのだからと大目に見ていた。

牽制を繰り返すことで自制をしてくれればと考えていた。

今回の事件は、それらの采配が裏目に出た形となった。

手ぬるい対応から自分たちはもとより、すずかたちの身まで危うくするところだった。

これを慢心・驕りと言わずしてなんといいのか。

もし何か起こっていたら悔やんでも悔やみきれない。

そして彼女… アルフさんがいなければそうなっていたことは想像に難くない。

それだけの手練であったのだ。このイレインと名乗った自動人形の襲撃者は。

やりきれない私の表情を見かねてか、アルフさんが頬を掻きながら再度口を開く。

「あー… だったらさ。アタイは良いから悠人に感謝しておいてよ」

「え？」

「アイツが許可してくれたからこうして駆け付けることができたんだ。だから、ね？」

「なるほど… 何もかもお見通しだった。そういうことですか」

「ま、そうなるね。自動人形、だっけ？ の数もかなり早い段階で把握してたし」

無機質な表情で淡々と確認をするノエルの言葉に、悪びれもせず応じるアルフさん。

どうやらこの必死の防戦も、彼にとっては予定調和の一幕に過ぎなかつたらしい。

こうまで見事に手のひらの上で転がされると、もはや怒りの感情すらも湧いてこない。

「それじゃ、アタイはこれで。あんまり遅くなってもアレだしね」

「でもアルフさんにもお礼をしてないわ」

「いいっていいって！ たまにや『正義の味方』も悪くない。それが充分な報酬さ」

なおも引き留めようとする私たちの言葉を振り切つて、アルフさんは笑顔を見せる。

それはお礼を無理強いをするのが申し訳なくなつてしまうほどの満面の笑みであつた。

思わず見惚れてしまったその隙に、彼女は風よりも素早くその場を後にしていた。

きつと彼女自身が認めた主人の元へと戻つたのだろう。

「さて… 恭也、ノエル。少し手伝つてくれるかしら？」

「無論だとも。といつても、技術的なことは門外漢だけだな」

「全ては忍お嬢様の御心のままに」

アルフさんの主人である桜庭悠人： 彼との会談を思い返しつつ私は行動に移つた。

さしあたってはイレイン： 安次郎の欲望のままに操られた彼女を修復してあげたい。

さて、これから少しばかり忙しくなりそうだな。

……

……

…

私こと月村忍はノエルからの不可解な報告を受けて考え込んでいた。

一時の『彼』と今の『彼』の、その違いについて。

一時の彼は、それはもう酷いものであつた。

少しでも見目が良い女性を見ると我が物にしようとし、気に入らな

いことがあれば暴れる。

それも生半な大人では対抗すら危ういとなれば、危険極まりない存在であった。

それなのに大きな惨事に至らなかつたのは、運が味方してくれていたことも大きいのだろう。

……だが、本当にそうだろうか？

恭也や私は勿論、すずかと仲良くしてくれている御剣くんも尽力してくれた。

力を持つ者が陰日向に悪しき者に対処する、ということに否やはない。

……巻き込んだ形になってしまった御剣くんには、若干の負い目は感じていたけれど。

しかし、そんな緊張感を孕んだ小競り合いが続いた『あの日』のことだ。

彼と御剣くんは決闘を行い……御剣くんが『力』に目醒め勝利した。こんなことを考えるのは、私が大人になってすれてしまったせいなのだろうか？

——それがどうにも、『出来過ぎていて気に入らない』。

その日以来、彼の悪逆非道はコレまでのことが嘘だったかのようにパツタリ鳴りを潜めた。

まるで、もう必要がなくなったと言わんばかりに。

それに対する反応は様々だった。

なお疑念を抱く者、恨みを抱く者、そして崇拜する者。

私とてバカ正直に無害になったのだと信じられるほどお花畑な頭をしていない。

だからこそ私なりに注意深く観察し、彼の在り方を見極めようとしていた。

その結果、思いも寄らない事実が判明したのだ。

惑星外知的生命体がコンタクトを取りに来て、それ絡みの異変が町に発生している。

最初に報告を受けた時にはどんな陳腐なSFかと一笑に付したも

のだ。

しかし、恭也の妹のなのはちゃんや御剣くんまで渦中にあると知り  
真実と認めるに至った。

彼女たちは手探りながらも、ギリギリの線の中でなんとか奮闘して  
いるようであった。

それを聞いて私は安堵の溜め息を漏らしたものだ。

あの日、決闘という形で御剣くんの目醒めがなければどれだけの苦  
戦を強いられていたかと。

……そこまで考え、私は背筋に氷柱を突き立てられたような錯覚を  
得た。

認めたくない。認めてはいけない。

しかし、もしや……心に湧いた小さな疑念を消すために更なる追跡  
調査を命じる。

そんな疑惑が確信に『変わってしまった』のは、つい先日のこと。  
努力に努力を重ねていた彼女たちでも乗り越えられぬほどの特大  
級の災厄。

恐らくは人為的に引き起こされたであろう落雷を、彼は一人で引き  
受けたのだ。

そう、彼はこうなる事態を見越して私たちを挑発し鍛えようとして  
いたのだろう。

依存されることを避けるため、憎むべき敵という立場をとって御剣  
くんを覚醒へと導いた。

それでも乗り越えられない脅威が迫った時に、躊躇いなく己の身を  
差し出すために。

それはなんとという孤独な戦い。

何故一言素直に事実を話し協力を求めてくれなかったのか。

月村が介入することで生じるであろう事態の混迷化を避けるため  
……

そんなお題目で未だ介入を避けている己の恥を棚に上げ、私は内心  
で彼を詰った。

彼に協力をする機会はもはや永遠に喪われてしまったのだから。

そんな諦観の念に囚われていた私に驚くべきニュースが届いたのは昨日のこと。

なんとすずかが行き倒れている彼を保護したというのだ。

直ちに緊急入院の手配をしようとしたが、他でもないすずかによってそれは止められた。

何故と問うてみれば、至極当たり前の返答が投げ返された。

「いや、お姉ちゃん。すごく疲れてるみたいだけど… 『目立った怪我はない』よ?」

そう聞いた時の私は、内心の動揺を表に出さないことで精一杯だった。

そして、最後に残っていた僅かな疑問の種も氷解に至った。

…:あぁ、そうか。

常識的に考えればあのスケールの攻撃を受けて人間が生き延びられるはずがない。

よしんば生き延びられたとしても、あの短期間で『目立った怪我はない』など有り得ない。

ならば何故か?

答えは一つ。…:彼もまた、人外なのであろう。夜の一族か、あるいはまた別の。

彼が頑なに真相を私たちに明かそうとしなかったのも領けるといふものだ。

ヒトは、人外を嫌う。姿形が似ていればこそ、そこに生じる僅かな差異を殊更嫌うのだ。

きつと彼自身もそういった思いを幾度となく味わってきたのではないだろうか?

ならば容易に真実など告げられようはずもない。

これまで行ってきた唾棄すべき振る舞いの数々こそが、彼に出来る精一杯だったのだろう。

ならば同じ闇に生きる者としてそれを暴かないのは最低限の礼儀というもの。

匂わす程度ならまだしも、基本は何も知らないふうに装って振る舞

うことにしよう。

しかし何も知らないというのも後々がある場合は差し障る： により万が一のこともある。

甘えるように申し訳ないけれど、恭也にも参加をお願いしてみようかしら。

そうして始まった話し合いの中で、『彼』は落ち着いた理性的な様子を示した。

だからこそ、少しだけ興味が湧いて話してしまった。夜の一族のことを。

勿論、冗談めかす形でオブラートに包んでだけでも。……恭也のジト目が怖かったです。

とはいえ、ほんのちよつとだけ鉄面皮の彼の表情が驚きに彩られたのはしてやったりだ。

多分、『いきなり何言ってるんだコイツ…』の表情ではなかったと信じたい。……信じたい。

その会話では彼自身が夜の一族やそれに連なる者であるかという証言は引き出せなかった。

しかし、幾つもの興味深い証言を彼の口から聞くことが出来た。ティナ・ハーヴェルという女性のこと。

彼女はヴァンパイア・ハーフでありオレンジシフォンケーキが好物の女の子だったこと。

アルクエイド・ブリュンスタッドという女性のこと。彼女は今や絶滅したとされる真祖の姫君であり、ふとした縁から友誼を結んだこと。

様々な話を、柔らかな嬉しそうな表情で話す彼の姿は『かつて』とはかけ離れていた。

ああ、なるほど。やはり、すずかやなのはちゃんアリサちゃんに語っていた愛はまやかし。

きっと彼自身の目的を達成するために必要な『言葉の羅列』でしかなかったのだろう。

彼の真意はこの短い会話の中で充分以上に図ることが出来た。

必要なことだったとはいえ、あの傍若無人な振る舞いが綺麗に許せるかという点と難しいが。

それでも、世界は汚いばかりではないと考え直すことが出来てほんの少し安心した。

だからだろうか？

私は： 私たち夜の一族は、『これからどうすべきなのか』をふと訊いてみたくなった。

彼の答えは簡潔の極みであった。

「別にどうも？ あるがままに生き、己の為せる最善に邁進すればいいや」

『別にどうも』って： でも、私たちには特別な力が…」

「変わらないさ。君たちが人であれかしと望むのならば、もとより森羅万象に区別はない」

「あつ…」

「陽の光を克服し、人と交わり生きる道を君たちの祖先は君たちに託したのだろうか？」

「……ええ」

『遺された物』について考え『次に何を遺すか』を考える。それが君の為すべきことでは？」

その言葉に思わず笑ってしまった。恭也と抱き合いながら涙までこぼして。

だって、それでは私がまるでただの人間みたいではないか。

ああ、なんて私は恵まれていることなのだろう。

恭也には恋する女であることを教えられ、彼からはただの人間であることを教えられた。

そしてお父さんお母さんやお爺ちゃんお婆ちゃん、その以前から受け継いできたものがある。

今も、私の中に。私が生きるといふことがその証なのだから。

…

…

…

「なんだか楽しそうだな、忍」

作業の手は休ませず追想に耽っていた私の耳朶を、恭也の声が優しく叩く。

「ええ、本当に。なにからなにまで思い通りに転がされて、でも、それが悔しくないの」

「お互いに大きな借りができてしまったみたいだな。やれやれ… 全く難儀なものだ」

言葉と裏腹に恭也の目付きも声のトーンも、普段より幾分優しいものとなっている。

さて、今の『彼』になれば私の… ううん、『月村』の力を貸すことも二つ返事なのだが。

『ええ、ありがとうございます。それではまた“次”の機会にでも…』さり気なく水を向けた時に社交辞令じみた返事で濁されてしまったことを思い出す。

その意味するところは、恐らく『今回は』手出し無用といったところか。

しっかりと釘を差されてしまったのならば仕方ない。

そこはそれ、次の機会を待ちながら彼と彼らの活躍を見守ることにしましょうか。

「ね？ 恭也」

「…まあ、俺なりにアイツらを鍛えてサポートくらいはしてやるさ」  
「まったく、ホントに素直じゃないんだから」

耳を赤くしながらそっぽを向いたどこか素直じゃない恋人。

愛しい人のそんな姿にため息を吐きながら、私は隠しきれない笑みを浮かべるのであった。

## 少年とチーム結成

——気が付けば。

微かに薬品の香りが漂うその場所で、窓から降り注ぐ茜色の光に包まれていた。

ズキズキ痛む頭を抑えつつ視線を左右に巡らせ、オレは『ベッド脇』へと声を掛ける。

「Hey, Siri! 今何時?」

『現在時刻日本時間で16時42分です、Sir』  
ベッド脇に置かれていたスマホ君から渋い音声が発せられる。

……Siriってもっと柔らかい女性音声じゃなかったっけ?

まあ、いいか。

「最近は何度何度目覚めるたびに知らない天井見るとか怖いなあ。  
……怖くない?」  
ため息交じりにそう呟いてしまうのも無理からぬことだと理解していただきたい。

昨日はフェイトの家。今日は月島さんの家。  
知らない天井コンプでも狙ってるのかな? と言いたくならうものだ。

……いや、フェイトの家ではなんか変な風呂の中だったけれど。

「ここは、多分保健室だよな? 一体どうしてこんなところに……」  
教室まではたどり着いたはず。

……そのはずだったのだが、その後がよく思い出せない。  
目が醒めたらこの部屋のベッドの中だったことから、何らかの不調に見舞われたのだろう。

うーん、誰かに殴られたような気もするが。

まるで何か幻覚を見ていたかのように判然としない。

よもや天狗の仕業だろうか? おのれ天狗め、ぜってえに許さねえ

!

……などとキレるのもバカバカしい。

「まあ、いいか」

もはや口癖となりつつある言葉をつぶやき、肩の力を抜く。

深く考えたところで悠人少年が戻ってくるわけでもなし、いつもどおり適当に流そう。

見たところ保健の先生も席を外している様子だ。

適当にお世話になったことに対する感謝の旨を記したメモだけでも残して帰るとするか。

そうしてメモを残し、荷物を取ってガラツと扉を開けると…

「ん。遅かったじゃないか」

いつからそこにいたのやら、保健室前の壁に背を預けていたアルフがそう声を掛けてきた。

「どうしてここに？」

「アンタの関係者だって言ったら通してくれたよ」

海鳴小の警備ガバガバだな。こんな不審なメルマツク星人をノー審査で通すとは。

やめたら？ この仕事。

「そうか。待たせて悪かった」

でもそれを指摘したらまた殴られそうなので触れないでおく。

悠人少年ボディは貧弱なので大切にしなければならぬ。オレも最近それを学んできた。

なのにどうして危険な映画のスタント役やら剣術道場フルマラソンやらしてるんですかねえ？

やめたい。この仕事。

「アンタ、その身体のことどうするつもりだい？ だいぶヤバそうだけれど、さ」

やけにシリアスな声音でアルフが尋ねてくる。

「そうだよ。貧弱過ぎてだいぶヤバイよ、マジで。」

「どうとでも。ま、なるようになるだろうさ」

「……まるで他人事のように言うね」

「実際、他人事だからな」

捨て鉢のような返答になってしまったことは否定できない。

なんせこのボディのスペックは他でもないオレ自身が誰よりも先に匙を投じているレベルだ。

むしろ下手に鍛えようとかせず、なるべく傷付けないように悠人少年にお引渡ししたい。

「もつと自分を大事にしなよ！ アタシらが言えたようなことじゃないかも知れないけど！」

「……………」

「聞いているのかい!? 黙ってちや…」

「わかっているツ!!」

思わず大声で怒鳴ってしまった。

耳に痛過ぎるごもつともな指摘をコレ以上聞いていられなかったのだ。

すまん。マジですまん、アルフ。全面的にオマエが正しいよ？

けれど正論が常に人を救うと思ったら大間違いだぞ？（逆ギレ）

とはいえ殴られたら怖いので己を曲げて素直に謝ろうと思います。

「……………すまない。大声を出してしまつて」

「……………」

「分かっているさ、分かっているつもりなんだ。なのに…」

なのになんでオレは！

映画のモブ役（スタントシーンマシマシ）やったりとか！

なんか目に見えない動きで飛び回る異常者けんじゅつどうじょうたちの巣窟すくに通ったり

してるんだよ！

距離取れよ！ 全力で！

握り締めた拳が震えてくるわ、マジで！

足を止めて世の理不尽に打ち震えるオレを見て何かを感じ取ったのか。

アルフは小さくため息をついて苦笑いを浮かべた。

「つたく、不器用な生き方しかできないのはお互い様か」

「……………フエイトのことか？」

「わかるかい？」

わからないでか。

お母さんは上の無茶振りのせいで事故車のリコール騒動を起こし心を病んでしまった。

そして痴女になってしまった（断定）。

娘のフェイトに与えた影響は決して小さくないだろう。

だから彼女も大型犬にリードも付けず法治国家に全力で喧嘩を売る生き方となった。

親が親なので将来痴女になってしまう恐れもある（推定）。

親子揃ってロックな生き方をしている。決して器用な生き方だなんて言えないだろう。

だからといって、大人しく世界に迎合すべきだなんてオレの口からは言えない。

だって、少なくとも今日という日まで世界はあの親子の存在を救えなかったのだ。

だからこそ、あの親子は己を守るために強くあろうとしたのだろう。……どんな形であれ。

そして、実現された。

けれど、それは……

「……ああ、悲しい強さだ」

オレは様々な言葉を飲み込んで、その一言だけを絞り出した。

「わかってくれるなら、いいさ。きつと、それだけで救われる」

アルフも多くを語らずに、ただ、穏やかな笑顔を浮かべた。

きつとコイツもあの親子に挟まれて色々と苦労しているんだろうな。

「大丈夫だ、管理局に相談しよう。リンデイさんたちなら悪いようにしない」

だからメンタルケアはプロのリンデイさんとクロノさんに丸投げしよう。

オレはこのまま何事もなく脇役としてフェードアウトしてみせる

ぜ！

「！……でも、管理局にとってアタシたちは」

首を振って後ずさるアルフ。

なんだオマエ、イヤイヤ期か？

「勇気を出せ、アルフ。悲しさを諦めるためじゃなくて、乗り越えるために」

冷静に考えて欲しい。

ただでさえ剣術道場のハードトレーニングで死にかけているのだ。

あとスーパーのタイムセールとかでもよく死にかけている。

しょっちゅう八神にいじめられてメンタルブレイクもしている。

それらに加えてこのよく分からない映画のモブ役として抜擢されたのだ。

そこから更にプレシアさん、フェイト、アルフといった事故物件を抱えてみる。

悠人少年じゃなくても死ぬよね？ 悠人少年だったら確定で死ぬよね？

このままじゃ悠人少年の貧弱ボディとメンタルがぶっ壊れる（確信）。

ならば誰よりもあの親子に近い人がサポートをすることでオレの負担を軽減すべきだろう。

そう、具体的に言うとならフさんですね。

しかし今の彼女は育児疲れからくるノイローゼのような症状が見受けられる。

だからプロによるアルフさんへの徹底的なメンタルケアが重要になるわけですね。

はい、よく出来ました。

そんなことを考えながらオレは渾身のキメ顔を作ってアルフに語りかける。

「アルフ、オレは友達だからな。手を差し伸べることはできる」

「……友達、だって？ アタシが？ アンタと？」

おずおずと、まるで迷子になった子供のような表情で言葉を紡ぐア



て欲しい。

増えてない？　なんでそこでフェイトやプレシアさんが出てくるの？

オレ一言もそんなこと言ってないよね？　アルフの目を見てしっかり語りかけたよね？

あとなんでオレに預けるの？　違うよね？　リンデイさんたちに預けろって言ったよね？

この間、僅か数秒。

……その数秒の間隙こそがオレにとって生死を分かつ瞬間であったのだ。

オレは慌てて訂正をしようと試みる。

「いや、あの、ちよっ……」

「話は聞かせてもらったぜ、桜庭ア！」

遮ろうとした言葉が形になることはなかった。

何故なら別の言葉によって遮られたからだ。

……お引き取りいただいてよろしいか？（威圧）

なんか廊下の曲がり角からいつもの少年が飛び出してきてそんなことをのたまってくれた。

誰だオマエ、いきなり出てきて好き勝手言ってんじゃねーゾ。

ていうかオマエに今朝いきなり殴られたような気がするんですけど？（曖昧な記憶）

「オマエってヤツはいつもそうだ。目を離すと一人で抱えて突っ走ろうとするよな」

何照れたような顔して鼻の頭を擦ってるんですか？ 突っ走ってるのはオマエだが？

……いや、無理に反発するとなし崩しに口論に発展してしまうかも知れない。

アルフの勘違いを速やかに正すためにも、まずは一旦この勢いをストップさせなくては！

まだなんかほざいてる少年を尻目にオレは彼を喝破せんと大きく息を吸い込み、口を開いた。

「おいアンター！ ふざけたこと言ってるんじゃ……」

「話は聞かせてもらったよ！ 桜庭くん！」

……ブルータス、オマエもか（諦め）。

「なんか良く分からないけれどフェイチちゃんを助けるんだよね！ 私も協力するよ！」

ツインテールの少女までやってきた。目をキラキラ輝かせている。

眩しすぎてオレの目は失明してしまいそうだ。

なんかよく分からないなら黙っててくれよお！（願望）

オレもなんでこうなったのか分からないからさあ！（悲鳴）

そもそもオレはフェイトを助けるとか一言も言っていない。それは確かだ。

なんで普通に親御さんのところで暮らしてる娘を助けるとかそういう話になるんだよ。

確かにプレシアさんちよつと病んでて露出症を発症してるっぽくて可哀想だけれど。

そういうのは精神科医等のプロの仕事で緩和する領域であつて断じてオレの管轄ではない。

断じて、オレの、管轄では、ない。

「アンタたち…」

おいアルフ、感動するな。そこは盗み聞きを咎めるべき場面だ。

プライバシーを暴こうとする他人に心を許してはいけない。

「みなまで言わないで、悠人。キミの献身の心はとても尊いものだと思う」

我が心の癒やしであるユーノくんまで出てきた。

もしやガバガバなのは海鳴小のセキュリティではなくオレのプライバシーなのではないか？

誰かセコム呼んで欲しい。あと献身の心つてなんぞ？ 流浪人かな？

「けれど、一人で背負うなんて間違っている。僕たちはチームなんだから」

チームだったのか。

一人で背負った覚えはないけれど、チームだったのか。

……知らなかった、そんなこと。

「……そうだなー！」

ユーノくんはともかく、残り3人を下手に刺激して暴力とか振るわれると怖い。

そう感じたオレはひとまず元気に肯くことにしたのであった。

問題の先送りと言わば言え。

こういう時は話の流れに乗っておけば取り敢えず大きな問題が起きない限りなんとかなる。

みんなオレに構うことを忘れて各々の職分というものを思い出すことだろう。

そうして折を見てアルフをリンデイさんなりクロノさんなりエイミイさんなりに押し付ける。

完璧な計画だな。

そう、大きな問題が起きない限り。

「私、フェイトIIテストロッサは……」

なのに……

「ジュエルシードの所有権を賭けて、あなた方時空管理局に決闘を要求します！」

あの？　大きな問題が起こっているんですが？　フェイトさんや？

オレは現実逃避をしながらもプルタブを空けて缶コーヒーの中の液体を臓腑に流し込んだ。

……いつもどおり、ソレはとても苦い味がした。……泣きたい。

## 大魔導師と『娘（にんぎょう）』

私の願いを叶えるためには、手段も、力も、時間も… 何もかもが足りなさ過ぎた。

だからだろうか。

あるかどうかさえ定かならぬ幻の楽園『アルハザード』に縋ってしまっただけだ。

あの日、喪ってしまった我が子の幻影を求めて禁忌の技術に手を染めたりもした。

けれど満たされることはなかった。

何かに突き動かされているかのように、焦燥感の赴くまま走り続けた。

自分でも答えが分からないままに、「違う」と否定して『本物』を追い求め続けた。

ソレは一体何だったのだろうか？ ……いや、考える時間すらも惜しい。

私に残された時間というものはあまりにも心許ないものなのだから。

だから目の前の人形フェイトに私の持てる技術を叩き込むためには、可能な限り効率的であるべきだ。

この子には私なんかよりもずっと多くの時間が残されているのだから。

「…あの、母さん？」

ここは時の庭園内の訓練スペース。

私と向かい合う形で立っていたフェイトがおずおずと声を掛けてきた。

報告後に移動を命じた時は懲罰を受けるのかと身を固くしていたようだけれど、バカな娘。

今更そのような非効率的なことをするものですか。

「白い魔導師の子… アレの適性を、あなたは分類できているかしら

？ フェイト」

無言の問いかけを無視して、私は言葉を紡いだ。

これから訓練を始めるに当たりフェイトに『認識』させねばならないことがあるからだ。

「えつと… 砲撃型の魔導師、ですよね？ 母さん」

やはり、その程度の認識か。…とはいえ、無理もないわね。

管理局でも気付いている者はそう多くないだろう。

いや、あるいはあの嫌味なほどに分析力に優れた銀髪の少年ならばあるいは…——

「……………」

嫌な顔を思い浮かべそうになった。

首を左右に振ってソレを思考から追い出した私を見て、フェイトは顔を青褪めさせる。

「ぐ、ごめんなさ…ッ！」

「謝る必要はないわ。時間の無駄だから。…代わりに、考えなさい」  
「……………考える？」

「そう。考えて、考えて、考え抜く。その上での行動ならば、きっと無意味ではないわ」

「……………分かりました」

目の前の娘は神妙な表情でそう言つて、一つ肯いてみせた。

「だからあなたには、今この場で幾つかの心得を授けます」

「！ それって…」

「考えて、考えて、考え抜いた先の一縷の勝機を形にして手繰り寄せるための力をね」

「は、はいッ！ まさか、母さんと訓練できる日が来るなんて…」

「フン、私の施す教練など付け焼き刃。モノにできるかどうかはあなた次第よ」

何を勘違いしたか知らないけれど、薄っすらと涙を浮かべる小娘に釘を差すのは忘れない。

「そのことを努々忘れぬように心に噛み締めて、精々必死に食らいついできなさい！」

「はいっ！ 母さん！ 私、精一杯がんばります！」

精々高圧的に見えるよう精一杯脅してみたつもりだが、フェイトは満面の笑顔になるばかり。

どうにも調子が狂うので話題を戻すことにした。

「……話を戻すわ。あの白い魔導師は砲撃型ではないか、とあなたは言ったわね？」

「は、はい。確かに言いました」

「アレはそんなに生易しい存在ではないわ。……アレの真の適正は『集束型魔導師』よ」

「……しゅうそく、型？」

「ええ、そうよ」

フェイトにとっては聞き慣れない単語だったようで首を傾げる。

無理もないか。適正者はそこまで多くはないのだから。

「……ソレは魔力の収束効率が優れたタイプの砲撃型魔導師、ということですか？」

「いいえ。収束ではなく集束……文字通り『周囲の魔力を集め束ねる』タイプを指すわ」

答えそのものは外れたとはいえ、言われたとおりに自分で考えようとしている。

良い傾向である。私としても出来の良い生徒は嫌いではない。

「えへへ」

「……」

「……あつ、もつと撫でてほしかったなあ」

思わずフェイトの頭を撫でていた手を引つ込めて、軽く咳払いを一つ。

「まあ、分からなくても無理もないわね。そうと認識して見る機会は少ないでしょうし」

というより一般の目では区別が付きにくい、という方がより正確なのだろう。

あまりピンとこない様子の方フェイトに幾つか例を交えて解説してみせる。

より効率的に砲撃を繰り返す、より広範囲に治癒フィールドを張り続ける。

そんな砲撃型や治癒型の魔導師が実は集束型だった、という例などしばしば散見される。

彼ら彼女らは何故他の同系統の魔導師よりも優れた力を発揮できたのか？

疑問に思った当局が調べてみた結果、彼ら彼女らの魔力運用にある種の独自性が見られた。

それが管理局による集束型魔導師発見のきっかけだ。

その存在そのものは古くから認知されていたのでメカニズムの解明という方が近いだろうが。

……これ以上は余談か。研究者色に染まりかけた思考を一旦リセットする。

結論から言うとおの白い魔導師は集束型魔導師で間違いないであろう。

「何故それが分かるのか？ ……私も集束型の魔導師だからよ」

でなければ時の庭園の機能を使ったとはいえ、簡単に時空跳躍魔法など使えるものですか。

「えっ、そんなのずるい。ずるいです！ あの子と母さんが同じだなんて…」

この子は何を言っているのだろうか？ ……いや、余計なことを口走った私も悪いか。

とはいえ、フェイトの感想は第三者視点で言えばそう的はずれなものでもない。

舞台が高位の魔導師が飛び交うような大規模戦場であればあるほど。

周辺の魔力を集め束ね己の物に変換する存在は、周囲からは反則的だと認識されるだろう。

「フェイト。あなたの魔力量や戦闘技術は、そうね… 『優秀』と言って差し支えないわ」

「う、うん。その… ありがとうございます…」

「けれど、凡人の領域を出るに及ばない。それが私の率直な見立てよ」  
照れた表情を浮かべてはにかむフェイトに、しかし私は、残酷な現実を突きつけた。

「……え？」

「対して集束に特化した魔導師というのは『天才』どころか『異才』とすら言える存在」

「だ、だったら！ 私も、集束魔法を使えば…」

「諦めなさい。少なくとも、今は」

「……ッ！」

継るような言葉に対し、私は首を左右に振って応え<sup>いら</sup>とした。

確かに出来ないとは言わない。けれど、それがイコール適正があるというわけではないのだ。

「あなたには適正がない。それはつまり魔力の変換効率にロスが生まれてしまうということ」

「そ、それでも…！」

「変換までのタイムラグも感覚で行える特化型よりも遥かに長い」

「あう…」

「……慣れないうちは、己の魔力を直接扱うより遥かに非効率的になるでしょうね」

それでもまだ諦めきれないフェイトに、とどめを刺す言葉を告げる。

「……もう一度言うわ、フェイト」

「……はい」

「集束魔法を使うなどは言わないわ。……ただ、今は集束型魔導師になるのは諦めなさい」

その言葉を聞いたフェイトは、この世の終わりのような表情をして打ちひしがれている。

……まったく、この娘は。

時間は限られているというのに、どうしてそこで空白の時間を作ってしまうのか。勿体ない。

「そんな… それじゃ、あの子に勝てなひゃんっ!?!」

ため息とともに自身の髪をすき上げ、もう片方の手で落ち込む人形にデコピンを見舞う。

「誰が『あなたじゃああの白い魔導師には勝てない』なんて言ったのかしら？」

「え？ で、でも…」

「たとえ相手が管理局だろうと集束型魔導師だろうと、この私が向かう戦場に敗北はないわ」

傲慢に見えるよう精一杯不敵に笑ってみせる。

なんせ私は大魔導師プレシアⅡテストロッサなのだから。

「当然、私の娘であるあなたもよ。あなたの名前は、なに？」

「！ 私は… 私はフェイトⅡテストロッサ。大魔導師プレシアⅡテストロッサの娘です！」

「……そう」

瞳に光が灯ったのを確認して、一つ肯く。

集束型を相手にする場合、時間をかければかけるほど魔法を使えば使うほどに不利になる。

周囲にバラ撒かれた魔力を、自身の魔法を発動させるためのソレへと転用できるからだ。

加えて習熟すればそのタイムラグもなくなりマルチタスクで集束しながら戦うことすら可能。

まさに絶望的な相手と言えるだろう。

……相手が私とフェイトでさえなければ。

「相手がどんなに絶望的な存在であっても人である限り、必ず『勝ち筋』は存在するわ」

「……………」

無言で肯くフェイト。

私はその瞳の色に在りし日の自身の使い魔であるリニスの面影を見た。

……この子はこんなに強い瞳ができるようになっていたのね。

「私は限界値100の魔力を100にまで引き上げることができない」「はっ」

「けれど、100の魔力で1000の魔力を持つ魔導師相手に勝たせることは出来るわ」

「はいッー!」

悪くない。気分が高揚している。

願わくばこの気持ちをこの子の本当の教師役であつたりニスとも分かち合いたかった。

……いいえ、感傷ね。

リニスは他でもない私の力不足のせいで自ら消滅を選んだのだから。

「構えなさい、フェイト。……さきほどは『付け焼き刃』と言ったけれど気が変わったわ」

「……はいー!」

「私の全てを『骨身に叩き込む』。折れず、曲がらず、付いてきなさい」  
デバイスを構えるのは久しぶりだ。

かつて『異才』と呼ばれ忌避された私の訓練だ。並大抵の『秀才』ならば折れるに違いない。

けれど今のフェイトならばそう簡単に屈してしまうことはないだろう。

「ところで母さん」

「なにかしら?」

「……あの、ちなみに悠人の才能は」

「アレは人類の例外だから忘れなさい。アレは人類の例外だから忘れなさい」

「は、はい」

怯えた表情でコクコクと首を上下に振るフェイトには少し可哀想なことをしたかもしれない。

しかし、大切なことなので真顔で2回繰り返した私は悪くないと信じた。

私は大魔導師プレシアー・テスタロッサ。

100の魔力でも1000の魔力相手に勝ち筋だつて見出してみせよう。

しかし相手が魔力1億とかの出鱈目な存在だったらそう言い切ることは出来ないのだから。

くっ！ アイツが素直に協力していれば今頃時の庭園の設備全てがフル稼働状態だったのに。

勿論飽くまでコレらは物のたとえに過ぎない。……そういうことにしておこう。

……  
……  
……

そして今朝方訓練を終えて充分に休息をとったフェイトを見送った。

これから言い付けどおりにジュエルシードを賭けて管理局に勝負を挑むことだろう。

それと同じくして、私は時の庭園で『準備』を始めることにした。

コレまでフェイトが集めてきたジュエルシードは15個。

総数である21個には遠く及ばないが、コレでも充分に過ぎるというもの。

「それでも、あの子があの子の白い魔導師に勝てるかと言うと分からないけれど……」

コンソールに手を滑らせながら独り言をつぶやく。

あんな啖呵を切ったものの僅か一日程度の訓練など付け焼き刃以外の何物でもない。

集束した魔力に指向性を示して解き放つ。

ただそれだけで一撃必殺の破壊力を持つソレこそが、あの白い魔導師の砲撃の正体だ。

加えて『戦いのセンス』だけで言えばアレはこの私すらも凌駕し得る危険な存在である。

目標を定めたら決してブレない心の強さ。

そして目標達成のために臨機応変に思考や行動を変えられる柔軟

性。

戦闘中ですらも無限に進化し続ける対応力と成長性。

まさに全知全能が戦いに特化している存在と言えるだろう。

あと5年… いや3、4年も後ならば私ですら手を焼いていたことだろう。

それでもフェイトは、あの子は最後まで投げ出すことなく訓練をやり遂げたのだ。

あの地獄という言葉も生温く感じるだろうスパルタな訓練に、よく付いてこれたものである。

無論、疲労を残すような愚はおかすことなくキッチンと回復ポッドで休ませた。

事実バイタルチェックの結果は万全の一言。

目に見えないメンタル面を除けば、であるが。

「けれど、きつと大丈夫。アレの心は誰よりも強い。だってリニスも教え導いたんだもの」

それに悔しいが、アルフやあの桜庭悠人という少年だっている。

だから、そう。『管理局に引き取られたとしても』そう悪いことにはならないだろう。

……無責任かもしれないが、ソレくらいは心の中で信じさせて欲しい。

「おかしいわね。いよいよ『計画』の成就に向けて行動しているのに頭に浮かぶのは…」

なんで、あの子のことばかりなんだろう。

違うでしょう？ プレシァーテストタロツサ。あなたは何のためにここまでやってきたの？

ソレは大きな矛盾のはず。私は一体何故……

「コフツ！ コフツ！」

……その時、抑えきれない倦怠感とともに二度三度と咳き込んでしまふ。

そして口元を抑えた手のひらを広げると、そこにはべったりと紅色

の液体がこびり付いていた。

それを見て、ストンと腑に落ちたものを感じてしまう。

時間がないとあんなに急ぎ立てられていたのも。

それなのにここに来てあの人形のために『計画外』の動きをしてしまったのも。

「……ああ、理解した」

静かにつぶやく。

理解した。してしまった。

そして安心した。

だって、私の中に矛盾なんてやはり何一つなかったのだから。

私がアルハザードに縋ってまで取り戻したかったもの。それは…

「……『幸せだったあの頃の時間』、なんて」

嗚呼。

我ながらなんとも恥知らずで少女趣味でロマンチックで、始末に出来ないものだろう。

こんな恥ずかしい本心なんて、フェイトどころか誰にだって打ち明けられたものじゃない。

死の間際でないと自分の本当の願いに気付けないなんて、我ながら度し難いものだ。

『……ジュエルシードの所有権を賭けて、あなた方時空管理局に決闘を要求します！』

再びコンソールに走らせようとしていた手を止め、モニターを見詰める。

人形の、もうひとりの娘の晴れ舞台だ。

コフリ、ともう一つ咳をこぼしながらそれでも私は満足げに微笑むのであった。